

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2016-03-10 キーワード: 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005948

2 研究および共同利用

概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「機関研究」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「機関研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、機関研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、4件の機関研究プロジェクト、39件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

また、本館が属する人間文化研究機構が主催する研究として「連携研究」が2005年度から本格的に始動した。連携研究は、人間文化研究機構を構成する6機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が連携してさらに高次の研究を目指すもので、「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」、「『人間文化資源』の総合的研究」、「大規模災害と人間文化研究」という3種類の大型プロジェクトが実施されている。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2014年度には『国立民族学博物館研究報告』39巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2013』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分

類されている。それぞれの整備および利用状況をみると、まず標本資料は、文化資源プロジェクトの一環として海外資料収集が行われており、寄贈などにより新たに加わった資料もある。映像音響資料の収集も文化資源プロジェクトの一環として行われている。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所 NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2014年度は日本語図書約10,000冊を始めとしてサンスクリット語図書1,452冊、その他諸語の図書約4,400冊の他、コレクション資料から牧野漢籍7,089冊を登録した。週及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internet を介して広く公開・利用されており、2014年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が833件、文献複写受付は1,898件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ1,774冊と好評である。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2014年度は、泉靖一アーカイブ、馬淵東一アーカイブ、北村甫旧蔵資料（仮称）アーカイブの権利処理を完了するとともに、梅棹忠夫アーカイブのリストを Web 公開した。また、岩本公夫アーカイブの写真資料2,237点をデジタル化し、全5,323点のデジタル化を完了した。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2014年度には402件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の2年目として、視聴覚室資料、大型図書（書庫1層）、漢籍（書庫2層）の実査に加えて、雑誌（書庫2層）約3万3千冊の資料に「カラーバーコード」を貼付し、総計5万冊の点検をおこなった。また、昨年度より整理およびリスト化を実施していた地図資料（約5万枚）についても、整備が完了し、そのリストに沿った配置換えも実施した。

2-1 みんなの研究

機関研究

●機関研究の意義

本館では、現代世界が直面する学術的かつ社会的に重要な諸課題について探求するため、本館の組織をあげて重点的に取り組む大型で公開性の高い共同研究として、2004年度から機関研究を実施している。機関研究は、国内外の大学や研究機関との連携や学術協定に基づき研究者が参加する国際共同研究である。その研究プロジェクトの内容は、申請時に大学・研究機関などの外部評価者の意見を反映させるなど、大学共同利用機関として研究者コミュニティの意見が十分に反映されるような体制がとられている。また、機関研究ではプロジェクトに参加する海外の研究者をも国際共同研究員に任じており、本館と海外の研究者との連携を強化する機能も担っている。

2009年度には、それまで4つに分かれていた研究領域の改組を行い、学術的かつ社会的な要請に基づいて、「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」という2つの研究領域をたちあげた。前者は人と人の関係に、後者は人とモノの関係に研究の焦点を合わせつつ、新たな社会観や人間観の創出をめざして関連諸分野の研究者と協力しながら研究を実施している。

研究領域「包摂と自律の人間学」では、「中国における家族・民族・国家のディスコース」（代表者：韓 敏）の1件のプロジェクトが展開している。一方、研究領域「マテリアリティの人間学」では、研究プロジェクト「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」（代表者：佐々木史郎）、「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」（代表者：菊澤律子）および「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」（代表者：飯田 卓）の合計3件のプロジェクトを行っている。

「包摂と自律の人間学」では、2014年11月に国際シンポジウム「中国文化の持続と変化——グローバル化の中の家族・民族・国家」（本館開催）を開催した。

「マテリアリティの人間学」では、国際ワークショップ「民族学博物館の展示基本構想」（2014年6月、ロシア民族学博物館で開催）、国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」（2014年10月、本館開催）、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」（2015年2月、本館開催）を含め合計9件の国際研究集会を開催した。

以上のように、両領域において国際シンポジウムなどによる研究成果の公開を着実に進めている。

また、機関研究プロジェクトが当初の目的に沿って効果的かつ適切に達成されたかについて評価するとともに、

将来における機関研究の水準の向上とさらなる発展に資する助言を受けるため、「機関研究プロジェクト評価要項」を2013年6月に策定した。2014年度には、要項に基づき3人の委員からなる機関研究プロジェクト評価委員会を立ち上げ、2013年度末に終了した2件の機関研究プロジェクトについて評価を実施した。

2014年度機関研究一覧領域

領域	プロジェクト	代表者	研究年度
1 包摂と自律の人間学 (領域代表：塚田誠之)	中国における家族・民族・国家のディスコース	韓 敏	2012～2014
2 マテリアリティの人間学 (領域代表：寺田吉孝)	民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究 ——ロシア民族学博物館との国際共同研究	佐々木史郎	2012～2014
	手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生	菊澤律子	2013～2015
	文化遺産の人類学——グローバル・システムにおける コミュニティとマテリアリティ	飯田 卓	2013～2015

●機関研究の領域とプロジェクト

1 「包摂と自律の人間学」 領域代表：塚田誠之

グローバル化が進む状況において人と人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい社会の構築を展望する。現代社会においては、マイノリティの自律性を保つとともに、社会的公正をめざす思想や方策が求められている。具体的には、公共圏や市民運動、ネットワーク、トランスナショナル、無国籍・重国籍、福祉、支援などが主要な研究テーマとなる。

「中国における家族・民族・国家のディスコース」

代表者：韓 敏 2012～2014

研究目的

家族・民族・国家は、人類の普遍的現象である。特に中国においては、家(jia)、族(Zu)、華夷、民族、国家などの概念は、複合的社会関係を生み出す仕組みとして機能してきた。また、中国の歴史を貫き、社会構造の連続性と非連続性を作り出す重要な要素でもある。上記の概念の中に家、族、華夷のような、歴史において中国人が自ら形成したものもあれば民族、国家のような外部から導入され、制度化されたものもある。王朝体制から共和制、社会主義国家へ、農耕社会から工業化・情報化社会への移行の中、上記の2種類の概念は複数の主体によって様々な状況に応じて再構築されている。グローバル化が進む近年、これらの概念は開発、福祉、移動、観光、文化遺産化などにおいて、人びとの関係や行動パターンを規制するディスコースとして再構築される局面をむかえている。

本研究の目的は、日本、中国、韓国、アメリカの中国研究者による国際共同研究を通して、中国の国民国家の成立と社会主義政権の誕生以降の家族・民族・国家の概念と動態を検討するところにある。またグローバルな観点から、中国の家族・民族・国家のディスコースの特殊性と普遍性の議論を通して非欧米型の人類学の視点と理論を構築する作業も射程に入れる。

実施状況

1) 国際シンポジウムの実施

2014年11月22日～23日、国際シンポジウム「中国の文化の持続と変化——グローバル化の下の家族・民族・国家(Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization)」を本館で実施した。

2) 機関研究の成果刊行

2012年度に開催された機関研究・国際シンポジウム「中国の社会と民族——人類学的枠組みと事例研究」の成果をまとめ、2013年11月に中国語論文集『中国社会の家族・民族・国家の话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』(Senri Ethnological Studies 90)を刊行した。

成果

- 1) 中国社会科学院民族学・人類学研究所などと連携して、中国、台湾、香港、韓国、アメリカ海外から13名の研究者を招き、機関研究の3回目の国際シンポジウムを開催した。1日目は70名、2日目は61名、合計131名の方が参加した。本企画は、これまでの成果と蓄積を活かし、歴史の視点から、中国の家族、民族、国家のディスコースとその動態を分析し、文化の持続と変化のメカニズムを考察した。また、中国本土に限らず、華人社会、カナダ、ロシア、韓国、日本などとの比較を通し、実体論的な見方というより、関係論の視野から、ディスコースが互いに交差して生成されて、人びとの生き方やアイデンティティに影響を与えているかを明らかにした。
- 2) 中国語論文集『中国社会的家族・民族・国家的话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』（Senri Ethnological Studies 90）では、東アジアの視点から家族・民族・国家に関する機関研究の最新成果を世界に発信した。

本書は、14名の人類学者と歴史学者によって執筆され、①家族・民族・国家と生／熟のディスコース、②国家枠組みの中の文化遺産とその資源化、③歴史の視点からみる民族とその文化の構築の3つの部分によって構成されている。

第1部は中国社会の基本的な概念である家族を東アジアの中で比較し、ディスコースや制度としての中国の家族と東アジアの諸社会との類似性を提示した（末成道男）。また、「民族」構築の理論的系譜を旧ソ連およびヨーロッパの国民国家のモデルまでもさかのぼり、中国の国家レベルの民族のディスコースのもつ連続性を明らかにした（翁 乃群）。一方、国家と社会の対立関係を前提とする欧米の主流である抵抗論とは違って、中国の国家と社会の関係性において、両者間の共謀、競合と妥協の側面がむしろ多く観察されていることがわかった（金 光億）。近年、国境を超えた宗族のネットワークの形成、祖先崇拜や族譜編集などの復興などは、民間と国家の共謀によるものであることが事例として上げられている。

また、レヴィ＝ストロースの構造主義人類学の「生のもの／火を通してのもの」の二分法をふまえた上で、漢族社会において、「生／熟」という二項対立のカテゴリーが食べ物からエスニックグループ、個人中心とした人間関係の作り方、人間の成長過程まで徹底されており、特にそれによる異民族への分類が、中国歴史上における複雑な民族間関係に計り知れない影響を与えたことが指摘された（周 星）。

第2部においては、ディスコース構築の諸主体とその構築プロセスに着目することにより、民族のディスコースが観光開発、アイデンティティの確立、建築や衣装の創出に活用される文化資源に転化したことを明らかにした（塚田誠之、色 音、河合洋尚、宮脇千絵）。アカデミックのディスコースが行政や経済的枠組みに組み入れた場合、本来多様で、流動的、包括的な文化現象を一律化、固定化あるいは分割してしまう傾向がある。また、構築されたディスコースは、時間と空間を越えて、影響力をもち続けたり、変えられたりすることもある。たとえば国家のコンテクストの中で、「迷信」のディスコースで語られてきた満州族の民間信仰の「焼香」とダフル族の「ワミナ儀礼」は、文化遺産ブームが高まる近年に、シャーマン文化のもつ国際性、観光資源としての価値が認められ、政府や知識人により「文化遺産」のディスコースに置き換えられた（劉 正愛、呉 鳳玲）。

第3部は、漢方薬の老舗や国際移民が、20世紀において社会主義の国民国家と地方行政の管理の枠組に組み入れられた過程（張 継焦、李 海燕）、都市開発におけるエスニック空間や歴史事件に関する複数の主体による異なるディスコース構築のメカニズム（今中崇文、田村和彦）を分析した。

東アジアの諸社会は、異なる近代化の道を歩んできたが、共通の文字と倫理基盤を共有してきた東アジアの人類学者には、問題意識と研究方法において多くの共通点が見られる。本書で見られたような家族に関する東アジアのモデル比較、人類学と歴史学の結合、ディスコースの構築をめぐる国家と社会の間の多様で柔軟な関係性のとらえ方は、東アジアの中国研究の特徴として発見されたと言える。これらは今後のさらなる国際共同研究の基礎となろう。

機関研究に関連した公表実績

韓 敏・末成道男

2014 『中国社会的家族・民族・国家的话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』（Senri Ethnological Studies 90）大阪：国立民族学博物館。

韓 敏

2014 「日中の人類学の交流と今後の展開」『民博通信』146: 8-9, 国立民族学博物館。

2014年11月22日～23日、国際シンポジウム「中国の文化の持続と変化——グローバル化の下の家族・民族・国家（Continuity and Change of Chinese Culture: Family, Ethnicity and State under Globalization）」を本館で実施した。

http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/corp/human_world

2 「マテリアリティの人間学」 領域代表：寺田吉孝

グローバル化が進む状況においてモノと人の関係を、人類学を核としつつ学際的に再検討して、新しい人間観の構築をめざす。モノと人の関係を、産業化や都市化、越境化などの脈絡で問い直し、また長期的時間軸を視野に入れて歴史的にも究明する。物神化の問題、人によるモノの収集と所有の問題、人工知能や情報技術など先端的科学技術と人の関係などが主要な研究テーマとなる。

「民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究——ロシア民族学博物館との国際共同研究」
代表者：佐々木史郎 2012～2014

研究目的

本研究プロジェクトの目的は、民族学資料（標本資料と映像音響資料から構成される）の収集、保存、修復、情報化、そして活用までを包括する総合的研究と実践を通じて、本館の大学共同利用機関としての機能と博物館としての機能を高め、その存在感を向上させることにある。そして、この目的を達成するために、2010年度に協定を締結したロシア民族学博物館（ロシア連邦サンクトペテルブルク市）との国際共同研究を実施する。本研究はマテリアリティ研究の最も基礎的な部分である、研究対象となるモノの選定、保存、記録化、情報化、そしてその価値の社会的、文化的文脈での見出し方を見直すものである。同時に、このような作業は博物館の実際の機能に欠かせないものでもある。本研究プロジェクトは基礎研究であるとともに、実践的な研究でもある。

なぜ、このような研究が必要なのか？実はこの種類の基礎研究は不断の見直しが必要とされるものである。「民族」の概念と社会的な枠組みは常に流動しており、民族学博物館が収集すべき資料もその時代によって変化する。また、過去の民族学資料の概念や枠組みに則って収集された資料の保存や管理、情報化、利用方法も不断に見直されていなければならない。しかし、日本の博物館はそのようなことを苦手とすることが多く、ことに本館ではそれが十分に行われて来なかったことは否めない。そこで古い伝統を持ち、資料の整理、管理、情報化でも長年の蓄積を持つロシアの民族学博物館の協力を得て、改めてその見直し作業に着手するわけである。ただし、本研究は本館とロシア民族学博物館との間だけの共同研究にとどめるつもりはない。研究会や国際シンポジウムの際に2館以外からも研究者を招聘し、欧米やアジアの研究者や博物館とも情報交換を行う。それによって機関研究「マテリアリティの人間学」に基礎研究と実践研究の両面から貢献することを目指す。

実施状況

2014年6月24日から27日まで、ロシアサンクトペテルブルク市のロシア民族学博物館において、第4回国際ワークショップ「民族学博物館の展示基本構想」を実施した。まず6月24日に研究集会を行い、代表者の佐々木の他、班員の吉田憲司教授、研究協力者として吉本 忍名誉教授が研究報告を行い、ロシア側からはスヴェトラナ・ロマノヴァ研究員とイリーナ・カラベトヴァ主任研究員が研究報告を行った。それに引き続き、25日にはロシア民族学博物館の収蔵庫における資料保管状況の視察、同市にある26日には人類学民族学博物館と27日にはエルミタージュ美術館の展示状況の視察を行い、研究員、学芸員と意見交換を行った。

2015年3月9日から13日まで国際ワークショップ「民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係」を実施した。まず3月10日に国立民族学博物館において8本の研究報告が行われ、3月12日には北海道白老郡白老町にあるアイヌ民族博物館において2本の研究報告が行われた。そのほか3月9日と11日に国立民族学博物館における展示と収蔵施設の視察と検討が、12日にアイヌ民族博物館における展示の視察とそれを題材とした討論が行われた。また、13日には苫小牧市美術博物館において、展示と収蔵庫の視察、そして市民との協力に基づく博物館作りについての説明と検討を行った。

成果

今年度の展示を主要なテーマとして、研究報告と議論を行った。6月のロシア側でのワークショップでは、民族学博物館が現在求められる展示コンセプトとはいかなるものなのかということを中心に議論を行った。事例として、日本側からはアフリカの芸術家の協力の下に行った企画展の事例、織物・織機をテーマにした特別展の事例が出され、ロシア側からは仏教美術を題材とした企画展の事例、シベリアの先住民族の工芸を中心とした企画展の事例が報告された。また、視察ではロシア民族学博物館での民族衣装の企画展示とエルミタージュ美術館が最近開設した匈奴の遺跡から出土した織物、繊維製品に関する常設展示の制作について、展示を見ながらの説明と議論を行った。

3月のワークショップでは、おもに民族学博物館の展示制作における、「ソースコミュニティ」と呼ばれる展示資料や文化情報を提供してくれる人々の役割、博物館と彼らとの協力関係の構築についての諸問題を議論した。このワークショップにはロシア民族学博物館、アメリカ自然史博物館（ニューヨーク）、国立民俗博物館（ソウル）といった国立あるいはそれと同等以上の規模を持つ博物館の研究者を招聘し、そのような大型の博物館が、展示対象とする人々からの要請、需要に基づく展示をどのように制作したのかという点に着目した研究報告を行った。さらに、北海道白老町のアイヌ民族博物館に場を移して、先住民というソースコミュニティと国立クラスの博物館が展示、資料の収集管理をはじめ博物館運営のためにどのような関係を構築するのがよいのかについての議論を行った。

これら2回のワークショップの成果としては、まず民族文化の展示もあるいは民俗の展示も、展示資料や情報を提供してくれる生活世界を生きる人々との密接な信頼関係の構築が重要であること、さらには特に3月のワークショップで報告された事例では、展示資料や情報を提供してくれた人々が、同時に観客にもなるケースで、ソースコミュニティが展示や収集資料を消費したり活用したりするコミュニティにもなる場合に、どのような関係を構築すればよいのかということを考えさせられた。

機関研究に関連した成果の公表実績

昨年度10月13日、14日に実施した「博物館コレクションの中のシベリア、極東諸民族の文化——収集、保存、展示方法の検討」の報告書の原稿が整い、*Культура народов Сибири и Дальнего Востока в музейных коллекциях: методы сбора, учета, хранения и экспозиции*（博物館コレクションにおけるシベリア、ロシア極東諸民族の文化——収集、研究、保存、展示）としてSenri Ethnological Reportsの出版を申請し、採用が決定されている。現在査読の後、そのときのコメントにしたがって改稿を行い、最終稿が編集室に提出されて入稿を待つばかりとなっている。

また、6月のロシア民族学博物館での研究集会も、3月の国立民族学博物館での研究集会も研究者向けに公開し、前者で3名、後者では4名の研究者がオブザーバー参加した。

「手話言語と音声言語の比較に基づく新しい言語観の創生」

代表者：菊澤律子 2013～2015

研究目的

本プロジェクトは、言語と、言語を担うヒトとの関係を、手話言語と音声言語の比較を通じてとらえ直すことを目的とする。

言語は、客観的に観察可能であり記述の対象となるという点で、ヒトからは独立した存在であり、人間が用いるツールのひとつととらえることができる。人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、コード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は、長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきており、手話言語の記述研究への関心が高まってきた当初は、その音声言語との共通性について論じられることが多かった。本プロジェクトでは、そこから一歩すすみ、モダリティの違いに起因する「違い」を論じることで、人間の言語をよりよく理解しようと試みる。

手話言語と音声言語の違いを見ることは、さまざまな面で、言語学における基本概念の見直しにつながる可能性がある。たとえば、時間軸に沿って一本の情報が流れ続けるとされる「言語の線条性」は、長く言語の基本的な特徴とされてきた。手話では、時間軸に沿う、という点では共通しているものの、同時に並行する複数の系統による表出が可能である。同時並行する情報を、手話話者はどのようにコードとして認識し、理解しているのだろうか？

モダリティの違いに焦点をあてることで、言語というツールを人間がどのように認識しつづけているのかを新たに認識し、これからヒトはどのように言語と付き合っていくのか、本研究により、単にその記述のための方法論にとどまるのではなく、言語教育や社会体制などといったより広い文脈においても考察することができるようになることが期待される。

実施状況

みんなく手話言語学フェスタ2014を以下の要領で開催した。

時 期：2014年10月4日～5日

場 所：国立民族学博物館

対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般公開）

内 容：「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」

手話言語学の研究成果を国内で紹介すると同時に、音声言語学の専門家とのディスカッションの場を持つことで、言語分析についての新しいアプローチの可能性を模索することを目的として、国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語類型論」を開催した。言語研究におけるさまざまな分野をカバーし、ディスカッションのきっかけとするため、オムニバス形式の講演会方式をとった。手話言語学における最新の研究トピックの各発表に対し、音声言語学における研究成果をマッチングで報告してもらった後、講演者間での公開ディスカッションの時間を設けることにより、各トピックにおける共通課題とモード（コミュニケーションの形態）の違いにもとづく相違点を明らかにする手がかりとすることができた。2日目の午後は、研究者のみのディスカッションタイムを設け、講演内容を掘り下げた。

成果

1年目は、手話言語学研究者と音声言語の研究者との接点をなかなか見いだせずにいたが、2014年度のシンポジウムにおいては、手話言語の研究者と音声言語の研究者の間でテーマを合わせた発表を3組含めることができた。具体的には、アスペクト、方向動詞、調音器官と音韻論、というそれぞれの分野で、たとえば、調音器官についていえば、具体的な調音メカニズムの類似点と違い、音韻論についていえば人間の認知と弁別、アスペクトや方向動詞については、チャンネルにより何が表現できて何が表現しにくいのか等、対比するにあたり具体的な項目が話題となった。講演者の組それぞれの間での公開討論の場では、このような、チャンネルの異なる2種類の言語（視覚言語と聴覚言語）間の違いや共通点について議論を進めることで、研究の進め方についても手がかりが少し見えてきたと感じている。2014年度には手話言語のみについてのみの発表となったテーマについても、映像等での記録を利用し、次年度は対応する音声言語学の発表を招待するなどして、成果を広げてゆくことができたと考えている。

機関研究に関連した公表実績

講演等はすべて映像収録し、とくに大切と考えられるものについては、ろう者やろうの研究者への情報保障を考慮し、インターネット上で情報保障（字幕付き・手話通訳）付き映像資料として以下のサイトに掲載している（総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」ウェブサイト <http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssll/index.html>）。

2014年分の映像については、現在、文字起こしおよび翻訳待ち状態となっており、映像配信アプリを利用して順次、上記ウェブサイトに掲載する。

なお、シンポジウム当日は、すべての講演内容とディスカッションをインターネット上で配信しており、さらに配信した映像については、館内でオフライン閲覧してもらえるよう、DVDの形に収録している。

「文化遺産の人類学——グローバル・システムにおけるコミュニティとマテリアリティ」
代表者：飯田 卓 2013～2015

研究目的

過去との結びつきを断とうとするモダニティの圧力が高まり、記憶が共同体のなかで無条件には存続しえなくなったいま、文化遺産を伝えようとする人びとがどのような物質的基盤をよりどころに過去との結びつきを保っているかを実証的かつ理論的に示す。また、過去との結びつきを模索する人たちの動きが合流し、文化遺産を支えるコミュニティがたち現われるプロセスを論ずる。

実施状況

前年度に引き続いて1回の研究打ち合わせをおこない、前年度から数えて2回にわたる打ち合わせの成果を国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開フォーラムのかたちで公開した。以下、5月17日の分科会と6月28日の公開研究会をのぞいては、すべて民博を会場として開催した。

- 2014年5月17日 国際人類民族科学連合（IUAES）分科会「遺産は人びとを橋渡す」（千葉市幕張メッセで開催）
- 2014年6月26日 研究集会「島唄研究の来しかたとゆくえ」
- 2014年6月27日 公開研究会「文化遺産管理における住民参加」（文化遺産国際協力コンソーシアムと共同主催、大阪国際交流センターで開催）
- 2014年6月28日 公開フォーラム「和食は誰のものか？」（追手門学院大学と共同主催）
- 2014年11月8日 公開フォーラム「文化遺産の人類学」

2015年1月24日～25日 国際フォーラム「中国地域の文化遺産——人類学の視点から」

2015年2月7日 国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」

成果

2014年度は一般公開むけの企画を集中的におこなったため、文化遺産がもつ学術的な問題性を広く周知できたと考えている。とくに公開フォーラム「和食は誰のものか？」では、身近なユネスコ無形文化遺産のもつ課題を提示し、公開研究会「文化遺産管理における住民参加」と国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」では、文化援助や紛争解決といった問題に周辺住民がどのように関わるかを紹介した。また、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」では、日本と同じ東アジア地域に属する台湾や、日本や台湾と文化行政の文脈を同じくしながらも文化大革命を経験した中華人民共和国においてどのような文化運動が展開しているのか、国家制度的な枠組みを参照しながら議論していくことの意義を紹介した。

学術的な成果としては、文化遺産の問題を歴史学や美術史としての問題だけでなく、現在に生きる人々の生活実践の問題として捉えることの意義を多くの文化人類学者と共有し、ネットワークを形成できたことが大きな成果である（公開フォーラム「文化遺産の人類学」、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」）。このことは、最終年度の2015年度にむけて、重要な布石となった。2015年度最終シンポジウムは、2014年度に固めたネットワークをふまえて実施していく予定である。また、文化遺産を制度的に認定されたものにかぎるのではなく、現代社会において文化的実践がもつ意味を明らかにするヒューリスティックな（課題解決というより課題発見のための）概念として用いることの有効性も確認された。

上述したような一般的課題における文化遺産概念の有効性のほか、公開フォーラム「和食は誰のものか？」では、聴衆全体にとって身近な「和食」を無形文化遺産と位置づける場合の課題が、学術的にも、行政的にも、また生活と文化との関わりを考えるうえでも、解決すべきものとして残されていることが明らかになった。このことは、2015年度（最終年度）に無形文化遺産をテーマにシンポジウムを開催するうえで、論点整理の意義をもつ。また、学会分科会「遺産は人びとを橋渡す」、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」、公開研究会「文化遺産管理における住民参加」では、それぞれ、復興災害や紛争解決、文化援助といった異なった文脈において文化遺産の問題が関わる局面を具体的な事例から明らかにすることができた。3つの問題に共通して指摘できるのは、担い手のいない「文化遺産」の担い手コミュニティを再構築していく過程で、多面的機能をもつ社会関係を構築できる可能性である。この目標を実現していくうえでは、偏狭なナショナリズムに陥らない方策を見きわめる必要があるが、目標そのものは、21世紀の文化が目ざすべきもっとも重要なもののひとつとして提起されうる。

機関研究に関連した公表実績

2013年に開催した国際シンポジウムでの報告と議論をもとに、“Heritage Practices in Africa”と題する論文集を編集集中である。この原稿は2014年度内にすべて集まる予定で、集まった原稿の書きかえなどの作業を2015年度にかけておこなう予定である（形態はSenri Ethnological Studiesを予定）。

IUAESの分科会として開催した国際フォーラムの結果も、原稿が集まりつつある。ただしこれは1冊の論文集とするには分量が不足しているため、2015年度に開催する国際シンポジウムの成果とあわせて出版する予定である（形態はSenri Ethnological Studiesを予定）。

公開フォーラム「文化遺産の人類学」でなされた報告は、同名の2巻本に収録するべく、出版社と連携しながら編集を進めている。この2冊本のなかには、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」でなされた報告の一部や、レギュラーメンバーが継続的に議論してきた内容をふまえた論文も収録し、30章から成る予定である（形態は外部出版を予定）。

さらに、国際フォーラム「中国地域の文化遺産」で発表されたすべての報告は、Senri Ethnological Reportsの形態で総合討論を含めたプロシーディングズを刊行すべく準備が進んでいる。

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんぱく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2013年6月～2018年3月
朝倉敏夫	「朝鮮半島の文化」に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築	強化型	2014年6月～2016年3月
福岡正太	徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2014年6月～2016年3月
林 勲男	民博所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築	強化型	2014年6月～2016年3月

*2014年度実施分

**開発型は4年以内、強化型は2年以内

「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

代表者：伊藤敦規 2013～2018

実施状況

2014年6月から7月にかけて須藤健一本館館長と渡米し、本プロジェクトの連携機関を訪問した。連携機関であるコロラド州デンバーのデンバー自然科学博物館では、ジョージ・スパークス館長を表敬訪問した。本プロジェクトの国際共同研究員で人類学担当学芸員のチップ・コルウェル博士とステイブ・ナッシュ博士に展示場や収蔵庫を紹介してもらった後、博物館人類学の最前線について意見を交わした。7月4日には、本プロジェクト実施のために本館と連携機関である北アリゾナ博物館とが学術協定を交わすことになり、その調印式をアリゾナ州フラッグスタッフの北アリゾナ博物館で開催した。この日は北アリゾナ博物館のホピ展の開幕日でもあり、開幕式にて須藤館長と本プロジェクトが列席者の前で紹介された。

7月から8月にかけては、本館が所蔵するホピ製木彫人形（約280点）を科研費補助金（（若手研究(A)）『日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究』（研究課題番号：26704012）にて撮影し、photoVR（ヴァーチャル・リアリティ）加工した。

10月5日から17日まで、photoVRというデジタル資料を活用しながら本館収蔵庫にて資料熟覧を実施した。海外からの招聘者はソースコミュニティ（ホピ）の国際研究協力者4名（Ramson Lomatewama, Darance Chimerica, Merle Namoki, Gerald Lomaventema）と、国際共同研究員6名（Robert Breunig [北アリゾナ博物館]、Kelley Hays-Gilpin [北アリゾナ大学]、Chip Colwell [デンバー自然科学博物館]、Jim Enote [ズニ博物館]、Cynthia Chavez-Lamar [国立アメリカン・インディアン博物館]、Henrietta Lidchi [国立スコットランド博物館]）のほか、天理大学附属天理参考館、野外民族博物館リトルワールドなどの日本国内のホピ製木彫人形所蔵博物館などが多数参加した（招聘について一部は科研費補助金を使用した）。このときに記録した10日分の音声・映像は日英両言語で文字起こしをし、発話者本人のチェックを受けて、日本語に翻訳している。

10月下旬から11月上旬にかけては、首都大学東京の「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループによる企画展（『伝統文化は誰のもの？ 文化資源をめぐる協働を考える』）とシンポジウム（同名）を行い、フォーラム型情報ミュージアムに係る資料整理やオンライン以外の情報公開・共有の可能性を検討・確認した。

11月には再度米国アリゾナ州の北アリゾナ博物館を訪問し、本館での資料熟覧時に記録した口頭解説の英文チェックを行いながら、北アリゾナ博物館所蔵のホピ製宝飾品資料（約450点中約380点）の資料写真撮影と採寸など既存のレコードの確認と追記を行った。

1月には2015年度に実施予定のリトルワールドでの資料熟覧のための打合せを、リトルワールドにて行った。そ

の機会は、本プロジェクト代表者の伊藤が代表者を務める民博共同研究（米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究）を利用し、収蔵庫や屋内展示場、屋外展示場の実見も行った。

ソースコミュニティ（ヤキ）について、本館の所蔵資料約50点を対象とする資料調査を国内共同研究員の水谷裕佳（上智大学）とともにに行った。水谷が資料撮影し、そのデータをヤキ政府の担当者に送り、公開適正に関する意見を収集し、一部の資料についてはソースコミュニティから管理上の提言が出たので、民博にてそれを実施するように情報企画課標本係に指示を出し、対処した。

本館のフォーラム型情報ミュージアム構想に類似する博物館間ネットワーク型データベースを運営している、ブリティッシュコロンビア大学附属人類学博物館（Reciprocal Research Network）、極北研究センター（Sharing Knowledge）などに国内共同研究員（岸上伸啓）を派遣する予定であったが、人間文化研究機構の「問題解決志向型基幹研究プロジェクト形成に係る準備調査提案書」に基づく調査経費が得られたので、その予算で1月から2月にかけて派遣した。

本プロジェクトの現状を中間報告するため、伊藤は6月に沖縄で開催されたアメリカ学会とドイツのフランクフルトで開催されたAIW（欧州における北米先住民学会、3月）に参加し口頭発表を行った。欧州滞り期間中は、オランダのトロップン博物館およびライデン国立民族学博物館の視察とフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトのプロモーションを行った。また、3月に上記の人間文化研究機構の準備調査提案書に基づく調査経費にて、オランダのアムステルダム大学を訪問し、情報社会学のRobin Boast教授とフォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に関する意見交換を行った。

成果

本館をはじめ日本国内外の博物館が所蔵する米国先住民ホピ製資料などのデジタルアーカイブズを構築するために、その手法や、ドキュメンテーションの仕方や、公開を対象とする相手の選定など、博物館とソースコミュニティ双方にとっての意義を探り、コンテンツを収集・整理することが初年度の実施内容の大半を占めた。

今後の展開に最も影響を与えることになると思われる本年度の内容は、資料のphotoVR撮影とソースコミュニティの招聘と熟覧の実施であった。ソースコミュニティを本館などの博物館に招聘する場合には、現地での就業形態や生活の流れ（繁盛期など）、健康状態、交通手段といった物理的手段やタイミングも親身になって配慮しなければならない。招聘する側の予算との兼ね合いもあり、人の移動を伴わない現地での擬似的な熟覧の機会を工夫して創出することが課題となっていた。

それをある程度解消するのがphotoVRである。ターンテーブルの上に乗せた資料を回転させながら水平0度、30度、60度、90度をそれぞれ36ショット撮影し、底面1ショットを加えた合計145ショットの画像を1枚のファイルに統合する。これにより、モノ資料を手でハンドリングしているかのようになった。顔を近づけて熟視することも、高解像度撮影した画像を拡大・縮小することで擬似的な環境を整えることができるようになった。もちろん臭いに関する嗅覚や重さや手触りに関連する触覚などの感覚を擬似的に再生することはできないが、それでも平面の写真1枚よりは格段に操作性が増すことになった。このphotoVR撮影を科研費を用いて実施したことで、その後の熟覧作業や、連携機関への解説が簡便になり、将来の展開や事業の可能性の幅が大幅に広がった。

ソースコミュニティによる熟覧は10月5日から17日の期間の平日である7日間行った。対象とする資料は祖霊や精霊や雨や雨雲を表す超自然的存在（カチーナ）を象った木彫人形である。民博は約280点の資料を所蔵している。4名の熟覧者は人形作家が2名、使用者（宗教指導者）が2名で、それぞれ年齢も居住村落も異なる人々である。全員が資料の熟覧経験がなかったため、まず、2012年に本館と学術協定を結んでいて、本館での資料熟覧経験もあるズニ博物館のJim Enote館長と国立アメリカン・インディアン博物館のCynthia Chavez-Lamar博士に熟覧の仕方や記録の仕方などについて実演を行ってもらった。彼ら自身も米国先住民であるため、ホピの熟覧者は非先住民の博物館関係者だけではなく、先住民からの指導も受けたことになる。一資料について全員でホピ語で意見を述べた後、一人一人が村落での役割などについて解説した。さらに全員の意見を聞いた要約として、黒背景で語りに集中できる映像撮影を行った。熟覧の様子は全て映像資料として記録しており、数百時間に及ぶ一次資料に関する貴重な資料が収集できた。全ての音声はテープ起こし済みで、発話者による英語のチェックが終わった分については日本語への翻訳も行った。これらがフォーラム型情報ミュージアムの一つとして新たに制作するデータベースに掲載する主要なコンテンツとなる。

その他にも、北アリゾナ博物館での資料調査と資料撮影、国内外の機関や学会やシンポジウムや展示会などでの口頭発表を介したプロジェクトの広報活動を行った。

資料台帳のレコード項目数としては、合計36,380レコードの確認、加筆を行った。内訳は以下の通りである。「民博所蔵ホピ製木彫人形資料」については、1資料あたり145点の静止画を撮影し、それらを1点のphotoVRに加工

した。10月5日から17日を期間とする約140点の資料熟覧の結果、1資料あたり最低9レコードの確認と加筆を行った（小計21,560レコード）。「北アリゾナ博物館所蔵ホピ製宝飾品資料」については、約380点の資料の写真撮影を行った（1点あたり約10点）。さらに寸法やデザインの確認など、39項目のレコードを確認・加筆した（小計14,820レコード）。

成果の公表実績

論文

伊藤敦規 「国立民族学博物館における研究公演の再定義——『ホピの踊りと音楽』の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察」『国立民族学博物館研究報告』39(3)：397-458（2015）。

エッセイなど

伊藤敦規 「日本国内の米国先住民研究の展開のために——民族誌資料で関係者を束ねる」『民博通信』145：20-21, 国立民族学博物館（2014）。

Atsunori Ito “Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Problem and the Prospects on Creating Collaborative Catalog.” *MINPAKU Anthropology Newsletter* 38: 11-12, National Museum of Ethnology（2014）。

公開シンポジウム・ワークショップ

Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日～10月10日）。

首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？文化資源をめぐる協働を考える』、首都大学東京（2014年11月1日）。

口頭発表

Atsunori Ito “Collaborating with the Source Community”, IUAES panel Re-imagining ethnological museums: new approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge (Commission on Museums and Cultural Heritage), Makuhari Messe（2014年5月15日）。

伊藤敦規 「米国先住民資料の所在と管理情報の現状、国立民族学博物館のInfo-Forum Museum構想の報告」、アメリカ学会第48回年次大会、米国先住民分科会、沖縄コンベンションセンター。（2014年6月8日）

伊藤敦規 「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」、第260回 民博研究懇談会、国立民族学博物館（2014年9月24日）。

Atsunori Ito ‘Introduction,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Robert Breunig, Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito ‘Reconnect Museum and Source Community,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Atsunori Ito ‘Tasks of collection, accumulation, documentation, and effective utilization of SC’s comments,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月5日）。

Atsunori Ito ‘Introduction of “Kachina doll” collection labeled Hopi in Minpaku,’ Minpaku International Workshop Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community, National Museum of Ethnology（2014年10月6日）。

伊藤敦規 「米国先住民ホピ製宝飾品の真髄を真贋判断から考える」（首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループシンポジウム『伝統文化は誰のもの？文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京（2014年11月1日）。

展示活動

伊藤敦規 「ホンモノ？ニセモノ？——『ホピ製』宝飾品の真作贋作」（首都大学東京「学術成果の都民への発信拠点・組織の形成」研究グループ企画展『伝統文化は誰のもの？——文化資源をめぐる協働を考える』）、首都大学東京91年館（2014年10月31日～11月13日）。

事典項目執筆

伊藤敦規 「北米先住民」国立民族学博物館編『世界民族百科事典』pp.296-297, 丸善出版（2014年7月10日）。「手工芸」pp.496-497。

「博物館と返還」 pp.518-519。

「表象に対する権利」 pp.736-737。

新聞

伊藤敦規 「精霊の化身、仮面 (7) 生き物」『毎日新聞夕刊』（旅・いろいろ地球人）（2014年7月17日）。

伊藤敦規 「おいのりで雨雲を呼ぶ（みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ1）」『毎日小学生新聞』（2015年1月10日）。

伊藤敦規 「願いを込めて『ソーシャルダンス』（みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ2）」『毎日小学生新聞』（2015年1月17日）。

伊藤敦規 「身体能力高いホピの人々（みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ3）」『毎日小学生新聞』（2015年1月24日）。

伊藤敦規 「伝統的な生活を大切に（みんぱく世界の旅 アメリカ先住民ホピ4）」『毎日小学生新聞』（2015年1月31日）。

メディア掲載

「民博が国際ワークショップを開催——“フォーラム型情報ミュージアム”実現に向け」『文教速報』7973:15, 官庁通信社（2014年2月26日）。

『日本経済新聞』（関西）「民族学資料 共有化へ 民博40年で変わる」（http://www.nikkei.com/article/DGXLSIH21H02_R21C14A0AA1P00/）（2014年10月26日）

“International collaboration helps connect Museum of Northern Arizona to Hopi community,” *Navajo-Hopi Observer* 34(50): 1, 4（2014年12月10日）。

その他（電子媒体など）

「国立民族学博物館（日本国 大阪）および北アリゾナ博物館（米国 アリゾナ州 フラッグスタッフ）との学術協力・協働協定書」（http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/exchange/agreement/northernarizona_2014）

“Museum of Northern Arizona, Japan’s National Museum of Ethnology Lead Global Initiative” (<http://musnaz.org/press-releases/museum-northern-arizona-japans-national-museum-ethnology-lead-global-initiative/>)

『『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築』

代表者：朝倉敏夫 2014～2016

実施状況

本館「朝鮮半島の文化」に関する本館の資料のうち、1988年以前に収集した約2,700点について当時の収集に携わった辛 瑋根 温陽民俗博物館顧問に協力を依頼し、データベースの基礎となるコンテンツを作成する作業を推進した。

また、本館は韓国国立民俗博物館と学術協定を締結しているが、これまで両館が協力してあげた成果をもとに、どのような情報生成型のマルチメディア・データベースを作成することができるか両館において協議した。

2014年7月から1年間、本館外国人客員研究者として韓国国立民俗博物館においてデータベース作成に関わってきた金 昌鎬を招聘し、2015年に開催する特別展「韓日食博」において公開する情報生成型のマルチメディア・データベースの作成について議論し、大阪工業大学の佐野陸夫教授とも共同で「食」関連資料のデータベースの作成に着手した。

標本資料の画像情報を組み込み可能な情報生成型のマルチメディア・データベースとして、資料の管理および公開のためのシステム開発を行った。機能設計にあたっては、日本語、韓国語、英語への対応とユーザ管理機能およびユーザによる関連情報の書き込み機能を要件とし、それらの機能を実現するためのバックエンドシステムの実装を行った。

成果

1988年以前に収集した本館「朝鮮半島の文化」に関する資料約2,700点について、データの補充およびクリーニングを行った。そのうち「食」に関する資料約500点のデータについて韓国語、日本語版を作成した。

韓国国立民俗博物館の『韓民族歴史文化図鑑——食生活』に掲載された120種の資料についての記載事項について韓国語、日本語、英語版を作成した。

情報生成型データベースとして、標本資料の管理および公開用の環境を開発した。公開用環境においては、標本資料に付加情報を書き込めるユーザコメント機能および日本語、韓国語、英語の表示および自動翻訳を組み込んだインタフェースを試作した。また、作成したデータを情報生成型データベースに登録し、データおよびシステムの

実証を行った。

「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2014～2016

実施状況

1) 基本的なデータベースシステムのデザイン

次の条件を満たすシステムのデザインを進めた。

- a) 主なデータは芸能を記録した映像ファイルと関連する文字、写真、音響、映像資料とする。
- b) それぞれのデータに対し、アノテーションを加えられるようにする。
- c) それぞれのデータに対し、コメントを加えディスカッションをできるようにする。
- d) 利用者が新たなデータを追加できるようにする。

2) 追加データの作成

このシステムの主なデータは、民博の文化資源プロジェクトおよび人間文化研究機構の連携研究「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」等により撮影した映像だが、若干手薄であった伊仙町等の民俗芸能について調査撮影を行いデータの充実をはかった。

伊仙町では、新たに阿三および目手久集落にて民俗芸能ならびにシマウタの調査撮影を行い、天城町で未撮影だった松原上区にて集落誌ならびに民俗芸能の撮影を行った。

3) 主なデータの英訳

コンテンツの解説等の英訳を進めた。全解説の9割程度の英訳を完成した。

4) 徳之島3町との連携調整

徳之島3町の各教育長や教育委員会関係者等とフォーラム型情報ミュージアム公開に向けて協議を進めた。

5) 研究会の開催

民博にて研究会を開催し、フォーラム型情報ミュージアムのコンセプトとシステムおよび徳之島関連コンテンツの紹介、『日本民謡大観（沖縄・奄美）』（日本放送協会、1989-1993）関連調査資料のデジタル化とアーカイブの報告、徳之島3町における芸能関連資料の所蔵やデジタル化作業等についての報告等を行い、今後のフォーラム型情報ミュージアムの展開の可能性について議論した。

成果

データについては、一部のデータの英訳が残っているものの、公開に向けてほぼ整備を終えることができた。システムについては、仕様とデザインが固まり、プロトタイプがほぼ完成しており、データの移植を進めれば公開できる状態に近づいている。徳之島3町の教育委員会等には、フォーラム型情報ミュージアムの有用性を理解していただき、端末の設置等について前向きな対応をいただいている。また、奄美地域の民謡や民俗芸能の研究者ともフォーラム型情報ミュージアムの構想についての議論を深めることができた。

成果の公表実績

天城町町立ユイの館にて、マルチメディアコンテンツ「徳之島の唄と踊りと祭り」の公開を開始した。その他の成果の公表は以下の通り。

電子媒体

福岡正太 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10), 1-3

口頭発表

福岡正太 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」、人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎 D501教室、2014年10月18日。

福岡正太 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」、シンポジウム「民俗音楽の新たな胎動をさぐる」、日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学 A 館200教室、2014年12月13日。

「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」

代表者：林 勲男 2014～2016

実施状況

2014年度は、本プロジェクトの初年度に当たるため、国内メンバーによる役割の確認と、フォーラム型情報ミュージアムの概念についての共通認識の確立を図るために丸川雄三准教授による説明を聞く会合からスタートした。

8月に国内共同研究員である友永雄吾が、オーストラリアのメルボルンにて国外共同研究員であるヘレン・ガードナー博士と面会し、プロジェクトの概要を説明し、ジョージ・ブラウンおよび同時代の他の宣教師たちの南太平洋における民族誌資料収集活動について情報をえた。またメルボルン博物館で、収蔵資料管理について情報を得た。シドニーのオーストラリア博物館では、研究協力者のロビン・トレンス博士、シドニー大学マクラー博物館のジュード・フィリップ博士と会い、それぞれに収蔵する関連使用調査を実施した。

11月に林とピーター・J. マシウスがニュージーランドを訪れ、オークランド博物館でアウトリーチプログラム、歴史部門、デジタル・システム、コレクション・マネージメント、保存科学のそれぞれの担当者と面談し、プロジェクトの遂行への協力を依頼した。ウェリントンでは、ニュージーランド国立博物館テ・ババにて、太平洋地域のコレクションのマネージャーと、デジタル・コレクション専門家から収蔵資料とデータ管理、他の機関とのデータベース共有化について情報を得た。また、民博へ招聘予定のリース・リチャーズ氏を訪ね、打ち合わせを行った。

今年度は、上記のソロモン諸島担当のリチャーズ氏以外に、メラネシア資料の植物材料調査のためロビン・ハイド博士（オーストラリア国立大学名誉教授）、イタリアからトロブリアンド諸島資料調査のためジャンカリオ・スコディティ博士の招聘を予定していたが、スコディティ博士の都合で来日は叶わなかった。

ジョージ・ブラウン・コレクション及びそのデータベースに関する簡単な説明文を、日本語と英語に加えて、メラネシア・ビジン語、サモア語、トンガ語、フィジー語にし、インターフェイスを修正してそれぞれの言語でこの解説を読めるようにした。

さらには、ジョージ・ブラウンの日記と手紙から、民族資料収集の足取りを探る調査を始め、これは来年度に継続される。

成果

ハイド博士とリチャーズ氏という専門家を招聘したことによって、ジョージ・ブラウン・コレクションの個別資料に関する情報の充実化が進んだ。オーストラリアとニュージーランドの博物館の専門部署のスタッフとプロジェクトについて協力を取り付けたことによって、その結果として、その後も情報の提供を得られるようになったことは大きい。

成果の公表実績

- 1) Bunkamura のザ・ミュージアムで開催されたジョセフ・バンクス展に、ジョージ・ブラウン・コレクションから標本資料を選定し、この展示の図録に寄稿した。また、マスコミ向けの内覧会では、解説をつとめた。貸し出したことで日本においてもその存在の周知を行うことができた。
- 2) Mchugh, Christopher (海外研究協力者) (in Press) Recontextualizing the George Brown Collection through Creative Ceramics, *Journal of Museum Ethnography* 26.
- 3) 2015年3月29日に開催されたみんぱくウィークエンド・サロン「パプアニューギニアのタイムカプセル」で、来館者にジョージ・ブラウン・コレクションの紹介を行った。

共同研究

2014年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2014年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	計	
一般	館内	課題1	6	3	8	13
		課題2	0	0	2	
	客員	課題1	0	0	2	2
		課題2	0	0	0	
	公募	課題1	10	4	12	18
		課題2	1	1	1	
若手	課題1	4	1	5	6	
	課題2	0	0	0		
計		21	9	30	39	

共同研究課題一覧

○印は館外研究代表者による実施課題、□印は特別客員教員（申請時）による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点	菅瀬晶子	1	2011-2014
□○ 人の移動と身分証明の人類学	陳 天璽	1	2011-2014
NGO活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座	信田敏宏	1	2011-2014
□○ 物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）	古谷嘉章	1	2011-2014
○ ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究	関根康正	1	2011-2014
○ ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究	名和克郎	1	2011-2014
○ グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究	松川恭子	1	2011-2014
○ 現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」	道信良子	1	2011-2014
○ 音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に	劉 麟玉	2	2011-2014
○ 災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承	橋本裕之	1	2012-2014
熱帯の「狩猟採集民」に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から	池谷和信	1	2012-2014
贈与論再考——「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究	岸上伸啓	1	2012-2014
肉食行為の研究	野林厚志	1	2012-2014
触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築	廣瀬浩二郎	1	2012-2014
明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルト、ニヅフ資料の再検討	齋藤玲子	2	2012-2015
○ アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較	小野林太郎	1	2012-2015

○ 「統制」と公共性の人類的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ	土佐桂子	1	2012-2015
● 現代消費文化に関する人類的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して	小川さやか	1	2012-2014
● ランドスケープの人類的研究——視覚化と身体化の視点から	河合洋尚	1	2012-2014
● 「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生	津田浩司	1	2012-2014
映像民族誌のナラティブの革新	川瀬 慈	1	2013-2015
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2016
米国土土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2016
○ 表象のポリティクス——グローバル世界における先住民／少数民族を焦点に	窪田幸子	1	2013-2016
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2016
○ 宗教学人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2016
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2016
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2016
● 宗教の開発実践と公共性に関する人類的研究	石森大知	1	2013-2015
● 再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して	浜田明範	1	2013-2015
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2017
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2017
家族と社会の境界面の編成に関する人類的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2017
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する	太田好信	1	2014-2017
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2016
○ 呪術の実践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2017
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川 清	1	2014-2017
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2017
● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2016

「パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点」

本研究会の目的は、パレスチナ・ナショナリズムとシオニズム、アラブ・ナショナリズムの比較研究を、人類的、歴史学的、政治学的、地理学的、社会学的視点から多角的におこなうことにある。

パレスチナ・ナショナリズムの起源は1834年、オスマン帝国治下のパレスチナの主要都市で起こった民衆蜂起にさかのぼるといわれている（Kimmering and Midgal 1995）。しかしながら、これについては批判も多く、列強によるシリア行政州の分割と植民地化が契機であるとする反論がなされてきた。なかでも、シオニストとの対峙によってパレスチナ人アイデンティティが形成されたとする、ハーリディの説（Khalidi 1997）が有名である。いずれにせよ、同じくオスマン帝国治下にあった周辺アラブ地域におけるアラブ・ナショナリズム、およびロシア・東欧地域からのシオニストによる入植活動に触発されて、パレスチナ・ナショナリズムが発生したことについて、疑問を差し挟む余地はないであろう。本共同研究会は、この三者を扱う研究者をメンバーに迎え、互いに情報を提供しあうことで、三者の相関関係を解明してゆくことを目的とする。

研究代表者 菅瀬晶子

班員 (館外) 赤尾光春 池田有日子 白杵 陽 奥山真知 蒲生裕恵 田浪亜央江 田村幸恵
奈良本英佑 早尾貴紀 藤田 進 細田和江 森 まり子 山本 薫 横田貴之

研究会

2014年11月22日

成果公開シンポジウムに向けての準備発表:

菅瀬晶子 「ナジブ・ナッサーの『シオニズム』にみるパレスチナにおける初期アラブ・ナショナリズム」

田村幸恵 「オスマン帝国時代末期の『オスマン臣民』概念とユダヤ教徒」

田浪亜央江「英国委任統治時代のパレスチナにおけるスカウト運動」

田村幸恵・池田有日子 「Zeina B. Ghandour, “A Discourse on Domination in Mandate Palestine: Imperialism, Property and Insurgency”」

シンポジウム開催に向けての話し合い

2015年3月13日

シンポジウム『イスラエル建国以前のパレスチナをめぐるナショナリズムの諸相』

田村幸恵 「『ナショナリズム』揺籃：第一次世界大戦下のパレスチナにおける『臣民』」

赤尾光春 「ディアスポラ・ナショナリズムとシオニズムのはざままで——S・アン＝スキーの思想的遍歴における精神的力と身体的力」

菅瀬晶子 「ナジブ・ナッサーのアラブ・ナショナリズム観——『シオニズム』とカルメル誌における活動から」

田浪亜央江「パレスチナにおけるB-P系スカウト運動と『ワタンへの愛』」

成果

本共同研究で当初から目標としていた、アラブ／パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの多角的比較研究というテーマは、おおむね果たすことができた。共同研究員それぞれの関心に基づき、定義の洗い直しや、文化活動に焦点をあてたナショナリズム表象のありかたの研究を進め、互いに知見をひろめることができた。また、初期シオニズムの揺籃であった帝政ロシア末期の社会主義がアラブ・ナショナリストに与えた影響など、今後研究を深化させてゆくうえでのあらたな課題もみつけることもできた。今後はシンポジウムの内容を論文集というかたちで出版することを目標に、共同研究員間の情報交換を密に保ってゆく予定である。

「人の移動と身分証明の人類学」

本研究は、人の移動・越境・滞在と身分証明をめぐる法的・行政的の制度、そしてそれらを利用する実践のあり方を明瞭化することをねらいとする。具体的には、生から死に至るいろいろなライフステージにおいて、人の移動と在留管理に基づく身分証明が、移動する人々の人生と次世代にどのような影響を与えるのかという視点に立ち、旅券、渡航証、身分証といった身分証明は、個人のアイデンティフィケーションや社会のトランスナショナリズムにどのように関わっているのかを解明していきたい。

2012年には外国人登録制度が廃止され、新たに在留管理制度が始動した。こうした社会的変化のなかで、身分証明のあり方を明らかにし、「国家」と「住民」が織り成す関係を分析し、さらには国境を越えて移動する人々たちの国家との関係を明らかにすることを目的としている。

研究代表者 陳 天璽 (客員)

班員 (館内) 庄司博史 南 真木人

(館外) 明石純一 李 仁子 石井香世子 大西広之 郭 潔蓉 川村千鶴子 窪田順平
小林真生 小森宏美 近藤 敦 佐々木てる 館田晶子 中牧弘允 錦田愛子
西脇靖洋 付 月 松田陸彦 三谷純子 南 誠 宮内紀子 柳下宙子
柳井健一 山上博信 山田美和 林 泉忠

研究会

2014年7月18日

柳下宙子 「外交史料館所蔵戦前期の諸外国の旅券と関係史料より見る人の移動」

2014年7月19日

研究打ち合わせ

館田晶子 「移民の家族呼び寄せと親子関係の証明」

出版に向け各メンバー執筆内容概要発表・打ち合わせ

2014年12月6日

宮脇幸生 「アフリカの移民——歴史と現状」

武田里子 「メコンデルタにおける中国人コミュニティの生存戦略——一斉帰化、結婚移住、民族教育をめぐって」

三谷純子 「インドのチベット人の曖昧な法的地位の認証——国家と個人の折り合いの付け方」

討論・研究成果の公開打ち合わせ

2014年12月7日

出版および研究成果公開打ち合わせ

小山雅徳 「紛争後のコソヴォにおける人の移動の管理と民族的アイデンティティ」

久保山亮 「入国管理政策の系譜学——ドイツ、ヨーロッパ、アメリカを事例に」

成果

本年度は最終年度であるため、成果論文執筆などを視野に入れて研究会を組織・開催した。研究会開催に際しては、各共同研究員が収集した資料に関する情報交換と分析のほか、成果公開に向けた打ち合わせも定期的に行った。7月には、外交史料館の所蔵されている資料から、戦前期における諸外国の旅券と関係資料から人々がどのように日本から移出、移入していたのかについて詳細に分析することができた。

また、本研究メンバーを組織する際、世界的な移動を視野に入れ、できる限りグローバルな人の移動と身分証明の人類学を研究・分析できるよう構成したつもりではあるが、3年ほどの共同研究を終えるにあたり、アフリカ地域や東欧地域の研究メンバーが手薄であったこと、その地域についても学び、比較研究したいと考え、本共同研究の最終回は、外部からアフリカにおける移動を専門とする研究者のほか、コソヴォの移動管理を研究のみならず、実務としても携わってきた研究者、そしてドイツをはじめとするヨーロッパとアメリカの入国管理政策を専門とする研究者を招き、研究発表をしていただき、これまでの研究と比較分析することができた。

「NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」

グローバルな支援の輪が地球規模で広がっている今日、NGOの活動域は、人類学が伝統的に研究のフィールドとしてきた世界各地の周辺地域にまで及んでいる。人類学が対象とするフィールドの人びとは、NGOによるボランティア活動や支援活動を媒介として、血縁や地縁に基づく従来の関係性を超えて新たな関係性を構築するようになってきており、NGO活動に関わる人びとは、グローバルな社会的ネットワークの中に自らを世界とつながる存在として位置づけるようになってきている。一方、人類学者はフィールドワークの傍らで、ローカルNGOや国際NGOが様々な支援活動を行っているのを目にするようになり、時には人類学者自身もNGOの活動に深く関わり、場合によっては自らが支援のエージェントとなっている。こうしたNGOと人類学が接近しつつある今日の状況を鑑みて、本研究では、NGO活動の現場における人びとの新たな関係性とグローバル支援のメカニズムを、人類学のミクロな視点を生かしてローカルな現場から解明していくことを目的とする。また、新しい電子メディアを通じて人びとが国境を越えて直接むすびつく「草の根レベルのグローバリゼーション」が進行する中で、国家や世界秩序の変革・再編にNGOをはじめとする市民社会の諸アクターがどのような役割を果たしているのかを探究することも大きな目的となっている。

研究代表者 信田敏宏

班員（館内） 宇田川妙子 鈴木 紀 関根久雄（客員）
 （館外） 綾部真雄 小河久志 加藤 剛 清水 展 杉田映里 内藤直樹 中川 理
 子島 進 福武慎太郎 藤掛洋子 増田和也 三浦 敦 渡邊 登

研究会

2014年10月5日

白川千尋 「国際協力NGOの担い手の『世代間差異』をめぐり試論」

三浦 敦 「市民社会論と農民支援——フィリピンとセネガルの市民社会とグローバル支援」

全 員 「全体討論」

全 員 「論集出版に向けての話し合い」

2014年12月6日

全 員 「論集出版に向けての話し合い」

関根久雄 「なぜ持続しないのか——ソロモン諸島における開発 NGO の実践と矛盾」

中川 理 「グローバル市民社会の想像力と『国家の外』の想像力——フランス農民のケース」

綾部真雄 「裂け目に分け入る——リス、『私』、そして NGO」

全 員 「全体討論」

成果

最終年度である本年度は、合計2回の研究会を実施した。本年度は、個別発表とそれに伴う議論と並行して、論集の出版に向けた話し合いを行った。個別発表については、2014年10月5日に、大阪大学の白川千尋による国際協力 NGO の担い手に関する報告と、三浦 敦による市民社会論の整理および農民支援に関するフィリピンとセネガルの比較についての報告がなされた。また、2014年12月6日に、関根久雄によるソロモン諸島の開発 NGO がなぜ持続しないのかについての要因分析、中川 理による青果市場におけるフランス農民の行動分析、綾部真雄によるタイの少数民族であるリス社会における人類学者の役割についての報告がそれぞれ行われた。本研究会の研究成果については、研究会メンバーおよび白川千尋が仮の論文タイトルを提出し、論集の趣旨や目次案などについて全体的な整合性の観点から十分に議論した上で、『グローバル支援の人類学—— NGO 活動の現場から』というタイトルで昭和堂から商業出版を目指すことで合意した。

「物質性の人類学（物性・感覚性・存在論を焦点として）」

インターネットをはじめとするテクノロジーの革新による仮想現実の蔓延の結果、人文社会科学の領域においても、人間にとっての物質世界の重要性が急速に低下しているかに見える。しかし、人間は依然として、（それぞれ特定の物性をもつ生物や無生物、自然物や人工物から構成される）物質世界のなかに存在し、その物質世界に物質たる身体感覚を介して物質的に関与する、それ自身徹頭徹尾、物質的存在でありつづけている。本研究は、人間の生活と人生の基盤をなす「物質性」(materiality) が人類学においてこれまで不当に看過されてきたとの認識に立ち、今後の人類学が問うべき「物質性」に関する問題系を、物性・感覚性・存在論の観点からラディカルに再考察することを通じて明らかにすることと、「物質性」に照準する具体的な手触りのある事例研究を、各自のフィールドワークに基づいて生みだし、今後の研究のために範を示すことを目的とする。

研究代表者 古谷嘉章（客員）

班員（館内）関 雄二 野林厚志

（館外）秋山 聡 鏡味治也 川田順造 佐々木重洋 武井秀夫 出口 顯 松本直子

溝口孝司 箭内 匡 渡辺公三

研究会

2014年7月12日

全員のミニ報告および討論 「物質と非物質のあいだ」

成果公表についてのディスカッション

2014年9月20日

『イメージの力』展見学および「展示と物質性」についての総合討論

成果公表についてのディスカッション（公刊書籍の趣旨および構成）

2014年12月14日

全員による総括討論 「物質性の人類学の可能性」

成果公表についてのディスカッション

成果

第4期「結」として、やや包括的なテーマについてのディスカッションのための研究会を2回開催した。具体的には、1)「物質と非物質のあいだ」というテーマの下で各自がミニ報告を行い、物質性の問題そのものを搦手から

再度あぶりだすことを試みた。2) 民博で開催中の『イメージの力』展を見学し、国立新美術館（東京）で開催された同展の展示との比較を視野に入れて、展示における物質性というテーマについて討論を行った。3) 最終回の研究会において、これまでの研究会で提起された様々な問題について再度検討することを通して、今後の「物質性的人类学」の展開を視野に入れた総括的検討を行った。分析概念等、共通のツールボックスを整備するという目標は予想以上に困難であったが、広範な議論を通して、問題領域の広がりとともに追及すべき問題群についてかなり具体的な共通理解に到達することができた。単行本出版を視野に入れて、書籍の全体構成等、成果公開のための準備作業を行った。

「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」

今日、ネオリベラリズムの主導する世界資本主義の浸透は社会に「恒常性の喪失」をもたらしている。しかも、主流社会とアンダークラスという垂直的に分離した「管理型」社会を産出している。アンダークラスや不安定労働者層は、保障なき世界をストリートに近接して剥き出して生きる現代の前衛と言える。主流ホーム社会の中核の人々さえも現代社会の強い遠心力に不安を募らせている。故に、縁辺のストリートを生き抜く人々のぎりぎりの実践知は、今日すべての人々に要求されている。この図式を現代の地域構造に向ければ、今日のローカリティの盛衰も広義の「ストリート現象」と言える。流動する時間を生きるグローバル・シティの強大化の下で、周辺化されるローカリティはその生き残りをかけて格闘している。この狭義から広義までの「ストリート」現象（敗北と再創造の過程）の記述分析が本研究の第一の目的となる。つまり、主流社会の設計主義が通用しない、偶発的なフローを資源にしたストリートの戦術的生き延び方のエスノグラフィを作成する。

研究代表者 関根康正

班員（館内）岸上伸啓

（館外）朝日由実子 阿部年晴 小田 亮 姜 竣 北山 修 高坂健次 鈴木晋介
関根康正 近森高明 Gill, Tom 内藤順子 西垣 有 根本 達 野村雅一
古川 彰 松本博之 丸山里美 南 博文 森田良成 和崎春日

研究会

2014年10月26日

根本 達 「野生の仏教序説——現代インドを生きる仏教僧佐々井秀嶺と『当事者になること』について」

朝日由実子「『エスニック・タウン』とストリート」

姜 竣 「漂白芸能にまつわるノスタルジアのイデオロギーと（当事者の）「痛み」について——街頭紙芝居と淡路人形伝統を事例に」

関根康正 「ストリート人類学の展望」

成果に向けての討論

2014年12月20日

丸山里美 「イギリスのスクウォット運動」

鈴木晋介 「伝統野菜の復興——背景と問題の所在」

西垣 有 「近傍論——ローカリティの創発へ向けての一試論」

関根康正 「ストリート人類学の挑戦」

野村雅一 「総括コメント」

総合討論

成果

最終年度の本年度は、本研究会の若手メンバーの「ストリート的なもの」をめぐるインテンシブなフィールドワークに基づく6本の発表を得て、新鮮で活発な討議が展開された。根本はインド社会の最周辺化されたダリトの間で仏教をストリート僧として生きる佐々井秀麗に学びつつ、ストリート研究のコミットメントの問題に肉薄した。朝日は、東京コリアンタウンの表象と実態のずれに注目しつつ多様な次元の文脈がずれたまま共存しながらストリートの盛衰が起こるアンヴィバレントな様相を描写した。姜は、街頭紙芝居と淡路人形伝統などを踏まえ漂白芸能にまつわるノスタルジアが内包する人が内発的に集まり生きる遊動性の原義を探求した。丸山は、イギリスのホームレスの空き家占拠というスクウォット運動のうちにネオリベ的遊動性への根本的抵抗を示す。鈴木もまた、ネオ

リベ経済の進展の中で逆説的に発現している伝統野菜の復興の背景を探って、二重の遊動性の差異を析出することを試みた。西垣には、本研究会の総括的な議論を依頼したがそれを見事に果たしてアパドゥライのローカリティと近傍の議論を深化させて、ストリート人類学の探求の焦点の所在を存在論的遊動性にあることを明示しようとした。野村と関根が最後にストリート人類学は何に挑戦しようとしているかを総括的に論じてまとめた。

「ネパールにおける『包摂』をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究」

本研究は、かつてヒマラヤのヒンドゥー王国であり、現在連邦民主共和制に向けた体制転換期にあるネパールにおいて、多種多様な中間集団の存在を前提として展開される種々の政治的な主張と、そうした中間集団に属するとされる様々な人々の行う実践とが織りなす布置を、近年ネパールにおいて急速に普及した翻訳語サマーベシーカラン（「包摂」）を鍵概念として明らかにするものである。カースト的秩序から一元的な国民統合路線を経て多民族性、多言語性が認められた1990年以降のネパールにおいて、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動と、マオイストから王党派に至るナショナルな水準での政党の主張、さらには人類学的なフィールドワークによって明らかにされる、必ずしもこうした運動や主張により回収されないローカルな水準での人々の状況、以上三者の間の関係と齟齬を多層的、多元的に検討することから、ネパール社会の歴史と現状に関する統合的理解を提出することが目的である。

研究代表者 名和克郎

班員（館内）南 真木人

（館外）石井 溥 上杉妙子 鹿野勝彦 佐藤齊華 高田洋平 橋 健一 田中雅子
外川昌彦 中川加奈子 丹羽 充 幅崎麻紀子 藤倉達郎 別所裕介
Maharjan, Keshav Lall 宮本万里 森田剛光 森本 泉 安野早己 渡辺和之

研究会

2015年1月31日

名和克郎・中川加奈子 「成果発表論文について」

橋 健一・森田剛光・渡辺和之・藤倉達郎 「成果発表論文について」

丹羽 充・（森本 泉）・（上杉妙子）・（宮本万里） 「成果発表論文について」

※（ ）内は、本人は参加出来なかったが、送られた原稿に基づき議論を行った

2015年2月1日

田中雅子・佐藤齊華・南 真木人・別所裕介 「成果発表論文について」

安野早己・石井 溥・幅崎麻紀子 「成果発表論文について」

成果

本年度は最終年度であり、予算の制約もあって、本研究会の成果出版に向けた草稿検討のための研究会を2日間にわたり開催するのみで終了した。2日間の検討を通して、本研究会が、第1に、「先住民族」「ダリト」などグローバルに或いは国境を越えて流通する概念に基づいた様々な権利主張の運動の動態を、複数の概念枠組の間での選択や、従来こうした概念を用いてこなかった人々による使用の問題も含め、運動家を含む当該社会の人々の内的な多様性に留意しつつ明らかにしてきたこと、第2に、国民国家という枠組と、民族やカースト、ジェンダーといった概念を所与の前提としては見えにくい様々な人々を巡る問題についても、様々な角度からこれまでにない視点を提供してきたことが明らかになった。さらに、本研究を通して、「包摂」を巡る問題を含む現代ネパールの現状を理解するために、海外への移住・出稼ぎという要素が決定的に重要であることが明確になった。研究成果のとりまとめにあたっては、この点についても配慮する所存である。また、昨年度までの研究成果の一端を、2014年5月に幕張で開催されたInternational Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter-Congress 2014における2つのパネルの中で発表した。

「グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究」

本研究の目的は、グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の現状を、同地域の政治・経済・社会的変化という文脈に位置づけ、人類学的な観点から明らかにすることである。インドで起こった1990年代の経済自由化

を端緒として、2000年代に入り南アジアの社会変化は更に進展した。そして、儀礼、演劇、舞踊、音楽などの南アジア芸能が、多様化する情報メディアの拡大及び人の移動を通じて幅広く受容・消費される状況をもたらした。それに合わせ、芸能の実践形態や実践者の社会経済的な状況に大きな変化が生じていると同時に、海外への芸能の拡散状況や南アジアへの逆輸入という現象がみられる。本研究では、芸能実践者たちが従来の社会関係を越えたネットワークに参入することで生じる、南アジア芸能の再定義と拡張について考察を行う。現代の芸能実践者たちは、様々な観客・消費者の嗜好に応えるため、従来とは異なる美意識とパフォーマンスを身につけ、市場経済原理に合わせたマネジメントとマーケティングを行う必要に迫られている。彼らが新たな需要に応える一方で、既存の芸能形態や社会形態を維持しつつ、南アジア芸能を創発・変容させていく過程を描き出す。

研究代表者 松川恭子

班員（館内）杉本良男 寺田吉孝

（館外）飯田玲子 岩谷彩子 岡田恵美 小尾 淳 古賀万由里 小西公大 竹村嘉晃

橋 健一 田森雅一 村山和之 山本達也

研究会

2014年5月10日

※現代インド地域研究 MINDAS との合同研究会

MINDAS 今年度の計画について（MINDAS 共同研究員のみ）

研究発表 David Trasoff “Hindustani Music in America: The First Fifty Years”

コメント及び討論（コメンテーター：田森雅一、岡田恵美）

北インド古典音楽ミニコンサート David Trasoff（サロード）

MINDAS 研究論集出版に関する打合せ

2014年5月11日

全 員 「本年度の計画についての打ち合わせ」

2015年2月28日

寺田吉孝 「南インド音楽・舞踊とグローバル化——研究の課題と展望」

松川恭子 「研究成果発表に向けて」

各 自 「研究成果原稿について」

2015年3月1日

全 員 「研究成果発表についての全体討論」

成果

本年度は研究会を2回実施し、研究成果の発表について主に議論を行った。2016年度中に『世界を環流する＜インド＞——グローバル化の中での変容する南アジア芸能の人類学的研究』（仮題）として出版予定である。その中では、グローバル化の中での南アジア芸能の変容を以下4つの類型に分け、南アジアの外で変容を遂げた後、南アジアに戻っていく、あるいは、更に他地域に広がっていく環流という観点から分析する。すなわち1) 「ワールド・ミュージック」の生成を背景に、1980年代以降、アメリカ、ヨーロッパ、日本などで起こった、エキゾチックな他者を喚起させるモノとしての芸能の消費の中での変容、2) グローバリゼーションとの交渉の中でネーション化など様々な方向に向かうローカルな場での芸能の変容、3) グローバルに移動しているように見えながら、リージョナリズムの媒介物として「閉じた観客」を対象に演じられる芸能の変容、4) イギリス植民地時代の南アジア系移民（特にインド系移民）の動きにもなった、南アジア地域外（たとえばシンガポールやマレーシア）への芸能の展開とホスト国の状況に合わせた変容の4つである。

「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』

子どもは年齢、性別、生育の環境における違いにかかわらず、生きることに主体性をもち、自分のいのちに関する情報を発信している。個別の社会や文化には子どもが発信する情報を適切に捉え、対応するための共通の認識枠組みが発達しており、子育てに関わる文化的慣習のあり方などを規定している。他方において、個別社会や文化の内部には、それぞれの文化的慣習にとらわれない多様な子どものいのちの認識もみとめられる。現代社会においては、人びとの認識は一層複雑になり、また、多様化しているが、子どものいのちをめぐる互いの認識のギャ

ップが、子どもの保健、医療、福祉にかかわる政策や現場の対応に影響を与えている。そこで、本研究では、人類学、社会学、医学および保健医療系の研究者と実践家による共同研究を行い、現代の保健・医療・福祉の現場における子どものいのちのありようとその捉え方について考察する。研究の成果は、子どものいのちにかかわる現代的課題に学際的に対応するための取り組みに応用する。

研究代表者 道信良子

班員（館内）信田敏宏

（館外）神谷 元 亀井伸孝 白川千尋 波平恵美子 西方浩一 幅崎麻紀子 樋室伸顕
藤田美樹 前田浩利 山崎浩司

研究会

2014年10月25日

全体会議 「研究成果の出版に向けて」
道信良子 「企画書の説明 他」

2014年10月26日

全体会議 「共同研究のまとめ」
公開研究会

成果

本年度は研究員及び特別講師による研究発表及び議論によって明らかになったことを研究の当初の目的に照らし、まとめてみた。具体的には、保健・医療・福祉の現場で働く医療者、病気や障がいのある子どもの家族、保健・医療・福祉の領域で研究活動を行っている研究者それぞれの「子ども」と「いのち」に対する考え方・捉え方とその共通性について議論し、人類学、社会学、医学及び保健医療福祉分野の研究者・実践家が子どものいのちに関わる課題に協働で取り組むための基本的視点について議論した。5月の日本文化人類学会（第48回研究大会）において中間的な成果を報告し、9月に日本学術振興会「ひらめき☆ときめきサイエンス」の助成を得て、利尻島で小学生向けのワークショップを開催した。10月に「地域における疾病予防と子どものいのち」というテーマで公開研究会を民博で行い、翌年3月に最終成果を中高生向けの本にまとめ、岩波ジュニア新書から刊行した。

「音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に」

本研究は、1945年以前に日本のレコード会社によって台湾と上海で発売されたレコードを取り上げ、両地域におけるレコード産業および音楽の発展の特徴とそれらの関連性を明らかにすることを目的としている。本研究では、数多く存在する東アジアのレコード音楽から、「声」・「歌」を含む音楽ジャンルのレコードに焦点を当てる。東アジアの在来音楽には語り物が多い上、初期レコードは、演説、映画説明、戯劇など、「音楽」に限定されない多様な音を取録した。そこで、ここでは「声」という概念を用いた。具体的には、次の2点に重点をおいて研究を進める。

- 1) 台湾、上海、日本で発売されたレコードを比較し、各地域の音楽嗜好の傾向、共通点、独自性を探求し、更にそれらの関連性を見いだす。
- 2) レコード産業の発達と各地域の社会、文化、音楽の間の相互的影響について研究する。

台湾と上海の音楽文化には共通点があり、録音されたレパートリーには重なり合う部分も見られる。一方で、日本の企業が初期からレコード産業を支配した台湾と、欧米のレーベルが産業の基礎を築き、後に日本企業が進出した上海では、レコード制作のあり方は大きく異なっていた。両地域のレコードの比較は、東アジア音楽の近代史においてメディアの発展、日本の支配、そして地域間の相互交流がどのような影響を与えていたかを明らかにするだろう。

研究代表者 劉 麟玉

班員（館内）野林厚志

福岡正太

（館外）今田健太郎 大畑（長嶺）亮子 尾高暁子 垣内幸夫 黄 英哲 西村正男
星宏宏修 細川周平 三澤真美恵 四方田（垂水）千恵

研究会

2014年6月21日

張 偉品 「民族学博物館所蔵『京劇』のSPレコードについて」
西村正男 「神戸華僑作曲家・梁 楽音と上海・香港・日本」

2014年11月24日

星名宏修 「耳で聞く文学体験——植民地期台湾のラジオドラマ」
成果発表に向けての準備会議

2015年2月28日

三澤真美恵「成果発表に向けての備忘録」
成果発表に向けての討論会

成果

本年度の研究会では、共同研究員による研究報告が2件と特別講師による研究報告が1件行われた。共同研究員による研究成果は、西村正男の「作曲家の事例研究」と星名宏修の「耳で聞く文学体験」の2つである。西村の報告では梁 楽音という神戸華僑作曲家を取り上げた。西村によると、梁 楽音は大阪音楽学校出身で1942年に上海に渡り、「中華連合製片有限公司」という映画会社の音楽課の課長に就任した。任期中、「売糖歌」、「戒烟歌」などの曲を作り、李 香蘭によって歌われた。特に「売糖歌」が流行っていたそうである。戦時中1945年までは、梁 楽音の音楽活動は日本と深い関わりを持っていたようである。一方、星名は、植民地台湾時代の日本語のラジオドラマや文学作品に焦点を当て、台湾人や在留日本人が、ラジオを通して、日本語のラジオドラマや文学作品の朗読を聞いたことを明らかにした。娯楽と動員という2つの役割をもったラジオで、日本語によるラジオドラマの「声」がどのように響いたのかを明らかにすることは、日本統治下の台湾における近代を理解する上で重要な課題である。

「災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承」

被災体験の記録化や記憶の継承は、被災者自身による体験記の執筆や第三者による聞き取り調査などによって、これまでも数多く試みられてきた。近年では、災害発生によって予期せぬ事態に遭遇した際の判断と行動に関して、一般市民だけでなく災害の現場での対応に当たった行政官や消防士などをも対象として、言語記録として残し、そしてそれを災害状況下での教訓として共有化を図るための災害エスノグラフィも実施されている。しかしながら災害エスノグラフィでは、将来の防災や減災への貢献を目的に、災害発生直後や避難所などの非日常的な環境下での判断・行動にテーマが限定されがちである。本研究は、人びとが自然・社会環境と日々関わる中で形成される実践的、経験的な知（在来知）が、災害発生により被った影響やその再生の活動、地域社会の再建に果たす役割、さらにはそうした経験の継承に注目し、社会的・歴史的背景に照らして、解明することを目的としている。主な対象は東日本大震災における無形文化とする。

研究代表者 橋本裕之

班員（館内）林 勲男 日高真吾 吉田憲司
（館外）猪瀬浩平 植田今日子 柄谷友香 川島秀一 木村周平 小谷竜介 佐治 靖
関 礼子 寺田匡宏 丹羽朋子 政岡伸洋 松前もゆる

研究会

2014年7月12日

丹羽朋子 「非当事者から『当事者』へ——東日本大震災における民間支援を考える」
小谷竜介 「『おらほの祭りを取り戻す』こと——石巻市雄勝町におけるチーム鼓舞の試みから」

2014年7月13日

橋本裕之・林 勲男 「成果出版について」
メンバー各自の執筆計画発表

2014年10月4日

岡本翔馬 「桜ライン311の活動」

2014年10月5日

山内宏泰 「常設展示『東日本大震災の記録と津波の災害史』の試み」

2015年1月25日

全員による成果出版用論文の中間発表

成果

最終年度に当たる本年度は、研究成果のとりまとめにあたり、3回の研究会のうち1回を館外開催とし、東日本大震災被災地にて展開する記憶継承活動のなかで、本研究会と密接に関わる2つのプロジェクトについて、研究会メンバーで情報を共有し、意見交換をおこなう機会とした。桜ライン311の岡本翔馬氏らは津波到達線上に桜を植樹することによって、リアスアーク美術館の山内宏泰氏は被災地の写真と被災物を主とした展示「東日本大震災の記録と津波の災害史」を通して、それぞれに災害の記憶をつなぐ方法の可能性を追求する試みを実践している。東北地方太平洋沿岸は、いわゆる津波常襲地域であり、過去の大災害においても経験と教訓の継承の試みはなされてきているが、新たな媒体を通じて、多くの人びとを巻き込むプロジェクトとして運用を図っていることは斬新なものである。両名に各プロジェクトについて発表してもらい、意見交換をおこなった。他の2回の研究会は、研究発表と成果の取りまとめに向けて、出版社から編集担当者にも参加してもらい開催した。

「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」

本研究は、熱帯の「狩猟採集民」を対象にして彼らの資源利用や民族間関係を環境史の視点から構築することを目的とする。申請者によると、彼らの歴史は、1) 狩猟採集民の時代、2) 狩猟民と農耕民との共生関係や農耕民化の時代、3) 前近代・近代の国家形成の時代、4) グローバル化の時代という4時代に便宜的に区分できる。本研究では、これらの時代状況をふまえて、アジア、アフリカ、南アメリカという3大陸に暮らす「狩猟採集民」の視点からみた世界史を環境史として新たに構築することを試みる。具体的な問いは、時間軸に沿って1) 狩猟採集民は、熱帯雨林や熱帯高地において自給的に暮らしていたのか、2) どういう状況下で狩猟採集民と農耕民との共生関係がみられたのか、3) 前近代の国家形成（ムガル帝国と林産物、コンゴ王国と象牙など）や植民地形成にともない狩猟民はどのように対応したのか、4) 沈香などの森林産物や象牙を求める中国経済の増大などグローバル化が進むなかで、狩猟民社会にどのような変化がみられたのか、などである。これら4つの個別の問題を解くことによって、これまでの都市文明中心の世界史ではなく狩猟採集民の視点からの世界史を、地球の環境史として構築することが研究会のねらいである。

研究代表者 池谷和信

班員（館内）信田敏宏

（館外）伊澤紘生	稲村哲也	大石高典	大橋麻里子	小谷真吾	小野林太郎	加藤裕美
金沢謙太郎	小泉 都	佐藤廉也	鮫島弘光	関野吉晴	高田 明	辻 貴志
鶴見英成	中井信介	那須浩郎	服部志保	増野高司	松井 章	松浦直毅
八塚春名	山本太郎					

研究会

2014年4月26日

池谷和信 「趣旨説明——アジアの森や海と狩猟採集民」

高木 仁 「ウミガメ類と人のかかわり——カリブ海からの視点」

鮫島弘光 「ボルネオのヒゲイノシシと人々」

信田敏宏 「統治される森に生きる——マレーシア、オラン・アスリの事例」

総合討論

2014年4月27日

参加者全員 「ノマドの遊動と定住——アジアの事例を中心として」

2014年7月26日

池谷和信 「趣旨説明・『狩猟採集民』の定住度と社会変化」

小泉 都 「東南アジア（ボルネオ）の狩猟採集民の由来と半定住」

コメント：小野林太郎

羽生淳子 「東アジアの『定住狩猟採集民』・縄文人」

コメント：荘司一歩

三宅 裕 「西アジアの定住狩猟採集民の実像」

コメント：佐藤廉也

全体討論

2015年2月8日

池谷和信 「趣旨説明——これまでの共同研究会から」

小野林太郎「海域アジアの人類史と狩猟採集民——人類の島嶼適応から狩猟・漁撈専門民の出現まで」

大橋麻里子「アマゾンの氾濫原の土地利用の変遷——過去数十年ぐらいの狩猟民と漁労民のかかわりから」

大石高典 「狩猟民と農耕民、漁労民——コンゴ盆地の環境史」

高田 明 「ナミビア北中部におけるクン・サンの再定住——宣教団の活動に注目して」

服部志帆 「定住化による生業と民族関係の変化——カメルーン東南部の狩猟採集民バカを事例に」

全 員 「成果出版」

成果

本年度の研究成果は、3回にわたる民博での共同研究会の開催のみならず、5月に幕張で開催された国際人類学民族学会議でのパネル報告（タイトル：狩猟民、遊動民からみた地球環境史）などと多岐にわたっている。本研究会では、1回目および2回目とも、人類にとっての定住化の過程やその社会経済的な影響について焦点を当てた。これらの事例の対象地域は異なるものの、地域と地域との比較をとおして共通の特質を抽出することができる。それと同時に、これらの定住化が、人類史のなかでどのように位置づけるのか、地球環境史の視点から考察することができた。

「贈与論再考——『贈与』・『交換』・『分配』に関する学際的比較研究」

個人間や集団間のモノや食料などのやり取りを説明する人類学理論にモースの贈与論がある。この贈与論は後に、互酬性（reciprocity）に着目したレヴィ＝ストロースによって社会的交換論へと展開を見た。また、贈与論を批判的に検討したワイナーやゴドリエは「贈与できないモノ」の概念を提起した。これらの流れとは別にマリノフスキーはクラ交易によって当事者間に連帯が生み出され、社会が統合されるという一種の交換論をモース以前に提起していた。狩猟採集社会を研究する人類学者は、食料のやり取りを分配（sharing）や再分配（redistribution）、交換（exchange）などの概念で記述し、説明しようと試みてきた。さらに上記の概念に関連する説明モデルとして、サーリンズモデルなどが存在している。

本研究の目的は、アメリカやオセアニア、アジア、アフリカなど世界各地における贈与や交換、分配の民族誌事例を学際的に比較検討することによって、贈与や交換、分配などの概念と説明モデルの内容や有効性を検証することである。また、グローバル化が進む市場経済の浸透によって、各社会の贈与・交換・分配慣行がどのように変化してきたかについても検討を加えたい。

研究代表者 岸上伸啓

班員（館内）丹羽典生 藤本透子

（館外）井上敏昭 小川さやか 小田 亮 風戸真理 近藤 宏 佐川 徹 立川陽仁

友野典男 中川 理 中倉智徳 仁平典宏 比嘉夏子 深田淳太郎 丸山淳子

溝口大助 山極寿一 山口 睦 渡辺公三

研究会

2014年7月6日

岸上伸啓 「総論」

藤本透子 「イスラーム復興のなかの贈与交換——カザフスタンの事例から」

風戸真理 「モンゴル牧畜における労働交換——雇用と贈与のあいだで」

山口 睦 「災害支援と贈与——婦人会活動と慰問袋を中心に」

全 員 「成果出版についての意見交換」

2014年11月8日

岸上伸啓 「これまでの研究会の成果について」

近藤 宏 「パナマ東部先住民エンペラにおける不信と道徳」

中倉智徳 「贈与論における発明の位置——モースとタルド」

全 員 「成果本の出版計画について」

2015年1月31日

岸上伸啓 「成果刊行について」

中川 理 「『反-市場』としての贈与——フランスの青果市場の事例」

仁平典宏 「近現代日本における『ボランティア』言説の構造と東日本大震災の位置——〈贈与のパラドックス〉に注目して」

全 員 総括

成果

2014年度は、ユーラシア地域、中米、ヨーロッパにおける贈与交換に関する事例の検討および社会科学から見た贈与論の検討を行った。本年度の成果は次の通りである。

1) 贈与交換の事例

カザフ人には、相互に贈与が行われるスイクルとイスラームに基づく贈与の2種類があり、カザフ社会における贈与や交換、分配の体系はイスラームの教義のみからでは理解できないことが藤本によって指摘された。グローバル化が贈与交換に影響を及ぼしている事例として、モンゴルのゲルは親から子にのみ受け継がれるものであったが、自由経済の拡大するに従い非家族間で金銭によって移譲されるようになったことが風戸によって報告された。近藤はパナマ東部の先住民エンベラを事例として毒の無いモノを分け与えることは、信頼できない他者との生活において良いことを生み出す手段となっていると指摘した。これらの事例は、贈与交換と社会関係が不可分の関係にあることを示している。

2) モースの「贈与論」の社会科学研究での応用的展開

災害支援と贈与について婦人会活動と慰問袋を事例として検討した山口は、災害支援としての贈り物は、非日常・日常時の贈与行為として贈与研究と災害研究が重なり合う研究領域であることを指摘した。中倉は、発明と贈与との関係についてモースとタルドの研究を比較検討し、発明やイノベーションを贈与論の視点から理解する可能性を提示した。また、中川はフランスの青果市場を事例として、社会に埋め込まれた市場という視点から贈与（反市場）/市場の構図を見直す必要性を指摘した。さらに、仁平はボランティアの言説分析によって贈与にはパラドックスが付随していることを指摘した。これらの研究は、「贈与」を現代的現象の解明に援用できる可能性を示している。

「肉食行為の研究」

本研究の目的は、人類の採食行動の構成要素の1つである肉食に焦点をあて、その生態学的適応と文化的位置づけとの関係、さらに今日のグローバル消費社会のなかで変質してきた人類の肉食行為の動態を明らかにし、将来の展望を与えることである。人類は進化の過程において、肉食と菜食の双方に生態学的に適応するとともに、それを文化的な行為として社会の中に位置づけてきた。食肉の分配や共食、供犠における利用、肉食の忌避や規範化は、人類学が明らかにしてきた肉食の重要な社会的機能である。食肉の生産や流通が産業化された20世紀後半から、肉食は先進国社会の中で日常化される反面、動物から食肉を得るという光景は希薄となった。こうした社会的背景のもと、欧米では「動物解放論」に代表される倫理的なアプローチを中心に、肉食の是非を含めた動物の権利をめぐる議論が盛んとなった。しかしながら、これらは功利主義と義務論が中心で、異なる社会的、文化的脈絡の中で人間と動物との関係が構築されてきたことについては必ずしも注意がはられていない。本研究では、肉食とそれに関連する行為の背景にある複雑で多様な問題群を明らかにしたうえで、これからのグローバル消費社会における肉食のありかた、さらには、人間と動物との関係のありかたに新たな視座を作り出すことをねらいとする。

研究代表者 野林厚志

班員（館内）池谷和信

岸上伸啓

（館外）伊勢田哲治

五百部 裕

鶴澤和宏

梅崎昌裕

永ノ尾信悟

大森美香

小川 光

加藤裕美

筒井俊之

林 耕次

原田信男

本郷一美

山田仁史

研究会

2014年 5月10日

- 野林厚志 本年度の計画概要
 梅崎昌裕 「パプアニューギニア高地人の肉食」
 山田仁史 「禁断の肉? ——人類学におけるカニバリズムの虚実」

2014年 5月11日

- 本郷一美 「狩猟から牧畜へ——肉食行為の変化」

2014年 7月27日

- 筒井俊之 「動物疾病から見た世界の畜産の動向」
 小川 光 「グローバル時代の食肉需要と供給の変化」
 全員による討論

2014年 7月28日

- 参加者による現代の食肉生産に関わる議論

2015年 1月17日

- 原田信男 「日本の動物供犠と穢れ」
 伊勢田哲治「動物福祉の論理と動物供養の倫理」
 成果出版に関する討議

2015年 1月18日

- 野林厚志 「肉食のブランド化——イベリコ豚を事例として」

成果

2014年度は人類社会における肉食行為を文化的に規定する諸要素、グローバル化する社会の中での肉食の位置づけや変化、そして、肉食や屠殺の倫理を課題とする研究会を実施した。文化的に肉食をかたちづくる要素として着目したのは饗宴、カニバリズム、そして肉食に対比的な植物（菜食）の実践である。特別な状況での採食の対象として食肉の相対的な価値が高くなることは、肉食行為に文化的な意味を付与する背景となること等が議論された。グローバル時代の肉食行為を考えるための議論は経済学と獣医疫学の分野を中心に行った。グローバル世界での肉食の未来の予見、大量生産社会における食肉生産と消費との間に存在する矛盾が議論の対象となった。また、肉食が倫理的な規範の中でどのように存在しうるのかという課題を通して、「西洋」と「東洋」における倫理規範の接合の可能性を探る議論が行われた。また、当該年度は、研究会の最終年度であり、成果刊行に関する意見交換も並行して行い、共同研究員の全員が寄稿する成果論文集の構成を決定した。

「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」

本共同研究は、2009～2011年度に実施した科学研究費プロジェクト「誰もが楽しめる博物館を創造する実践的研究——視覚障害者を対象とする体験型展示の試み」を発展的に継承し、人類学的視点から「触文化」（さわらなければわからない事実、さわって知る物の特徴）について考察することを目的としている。上記科研プロジェクトの成果としてまとめられた広瀬編『さわって楽しむ博物館——ユニバーサル・ミュージアムの可能性』（青弓社、2012年5月）は、「ユニバーサル・ミュージアム＝誰もが楽しめる博物館」の入門書、実践事例集と位置づけることができる。この本の内容を敷衍する形でユニバーサル・ミュージアム、さらには21世紀の多文化共生社会の具体像を指し示すための理論構築を試みるのが本研究の狙いといえよう。これまでの人類学においては、視覚（映像）・聴覚（音響）などに比較して、触覚に注目する研究は少なかった。本研究では、博物館展示を活用した“手学問”理論を切り口として、「触文化」にアプローチする。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員（館外）石塚裕子 及川昭文 大石 徹 大高 幸 小山修三 五月女賢司 鈴木康二
 原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 増子 正 宮本ルリ子 山本清龍

研究会

2014年 7月 6日

- さかいひろこ 「『縄文文化にさわる』ワークショップの実践事例報告1」

堀江武史 「『縄文文化にさわる』ワークショップの実践事例報告2」

寺岡茂樹 「『疱瘡絵にさわる』展覧会の実践事例報告」

2014年11月30日

安芸早穂子 「『アート&アーケオロジー』の可能性1——レプリカの制作と活用」

村野正景 「『アート&アーケオロジー』の可能性2——考古展示のユニバーサル化の模索」

堀江典子 「公園のユニバーサルデザイン——その現状と課題」

半田こづえ 「視覚障害者の美術鑑賞1——彫刻作品の触察」

真下弥生 「視覚障害者の美術鑑賞2——絵画作品へのアプローチ」

総合討論

2015年3月1日

鈴木康二 「ワークショップの可能性——レプリカのその後」

藤村 俊 「身体を刺激する場としての博物館」

宮本ルリ子 「『つちっこ！プログラム』（普及事業）の触る展示とワークショップ事例報告」

五月女賢司 「宇治の世界遺産・触って散歩ツアーについての考察」

山本清龍 「大阪空堀のまちあるき体験の評価——ユニバーサルな楽しみ方の提案に向けて」

大石 徹 「触常者も見常者も満喫できる娯楽施設——マダーロッジの事例」

廣瀬浩二郎 「共同研究の回顧と展望——総合討論」

成果

共同研究の最終年度である今年度は、3回の研究会を実施した。全体として、「さわる」「視覚障害」をキーワードとする多様な実践報告が積み上げられ、本プロジェクトが掲げる「博物館を活用した“手学問”理論の構築」という目標を達成できた手応えを感じている。初回研究会（7月6日）では考古学、現代アート、近世風俗史などの分野で触察系のワークショップを展開しているゲスト講師の発表を元に、ユニバーサル・ミュージアムにおける「さわる展示」の重要性を確認した。第2回研究会（11月30日）では視覚障害者の美術鑑賞を中心に、多様な角度から触文化の意義を探った。第3回研究会（3月1日）では2年半の活動の総括を意識し、共同研究員が自己の研究の現状と課題を報告した。個々のメンバーが最終回となる研究会において、来年度以降の新たな共同研究に向かう展望を共有できたことは有意義である。

「明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動

——国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイルタ、ニヴフ資料の再検討——

国立民族学博物館が所蔵する北海道、樺太、千島の民族資料のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたことが明らかなのは、アイヌが1,000点以上、ウイルタで280点以上、ニヴフで70点以上ある。これらは伝統的な特徴をよく残しており、素材や製作技法といった物質文化研究を進めるうえで重要であるとともに、現在では収集できない貴重なものが多数含まれている。ただ残念なことに、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、資料データの欠けているものや誤りが少なくない。しかし、これらの資料は収集者が明らかなものが大部分で、その足跡をたどることによって、情報を再検討し、修正・追加できる可能性が十分にある。本研究では、各民族の物質文化、言語等に関する専門家が共同研究を行うことによって、資料に適正な情報を付すとともに、あわせて明治から昭和前期までの人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係など、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景を明らかにする。

研究代表者 齋藤玲子

班員（館内）佐々木史郎

（館外）大塚和義 小川正人 加藤 克 北原次郎太 木名瀬高嗣 小西雅徳 田村将人
丹菊逸治 津曲敏郎 手塚 薫

研究会

2014年9月24日

齋藤玲子 「坪井正五郎の北海道・樺太調査について」

2014年 9月25日

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵「坪井家関係資料」のうち坪井正五郎関係資料とその内容に関する検証

2014年 9月26日

東京大学大学院情報学環附属社会情報研究資料センター所蔵「坪井家関係資料」のうち坪井正五郎関係資料とその内容に関する検証

研究計画に関する打ち合わせ

2015年 1月24日

齋藤玲子「坪井正五郎の樺太調査関係資料から見えるもの」

加藤 克「旧東京大学理学部人類学教室資料の管理変遷について」

2015年 1月25日

木名瀬高嗣「国立民族学博物館所蔵資料と『アイヌ民族総合調査』」

2015年 2月28日

山田祥子「ウイルト民族資料の現地呼称——資料カードと辞書の照合による民族誌研究の展開」

佐々木史郎「虻田で作られた木綿衣の分布と年代——ロシアおよび北海道の博物館の資料調査から」

2015年 3月 1日

小西雅徳「石田収蔵の第4回樺太調査（大正6年）について」

成果

引き続き、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料と日本民族学（協）会附属民族学博物館旧蔵資料を中心に、情報の再検討・修正を進めた。とくに東大人類学教室の主任教授であった坪井正五郎（1863-1913）の遺した野帳や日記などと著作について調べ、明治時代におこなわれた北海道と樺太の調査・収集活動の状況を検討した。さらに、東大の資料カード類については、複数回の整理・作成がおこなわれているが、それらを比較調査し、記載情報の変化をつきとめ、作成された時代や状況等を推察した。

また、日本民族学協会の旧蔵資料については、同協会が1938（昭和13）年に樺太に派遣した北方文化調査隊の一人、宮本馨太郎が残した収集資料のカードに記録されたウイルト語およびニヴフ語の現地呼称について、共同研究員および特別講師の言語学研究者によって分析をおこない、調査時の状況や今後の課題について検討した。

「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究——資源利用と物質文化の時空間比較」——

アフリカ大陸で誕生した現生人類は、約5万年前頃までにはアジアやオセアニアの島嶼海域に移住・拡散した。島嶼海域に進出した人類は、自然資源や加工生産物を交換するために海を渡る移動を繰り返し、その過程で広範囲に及ぶネットワークを形成してきた。アジア・オセアニアには、そうした海域ネットワークを生活基盤とする社会が各地にみられる。本研究の目的は、この海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を、物質文化と資源利用の様式ならびにその分布に関する時空間の双方の面からの比較を通じて、人類学的な視点で検討するところにある。このうち時間面では、5万年程度の幅の考古学的時間と約100年程度の幅の民族誌的時間を、空間面では、日本を含む東アジア、東南アジア、オセアニアの海域を、それぞれ比較の準拠枠と、主な検討事項としては資源利用と物質文化をテーマに検討を進め、海域ネットワーク社会の普遍性と地域性を明らかにするのが狙いである。

研究代表者 小野林太郎

班員（館内）飯田 卓 印東道子

（館外）赤嶺 淳 秋道智彌 片桐千亜紀 島袋綾野 鈴木佑記 田中和彦 玉城 毅

長津一史 橋村 修 山形真理子 山極海嗣 山口 徹

研究会

2014年 7月 6日

小野林太郎「本年度の計画」

瀬木志央「フィリピン中央ビサヤ地域の小規模漁業と商業漁業を巡る海域ネットワーク」

2014年10月19日

小野林太郎・長津一史「第2回研究会の趣旨と発表者の紹介」

深田淳太郎「ムシロガイ交易の地域史——ニューブリテン島—ブーゲンビル島—ソロモン諸島西部地域を結ぶ海域ネットワークの歴史の変遷」

玉城 毅 「沖縄・糸満漁民を生み出した力学——漁業町形成過程における政治経済と文化」

2014年11月16日

秋道智彌 「海のエスノ・ネットワーク論からみた東南アジア・オセアニア・琉球」

印東道子 「ミクロネシアの海域ネットワーク——その起源に関する一考察」

山口 徹 「海域ネットワークが生み出したリモートオセアニアの環礁景観」

島袋綾野 「更新世以降における八重山列島の人類移住と海域ネットワーク——課題と現状」

山極海嗣 「下田原期～無土器時代における先史宮古・八重山諸島と海域ネットワーク」

小野林太郎「新石器～金属器時代におけるウォーラシア海域の人類移住と海域ネットワーク」

田中和彦 「土器・副葬品からみた先史南シナ海における海域ネットワーク——フィリピンの事例から」

深山絵実梨「鉄器時代の南シナ海における海域ネットワーク——耳飾の分布と年代からの復元の試みから」

山形真理子「鉄器時代の南シナ海における海域ネットワークと人類の移住——ベトナムの甕棺墓に残された証拠から」

成果

本年度の主な研究成果としては、3回の共同研究会の開催があげられる。このうち本年度1回目の共同研究は2014年の7月6日に開催し、特別講師としてメルボルン大学の瀬木志央氏にフィリピン中央ビサヤ地域の小規模漁業と商業漁業を巡る海域ネットワークについて発表してもらうことができた。次に2回目の共同研究は2014年10月19日に開催し、特別講師として一橋大学の深田淳太郎氏にメラネシアの事例として、ソロモン諸島西部地域におけるムシロガイ交易の地域史から、海域ネットワークの歴史の変遷について発表してもらったほか、本研究メンバーの玉城 毅氏に沖縄・糸満漁民の事例として、糸満集団による漁業町形成過程における政治経済と文化的背景について発表してもらい、両事例を踏まえた総合討論を行うことができた。さらに3回目の共同研究は、日本東南アジア考古学会の大会を兼ねる形で2014年11月16日に上智大学を会場とした、公開研究会として開催し、本研究メンバーのうち、考古学的時間軸を中心に計8名が発表したほか、特別講師として早稲田大学の深山絵実梨氏に南シナ海の鉄器時代における海域ネットワークの事例について発表してもらうことができた。

『統制』と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ——

ミャンマー（ビルマ）は1962年ネーウインの軍事クーデター以来、半世紀の間に3つの政治体制（社会主義、軍政、大統領制）と2つの経済体制（社会主義体制における統制経済、経済制裁下の市場経済）を経験したが、一貫して物の流れや人的移動、情報などを中心に厳しい統制が課せられてきた。本研究会で扱う「統制」とは比較的可視化されやすい国家政策に留まらず、宗教、ジェンダーといった多様な領域に及ぶ不可視のイデオロギーと支配装置、さらに、隣組的な相互監視システムや言論統制などを通じて身体化された統制をも含む。他方、それぞれのコミュニティ内で、例えばミャンマーであれば、僧院を核とする宗教ネットワークや在家組織、精霊信仰の霊媒や信者たち、各少数民族や国際・国内NGOなどの組織やその参加者、その他ジェンダーや「親しい（キン）」を媒介とする繋がりの中に、「統制」をすり抜け、オルターナティブなネットワークを作る戦略的实践が存在してきた。本研究会では、こうした実践に着目し、「統制」と公共性という2つの観点から、統制解除へと急激に移行しつつあるミャンマーを中心に、社会的再編成、コミュニティの公共性やその変容を明らかにすることを旨とする。

研究代表者 土佐桂子

班員（館内）信田敏宏

（館外）飯國有佳子 生駒美樹 伊藤まり子 伊野憲治 岡本正明 藏本龍介 斎藤紋子
高谷紀夫 田村克己 田村慶子 テッテツヌステイ 松井生子

研究会

2014年4月26日

田村慶子 「2006年12月調査から見るミャンマー華人」

木村 自 「クレオールとしてのミャンマー華人／華人系ミャンマー人——ミャンマー地方都市における華人と非華人の協働から考える」

総合討論

2014年 5月24日

生駒美樹 「パラウン自治区ナムサン郡における茶生産者間の関係の変化とその背景」
山本文子 「ヤンゴンにおける霊媒カルト集団の現状——霊媒 KMT とその信者の事例から」
総合討論・情報交換

2014年 6月29日

岡本正明 「民主化・自由化とセキュリティーの民営化——インドネシアとミャンマーの比較」
菱山宏輔 「バリ島の地域セキュリティーとゲートッド・コミュニティ」
総合討論・情報交換

2014年 9月28日

土佐桂子 「『統制』と公共性をめぐる人類学的研究の可能性」
全 員 「研究に関する中間報告」
総合討論・情報交換

成果

2014年度は全部で4回の研究会を開催した。今年度の核は3つあり、第1が昨年度に引き続き、華人や少数民族といったマイノリティに対する統制に関わる考察である。マイノリティの言語、生産、宗教活動に対する統制という局面に着目することにより、彼らの置かれる状況は可視化しやすい。ただし、逆に、公共性へのアクセスがどれほど開けるかという点においては当該社会の状況により異なり、今後の研究課題として残されている。第2に、統制、統治を考察する重要な核として、民主化プロセスにおけるセキュリティーの民営化に着目する研究がある。インドネシアにおけるセキュリティーの民営化、さらにミャンマーにおけるセキュリティー事業への元軍人の関与、さらに、バリのゲートッド・コミュニティに関する考察を通じて、ゲートが人の動きを統制する反面、バリ島における伝統的門の機能に重なる公共性を担う可能性も示された。第3の核は、統制と公共性に関する従来の理論を振り返り、これまでの発表における「公共性」の理論的検討を行うものである。参加者全員の討論を通じて、50年近い言論統制の歴史を通じた統制の在り方、民主化運動の意義を振り返りつつ、いくつかの課題が示された。次年度再度、概念や議論のすりあわせを行いつつ、出版に向けて考察を深めることが課題といえる。

「現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して」

本研究の目的は、モノの流通・消費をめぐるグローバル化現象の多元性に注目した、現代消費文化に関する人類学的研究の新しい可能性を提起することにある。具体的には、アフリカにおける中古品やコピー商品、タイに輸入される日本アニメ、ガーナやラオスのフェアトレード製品、ネパールの宝石、既製服化される中国ミャオ族の民族衣装、トルコの手織り絨毯、エジプトにおける学校教育や教養としての宗教実践を通じたステータスの消費、鯨肉の流通・消費における日本人論の消費といった多様なモノ・価値の流通・消費にかかわる事例報告をおこない、以下の二つの課題に取り組む。第1に、先進諸国・新興国・研究対象地域のあいだをモノが動くプロセスと、そこでモノの価値変化を明らかにし、グローバルな経済システムの再編・再創造のあり方を考察する。第2に、モノの流通・消費の実践にみられる研究対象地域の自己表現のあり方やアイデンティティの変容、新しい環境観・ジェンダー観、階層化や世代間関係を析出し、研究対象地域間、および日本をふくむ先進諸国におけるそれらとの共通性・異質性を考察する。

研究代表者 小川さやか

班員（館外） 相島葉月 牛久晴香 田村うらら 鳥山純子 箕曲在弘 宮脇千絵 若松文貴
渡部瑞希

研究会

2014年 7月13日

小川さやか「今年度の研究計画について意見交換」
宮脇千絵 「手製から既製服へ——中国雲南省におけるモンの服飾の商品化・流通・消費」
相島葉月 「教養へのあこがれ——現代エジプトの都市中間層によるイスラーム・教育・メディアの消費をめぐって」

討論

2014年12月20日

今年度の研究計画について意見交換

鳥山純子 「現代カイロの教育学校市場に関する一考察——分析ツールとしての「消費」概念を援用して」

小川さやか「消費の人類学の論点整理と成果公開について」

討論

2015年2月1日

これまでの研究会と今後の成果公開について意見交換

田村うらら「消費者の志向を想像／創造する——トルコ絨毯の修繕と流通に関わる人びとに注目して」

渡部瑞希 「フレンドへの信頼と懐疑から生成する取引空間——ネパールの観光市場、タメルにおける宝飾商売の事例から」

討論

成果

本年度は、計3回の共同研究会を開催した。第1回目は小川が、昨年度の共同研究の論点を整理した後、2つの個人発表がなされた。宮脇は、中国少数民族ミャオ族の民族衣装が既製服化されるプロセスに光をあて、装いと民族アイデンティティを結びつける他者からの視線と識別と着用者による認識のずれを考察した。また相島は、現代エジプトの都市中間層による聖典の暗誦教室やメディア、教育の消費が「教養」の獲得の切望と結びついていることを示し、中流層的な倫理観とモダニティの関係性をめぐる従来の議論を再考した。第2回の研究会では、鳥山が大塚英志の「物語消費」論を援用して、社会的成功をめぐる「神話」により、エジプトの中間層のあいだでいかに学校選択という記号消費が過熱していくかを論じた。第3回では、田村が古い絨毯に価値を置く消費者の志向性と呼応した／を創造するトルコ絨毯のビンテージ化と修繕の試みについて報告した。また渡部はネパールの宝石商が観光客の購買行動や消費に「フレンド」という「信頼」をめぐる記号を用いていかに働きかけているかを議論した。本年度で予定していたすべての研究発表を終え、メンバーの共通した切り口としてモノの価値や消費のコンテクストの断絶をつなぐ「インターフェイス」に注目したアプローチが析出された。

「ランドスケープの人類学的研究——視覚化と身体化の視点から」

グローバル化の進展に伴い世界各地で地域的特色をつくりだす動きが顕著になっているが、なかでも自然、建築、公園などの景観は、現地の歴史文化や民族文化と結合し、その特色を示すランドマークとなっている。しかし、こうした景観と文化のポリティクスとの関係性について、我が国の人類学はいまだに十分な議論を展開しておらず、景観人類学という分野も定着していない。本共同研究は、多様な行為主体による景観への意味付与や競合に焦点を当てることで、景観研究における人類学の意義と役割を考察する。

本共同研究は具体的に、主に2つの視点から、世界各地における景観形成のメカニズムを検討する。まず、地方政府、プランナー、開発業者、旅行会社、マス・メディアなどが、紋切型の現地文化を可視化し、現地らしい景観を物理的に構築していく「視覚化」の力学(1)について探求する。次に、そうした景観が住民、観光客、芸能集団の身体経験に基づき再解釈されていく「身体化」の過程(2)を、民族誌的記述により探求する。さらに、この2つの枠組みを統合する理論モデル(3)を導き出すことで、日本における景観人類学の促進を図ることを、本共同研究の目的とする。

研究代表者 河合洋尚

班員 (館外) 石村 智 岩田京子 大西秀之 小西公大 小林 誠 里見龍樹 辻本香子
椿原敦子 土井清美 安田 慎

研究会

2014年6月28日

小西公大 「風車が村にやってきた！——インド・タール沙漠における風力発電開発事業と変容する社会的景観」

辻本香子 「共有される／されない音風景——香港の龍舞の屋外活動をめぐって」

2014年6月29日

石村 智 「景観を読む——Reading the Landscape」

総合討論

2015年1月10日

河合洋尚・岩田京子・椿原敦子・安田 慎 「研究成果原稿読み合わせ(1)」

2015年1月11日

大西秀之・石村 智・辻本香子 「研究成果原稿読み合わせ(2)」

成果

最終年である2014年度は、3名の発表者が事例報告をおこなった。今年度は、景観人類学において今後重要になると思われる、2つの問題について主に議論を展開した。第1は、景観と五感との関係性についてである。従来の景観人類学では、景観の概念がまなざしと関係するため、特に視覚について焦点を当ててきた。それに対し、本研究会は、景観人類学の議論における視覚への偏重を確認するとともに、視覚以外の五感（聴覚、嗅覚、触覚）にいかにかアプローチしていくかについて議論した。第2は、応用実践への取り組みである。目下、景観人類学は、景観の形成とその競合を論じることはあっても、景観問題を解決することに必ずしも注意を払ってきたわけではない。この状況を鑑みて、景観問題の解決に取り組もうとする先行研究を整理するとともに、インド、カンボジアなどの事例から、人類学が景観問題にいかように役に立ちうるのか討議した。さらに、パブリック人類学／考古学と景観人類学の接点についても新たに確認することができた。

『「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生』

現代インドネシアでは、中央の民主化と地方分権化政策に呼応した地方の小地域社会や民族集団が、独自の文化や歴史を創生し、国家レベルの認証制度を活用しながらその権威づけを目指す動向が顕在化している。本研究では、これらの諸動向を複数の地域・民族間で比較検討することで、対象社会が国家中央との関係を模索しながら文化的自己呈示を行い、そこから「地方」や、特定地域への帰属によらない「民族」といった人間集合が生成、再生する動態を、文化、歴史、政治、開発など複眼的に考察する。具体的には、本来は国民統合の手段であった「国家英雄」認定制度に注目することで、1) 近現代の国民国家の形成過程を再検討し、2) 国民統合とは異なる次元で進む「国家英雄推戴運動」による地域振興や文化創生の現状、3) その動機と背景となる各対象社会の歴史過程を共通の問題として探求しながら、脱中央集権を標榜する国民国家と「地方」や「民族」との関係を、グローバルな政治経済的状況や民主化動向を視野に明らかにすることを目指す。

研究代表者 津田浩司

班員（館外） 太田 淳 岡本正明 小國和子 金子正徳 北村由美 佐々木拓雄 中野麻衣子
見市 建 森下明子 森田良成 山口裕子 横山豪志

研究会

2014年7月19日

小國和子 「地方分権時代の〈国家〉英雄——南スラウェシにおける Sultan Daeng Raddja 家族の語りを中心に」

森下明子 「なぜ国家英雄推戴の動きが活発な地方とそうでない地方があるのか——カリマンタン4州の国家英雄推戴の動向を比較しながら考える」

森田良成 「西ティモールと新しい国家英雄」

全体討論

2015年2月22日

岡本正明 「国民英雄の死後管理」

太田 淳 「国民英雄の歴史文脈——バンテンおよびランブンの歴史叙述から」

全体討論

成果

本年度は研究集会を2度実施し、各メンバーの研究成果に基づき、各事例の共通性と差異について、各地域社会の政治・経済状況や文化的特性、歴史過程を踏まえて相互参照的に検討した。具体的には、これまでまだ発表を行っていなかったメンバーによる、ティモール島、カリマンタン島などの諸社会・諸団体における事例および政治学や歴史学の視点からの発表をもとに、議論を行った。

近年、民族誌映画祭を中心とした国際的な研究交流が、メディアアートや映画界をも包摂しつつ、世界各地で盛んに展開し、人類学における新たな理論潮流が生み出されている。本研究の目的は、これらの国際的な研究動向を踏まえ、人類学、映画、アートの実践が交差する場から、文化の記録と表象における表現の地平を理論的・実践的に開拓することである。本研究では、映像人類学の各学派の研究潮流の分析、アートや映画界における人類学的に援用可能な方法論の考察を行う。そして、共同研究のメンバーが実践する民族誌映画制作、音や写真のインスタレーション等の報告、議論を経て、映像民族誌の新たなナラティブを創造し、人類学および隣接する学問へその可能性を提言する。

研究代表者 川瀬 慈

班員（館外）伊藤 悟 春日 聡 小林直明 佐藤剛裕 田沼幸子 丹羽朋子 分藤大翼
村橋 勲 柳沢英輔

研究会

2014年7月6日

川瀬 慈 「はじめに—— Sensory Turn の人類学への返答」

分藤大翼 「第12回ゲッティンゲン国際民族誌映画祭報告」

佐藤剛裕 「NGAGPA STYLE ——ヒマラヤの在家密教行者の世界」粗編集版の発表／ブラッシュアップ

村橋 勲 「これまでの作品紹介と今後の撮影計画——南スーダンと「難民」の映画製作に向けて」

丹羽朋子 「フィールドワークの経験を「展示」する——「窓花／中国の切り紙」展における映像実践」

柳沢英輔 「実験的な民族誌映画における音・身体・環境」

久保田テツ総評

2015年1月25日

伊藤 悟 映像作品 『Sensing the Journey of the Dead』

春日 聡 映像作品 『スカラ＝ニスカラ——バリの音と陶酔の共鳴』

下道基行 「すぐ目の前にある『見えない風景』」

小林直明 「なぜ、映画をつくるのが人を元気にするのか——『市民映画』の成果と展望」

川瀬 慈・伊藤 悟 「トロムソ大学映像文化学科の研究動向、第8回 Cinema Verite 国際ドキュメンタリー映画祭（イラン）の報告」

成果

2014年度は計2回の会合を開催し、映像人類学の各学派の研究潮流に関する発表、共同研究員の制作した、あるいは制作過程の作品の発表、さらにはアート界からの招聘講師による発表等を行った。5月には、日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014 合同開催）映画上映プログラム『New Horizon of Anthropological Films from Japan』において、共同研究員4名が制作した研究作品を発表し、各国の映像人類学者と制作方法論に関する活発な議論を行った。その後の出版や上映企画につながる研究交流の場となった。また3月には、日本映像民俗学の会第37回大会において、共同研究員3名が実行委員として運営に携わり、映画界や様々な分野の研究者と、映像民族誌のナラティブに関する議論を行った。関連する出版としては共同研究員による映像人類学の制作方法論に関する論稿を含む2冊の著作を出版した。

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性とを明らかにするための比較研究である。その際、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、軌近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インドにおける聖地の政治経済学的研究を通じ

て、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員 (館内) 河合洋尚 韓 敏 松尾瑞穂
(館外) 川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男

研究会

2014年6月14日

高橋沙奈美「奇跡の起こる場所——ロシアにおける聖人崇拜の伝統とその現代的諸相に関する予備的考察」

後藤正憲「モノから場所へ——ロシア・チュヴァシの在来信仰をめぐる政治学」

2014年10月4日

松尾瑞穂「インド・ヒンドゥー聖地の『宗教産業』と在地社会の変容に関する予備的考察」

前島訓子「インドにおける『仏教聖地』構築の諸相——『聖地』の場所論的視座」

2015年1月31日

韓 敏「近代中国の聖地作り——指導者ゆかりの場所を事例に」

望月哲男「世俗聖地としてのロシア地主領地——ヤースナヤ・ポリャーナを中心に」

総合討論「客家の『聖地』をめぐる政治経済学」

成果

本年度は、ロシア、インド、中国それぞれの事例を取り上げた研究会を3回開催した。それぞれの事例報告と考察によって、さまざまな基礎概念について整理が必要であることが明確になった。本研究会では、西欧近代的な「宗教」、「聖俗」などの諸概念をいったん棚上げしつつ、各地域のそれぞれの文脈における事例の比較検討を行ってきた。その結果、鍵概念である「聖地」あるいはその前提となる「聖」あるいは「聖俗」概念の歴史性、イデオロギー性がむしろ浮かび上がる結果となった。とくに、卓越した人物の崇拜およびその故地の「聖地」化についてのいくつかの事例報告から、俗人、聖人といった二分法そのもののイデオロギー性が明らかになった。また、「聖地」はいずれも場所、空間に関わる概念であるが、理論的に場所論、空間論などの再吟味が必要であることが、やはり基本的な方法論の問題として確認された。また、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにおける公開の外部開催によって、いっそう幅広い研究交流の可能性が開かれたことも大きな成果であった。来年度以降は、研究の幅を広げるとともに、基本概念の整理を行い、最終年度のとりまとめに備える計画である。

「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員 (館内) 岸上伸啓
(館外) 阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子
藤巻光浩 水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治 山本真鳥

研究会

2014年5月31日

山崎幸治 「アイヌ資料調査結果のソースコミュニティとの共有について」

岸上伸啓 「民博企画展（「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」）でのソースコミュニティや所蔵機関との協働関係」

全 員 ディスカッション

2014年6月1日

川浦佐知子「NAGPRA と先住民の記憶」

全 員 ディスカッション

2014年7月12日

大野あずさ「現代史研究におけるインタビュー調査と成果公開・現地還元」

佐藤 円 「史資料の利用に関する倫理的問題」

全 員 ディスカッション

2014年7月13日

野口久美子「トライブ政府のために働くという関わり方」

全 員 ディスカッション

2014年10月4日

谷本和子 「Association of Tribal Archives, Libraries, and Museums の活動動向」

水谷裕佳 「先住民および博物館の立場から見た NAGPRA の限界」

全 員 ディスカッション

2015年1月17日

宮里孝生 「民族学博物館とソースコミュニティとの連携」

リトルワールド収蔵庫実見

2015年1月18日

阿部珠理 「協働の思想におけるヴァイン・デロリア・ジュニアの影響」

全 員 ディスカッション

リトルワールド展示場実見

成果

2014年度には4回の研究会を開催した。

第1回研究会では、博物館などでの展示活動を行うために欠かせない資料調査や資料管理におけるソースコミュニティとの協働、および展示実践における協働を、アイヌ、グリーンランド先住民、ノーザンシャイアン（米国先住民）を事例として検討した。第2回研究会では歴史学（特に近現代史）を専門とする研究者による報告となった。民博など民族学系の博物館が所蔵する物質文化資料や映像音響資料とソースコミュニティとの関係だけではなく、すでに歴史の一部になっている歴史資料や今後トライブ史に組み込まれる可能性がある「生きた」資料の取り扱いや倫理的問題などに関して議論を行った。第3回研究会では米国先住民と博物館関係者が多数会員となっている ATALM の創設理由や動向についての発表と、米国とメキシコ国境にくらす先住民ヤキに関する博物館からの資料返還の問題点を考察する発表が行われた。それらの発表からは、博物館——ソースコミュニティという一対一の関係だけではなく、米国法や国際法、経済問題や歴史問題など広い視野をもって本研究を分析考察する必要性が確認された。第4回研究会では、愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドを会場とした。収蔵庫での資料管理方法や、展示方法を確認しただけではなく、ソースコミュニティとの資料（家屋・建築資料）の保存や修復や再建築における協働の事例が報告された。また、協働の思想の前段階として位置づけることが可能な、先住民側から学界への批判を行ったヴァイン・デロリア・ジュニアの足跡をたどる発表も行われた。

「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながる一方、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティッ

クスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員（館内） 上羽陽子 齋藤玲子 竹沢尚一郎 野林厚志 吉田ゆか子
 （館外） 青木恵理子 池本幸生 大村敬一 川崎和也 新本万里子 隅 杏奈 田村うらら
 中谷文美 中村香子 名和克郎 深井晃子 松井 健 丸山淳子 宮脇千絵
 渡辺 文

研究会

2014年4月12日

窪田幸子 「前回までの研究会の論点の整理」
 宮脇千絵 「中国雲南省におけるモン衣装の変化と継承にみる自他意識」
 上羽陽子 「インド、ラバーリーの刺繍布をめぐる自己と他者」
 吉田ゆか子「バリの障害者の演劇活動にみる表象のポリティクス——笑いとインベアメントの視点から」

2014年5月22日

ハワード・モーフィー 「Living Collections: Researching Australian Aboriginal Art and Material Material Culture」

2014年7月19日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
 緒方しらべ「『アート』の語りのポリティクス——ナイジェリア南西部の都市で生きる『アーティスト』の事例から」
 川崎和也 「アボリジニの美術工芸品と経済生活——オーストラリア北部、ティウイの事例から」
 青木恵理子「布とフェティシズム」

2014年10月11日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
 中谷文美 「バリ島の手織り布のファッション化・文化遺産化をめぐる」
 松井 健 「布の経済的転位と付加価値」
 窪田幸子 「表象研究の課題と展望」
 討議と意見交換

2014年12月20日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
 名和克郎 「ネパール、ランにおける自己——表象の近年の展開？民族運動から写真展まで」
 中谷和人 「表象から出来事へ——『生態学的』視角からみた知的障害者のアート活動」
 大村敬一 「旅するアート／インヴォリューションするアート——美の様式をめぐる人類学を目指して」
 全体討議

2015年2月1日

窪田幸子 「前回研究会の論点の整理」
 齋藤玲子 「アイヌの木彫と表象——松前藩献上品から経産省の伝統的工芸品指定まで」
 丸山淳子 「ブッシュマンの観光と表象」

成果

研究第2年度にあたる本年は、6回の研究会を開催した。あと2人の発表を残し、ほぼ全員の発表を一巡することができた。先住民／少数者のアイデンティティにかかわり、モノの流通、モノの転化、美術と工芸というカテゴリー、表象の粘着度、などのいくつかの研究のまとまりを見出すことができてきた。次年度予定しているシンポジウム形式の研究会で、それぞれのテーマごとに分担者を配分する作業を次の研究会で行う予定である。この作業によって、研究の視座の多層性が全員に共有される見通しができてきた。

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、そこでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非-人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌のデータを豊かに内包しうる次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東 賢太郎 片岡 樹 金子守恵 桑原牧子 高田 明 津村文彦 中村 潔
馬場 淳 森田敦郎

研究会

2014年 5月31日

杉島敬志 「トールキン、ラトゥール、ジェルの指輪物語——推移的定立、継時的作用、主体プロジェクションに関する考察」

発表をめぐる総合討論と本年度研究計画に関わる議論

2014年 7月 5日

小川さやか「模造品の増殖を促す複ゲーム状況——エージェンシー研究の展望と可能性」

発表をめぐる総合討論

2014年10月 4日

金子守恵 「土器をつくる手、デンプンをつかむ手——エージェンシーの作用と定立に関わる問題関心の整理と研究計画」

杉島敬志 「オーストロネシア諸族における『原初対』と『生命根』」

各研究発表をめぐる総合討論

2014年12月20日

里見龍樹 「『育つ岩』と『われわれ』——ソロモン諸島のサンゴ礁居住民の事例からのエージェンシー論『批判』の試み」

田所聖志 「パプアニューギニア、ポートモレスビーにおけるフリ人移民の人口流動」

各研究発表をめぐる総合討論

2015年 2月 7日

共同研究構成全員による研究進捗状況報告

各研究発表をめぐる総合討論

成果

計5回の研究会を開催した。昨年度同様、共同研究が目的とするところについての基本的考えにもとづき、研究代表者は、具体的内容のある研究の成果を発表し、共同研究構成員のあいだでの議論を活発化することに努めた。それとともに、本年度は、本共同研究の目的や本共同研究が包摂する研究領域に造詣の深い、共同研究構成員外の研究者を特別講師にむかえて研究発表をおこなっていただき、その内容について議論をおこなうことで、共同研究を組織する枠組みを、いわば外部の視点から対象化してとらえる機会をもうけた。具体的には、2014年7月5日に小川さやか氏、2014年12月20日に里見龍樹氏と田所聖志氏にご協力いただき、上記のような意味で、共同研究の内容を充実させることに努めた。また、第5回研究会では、共同研究構成員が本年度の研究進捗状況を報告するとともに、その報告内容について議論をおこなうとともに、来年度の研究計画について意見交換をおこなった。

「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子

（館外）岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

研究会

2014年 5月24日

長谷千代子「これまでのまとめとお知らせ」

國弘暁子 「近代宗教制度報告」（インド）

實川幹朗 「日本からの宗教人類学はなぜ見込みがあるのか——事実と意識をめぐって」

田中雅一 「日本の宗教人類学はなぜ自壊したのか？」

2014年 6月28日

藤本透子 「近代宗教制度報告（カザフスタン）」

IAHRに向けての話し合い

伊達聖伸 『『宗教』から『宗教的なもの』へ——フランスの宗教研究における近年の動向と人類学への示唆』

2014年 6月29日

IAHRに向けての討論及び打合せ

成果

2014年度は2回の研究会を行った。このなかでまず、昨年度から続けてきた、各研究員の担当地域における近代的宗教制度についての概要の発表を一通り終了した。これにより、各国の宗教政策環境が予想以上に大きく異なることが明らかとなり、宗教概念のみならず、各国の宗教行政機関や宗教行政、宗教研究のあり方なども、近代における宗教と政治の関係を知るために調査する余地があることが分かった。ゲスト講師としては實川幹朗、田中雅一、伊達聖伸の各氏を招き、日本の従来の宗教人類学のあり方を概観すると同時に、研究主体の立ち位置や研究対象の特定の仕方なども再考しつつ、今後の研究方向を模索すべきであるとの展望を得た。また、2015年度に行われる国際学会での発表に向けて打ち合わせを行い、一部のメンバーがIAHRとIUAESで1つずつパネル発表を企画し、どちらも受理されて現在鋭意準備中である。

「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この共同研究は、東南アジアのポピュラーカルチャーを対象とする。研究の目的は、グローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の検討を通して、人々の複合的で流動的なアイデンティティのあり方を考察することである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀の半ば以降に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが常に模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な差異を内包している。人やモノや情報が越境するグローバル化の状況において多くの文化的表現は既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究会では現代東南アジア社会における音楽、舞踊、映画、文学、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や、出版物、電子媒体などを含む各種メディアを研究対象として取り上げ、

文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会におけるアイデンティティ形成の複合的で流動的なプロセスを考察する。

研究代表者 福岡まどか

班員 (館内) 寺田吉孝 福岡正太
(館外) 井上さゆり 小池 誠 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹 丸橋 基
山本博之

研究会

2014年7月5日

竹下 愛 「巡回野外映画上映会『ラヤール・タンチャップ』の現在」

コメント：コメンテーター 福岡正太

丸橋 基 「インドネシアにおける1960年代の録音資料紹介——ロカナンタの資料を中心に」

総合討論

2014年10月11日

井上さゆり「ビルマの近現代歌謡と現代の演奏」

馬場雄司 「メコンの歌師の現代的展開と『伝統』へのこだわり」

総合討論

2014年11月24日

津村文彦 「妖しげなるものの姿——タイのピー表象を手がかりに」

山本博之 「マレーシア映画に見る混成性と境界性」

総合討論

2015年2月21日

坂川直也 「ベトナム映画のニューウェーブ（新潮流）——B級映画都市サイゴン復活以後」

竹村嘉晃 「『インド舞踊』は国家と踊る——シンガポールにおける文化・芸術政策とインド芸能の発展」

総合討論

2015年2月22日

篠崎香織 「東南アジアにおける大衆文化の担い手としての華人——秩序転換に揺れた100年」

平田晶子 「グローバル化するタイ東北地方音楽モーラム——聴かせる・魅せる・繋がる」

成果

2014年は4回の研究会を開催し、東南アジアの各地における事例の検討を通して議論を深めることを行った。研究会のメンバーに4人の特別講師を加えた10名ほどの発表者からは、インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム、ミャンマー、シンガポールの諸地域における多様な事例が提示された。対象とされた事例は音楽、舞踊、映画、文学作品、各種メディアの流通などの多岐にわたり、文化表現と身体表象の生産と消費に関わる事例が検討された。これらの事例研究の検討と議論を通して、伝統芸術と現代芸術の相互関係、文化表現を通じた社会関係構築の場の形成、地域や社会階層による情報格差、伝統的概念のメディアを通じた図像化や表象、現代社会に見られる複合的な混成性のあり方、メディアや芸術実践によるディアスポラ社会の関係構築、などの諸テーマが浮かび上がってきたと考えられる。一方で、地域横断的テーマとしては東南アジアにおける華人文化の位置づけ、東南アジアにおけるインド文化の影響についても考察を行った。これらの問題設定を通して今後の成果の方針について議論を行い、研究成果の全体構成の大枠に各メンバーの研究を位置づけることも試みた。

「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。

近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支える

ヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。

本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内）齋藤 晃

（館外）足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子

武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

研究会

2014年6月28日

小原 正 「インディオ村落共同体と通貨——1570年代から1730年代までのグアテマラ聴訴院領チアパス地方の事例から」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「専修大所蔵のヌエバ・エスパーニャ写本資料の閲覧」

安村直己 「インディオ村落共同体金庫と村の生活——18世紀後半のヌエバ・エスパーニャ副王領の事例から」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「今年度の研究活動について」

2014年9月23日

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

三宅真紀 「テキストマイニングの基礎と実践——新約聖書校訂本の比較研究を事例に」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「今年度後半の研究活動について」

2014年11月29日

吉江貴文 「植民地の行政司法機関における文書実践の仕組み」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

横山和加子 「メキシコ植民地初期有力入植者の文書戦略——大西洋間の連絡を中心に」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「次回及び来年度以降の研究会について」

2015年1月31日

溝田のぞみ 「先住民の文書利用——17世紀ペルー・ワマンガの公正証書の分析を通じて」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」

網野徹哉 「アンデス先住民遺言書論序説」

全 員 「報告内容についての質疑応答・討論」、「来年度の研究会開催計画の検討」

成果

2014年度は4回の共同研究会を実施し、スペイン帝国の諸機関において生産・管理された文書群の実態について、文書と人間のインターフェースにまつわる諸相に焦点を当てた究明作業を行った。具体的に、ヌエバ・エスパーニャ副王領における先住民村落共同体会計文書をスペイン本国の財務官僚から植民地の村落共同体役職者に至る多様な主体による連鎖的折衝の産物として描き出した安村および小原報告、司法の場を主舞台に個と制度の狭間を縫って展開される文書戦略の複雑な在り方について、メキシコとボリビアの事例に基づいて明らかにした横山および吉江報告、17世紀ペルー副王領で作成された私人契約文書（公正証書・遺言状）の成立背景について、宗教的感情、経済的利害、文書実務といった異質な力のせめぎ合う闘争の力学という視点から分析した網野および溝田報告などをベースに、スペイン帝国の統治機構を下支えした文書管理体制の重層的な成り立ちの実相について十分に議論を深めることが出来た。

「宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究」

20世紀後半以降、世界各地で宗教復興が顕在化すると同時に、公共領域における宗教の影響力が増大している。その背景には、新自由主義経済の浸透による国家財政の緊縮化とそれともなう社会・福祉サービスの低下がみられるなか、宗教（宗教者や宗教集団）が、独自のネットワークに基づき、そして多くの場合、地域社会・援助供与

国・国際 NGO などと連携しながら、社会開発に積極的に参画するというグローバルな流れが指摘できる。

そこで本研究では、宗教の開発実践が顕著にみられるアジアとオセアニアをおもな舞台として、以下の2点を目的とする。第1に、宗教による経済開発、医療と公衆衛生、教育などの領域における活動を民族誌的な事例として収集し、そこに反映される宗教固有の理念や規範およびネットワークの性質を明らかにする。第2に、このような現象が社会全体にかかわる諸問題を主題化し、公共性およびその変容を喚起していることを明らかにする。この2点を明らかにすることで、本研究は、ポスト世俗化の宗教論を超える視点を提示することを目指す。

研究代表者 石森大知

班員（館内）丹羽典生

（館外）岡部真由美 岡本亮輔 小河久志 門田岳久 倉田 誠 小西賢吾 白波瀬達也
野上恵美 舟橋健太

研究会

2014年9月27日

石森大知 「ソロモン諸島の紛争経験と宗教・開発・公共性——アングリカン系メラネシア教会の事例を中心に」

岡本亮輔 「ポスト世俗化の宗教論——現代宗教におけるコミュニティの再形成」

全 員 「本年度の研究計画」

2015年2月28日

丹羽典生 「神学と宗教的社会運動——フィジー・ダク村落開発運動を中心に」

倉田 誠 「近代化と世俗化——サモア・カソリック教会による慈善活動の展開」

藏本龍介 「ミャンマーの社会参加仏教——出家者の活動に注目して」

成果

2014年度は、2回の共同研究会を開催した。1回目の研究会では、世俗化論・ポスト世俗化論に関する批判的な検討をおこなうとともに、ソロモン諸島および日本のフィールドから事例を報告した。そのなかで、現代社会における世俗化と私事化のインパクト、公的領域における宗教の影響拡大などをどのように捉えるか、そして修正派世俗化論に対する評価などをめぐって議論を重ねた。また2回目の研究会では、オセアニアと東南アジアの事例に基づく3つの報告があった。まず現代オセアニアに広くみられる伝統（土地、祖先）、宗教、政府という三位一体の神学について考察をおこなうと同時に、オセアニアの国家とキリスト教の関係性について検討した。つぎにミャンマーの事例を踏まえ、出家をめぐるジレンマについて議論を交わした。その後、これらの事例報告の検討から発展する形で、非西洋における宗教と世俗（開発）の境界および宗教の公共性など、本共同研究全体にかかわるテーマについて総合討論をおこなった。

「再分配を通じた集団の生成に関する比較民族誌的研究——手続きと多層性に注目して」

本共同研究では、再分配が集団を生成している点に注目することで、集団と再分配の関係の多様性を明らかにしていく。ポランニーは、再分配を〈富や労働を中心に集めたくて配り直す〉経済活動の様式として定式化し、その中に儀礼や祝祭、租税、家政が含まれるとした。そこでは、社会の存在が前提とされ、いかに再分配が社会統合に役立つかという構造機能主義的な枠組みが強調されている。それに対し本研究では、社会の存在を自明視するのではなく、他ならぬ再分配によって集団が立ち現われている点に注目する。思想史家のエヴァルドがフランスの社会保険を例に示したように再分配はそれに参加する者に連帯感を喚起することで集団意識を醸成しうるし、また、再分配への参加は集団の境界を引く際の重要な留意点にもなるからである。本共同研究では、この視点から世界各地の事例を比較し、再分配の具体的な手続きと集団の特性の関係について検討していく。

研究代表者 浜田明範

班員（館内）加賀谷真梨 吉田ゆか子

（館外）伊東未来 久保忠行 里見龍樹 高橋絵里香 高橋慶介 田口陽子 友松夕香

研究会

2014年4月5日

全 員 「今後の方向性と日程の確認」

田口陽子 「インドの『市民的』モラルと再分配——『社会的なもの』批判の比較を通して」

浜田明範 「再分配を通じた集団の生成——論点整理と四つの方向性」

2014年10月25日

今後の方向性と日程の確認

里見龍樹 「メラネシア再分配論とは何だったか——マーシャル・サーリンズを中心に」

河野正治 「儀礼的再分配にみる価値の創造と流通——マイクロネシア連邦ポーンペイの位階称号を事例として」

伊東未来 「再配分としての季節労働——マリ共和国ジェンネにおける都市民の収穫労働を事例に」

成果

本共同研究の2年度目にあたる2014年度は、4月と10月に2度の研究会を開催した。また、1月に東京大学で行われた現代人類学研究会に東京大学の森 政稔教授をコメンテーターに迎えて「特集：再分配」を組織し、30名以上の参加者を得た。

より具体的には、浜田明範によるポランニーの再読や里見龍樹によるサーリンズの再読といった理論的な検討とともに、田口陽子によるインドにおける再分配に関する言説、伊東未来によるマリの都市民の出稼ぎの収穫労働、高橋絵里香によるフィンランドの高齢者福祉における安心電話の利用状況、友松夕香によるガーナ北部のラッカセイ収穫における分益といった世界各地の事例についての報告がなされた。また、特別講師として招聘した筑波大学の河野正治には、マイクロネシアの位階称号に関する詳細な報告をお願いした。

同時に、2015年度の日本文化人類学会の研究大会で分科会を開催するための準備も進めることができた。

「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし現在、世界各地で従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員（館内） 齋藤玲子 南 真木人

（館外） 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 坂田博美 新本万里子 杉本星子

中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのぶこ 村松美賀子 山崎明子

研究会

2014年11月30日

上羽陽子 「共同研究の着想およびめざすところ」

全 員 「自己紹介および各自の活動・研究について」

山崎明子 「近代日本の『手芸』から戦後の手芸ブームまで」

全 員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2015年3月1日

上羽陽子 「前回までの研究会の論点の整理」

笠井みぎわ「祈りの手刺繍——日本聖公会の教会刺繍をめぐる考察」

山崎明子 「近代日本の『手芸』から戦後の手芸ブームまで（2）」

坂田博美 「キルトショップにおける顧客関係——キルターとキルトショップ・オーナーの事例」

全 員 「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

成果

第1回目の研究会では上羽が本共同研究の着想およびめざすところについて提示した。それを踏まえて各研究員が各自の活動や研究について報告をし、本共同研究における役割や方向性について議論した。さらに副代表の山崎が、近代日本の手芸から戦後の手芸ブームについて報告し、新たな「手芸」概念を再検討するための問題の共有化を図った。

第2回目の研究会では、笠井が日本聖公会の教会刺繍について報告し、宗教や祈りの現場とそれらを取りまく手仕事について検討した。山崎は、第1回目の報告をふまえて総括的に戦後から現在までの手芸ブームについて提示した。坂田は経済学の視点からキルトショックにおけるキルター（キルトをする人）とオーナーの顧客関係について報告し、自己目的志向の小売業者が存続するメカニズムを指摘した。

「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「適応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。適応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、ヴァリニャーノの日本宣教師方針やリッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の適応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするれば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の適応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が適応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館外） 網野徹哉 伊川健二 井川義次 王寺賢太 岡田裕成 折井善果 小谷訓子
鈴木広光 中砂明德 真下裕之 松森奈津子 Guillermo Wilde

研究会

2014年12月21日

齋藤 晃 「近世カトリックの世界宣教と文化順応——趣旨説明」

実施計画策定

2015年2月21日

Guillermo Wilde 「Writing Rites, Translating Concepts, Appropriating Customs: Missionary Anthropology in the South American Borderlands of Iberian Empires」

折井善果 「Joan-Pau Rubiés著 “The Concept of Cultural Dialogue and the Jesuit Method of Accommodation: Between Idolatry and Civilization” について」

成果

本年度は3年半の研究期間の初年度に相当し、しかも半年しかない。それゆえ、本研究の趣旨についてメンバーの理解と合意を確立することを最優先課題とした。12月21日に開催された第1回研究会では、代表者の齋藤が本研究の対象・目的・方法を説明した。とりわけ、宣教師の適応を、宣教現場における通文化的実践、およびヨーロッパにおける比較文明論的思索というふたつのコンテクストに位置づけ、その複合的意義を解明することの重要性を強調した。2月21日に開催された第2回研究会では、実質的な副代表者である Guillermo Wilde が、植民地時代南米の事例に依拠しながら、宣教師の適応を研究するうえで重要な諸問題を指摘し、地域間比較の必要性を説いた。これらふたつの報告により、本研究の趣旨についてメンバー各自の十分な理解が得られたと判断している。

第2回研究会の後半では、折井善果が Joan-Pau Rubiés の論文について論評した。折井の報告は、来年度以降引き続き実施される先行研究の合評の第1回に相当する。Rubiés の論文はイエズス会の適応政策の思想史的意義を広い視野のもと究明しており、先行研究の到達点のひとつとみなすことができる。この論文の合評を通じて、本研究が目指す方向を明確にすることができた。

「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行なうことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、福祉国家制度の限界は明らかとなり、ケアはどのように実現されるのか、そのあり方があらためて問い直されている。こうした状況をふまえ、本研究は、保育や介護をめぐるケアの制度化／脱制度化の様相を、個別のローカルな状況のもとでとらえ、比較検討するものである。その分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。これまでの人類学研究を批判的に検討する視点から、人類学、社会学、歴史学の分野を横断する議論を展開し、西欧近代の福祉国家システムを、人類学研究として批判的に検討していく。

研究代表者 森 明子

班員（館内）加賀谷真梨 浜田明範

（館外）天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加藤敦典 木村周平 工藤由美 沢山美果子

高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如 速水洋子

モハーチゲルゲイ

研究会

2014年11月16日

森 明子 「共同研究の趣旨説明と問題提起」

全 員 「研究課題をめぐる各自の研究状況と今後の研究計画」

2014年12月20日

岡部真由美「宗教をつうじたケアのかたち——現代タイ社会における仏教僧による『開発』の事例より」

沢山美果子「乳からみた産み育てることの近世・近代」

全 員 討論

2015年1月8日

加賀谷真梨「誰のための福祉事業か？——沖縄県 A 島の高齢者地域福祉活動に生じるコンフリクト」

西 真如 「『南の』世界におけるケアの実践を計る——エチオピア農村社会におけるチャイルドケアの量的把握に関する方法論上の課題」

全 員 討論

成果

研究初年度にあたる本年度は、3回の研究会を開催した。第1回研究会で、研究代表者が本共同研究の企図・目標等を説明し、各メンバーの関心や研究状況を配置していった。第2回研究会では、岡部がタイの寺院におけるケアについて報告し、ケアという問題系に、宗教のかかわりはどうあらわされてきたのか、キリスト教や仏教を素材にした議論が展開した。沢山は、日本の近世・近代の乳に注目した報告を行い、子どもの養育において、乳が家族と社会を接合する様態について議論が展開した。第3回研究会では、加賀谷が、離島の高齢者地域福祉の実践を報告し、特定のローカリティのもとにある各アクターの意思決定をめぐって議論が展開した。また、西は、ケアの実践が社会の持続性という観点から重要な意味をもつことを理論的に整理し、それを量的に計る可能性について方法論的な議論のための回路を開く発表を行った。

以上より、本共同研究が前提とすべき状況と研究水準が参加者の間で共有され、さらに、特定のローカリティのもとで、ケアの制度化／脱制度化の実践をとらえていく議論の端緒が開かれた。

「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ（文化的実践による社会的分類）や人種（肌の色による社会的分類）が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失われかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史に

において不可視だった支配者側のエスニシティや人種（たとえば、アイヌ民族のいう「シャモ」、沖縄の人々が発する「ナイチャー（ヤマトンチュ）」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」）を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員（館外） 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

研究会

2014年11月14日

太田好信 「共同研究会の趣意説明」

参加者による自己紹介

太田好信 「政治的分類としての人種とエスニシティ——リベラル民主主義と歴史の重み」

質疑と応答

2014年11月16日

質疑と応答（継続） 共同研究会の今後の開催予定、成果発表までのプロセスに関する説明

2015年1月31日

前回、欠席した共同研究会参加者の自己紹介（3名）

深山直子 「『(ポスト)和解時代』におけるマオリの再組織化とパーケハーの可視化」

討論（質疑応答）

辻 康夫 「多文化主義と『不可視性』の問題」

2015年2月1日

総合討論（前日の発表に関する質疑と応答）

成果

本年度は、2回の共同研究会を開催した。第1回目では、代表者が本共同研究を構想した過程を含め、目標と課題を説明した。研究者が集団の一員として名指される経験を人種主義や民族絶対主義として否定するのではなく、そこに理論的価値を見出すことができるのか、などという疑問について議論し、リベラル民主主義において自然化している発想を対象化する契機として、名指される経験を位置づけた。第2回目は、深山がニュージーランドにおけるパーケハー（白人）とマオリとの関係性について、詳細な民族誌的資料に基づいた報告をおこなった。なかでも重要な点は、マオリの先住民性がニュージーランド在住のヨーロッパ系住民をしてパーケハーを自称するという現象が起きていることである。また、辻は、憲法学の視点から、リベラル民主主義の枠内で人種主義を超え、いかにして多文化主義を構想できるか、規範論的認識に根差した報告をおこなった。

「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個別性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員（館内） 宇田川妙子 笹原亮二 関 雄二 野林厚志 加賀谷真梨 浜田明範
（館外） 阿良田麻里子 金子正徳 中谷純江 松村恵里 古谷嘉章

研究会

2014年11月22日

鏡味治也 「趣旨説明」

金子正徳 「インドネシアでの資料収集およびデータベース保存・共有方法」

阿良田麻里子 「インドネシアでの資料収集方法」

2014年12月13日

鏡味治也 「今回の研究会趣旨説明」

中谷文美 「オランダにおける家事の文化」

全 員 生活用品資料収集上の問題点の検討

成果

本年度は、2011年度から実施している科学研究費補助金（基盤研究(B)）「消費様式から見た国民文化形成の文化人類学的研究：インドネシア等の生活用品調査から」（研究代表者：鏡味治也）のこれまでの資料収集実績を、その科研の分担者・協力者でもある金子正徳・阿良田麻里子両氏から報告してもらい、本研究会参加者への情報提供と引き継ぎをはかった。また生活用品と密接に関わる「家事」領域の生成発展について、中谷文美氏を特別講師として招きオランダにおける家事文化について話していただいた。その上で、本研究会がめざす生活用品の全世界的な資料収集に向けて、これまでインドネシアでの資料収集で用いた生活用品リストや情報収集方法の問題点や修正が必要な点について、参加者の間で意見を交換した。それを受けて新たに「生活用品質問表」をとりまとめ、従来の生活用品リストと合わせて資料収集を行えるよう整えた。

「呪術的实践＝知の現代的位相——他の諸実践＝知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践＝知（本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践＝知」という語を用いる）のなかで、呪術的实践＝知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践＝知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践＝知とそれ以外の諸実践＝知（すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など）との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個別性（特殊性）と普遍性（他の諸実践＝知との共通性）をうきほりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」（2007～2009年度、代表：白川千尋）とその成果論集『呪術の人類学』（2012年、白川・川田編、人文書院）をふまえて、その基本的枠組みであった「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内）飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂 浜田明範

（館外）飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島藪洋介 白川千尋

田中正隆 中川 敏 中村 潔

研究会

2014年11月16日

川田牧人 「現代における呪術と他の諸実践＝知——本研究会の趣旨と基本的ビジョン」

白川千尋 「呪術と科学の違いに関する省察——『どのようにして』と『なぜ』の問いを手がかりにして」

全員による討論「本研究会の研究構想」、ならびに事務連絡

2015年2月8日

近藤英俊 「偶然的他者の呪術的『再必然化』」

『信念の呪縛』（浜本 満著、九州大学出版会、2014）検討会

次年度計画、ならびに事務連絡

成果

2014年度は研究会を2回開催した。まず第1回では、本共同研究の開始にあたり、1) 呪術的实践＝知と隣接する

「その他の諸実践＝知」との関係性を検討する、2) 触知性や物質性といった感覚特性を視野に入れて、「信じる・知る・行なう・感じる」という活動領域に着目して検討するという研究の方向性が確認された。第1回目後半と第2回目では各論に入り、「どのようにして」の問いに答えるものとしての科学に対し、「なぜ」の問いに答えるものとしての呪術というとらえ方が可能であること、また、不可解さや理不尽さに満ちた偶然性を再必然化するという呪術の一側面について検討がなされた。そしてそれらから、当事者にとっても必ずしも自明ではないことへ向かう呪術的实践＝知に関する議論が深められた。また第2回では浜本 満著『信念の呪縛』を全員で講読して検討会がおこなわれた。当共同研究にも関連する論点として、偶然性と賭博性、不在を核とした信念群と真理化プロセス、不可解さに関する想像力・感性などの諸点が指摘され、それらはいかにして展開可能かといった議論もなされた。

「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあひながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川 清

班員 (館内) 樫永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之
(館外) 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

研究会

2014年10月18日

長谷川清 「趣旨説明」

稲村 務 「資源としての歴史と記憶——アカ種族とハニ種族の事例より」

塚田誠之 「歴史の解釈をめぐる——壮族の『民族英雄』儂智高を事例として」

2015年1月11日

野本 敬 「イ族系土司・土目にみる歴史の記録と構築について」

長谷川清 「国境地域の〈歴史〉とその資源化——孟連タイ族の事例から」

成果

上記の4名の報告者により、研究報告がなされた。すなわち、第1回研究会では、雲南省南部のハニ族社会において系譜意識、土司遺跡、棚田の文化的景観など、多様な媒体や様式によって伝承されてきたコミュニティーの集合的記憶と資源化の過程(稲村報告)、中国・ベトナム境域においてチワン族の間で「民族英雄」とみなされる儂智高について歴史叙述やディスコースの変遷、中華ナショナリズムとの関わり(塚田報告)が取り上げられた。第2回研究会では、中国西南部のイ族社会に残されている碑文資料の保存状況、記述スタイルの諸特徴、中華的秩序のもとでの政治的意義(野本報告)、現存するタイ族の土司官署の歴史展示とナラティブ、文化的記憶との関係(長谷川報告)が扱われ、それらをめぐって議論が行われた。

「歴史」の資源化をめぐる問題領域と理論的な枠組みに関して、民族誌の事例からアプローチしていくことの重要性や意義を確認し、今後の比較研究に向けた論点を明らかにすることができた。

「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション(通称「時代玩具」)は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中

心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもに対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員 (館内) 笹原亮二 日高真吾

(館外) 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀

滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

研究会

2014年10月11日

共同研究の趣旨・目的について及び共同研究者の自己紹介

笹原亮二 「国立民族学博物館の多田コレクションについて」

稲葉千容 「多田コレクションについて——基本的な性格と全体像の把握」

2014年10月12日

是澤博昭 「教育玩具の近代——教育対象としての子供の誕生」

フリートーク 多田コレクション研究の今後の課題と展望

2015年1月10日

稲葉千容 「多田コレクションの分類別資料紹介」

目録の熟覧と内容等に関する質疑応答

原山 煌 「福島安正の研究から見る多田コレクションの意義」

2015年1月11日

内田幸彦 「渋沢敬三とアチックミュージアム——埼玉県との関わりを中心に」

全 員 今後の研究の進め方の検討

成果

多田コレクションの特徴やその基本性格の全体像把握の一環として、近代日本の子どもをめぐる物質文化総体における位置付けに関連する研究報告を行った。

これと並行して、大阪府指定有形民俗文化財指定から国立民族学博物館への寄贈へいたる経緯とともに、分類における諸問題をはじめとする現状を共有した。その上で、同コレクションを学術的に研究活用するためには何が必要かという視点から問題点を整理した。

それに基づきモノをベースにした各共同研究員のアプローチの方法に関する共同討議を行うことで、それぞれの専門分野に関わる個別研究テーマの設定と今後の方向性を模索することができた。次年度以降各地の類似のコレクションとの比較検討を含め、各共同研究員の専門分野と研究テーマにそって多田コレクションの資料に関する具体的な調査研究のための基盤を形成した。

「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテン

ポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第1の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第2の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館外） 佐本英規 大門 碧 竹村嘉晃 田中みわ子 辻本香子 増野亜子 松嶋 健
柳沢英輔 山口未花子

研究会

2015年1月31日

全員 自己紹介

吉田ゆか子「マテリアリティの人類学と芸能研究の交差点——研究会の主旨と背景」

丹羽朋子 「中国陝北地域の剪紙と、その民族誌的展示表現における物質性——パフォーマンス研究との対話にむけて」

成果

本年度は第1回目の研究会を実施し、各メンバーが取り組もうとしている課題について情報交換した。その上で、代表の吉田が、研究会の背景や構想、マテリアリティに関わる人類学的議論の系譜と経緯、そして近年の民族音楽学および演劇研究における、楽器や人形や仮面といったモノを扱った研究の動向を紹介した。この発表を受け、全体では、音をモノとして扱うことの意義について議論がなされた。音はモノのように現れることも、モノとしては捉え難いあり方をすることもある。分析上どう位置づけることが有益かは、ケースごとに異なること等が議論された。

続いて特別講師の丹羽が、中国の陝北地域の剪紙や暮らしを展示した経験について話した。創られては、消耗し、再び創られ再生する窓花のパフォーマティブなあり方を、影や断片的な映像も用いつつ展示場に表現。その中で現れた、モノやイメージをずらし再構成することによる翻訳、モノが反響させる複数の「時間性」の効果といった視点は芸能分析に活かしうる示唆的なものであった。

人間文化研究機構連携研究

「人間文化資源の保存環境研究」

代表者：園田直子

本研究は、これまで人間文化研究総合推進事業で進めてきた「文化資源の高度活用：有形文化資源の共同利用を推進するための資料管理基盤形成」（2006～2008年度）、「保存環境解析法の再検証」（2009年度）の研究成果を発展的に継承し、より広範囲な資料群を対象とした保存環境研究を行うことを目的としている。研究対象はモノ資料にかぎらず、映像音響資料、図書文書資料、さらには電子データなど多様な形態から構成される研究資源に広げ、それぞれの形態に応じた保存環境モデルを構築するために必要となる保存環境分析システムを研究開発する。

成果

- 1) 温度・湿度分析システム・スモールパッケージのプロトタイプの検証と問題点の抽出
- 2) 生物生息調査分析システム・スモールパッケージのプロトタイプ完成

研究会開催

2014年6月7日 園田直子・日高真吾・和高智美（ポスター発表）「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」文化財保存修復学会第36回大会（明治大学アカデミーコモン）

2014年8月25日 Sonoda, N. 'Museum Environment Control for Sustainable Collection Management.' International Research Meeting on Museology in Thailand, Kanchanaphisek National Museum & Central Storage, Thailand

- 2015年2月20日 人間文化研究機構・連携研究「人間文化資源」の総合的研究「人間文化資源の保存環境研究」平成26年度第1回研究会・国立民族学博物館研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて——博物館環境データの分析手法を考える」・文化財保存修復学会例会、国立民族学博物館
園田直子 「趣旨説明」
河村友佳子「温度・湿度分析システム・スモールパッケージ試作版の概略」
小瀬戸恵美「考古・歴史・民俗資料の保存環境分析」
青木 睦 「典籍・文書資料の保存環境分析」
和田 浩 「文化財の保存環境分析」
山口孝子 「写真資料の保存環境分析」
芳賀文絵 「地方博物館での保存環境分析」
和高智美 「生物生息調査分析システム・スモールパッケージ試作版の概略」
園田直子 「総括・今後の展望」
- 2015年2月21日 Sonoda, N. 'Managing and Analyzing Museum Environmental Data.' 国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」国立民族学博物館

論文発表

- 園田直子・日高真吾・和高智美（ポスター発表）
2014 「博物館害虫・不快害虫の発生源に関する一考察」『文化財保存修復学会第36回大会於東京研究発表要旨集』 pp.184-185。
- 園田直子
2014 「持続的な資料管理に向けた収蔵庫『再』編成」園田直子・小長谷有紀・I. Lkhagvasuren 編『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』、pp.19-27（日本語）、pp.187-197（モンゴル語）、ウランバートル：モンゴル国立文化遺産センター。
- Sonoda, N.
2015 Museum Environment Control for Sustainable Collection Management. In N. Sonoda, K. Hirai and J. Incherdchai (eds.) Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Museology in Thailand (Senri Ethnological Studies 129), pp.27-35, Osaka: National Museum of Ethnology（査読有）。

「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」

代表者：福岡正太

一定の視点から芸能の動きと音を記録し、再生することができる映像は、第三者に具体的に芸能の姿を伝えることができる。その性質により、学術資料であっても、多くの人に活用され、芸能のイメージを広めることにひと役買う可能性をもっている。一方、芸能の関係者にとって、外部の人間が撮影編集した映像を見ることは、外からのまなごしを意識し、自己イメージを再形成する機会ともなる。この研究は、映像による芸能の民族誌的記録が、芸能を支える人々や研究者、映像を視聴する第三者など、立場を異にする人々のあいだにどのような相互関係を築き、どのように芸能の上演と伝承に影響を与えうるのかを実践的に明らかにし、学術的な民族誌映像の作成および活用の望ましいあり方を探ることを目的としている。

成果

硫黄島においては、八朔太鼓踊り、盆踊りと柱松行事、九月踊りなどの調査撮影を進めて島の芸能を概観するとともに、八朔太鼓踊りについては年ごとの変化を映像で記録した。硫黄島は、人口120名ほどであり、小中学校教員や「しおかぜ留学」制度により島の学校で学ぶ生徒、ジャンバスクールの「留学生」など、一定期間島に暮らす島外の人々の存在が社会の維持に欠かせない。刻々と変化する島の社会や島の社会関係構築の1つの結節点としての芸能を、映像によりとらえることができた。変化する社会を記録する方法として、こうした芸能の映像記録が有効であることが明らかになった。また、三島開発総合センターにて、「八朔太鼓踊り調査映像2007-2013」（藤岡幹嗣撮影編集）、宮本馨太郎撮影フィルムから竹島、硫黄島の記録フィルム（九月踊りと八朔太鼓踊りなど、1934年撮影）、「八朔踊りとメンドン」（民族文化映像研究所、1983）の上映会を行い、島の人々が歴史を振り返る媒体として映像が有効であることも確認することができた。

徳之島については、島内3町の教育委員会等との協力により、各集落の芸能の映像記録を進め、マルチメディア番組「徳之島の唄と踊りと祭り」にまとめた。同番組は、26集落の芸能のべ約250曲の芸能の映像を収めており、徳之島の多様な芸能を概観比較することのできるコンテンツである。現地における映像上映会も繰り返し開催し、当事者にとって映像がもたらす意義についても考察を進めた。その結果、映像を見ることが、自らの芸能を振り返ったり、他の集落の芸能と比較したり、一緒に視聴する者との情報や意見を交換し、芸能の営みそのものを様々な角度から見直す機会となることがわかった。そして、芸能の映像記録のアーカイブを構築する場合、芸能の伝承の過程に記録を位置づける工夫が必要だとの結論に至った。この点を踏まえ、民博で始まった「フォーラム型情報ミュージアム」構築のプロジェクトにおいて、これらの映像記録をさらに効果的に公開していくこととした。

東南アジア大陸部及び東南アジア島嶼部におけるゴング文化についての映像記録作成を通じた研究は、主に科研費により調査を進めてきた。ベトナム中部高原からラオス南部、およびフィリピン北部の少数民族のゴング文化については、これまであまり多くの報告がなかったが、そうした空白を埋めることができた。また、ジャワ島およびバリ島、ロンボク島において、鉄のゴングの製作と流通について調査を行い、青銅製に比べて軽視されてきた鉄製ゴングの重要性が明らかになった。さらに、ベトナムにおける青銅製ゴング製作、ジャワ島とバリ島における青銅製と鉄製ゴング製作の映像記録により、それぞれの製作技法の比較などが可能となった。

研究会開催

- 2014年5月18日 国際シンポジウム “An Audiovisual Exploration of Philippine Music: The Historical Contribution of Robert Garfias”、国立民族学博物館第4セミナー室
- 2015年2月8日 「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会、国立民族学博物館特別研究室

論文発表

福岡正太

- 2014 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」『研究報告人文科学とコンピュータ』2014-CH-104(10)：1-3。

著作物

[映像作品]

寺田吉孝

- 2014 『祝いの音、勝利の記憶——フィリピン・ルソン島山地民の結婚式』（日本語、英語、イロカノ語、各25分）。

藤岡幹嗣

- 2015 『八朔太鼓踊り調査映像2007-2013』。

[プロシーディングス]

Fukuoka, Shota (ed.)

- 2015 International Symposium Audiovisual Ethnography of Gongs in Southeast Asia: Proceedings. National Institutes for the Humanities Inter-Institutional Research Project “A Study on Visual Ethnography of Performing Arts as Human Cultural Resources.”

その他

福岡正太

- 2014年5月6日 「探求！ 現役フィールドワーク研究者に聞く記録と意味」梅棹忠夫と21世紀の「知的生産の技術」シンポジウム、グランフロント大阪ナレッジキャピタル北館タワーC8階
- 2014年5月14日 「霊と交流する楽器ゴングの今」みんぱくカレッジシアター地球探究紀行、あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」
- 2014年8月6日 「島のまわりに人がつどう——鹿児島県硫黄島」みんぱくカレッジシアター地球探究紀行、あべのハルカス近鉄本店ウイング館9階「スペース9」
- 2014年10月18日 「音楽芸能の伝承において映像記録が果たしうる役割——徳之島の芸能を例に」人文科学とコンピュータ研究会（情報処理学会）発表会、関西大学千里山キャンパス第三学舎D501教室
- 2014年12月13日 「映像記録を民俗芸能の営みの中に位置づける」シンポジウム「民俗音楽の新たな胎動をさぐ

- る」日本民俗音楽学会第28回大会、東京音楽大学 A 館200教室
- 2015年2月8日 「フォーラム型情報ミュージアム・徳之島について」「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究会 国立民族学博物館特別研究室
- 寺田吉孝
- 2014年10月16日 ‘Recent documentation projects at the National Museum of Ethnology.’ ‘Laon-Laon Forum and Conference-Workshop on Preservation of Music Heritage in Asia’、フィリピン大学民族音楽学センター（フィリピン、ディリマン）
- 2015年1月26日 ‘Safeguarding Intangible Cultural Heritage: Process-oriented Applications of Audiovisual Media.’ アジア太平洋無形文化遺産国際研究センター（IRCI）国際専門家会議、イスラム芸術博物館（マレーシア、クアラルンプール）

人間文化研究総合推進事業

「第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム『言語の記述・記録・保存と通言語種類論』の開催」——
代表者：菊澤律子

目的

本国際シンポジウムは、手話言語と音声言語の比較を通じた研究成果を共有し、言語の新たな理解につなげること、また、最新の研究動向を国内の若手研究者やろう者（話者）が聴講する場を提供すること、のふたつを目的として開催する。

人間の言語には、手話言語と音声言語というふたつの形態があり、情報のコード化という面で共通性を持つ一方、伝達のために用いるのが音中心なのかビジュアル情報なのかという「モダリティ」の面で異なっている。言語学は長く、音声言語を対象とした研究成果に依ってきたが、近年では、手話言語を研究対象に含めることで、基本概念の見直しにつながるさまざまな事実が明らかになりつつある。たとえば、長く言語の基本特徴とされてきた「言語の線条性」「(形態と意味の結びつきの) 恣意性」などの性質は、手話言語の特徴に照らして近年見直されつつあるが、その一方で、音声言語と手話言語の研究者が同時に集う場はまだ多くはない。

本シンポジウム・シリーズは、このような新たな研究の促進という意義のみならず、その内容が言語教育や社会制作の応用にもつながることから、国内外で定評を得つつある。

成果

- ・講演等はすべて映像収録し、とくに大切と考えられるものについては、ろう者やろうの研究者への情報保障を考慮し、インターネット上で情報保障（字幕付き・手話通訳）付き映像資料として以下のサイトに掲載する予定である（総合研究大学院大学学融合推進センタープロジェクト「手話言語学を世界へつなぐ——メディア発信とe-learning 開発に向けて（研究代表者：菊澤律子）」ウェブサイト <http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssl/index.html>）。
- ・2014年分の映像については、主要なものについては文字起こしおよび翻訳済みとなっており、映像配信アプリを利用して順次字幕つけ作業を進めている。完成したものから上記ウェブサイトに掲載する。
- ・シンポジウム当日は、すべての講演内容とディスカッションをインターネット上で配信し、さらに配信した映像についてはDVDの形に収録した。

シンポジウム開催

第3回手話言語と音声言語に関する国際シンポジウム「言語の記述・記録・保存と通モード言語種類論」

開催日：2014年10月4日、5日

場 所：国立民族学博物館 講堂（本館2F）

言 語：英語、日本語、日本手話、アメリカ手話（日英同時通訳、日本語-日本手話、英語-アメリカ手話通訳、英文パソコン要約筆記付き）

一般公開（参加無料／要事前申込／定員各日400名）、USTREAMによるインターネット中継あり

プログラム

10月4日

9：45～9：55 「ご挨拶」 須藤健一（国立民族学博物館長）

9：55～10：00 「諸連絡」 菊澤律子（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）

- 10：00～10：30 「手話言語における未完了相の解釈」 クリスチャン・ラスマン（ハンブルグ大学）
 10：30～11：00 「未完了相の通言語学的分析——二構成理論アプローチ」 白井恭弘（ピッツバーグ大学）
 11：00～11：30 ディスカッション
 話者：クリスチャン・ラスマン／白井恭弘、司会：桐生和幸（美作大学）
 12：30～13：00 「移動表現に関する通言語学的実験研究——様態、経路、ダイクシスの頻度と表現位置」 松本 曜
 （神戸大学）
 13：00～13：30 「日本手話における移動事象の表現——文法上の制約と動詞連続構文による解決」 市田泰弘（国立障害者リハビリテーション学院／国立民族学博物館）
 13：30～14：00 ディスカッション
 話者：市田泰弘／松本 曜、司会：秋田喜美（大阪大学）
 14：30～15：00 「手話言語間のコード・スイッチングに関する新たな発見」 ロバート・アダム（ユニヴァーシ
 ティ・カレッジ・ロンドン）
 15：00～15：30 「単一モード・バイリンガルに関する観察——単一コミュニティにおける二つの手話併用の実
 例」 ウルリケ・ゼシヤン（セントラル・ランカシャー大学）
 16：00～16：50 一般からの質疑応答 司会：ブラシャント・バルデシ（国立国語研究所）
 16：50～17：00 「諸連絡」 菊澤律子

10月5日

- 9：00～9：10 「諸連絡」 相良啓子（国立民族学博物館／総合研究大学院大学）
 9：10～9：40 「手話における調音的姿勢と変型のタイプ」 ロバート・ジョンソン（ギャロデット大学／国立
 民族学博物館）
 9：40～10：10 「固有母音素性とフィジー語の母音体系」 那須川訓也（東北学院大学）
 10：10～10：40 ディスカッション
 話者：ロバート・ジョンソン／那須川訓也、司会：森 壮也（日本貿易振興機構アジア経済研究
 所）
 11：00～11：30 「手話言語類型論からの知見——いくつかの意味領域に対する通言語学的調査の方法論」 相良
 啓子
 11：30～12：00 「ハワイ大学手話言語記録教育センター（SLDTC）——成功のための処方」 ジャン・フリード
 （ハワイ大学）
 12：00～12：25 一般からの質疑応答
 司会：原 大介（豊田工業大学）
 12：25～12：30 「ご挨拶」 菊澤律子
 13：30～16：00 研究者による打合せ
 司会：菊澤律子

「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」

代表者：山中由里子

目的

本連携研究は、申請者が代表を勤めた共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」と国際日本文化研究センターの小松和彦教授が率いてきた共同研究「怪異・妖怪文化の伝統と創造——研究のさらなる飛躍に向けて」の成果を対照させ、未知なるものをめぐる思考様式の地域性や時代性を浮かびあがらせ、伝承やイメージの東西伝播を明らかにしようとするものである。機構連携展示としての特別展の開催を成果の一つとすることを視野に入れつつ、特に驚異・怪異の表象物（挿絵・絵画、民俗資料、珍品・からくり、博物標本など）に焦点をあてる。

中東とヨーロッパという一神教世界における驚異にある程度の共通性があるとしたら、中国の『山海経』あるいは『日本霊異記』のような「怪異譚」とは、またどう違うのか、といった問題に取り組む。

成果

代表者が下記にあげる複数の国際研究会・シンポジウムで、驚異と怪異の比較研究の枠組みについて発表した。分野の異なるそれぞれの会合で、今後の研究の展開に参考になる反応を得ることができた。

研究会開催

- 2014年5月31日 「驚異と怪異——想像界の比較研究」東アジア怪異学会、園田学園女子大学
 2014年10月12日～13日 研究フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」国立民族学博物館
 2015年1月14日～16日 ‘Travelling Narratives and Networks of Knowledge: the Case of the Alexander Romance,’ “Knowledge Transfer Across Borders: Integrative Approaches,” ゲッティゲン大学、ドイツ

論文発表

- 「未知との遭遇——怪異と驚異の比較研究」『HUMAN』6巻（特集：日本の魍魎）pp.74-78, 平凡社, 2014年7月。
 「〈驚異〉を媒介する旅人」『怪異を媒介するもの』（アジア遊学）勉誠社、2015年5月刊行予定。

データベース等の公開

本機構連携研究開始以前からすでに日文研で立ち上げられているものとして、「怪異妖怪伝承データベース」が挙げられる (<http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)。

「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」

代表者：日高真吾

目的

本研究は、大規模災害において壊滅的な被害を受けた文化遺産を被災地の大学機関やミュージアムと連携し、どのように復興させ、活用していくのかを調査・研究するものである。そして、そのような活動に研究機関である大学共同利用機関がどのような役割を果たせるのかを明らかにしていくことを目的とする。

成果

連携研究最終年に当たる今年度は、これまで同様、一時保管場所である気仙沼市旧月立中学校の環境モニタリングを継続するとともに、石巻市鮎川収蔵庫資料の脱塩処理の技術移転をおこなった。無形の文化遺産の保護活動では、民博などの施設を利用し、被災地の芸能の公演を企画し、芸能をおこなう場の創出とそれに伴う地域活性の状況について検証をおこない、民博研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」の実施へとつなげた。「災害の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸の津波碑等のデータベースを作成し、今後の備えとしてこれらのデータベースがどのように役に立つのかについて検証し、次年度以降の本格運用に向けた準備をおこなった。「災害時における大学間の連携体制の構築」では、大学機関を中心に設置が急速に進んでいる資料ネットワークとの連携を目指し、災害時における協力関係の構築を目指した打ち合わせを重ねてきた。以上の結果、人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の準備に向けた体制を作ることができた。

1) 研究会開催

- 2014年11月1日 研究フォーラム「学校芸能の現在」, 国立民族学博物館
 2015年1月24日 民博研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」, 国立民族学博物館

2) 著作物名

日高真吾 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』千里文化財団, 2015年2月。

3) 論文発表

林 勲男 「生者の記憶、死者との対話」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』勉誠出版、2015年3月。

日高真吾 「生活文化の記憶を取り戻す 文化財レスキューの現場から」木部暢子編『災害に学ぶ——文化資源の保全と再生』勉誠出版、2015年3月。

Hidaka, S. “Conservation and Restoration of Tangible Cultural Properties: Rescue Operations Related to the Great East Japan Earthquake.” *Asian Museum and Museology: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125) pp.69-78, National Museum of Ethnology, February, 2015.

Hidaka, S. “Rescue and Emergency Treatment for Tangible Cultural Properties.” *Asian Museum and Museology: International Research Meeting on Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129) pp.57-62, National Museum of Ethnology, March, 2015.

日高真吾 責任編集 公開シンポジウム「災害と展示」『展示学』52: 32-54, 展示学会, 2015年2月。

日高真吾 「有形文化遺産のレスキュー」『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージ

アム・クリタイ』 pp.115-125, モンゴル国立文化遺産センター, 2015年11月。

日高真吾 「東日本大震災で被災した民俗文化財の脱塩処理に関する一考察」『民具研究』（日本民具学会）2015年度刊行予定。

日高真吾 「規模災害時における文化財レスキュー事業に関する一考察——東日本大震災の活動から振り返る」『国立民族学博物館研究報告』2015年度刊行予定。

人間文化研究機構地域研究推進事業「現代インド地域研究」

人間文化研究機構は、わが国にとって学術的、社会的に重要な意義を有する地域の文化、社会を総合的に理解、解明するため、関係大学・機関と協力して2006年度から「地域研究推進事業」を開始した。本事業は、機構が関係大学・機関と研究拠点を共同設置し、拠点間のネットワークを構築して研究を推進する方式の研究事業である。2006年度から「イスラーム地域研究」事業、2007年度からは「現代中国地域研究」が始められているが、これに加え2010年度より「現代インド地域研究」事業が開始された。

「現代インド地域研究」事業においては、京都大学を中心拠点とし、これに東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学、および国立民族学博物館の5拠点が加わってネットワーク型の研究推進が図られている。

以下では「現代インド地域研究」国立民族学博物館拠点の2014年度の事業概要を記載する。

【拠点の整備】

「現代インド地域研究」プロジェクトの国際的ネットワーク化へのブリッジ的拠点として、本拠点は2010年度～2012年度において日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」経費による「現代南アジア研究の国際的ネットワークの形成」事業の経費受入研究拠点となった。今年度は、本プロジェクトの成果を論文集として出版するため、デリー大学やエジンバラ大学との協力により編集作業を進めた。論文集は2015年度中にも刊行される見通しである。

拠点独自の研究活動としては、現代インドの宗教と文化の動態に関して、グローバルな人・モノ・情報の流動との関連に着目しながら研究メンバーを海外に派遣して調査を進めるとともに、研究会を開催した。インド発の環流現象に関する本拠点の研究成果は、現代インド地域研究全体の叢書第6巻として編集が進められ、2015年5月に出版した。

上記の論文集とは別に拠点独自の研究成果論文集の出版も計画しており、今年度の研究会では、論文集の取りまとめを念頭に、拠点メンバーがこれまで継続してきた海外調査の成果の発表と討論を行った。また研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学南アジア研究センターとの間で若手研究者を相互に派遣し合い、相手先のセンターのセミナーで研究発表を行ったり、派遣された研究者と意見交換を行ったりした。これらの調査や研究会を通じて、1) 環流的な現象はインドのみならず南アジア地域全体で、コロニアル期から世界的な経済や社会状況と交渉しつつ、宗教や文化の幅広い側面で生じてきた。コロニアル期からの環流的現象としては、例えば宗教的領域における神智協会の活動の歴史、あるいは文化的な側面では陶磁器産業における日本とインドの動的な交流などが具体的に跡づけられた。2) 宗教の動態においては、インドからの移民を担い手とする環流的動態に関する事例が次第に集積され、東南アジアやヨーロッパなど地域間の比較に着手できる見通しがついた。一方、インド国内の宗教的運動の研究においては国家の規制や情報テクノロジーの進展との交渉の中で伝統的宗教実践の領域が変容しつつ、なお庶民の切実な願いや苦しみからの解決のための重要な領域となっている 等の点が明らかとなった。この成果は上記叢書のほか、拠点独自の成果報告書の刊行という形で公表する計画である。

研究資料の受け入れに関しては、インドの宗教祭礼や民俗文化の写真撮影を行ってきた写真家沖守弘氏のスライド写真約2万点と関連文書資料を、民族学博物館図書館と共同して受け入れてデータベースとして公開するプロジェクトを進めた。今年度は、昨年度受け入れを完了した資料のうち、スライド写真8,200点余りをデジタル化するとともに、5,000点余りについて写真情報の打ち込み作業を行った。データベースはデジタル化と資料情報の整理が終わり次第、2015年度中に公開する予定である。

【拠点の活動と成果】 国際シンポジウムの共催

国際ワークショップの開催

①国際研究セミナーの開催

日時：2014年5月10日 午後1時30分～午後5時30分

場所：国立民族学博物館第3セミナー室、第7セミナー室

概要：インド発の文化的環流動態の研究の一環として、アメリカ合衆国において自らインド音楽を学び、演奏しつつ、インド音楽の同国における受容の歴史を研究している David Trasoff 氏を招聘し、講演会を行い、その後で氏自身によるインド音楽演奏ワークショップを開催した。

講演では、アメリカ合衆国におけるインド音楽受容史において2つの重要な画期が指摘された。1つは1960年代から80年代の「ニュー・エイジ」音楽ブームである。この音楽の流行はヨーロッパや日本も巻き込んだ流行の一環である。この時期に多数の著名なインド人音楽家が渡米して演奏を行って人気を博した。またアメリカ合衆国においてはさまざまなインド音楽の教育機関が設立され、インド系移民だけでなくそれ以外の合衆国住民にも伝統的なインド音楽の技法や哲学が伝えられた。2つめの画期は1990年代以降の「アメリカン・キールタン」の流行である。これはサンスクリット文献から引用された宗教的な賛歌をストリートや演奏会場で歌い踊るものである。こちらの音楽においては、歌詞や意味内容はインド由来のものだが楽曲はインドの伝統音楽の技法とは無関係で、合衆国のポピュラー音楽的な技法によるものである。このような音楽のあり方が1960年代から80年代の「ニュー・エイジ」音楽のように世界的に流行するような環流的動態を示すのかどうかは今後注目に値するだろう。

プログラム

Opening Address: Yoshitaka Terada (National Museum of Ethnology)

Lecture & Performance: David Trasoff (Lila Vihun Music)

“Hindustani Music in America: The First Years”

Commentator: Masakazu Tamori (University of Tokyo)

Emi Okada (University of the Ryukyus)

②国際研究ワークショップの開催

日時：2014年10月11日 午後1時30分～午後6時

場所：国立民族学博物館第6セミナー室

概要：インド西部ラージャスターン地方のローカルな宗教実践が現代の政治や社会、あるいは技術の変容とどのように関連しあうのかという観点から、アメリカ合衆国からも研究者を招聘して国際研究ワークショップを開催した。ローカルな宗教実践の現代における変容に関わる要素の検証を通じて、現代インドにおける宗教の動態を捉える視点をより明確にすることがワークショップの目的であった。

ワークショップは3人の発表者がそれぞれの研究に基づく発表を行い、その後で総合討論を行った。最初に三尾が自らの調査に基づき、ラージャスターン州メーワール地方の戦士の霊にまつわる信仰をめぐる信者集団のあいだで活発に用いられるようになったフェイスブックを取り上げて事例報告と考察を行った。この霊をめぐる宗教実践では、神像や霊媒に現前する神霊との具体的で直接的な交流が重視されてきた。神霊との交流は身体的であり、そうであるがゆえに場所拘束的であった。しかし、フェイスブックなどの電子的メディアは場所の拘束からの自由を与えるとともに、神霊の現前を必要としないことから、電子メディアが宗教実践を媒介することで宗教実践の内容そのものを大きく変える可能性を持っている。報告では、フェイスブックと言うメディアの特性がコアな信者集団が神霊によせる信仰の篤さを競わせるという結果をもたらし、それによりこの神霊信仰で重視される神像の飾りつけがかえって頻繁かつ壮麗に行われるようになっていくことが指摘された。電子技術は神霊の現われの特性を変える一方で、伝統的な神霊信仰のある部分を強化する側面を持つのである。

次の報告では、三尾が取り上げた神霊信仰に関する語りの複数性と変容に関して、招聘研究者である Harlan 氏が発表を行った。神霊の起源譚は主たる寺院で伝承されている、神霊となった戦士を主人公としたストーリー以外にも多数あり、その起源譚が焦点化する主人公の帰属する集団やジェンダーによってその趣きを大きく異にしている。Harlan 氏は多数の起源譚を収集しているが、今回の発表では神霊となった戦士の父と関わったジャイナ教徒の女性を主人公とした起源譚に基づく分析を行った。その読みからは、ジャイナ教とヒンドゥー教の関係性や、当時及び現代のジェンダー関係の複雑さが浮かび上がってくる。起源譚の複数性から、ローカルな信仰実践が支配的な政治・宗教勢力と巧みに交渉しつつ、支配勢力を批判的に捉え、庶民の独自の想像力や信仰の世界を確保してきた歴史が読みとれる。これがグローバル化の進む現代においてどれだけの想像力や批判力の源泉となりうるかが今後の注目点となるだろう。

第3の報告は、ラージャスターンにおけるローカルな女神寺院の設立と経営に関して調査を行ってきた田中が、寺院経営と国家や司法との関わりという観点から発表を行った。田中の調査対象は、サティー（寡婦殉死）を行ったとされる女性の霊を女神として祭る寺院である。それゆえ、サティーが現代インドにお

いて問題化された1980年代以降、サティーやそれに関わる信仰を規制しようとする国家と、女神をコミュニティの伝統として守ろうとする商人カーストとの間で、寺院や祭礼の性格、また運営のあり方をめぐってさまざまな交渉が繰り返されてきた。田中は、商人カーストの信者集団が国家と交渉するため寺院トラストをどのようにして形成し、どのような論理で国家の規制と対峙し、自らの信仰を守ろうとしてきたのか、またその中で宗教的実践がどのように変化したのかを考察した。世俗主義を掲げるインドにおいて、宗教は全く自由な領域ではなく、常に国家の規制が及ぶ領域であった。しかし、その規制の実態は、特にローカルな宗教実践に即した形ではほとんど研究の対象となっていなかった。田中の報告は、国家の規制がローカルな実践をどれだけ動的に変容させるかを明らかにしており、今後のインドの宗教研究において重要な視点を提供したと考えられる。

ワークショップを通じて、ローカルな宗教実践が独自の実践の空間を維持するために、国家をはじめとする権力や時代ごとの主導的な技術と交渉し、ある場合にはそれらを柔軟に取り入れながら変容を遂げている姿が具体的な事例を通じて明らかとなった。ローカルな宗教実践の動態を考える上では、装置としての近代国家や情報テクノロジーとの交渉過程を詳細かつ具体的に解明する必要があることも、このワークショップによってより明確となった。

なお、このワークショップは、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「南アジアの移住商人（マルワリー）の研究：実態と表象への学際的アプローチ」（代表：中谷純江 鹿児島大学国際連携推進センター・准教授）との共同で開催した。

プログラム

Opening Address: Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

Lecture (1): Minoru Mio (National Museum of Ethnology)

“Enchantment of the Past: Nature of Faith through Things in the Worrier’s Spirits’ Cult of Southeastern Rajasthan”

Lecture (2): Lindsey Harlan (Professor of Religious Studies, Connecticut College)

“Stories of Gevar Bai and the Construction of Mewar’s Rajsamand Reservoir”

Lecture (3): Tetsuya Tanaka (National Museum of Ethnology)

“Consideration on Struggles of Rani Sati Temple Management after Implementation of Commission of Sati (Prevention) Act, 1988”

General Discussion

研究会活動

研究グループ1および2合同の拠点研究会を合計3回開催した。今年度は、国立民族学博物館拠点が独自に出版を計画している、拠点の成果報告論文集の出版をめざして拠点の構成員や拠点の研究分担者・協力者がこのプロジェクトにおいて行った各自の研究成果を発表した。

各回の研究会の発表者と題目は下記の通り。

①国立民族学博物館拠点第1回合同研究会

日時：2014年7月19日 午後2時～午後5時

7月20日 午前10時30分～午後3時30分

場所：国立民族学博物館4階第1演習室

プログラム

報告1：松川恭子（甲南大学文学部准教授）「地域的想像力の故地への環流：ボンベイのゴア人コミュニティ形成と演劇シアトルの発展」

報告2：小牧幸代（高崎経済大学地域政策学部教授）「現代インドのテーマパークにおける商品としてのイスラーム：アドラブズ・イマジカの事例を中心に」

報告3：福内千絵（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・研究員）「近現代インドにおける「ナショナル・アート」の生成：ラヴィ・ヴァルマーをめぐる言説から」

②国立民族学博物館拠点第2回合同研究会

日時：2014年10月12日 午前10時30分～午後4時30分

場所：国立民族学博物館4階第1演習室

プログラム

報告1：松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）「神話と遺伝子——現代インドにおける生殖医療とサブスタンス

の文化的意味付け」

報告2：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）「ディアスポラにおけるヒンドゥー儀礼の制約と変質——世界数カ所の事例をもとに」

報告3：鈴木晋介（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）「ラフィング・ブッダ——現代スリランカの民間信仰とグローバリゼーション」

③国立民族学博物館拠点第3回合同研究会

日時：2015年1月24日 午後1時30分～午後5時

1月25日 午前10時30分～午後3時

場所：国立民族学博物館4階第4演習室

プログラム

報告1：竹村嘉晃（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）「ローカルの伝統からナショナル、ハイブリットなコンテンポラリーまで——シンガポールにおける〈インド芸能〉の発展と文化政策」

報告2：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）「カナダ、トロント市における南インド音楽・舞踊の実践」

報告3：五十嵐理奈（福岡アジア美術館学芸員）「美術制度に抗する南アジア美術ネットワーク——「第5回福岡アジア美術トリエンナーレ2014」より」

報告4：南 真木人（国立民族学博物館准教授）「『移民の文化』の形成過程——ネパール人移住労働者から」

海外調査

拠点の研究メンバーをのべ13回インド、アメリカ、マレーシア、タイ、ドバイ、フランス、ベルギー、イギリス、シンガポール、オランダ等に派遣し、海外現地調査や学会等での研究成果発表や意見交換にあたらせた。派遣先やテーマの詳細は下記の通り。

- ① 17th North American Zoroastrian Congress の動向調査
出張期間：2014年12月26日～2015年1月2日
出張先（アメリカ）：ロサンゼルス
出張者：香月法子（中央大学政策文化総合研究所準研究員）
- ② 現代インドの娯楽・観光産業における「商品」としての宗教・民族に関する現地調査
出張期間：2014年8月28日～9月18日
出張先（インド）：デリー、ハイダラーバード、ブネー、ムンバイー
出張者：小牧幸代（高崎経済大学地域政策学部教授）
- ③ 研究発表および意見交換
出張期間：2014年12月13日～12月21日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：アントニサーミー・サガヤラージ（南山大学人文学部准教授）
- ④ インドにおけるローカルな宗教実践の動態に関する調査
出張期間：2014年7月23日～8月11日
出張先（インド）：ウダイプル市及びその近郊
出張者：三尾 稔（国立民族学博物館准教授）
- ⑤ 東南アジアのヒンドゥー寺院における寺院儀礼と空間構造の調査
出張期間：2014年12月19日～1月5日
出張先（マレーシア、タイ）：ペナン、バンコク
出張者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）
- ⑥ 共同研究および国立民族学博物館南アジア展示新構築関連事業に関する協議
出張期間：2015年3月3日～3月13日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：杉本良男（国立民族学博物館教授）
- ⑦ 神霊信仰にもとづく舞踊芸能の脱領域的広がりに関する実態調査
出張期間：2015年4月1日～4月6日
出張先（ドバイ）：ドバイ市
出張者：竹村嘉晃（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）

- ⑧ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションに関する実態調査
出張期間：2014年9月12日～9月25日
出張先（フランス）：パリ
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑨ インド音楽・舞踊のグローバリゼーションに関する実態調査
出張期間：2015年2月5日～2月15日
出張先（ベルギー、フランス）：ブリュッセル、パリ
出張者：田森雅一（東京大学非常勤講師）
- ⑩ インド音楽・舞踊のグローバルな環流に関する実態調査
出張期間：2014年12月24日～2015年1月5日
出張先（インド）：チェンナイ
出張者：寺田吉孝（国立民族学博物館教授）
- ⑪ 研究発表・意見交換および美術資料の熟覧調査
出張期間：2014年10月21日～10月31日
出張先（イギリス）：エジンバラ、グラスゴー、ロンドン
出張者：豊山亜希（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）
- ⑫ 南アジア・東南アジアにおける日本製雑貨の受容史に関する調査
出張期間：2015年2月12日～3月4日
出張先（インド、マレーシア、シンガポール）：左記各国の諸都市
出張者：豊山亜希（現代インド地域研究国立民族学博物館拠点研究員）
- ⑬ 研究発表および意見交換
出張期間：2015年2月23日～3月4日
出張先（イギリス、オランダ）：エジンバラ、ライデン
出張者：松尾瑞穂（国立民族学博物館准教授）

研究資料の整備

1970年代からインド各地の祭礼や民俗芸能、絵画等に関する写真撮影を行ってきた写真家沖 守弘氏の写真資料と写真取材に関連する文書資料を一括して受け入れデジタル保存し、広く研究用に公開するためのデータベースを作成する作業を行った。今年度は、昨年度に資料受け入れが完了した約2万点のスライド写真のうち、8,200点余りをデジタル化するとともに、5,000点余りについて写真情報の打ち込み作業を行った。

日本関連在外資料調査研究

「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」

代表者：佐々木史郎

19世紀に収集されたことが確実な日本関連資料のうち、まとまりがあり同時代の日本文化や歴史を表象することのできるコレクションを、可能な限り総合的に調査研究する。その際、少なくとも資料に関する詳細なデータをできる限り多く共有することで、同時期の「規準」となる「もの資料」を明確にする。19世紀のコレクションのうち、いくつかのモデルケースを設定し、国内外の研究者コミュニティが、詳細な「記録」というかたちであれ、「実物」のままであれ、未来にわたって「共有」するために、長期にわたって継続でき、かつ成果を広く共有しうる調査方法と実現できる調査計画と公開方法を立案、実行する。同時に、すでに目録が整備されているもののうち、相互利用に関する合意ができる場合は、協定など利用規程を定めたくて「共用」化を進める。さらに、資料群の現状（状態）を把握することで、今後の長期的保存・修復計画を策定することも目指す。

毎年度海外の博物館等の研究者を招聘し、国際フォーラムを開催する。この国際フォーラムは「ロシアと北欧における日本関連アジア資料の調査研究」（代表：近藤雅樹、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」の一環）の企画である。その目的は、バルト海沿岸地域の諸都市を中心に博物館などが所蔵する日本および東アジア関連の民族資料（物品、写真、映像、文献など）を6か年計画で幅広く調査し、未紹介資料を含めて概要を明らかにしようとするものである。

成果

- 1) ロシア、サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館に所蔵されているシーボルトが収集した絵画資料と長崎商館員オーベルメール・フィッセルが収集した民俗資料の図録を作成するため、論文と解説の執筆と、それらの翻訳編集作業を行った。
- 2) 2011年度開催の国際フォーラムの実施報告書を刊行した。

研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

●館のシンポジウム

IUAES 2014 (国際人類学民族科学連合・国際研究大会) における「アイヌ古式舞踊」研究公演

2014年5月17日 幕張メッセ

代表者：齋藤玲子

Panel 136

「Songs and Dances of the Ainu: Heritage and Practice in Akan, Hokkaido, Japan (アイヌの歌と踊り 阿寒における伝承と実践をとおして)」

日本文化人類学会50周年記念事業として千葉幕張メッセで開催された国際人類学民族科学連合2014年中間会議(IUAES2014)を兼ねた国際研究大会において、アイヌ古式舞踊の研究公演と、晩餐会(バンケット)での公演をおこなった。

本事業は、IUAES 2014大会において、日本文化人類学会・小泉潤二会長の招待パネルとしておこなった。

アイヌ民族の歌と踊りは、明治以降に伝統的な文化が衰退するなかで、変化をしながらも儀式的場面などで伝えられてきた。「アイヌ古式舞踊」は1984年(1994年追加)に国の重要無形民俗文化財に指定され、2009年にはユネスコの世界無形文化遺産にも登録された。本パネルでは、歌や踊りの歴史的背景と特徴についての解説とともに、実演および質疑応答をすることで、アイヌの舞踊についてより深く理解してもらうことができ、情報交換もおこなえた。

海外の文化人類学者が多数参加する国際研究大会において、日本の先住民であるアイヌ民族の文化の現状を示すことは、参加者から期待されることであり、本館がその役割を担う意義は大きいと考えた。

実施状況

研究公演は15:30~17:00(パネルセッション90分の枠)で、アイヌ民族の歴史と文化の概要、アイヌ音楽の現状と研究状況を解説した後、踊りの実演をおこなった。他のパネルセッションや学会発表とも重なる時間帯であったことから、参加者は70人ほどであったが、みな熱心に視聴し、質問も多かった。

バンケットでは、司会者からの短い解説を添え、晩餐会に合ったエンターテインメント性の高い演目も加えた。舞台周りに人だかりができ、大変盛り上がった。

司会 齋藤玲子(国立民族学博物館)

解説 千葉伸彦(音楽家・アイヌ文化研究者)

実演 阿寒アイヌ工芸協同組合/阿寒アイヌ民族文化保存会 8名

成果

いずれも終了後に多くの賛辞をいただき、目的どおりに、日本の先住民であるアイヌ民族の文化の一端を紹介するとともに、本館がこうした事業を企画・支援していることも知っていただけた。

国際シンポジウム「ロベルト・ガルフィアスのフィリピン音楽映像記録——歴史的意義と将来的活用」

2014年5月18日 国立民族学博物館

代表者：福岡正太

本シンポジウムは、人間文化研究機構連携研究「人間文化資源」の総合的研究における「映像による芸能の民族誌の人間文化資源的活用」班(代表者：福岡正太)の研究活動の一環として開催したもので、アメリカの指導的民族音楽学者であるロベルト・カルフィアス氏が小泉文夫音楽賞受賞により来日した機会をとらえ、氏がフィリピンでの調査時に撮影した映像を様々な角度から再検証し、民族音楽学研究における意義と今後の活用の可能性について

て検討することを目的とした。

実施状況

本館外国人研究員米野みちよ氏が、ルソン島の映像に関連してフィリピンの音楽に関する民族誌の変化について論じ、ガルフィアス教授によりアメリカ合衆国に招かれ教育研究に従事してきたウソパイ・カダー氏が、ミンダナオ島などの映像に関連してクリントン音楽の変化を論じ、フィリピン大学民族音楽学センター長のラモン・サントス氏が、ガルフィアス教授が撮影した映像記録の重要性に触れた上で、それらの資料を活用するフィリピン大の試みについて論じた。

成果

ガルフィアス教授は、比較的早い時期から、民族音楽学研究における映像の重要性を認識し、研究活動の一環として映像記録作成をおこなってきた。氏の調査をきっかけとして渡米し、フィリピンの音楽を教えるかたわら民族音楽学を学んだウソパイ・カダー氏、氏が調査をおこなった地域で現在研究をおこなっている米野みちよ氏、フィリピン音楽研究の第一人者であるラモン・サントス氏により、ガルフィアス教授による映像記録を検証してもらうことで、音楽文化研究における映像の有用性、民族音楽学に対して映像記録がもつ影響力、フィリピン音楽研究において映像が果たした役割を明らかにし、今後の活用の可能性を示すことができる。また、本シンポジウムにおける議論は、本館における映像製作に対しても多くの示唆を与えることができるだろう。連携研究経費により英文の報告書を刊行する。

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウム

2014年7月19日～7月23日 国立民族学博物館

代表者：寺田吉孝

国際伝統音楽評議会 (International Council for Traditional Music) 「音楽とマイノリティ」研究グループの第8回国際シンポジウムを民博で開催する。同評議会は1947年にイギリスで設立された、世界最大規模の音楽・芸能学会である。傘下に19の研究グループがあり、各々国際研究大会を開催している。その一つである「音楽とマイノリティ」研究グループは2000年に設立され、同年の第1回大会（於、スロベニア）以来、隔年で国際シンポジウムを開催してきた。

実施状況

国際伝統音楽評議会「音楽とマイノリティ」研究会の第8回国際シンポジウムが、国立民族学博物館第4セミナー室において7月19日～23日に予定通り開催された。開会式、基調講演に続いて、24本の研究発表が、大会の4つのテーマ（文化政策、観光、ジェンダーとセクシュアリティ、その他の新研究）に沿っておこなわれた。

関連イベントとして、大会2日目には、研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」が開かれ、同4日目には、エクスカーションとして大阪市浪速区の被差別部落を訪れ、大阪人権博物館の視察、太鼓ワークショップ、太鼓作りの見学のと、地元浪速神社の夏祭りに参加した。

成果

ハワイ大学名誉教授のリカルド・トゥリミリオス氏による基調講演は、マイノリティ・マジョリティの二分法的概念規定の問題点を指摘するとともに、氏自身の調査地であるフィリピン、ハワイ、沖縄の事例をあげながら比較の重要性と理論化を念頭におくことの必要性を指摘した。同氏の問題提起は、その後の個別発表でもしばしば言及され、シンポジウム全体の通奏低音として効果的に機能した。

3日目におこなわれた研究会の総会では、今回のシンポジウムの発表に基づいた論文集を刊行することが確認され、2016年の刊行を目指して編集作業を進めることとなった。寺田を含む3名が編者に指名された。今回のシンポジウムの参加者は計65名。アジア・ヨーロッパを中心に16か国からの参加があり、文字通り国際的なシンポジウムとなった。若手の発表者・参加者も多く、次世代への継承についても一定の成果をあげることができた。

公開シンポジウム「南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道」

2014年10月11日 国立民族学博物館

代表者：池谷和信

南アフリカ共和国は、サハラ以南アフリカのGNPの3分の2を占める大国であるにもかかわらず、これまでアパルトヘイト（人種隔離政策）があまりにも注目されたために、庶民の暮らしの現実が紹介されることはあまりなかった。この会では、アパルトヘイトの崩壊後にどのように社会は変わったのかについて明らかにすることを目的とする。これらを通して、治安の悪さが強調されがちな南アフリカの都市の新たな実像を紹介する。

実施状況

本企画では、モハウ・ペコ南アフリカ共和国大使による基調講演（南アフリカの都市化を展望）を中心として、環境経済学、歴史学（経済史）、民族学（環境人類学）の研究者がそれぞれ南アフリカの都市の過去と現在を、一般の来館者を対象にして、わかりやすく論じることができた。

成果

シンポジウムの結果、貧困や犯罪の温床などの都市イメージとは異なる南アフリカの都市の本当の姿を伝えることができたと思われる。また、必ずしも身近ではないアフリカの文化や社会について、アフリカの人々の声を直に聞くことのできる機会になった。さらに、今回の企画は、南アフリカの事例に焦点を当てたものではあるが、これらを通して、21世紀における大都市での「持続可能な生き方」や「持続可能な資源利用のあり方」を考えるためのヒントが与えられることになった。

国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」

2014年12月6日～12月7日 国立民族学博物館

代表者：朝倉敏夫

国立民族学博物館と立命館大学国際食文化研究センターは、2014年4月10日に学術交流協定を締結した。この協定締結を記念して、世界の食文化研究と博物館の役割に関する国際シンポジウムを開催する。

「食」は人類の生存にとって原始からもっとも大きな問題でありなおかつ、食と環境、生態、安全、健康との関係は人類にとっての今日的な問題でもある。しかし、「食」を「食は文化である」という視点から食文化研究が始まったのは、日本においては、1980年代になってからである。今回のシンポジウムでは、それからおよそ30年がたった今、日本の食文化研究がどのような展開をみせてきたのか、その足跡と現状を明らかにするとともに、世界においては食文化の研究がどのように進められているのかを俯瞰してみる。そして、食文化を研究するうえで博物館がどのような貢献をしているか、まずは東アジアを中心に、その現状を具体的な事例を通して報告してもらい、今後、博物館が食文化を研究するうえで果たすべき役割は何かを考察してみる。

実施状況

国立民族学博物館と立命館大学（国際食文化研究センター）が2014年4月10日に締結した学術交流協定を記念して、世界の食文化研究と博物館の果たす役割に関する国際シンポジウムを2日間に渡り本館講堂にて開催し、一般参加者を含む385人の参加者を得た。「食」は、人類の生存にとって原始からもっとも大きな問題であり、「食」と環境・生態・安全・健康との関係は、喫緊の今日的な問題でもある。しかし、「食は文化である」という視点から研究が始まったのも、「食文化」という言葉が一般に使われるようになったのも、この30～40年である。本シンポジウムでは「食は文化である」という再認識のもと、食文化研究の意義を明らかにする一方、食文化を研究するうえでの博物館の役割について考察した。

初日は、本館館長及び立命館大学理事長からの挨拶の後、在大阪イタリア総領事及び駐大阪韓国総領事から祝辞をいただいた。その後本館朝倉から趣旨説明を行い、引き続き石毛直道元館長をはじめ、日本、中国、イタリア、韓国の食文化研究の進展について講演が行われた。

2日目は、博物館における食文化の表現や展示について、東アジアを中心とした事例報告があり、今後の食文化研究の発展と博物館の役割についての討論が行われた。最後に、立命館大学の井澤裕司教授が、今後も両機関が連携のうえ食文化研究を推進していく決意を述べた。

成果

本シンポジウムを通じ、我が国において食文化研究がどのような展開をみせてきたのか、その足跡と現状を明らかにし、世界においては食文化の研究がどのように進められているのかを俯瞰することができた。そして、食文化を研究するうえで博物館がどのような貢献をしているか、まずは東アジアを中心に、その現状を具体的な事例を通して報告してもらい、今後、博物館が食文化を研究するうえで果たすべき役割について考察できた。

国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」

2015年2月21日～2月22日 国立民族学博物館

代表者：園田直子

* 人間文化研究機構機構長裁量経費

国立民族学博物館では1994年度より、JICAと協力のもと、途上国を対象に博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。対象国のなかには、タイ、ミャンマー、モンゴルのように、日本で研修を受けた人びとが自国の博物館活動や人材育成教育において中核的役割を果たすところがあるのである。そこで本館では2012年度から3年計画で、これら3国とともに新たなプロジェクトを、外部資金（日本学術振興会 研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）を得て進めている。シンポジウムには、これら3国からそれぞれ2名（プロジェクトの相手国コーディネータと、若手研究者）を招聘することで、本館を核とした博物館・博物館学に関わる国際ネットワークを組織的・持続的に強固なものとする。本シンポジウムにより、これまでの〈日本＝研修実施側〉、〈タイ、ミャンマー、モンゴル＝研修を受ける側〉という図式を超えた新しい協力体制が構築される。また、諸外国の経験や動向を取り入れながら、それぞれの歴史的・社会的・文化的背景をもとに発展、成熟する現在アジアの博物館事情を明らかにすることで、欧米に偏りがちな今までの博物館研究に新たな切り口をひらくことが期待される。

本シンポジウムは、日本学術振興会研究拠点形成事業B.アジア・アフリカ学術基盤形成型「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」の成果発表というだけでなく、本館の20年あまりにわたる博物館学に関わる国際貢献・人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。

実施状況

シンポジウムでは、セッション1（アジアの博物館事情）、セッション2（デジタル時代の博物館）、セッション3（「活用」と「保存」の両立）、セッション4（ひらかれた博物館）において、アジアの歴史的・社会的・文化的背景に即して発展、成熟してきた各国の博物館研究やその実践事例を共有する。セッション5（新しい博物館・博物館学の展望）では、アジア独自の博物館・博物館学のありかたを議論し、欧米が主軸になりがちな博物館研究に新たな切り口をひらく。博物館学に関するこれまでのネットワークを継承しつつ、今後につながる持続的な国際的協力体制を構築しようとするものである。

成果

シンポジウム参加者は、1日目は55名、2日目は49名であり、ディスカッションでは活発な質疑応答が繰り広げられた。発表により、日本をはじめ、タイ、モンゴル、ミャンマー、それぞれの国の歴史的・社会的・文化的背景をもとに発展する博物館・博物館学の活動事例を共有し、各国の経験と知見を分かちあうことができた。JICA博物館学コースによる研修など、民博の20年間にわたる博物館学に関わる国際貢献・人材育成の成果が結実していることが実感できた。また、これまで築いてきた博物館・博物館学のネットワークを継承しつつ、今後へとつながる持続的な国際協力体制がより強固なものにできた。今後の展開としては、シンポジウムの成果を刊行し、これまで発信の少なかったアジアから世界に向けて、博物館の活発な活動の現状と、博物館学の成果を公表していく予定である。

●研究フォーラム

国際フォーラム「日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）におけるパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する Re-imagining Ethnological Museums」でのパネル発表と国立民族学博物館でのコロキウムおよび研究懇談」

2014年5月14日～5月21日 国立民族学博物館

代表者：吉田憲司

2014年5月15日～18日まで開催される日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）において、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏の参加をおおぎ、同大会でのパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する——多面的な知と接触の場としての博物館に向けての新たなアプローチ Re-imagining Ethnological Museums: New approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge」を実施するとともに、大会後、シェルトン氏を民博に招聘し、研究コロキウム（非公開）を通じて、民族学博物館の新たなあり方を考究する。また、国際大会パネル参加者には、国立新美術館での企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の合同視察を実施し、博物館と美術館を超えた文化装置の可能性についても共同で考察する。

実施状況

2014年5月15日～18日まで開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES2014）において、カナダ・ブリティッシュコロンビア大学人類学博物館長アンソニー・シェルトン氏の参加をおおぎ、同大会でのパネル（NME パネル兼博物館・文化遺産委員会パネル）「民族学博物館を再想像する——多面的な知と接触の場としての博物館に向けての新たなアプローチ Re-imagining ethnological Museums: New approaches to developing the museum as a place of multi-lateral contacts and knowledge」を実施し、民族学博物館の新たなあり方を考究した。あわせて、大会後、シェルトン氏を民博に招聘し、研究コロキウムを通じて、近年のアートと人類学の接近について、最新の知見を交換した。また、国際大会パネル参加者を対象に、国立新美術館での企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」の合同視察を実施し、博物館と美術館を超えた文化装置の可能性について共同で考察し、将来への指針を得た。

成果

国際大会の場で、民博の存在とその活動をひろく世界に周知し、民族誌展示や民族誌資料情報管理における新たな指針を提示することで、本事業は、今後民博が世界の民族学博物館の動向を主導していく契機となった。また、国際大会パネルでの議論を国立新美術館で開催中の企画展「イメージの力——国立民族学博物館コレクションにさぐる」と接合することで、博物館と美術館、人類学・民族学と芸術学・美術史学の区別を超えた、新たなミュージオロジーの構築を進めることができた。さらに、大会後の民博でのコロキウムを通じて、上記の活動の成果を民博館内、ならびに関西地区の関連分野研究者と共有することが可能となった。現在、吉田が編集集中の英文単行書『芸術と人類学 Art and Anthropology』に、パネルおよびコロキウムでの発表論文を所収の予定である。

国際フォーラム「驚異と怪異：想像界の比較研究に向けて」

2014年10月12日～10月13日 国立民族学博物館

代表者：山中由里子

共同研究「驚異譚にみる文化交流の諸相——中東・ヨーロッパを中心に」において、ラテン語で *mirabilia*、アラビア語・ペルシア語で *'ajā'ib* と呼ばれる、辺境・異界・太古の不思議な事物や生き物についての表象を比較し、モチーフ伝播の過程、世界観の相違、文化交流のダイナミズムなどを検討してきた。これまでは中東とヨーロッパという一神教世界の事例を中心に検討してきたが、東アジアにも視野を拡げ、「驚異」に対して「怪異」という概念を対置させ、人間の想像力と表象物の相関関係や、背景にある宗教観・世界像などを比較するためのより大きなプロジェクトに展開させてゆく。本フォーラムは、今後の比較研究の概念的な枠組みを議論するためのもので、参加者は東アジア・中東・ヨーロッパの研究者であり、専門領域も歴史・文学・美術・民俗学・人類学と学際的である。様々な文化圏や時代の驚異・怪異観念を比較することによって、人間の想像界をより多面的に捉えようとするところに本計画の意義がある。

実施状況

これまで共同研究で明らかにしてきた驚異をめぐる中東とヨーロッパの比較心性史を、国際日本文化研究センターの小松和彦氏が牽引してきた妖怪研究や東アジア怪異学会が中心となって行ってきた怪異の研究と対比させ、新たな比較研究の枠組みを検討する会であった。午前は山中がまず今後のプロジェクトの概要を説明し、これまでの驚異研究の紹介をした。小松が怪異研究の今後の方向性について話した。黒川がヨーロッパにおける驚異と超自然の概念について紹介した。午後は、中国と日本の怪異思想、怪異の視覚表象、驚異・怪異の展示について、参加者から事例提供があり、全体討議を行った。

本フォーラムの参加者は、これまで個別に活動してきた上記プロジェクトのコアメンバーで、専門とする地域、時代、学問分野が異なる。通常は交流する機会が少ないこれらの研究者が専門的知識と、それぞれが関わってきた驚異・怪異関係のプロジェクトの成果を共有するプロジェクトを来年度から本格的に立ち上げる予定であり、今回はその妥当性と方向性を探った。外部の研究者や学生の参加もあり、限られた時間で内容の濃い議論が行われた。

成果

中東とヨーロッパを中心とした一神教世界における驚異の心性史を、東アジアの世界観における怪異と比較する枠組みの構築について議論した。将来的に特別展示に成果を結実させることを念頭に、「驚異・怪異のトポグラフィ」(驚異や怪異はどのような場に現れるか)、「異形の造形」(驚異や怪異の言説が視覚化されるプロセス)、「驚異・怪異と身体」(身体観の比較)、「驚異・怪異と自然」(宇宙観の比較)といった概念的軸の抽出を検討した。また、より具体的には、例えば「人魚」あるいは「彗星」といったような東西の共通項となり得る、かつ視覚的にも目を引くモチーフに関する参加者からの事例提供をつのった。

本フォーラムの参加者は、これまで個別に活動してきた上記プロジェクトのコアメンバーで、専門とする地域、時代、学問分野が異なる。通常は交流する機会が少ないこれらの研究者が専門的知識と、それぞれが関わってきた驚異・怪異関係のプロジェクトの成果を共有する機会となり、特別展示という実践に向けた効果的な議論がなされた。

2015年10月に名古屋大学出版会から論文集を刊行する。ホームページでプログラムを公開した。

国際ワークショップ「人の移動と民族的／地域的共同性の再構築」

2014年12月5日～12月6日 国立民族学博物館

代表者：山田孝子・藤本透子

本国際ワークショップは、グローバル化が進むなかで、ミクロ／ローカルな共同体の維持・展開を可能とする共同性はいかに再構築されるのかを、とくに伝統的・宗教的实践、超域的ネットワーク、リーダーシップ、歴史性・歴史的記憶等に着眼しながら、越境や移動を経験する集団の事例研究をもとに、人類学的・歴史学的視点から解明するものである。本館客員教授の山田孝子が研究代表者、助教の藤本が研究分担者として関わる科学研究費補助金基盤研究(B)「多文化空間に生きる越境者の共同性再構築に関する地域間比較研究」(2012～2014年度)、京都大学CIAS共同利用・共同研究プロジェクト「移動と宗教実践——地域社会の動態に関する比較研究」(2013～2014年度、代表：小島敬裕)、民博共同研究(若手)「内陸アジアの宗教復興——体制移行と越境を経験した多文化社会における宗教実践の展開」(2012年度終了、代表：藤本透子)による研究成果の国際的発信であり、地域社会再編に向けての視座を提起する意義がある。

実施状況

2日間にわたり13名の発表者(うち6名は国外から招聘)によって、歴史性、シンボルとアイデンティティ、日常実践、民俗知識、宗教動態、リーダーシップなどに着目した研究発表が行われ、共同性の再構築に関しては活発な議論が交わされた。例えば、カナダの中国系移民のあいだでは歴史の継承活動が世代を超えて共同性を再構築していく重要な活動となっているのに対し、カナダのチベット難民社会においてはチベット人協会などの活動に加えてダライ・ラマの宗教的リーダーシップが共同性再構築に大きな役割を果たしている。また、ムスリムの移民の場合はイスラームが共通して重要な役割を果たすが、ホスト社会との関係において何が共同性の基盤となるかという点では次のような多様性がみられる。タイ北部のムスリムが故地である中国雲南省とのつながりを再構築する一方でタイ国内の他民族のムスリムと連携するのに対し、モンゴルのカザフ社会では国外とイスラームを通して結びつく一方で国内では特定の祝祭がエスニシティの象徴となっている。

こうした事例研究を広く比較検討し、グローバル化が進展するなかでマイノリティがマジョリティに同化するの

ではなく社会的・文化的主張を活発に行い、ミクロレベルで地域社会における共同性を再構築していているメカニズムが具体的に論じられた。

成果

本国際ワークショップでは、当該社会出身者を含む国内外の研究者が、実地調査に基づいて多文化空間に生きる越境者集団を地域間比較し、人類学的・歴史学的視点、および調査される側と調査する側の視点から、共同性の維持・展開を実証的に解明した。具体的には、しばしば経済のグローバル化に逆行するかたちで地域の独自性や文化的異質性を主張するミクロな共同体が再構築されており、ここでは、1) 多方面におよぶネットワーク形成により移民社会の凝集性の向上とともに他者との共生がみられ、2) 移住後の教育が共同性の再構築に資する力となる、3) 体制移行や移住後に「伝統」がしばしば共同性再構築の核となる、4) 文化接触の際の「文脈化」が共同性を再構築する上で重要な意味をもつ、5) 宗教的・世俗的リーダーシップが共同性の再構築に果たす役割が大きいことなどが明らかとなった。本国際ワークショップの成果は、山田孝子・藤本透子共編の *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness* として、SES での出版を申請しているが、本出版企画は、当該社会出身者による論考も含み、内部と外部の視点から、文化的多様性を内包した地域社会における共生の在り方を提起するものとなっている。

公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」

2015年1月25日 JPタワー ホール&カンファレンス (東京)

代表者：関 雄二

エジプトを専門とする国内の考古学者2名を招聘し、権力生成に関して南米の古代文明と比較する研究フォーラムを古代アメリカ学会の協力を得て行う。開催地は東京(会場は未定)、一般公開を予定している。招聘旅費、およびシンポジウム発表者の国内旅費は、科研費(「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」代表・関 雄二)より支出する。これは、科研費プロジェクトの成果公開の一環であり、アンデス文明における権力生成とその変容を相対化するために、視点を共有したうえで、文明間の比較を行うことを特色とする。こうした広い視野に立ったテーマ設定を行うことで、学問領域の細分化が進み、個別具体性への関心が高まり、普遍化、一般化への試みが顧みられない現代の学問潮流に一石を投じることができると考えられる。

実施状況

公開フォーラム「古代文明の生成過程——エジプトとアンデス」

日時：2015年1月25日 13:00~16:00 [開場 12:30]

会場：JPタワー ホール&カンファレンス ホール1 (東京都千代田区丸の内2丁目7番2号 JPタワー4階)

プログラム

13:00~13:05 あいさつ

13:05~13:35 「古代エジプトにおける国家と経済」

河合 望 (早稲田大学)

13:35~14:05 「経済から見た古代エジプト初期国家の形成」

高宮 いづみ (近畿大学)

14:05~14:35 「アンデス文明初期の神殿と経済活動——クントゥル・ワシ遺跡の調査成果から」

井口 欣也 (埼玉大学)

14:35~15:05 「古代アンデスにおける神殿の登場と権力の発生」

関 雄二 (国立民族学博物館)

15:15~16:00 ディスカッション

成果

フォーラムにおいては、まず高宮いづみ氏が、エジプト先王国期において比較的短期間に社会階層や専門化が始まり、特別な副葬品と構造を持つエリート階層の墓が作られたことを指摘した。続く河合望氏は、古王国におけるピラミッド建設が王の葬祭と関連して登場した点、やがて葬祭への比重が高まり、それを支える組織が誕生した点、王の死後も葬祭が継承されるが、それが故に葬祭に関わるエリート階層の台頭と王の権威の失墜がもたらされた点などを述べた。これに対して、アンデス文明について、まず関雄二が文明初期における神殿の登場を、意図せざる

結果とする実践論的仮説を提示し、続く井口欣也氏は、文明初期の神殿において、広域拠点からローカル拠点に変貌する過程で、エリート集団の拡大が生じた点を考古学的データから明らかにした。その後、4名によるパネルディスカッションにおいて、エジプトで社会階層と専門家が急激に発展した理由、西アジアとエジプトにおける都市化の違い、王権の成立基盤のイデオロギーがいつ、どのように誕生したのかについて討論を重ねた。この結果、古代エジプトでは、ゴードン・チャイルドらが提唱した唯物史観に比較的近い形で社会が変化していったこと、そしてアンデスにおける文明の成立過程とは全く異なるものであったことが再認識できた。

研究フォーラム「持続可能な IPM に向けて——博物館環境データの分析手法を考える」

2015年2月20日 国立民族学博物館

代表者：園田直子

博物館では、持続可能な IPM（総合的有害生物管理）を目指し、各種の環境調査を行い、その結果をもとに環境を整備する。環境調査のうち生物生息調査と温度・湿度モニタリングは、データ量が膨大となるため、いかに効率的かつ長期的視点で解析できるかが鍵となる。申請者は、人間文化研究機構・連携研究の枠内で、生物生息調査分析システムと、温度・湿度分析システムを開発し、連携機関での活用供してきた。当該分析システムを活用して得られた知見は、逐次、国内外の学会やシンポジウムで発表、セミナーやワークショップで普及してきており、今後ともこの研究活動を継続する。分析システムを、無償で、必要とする人びとに提供できるよう、パソコン単体で利用できるスモールパッケージを現在開発中であり、完成版ができた時点で、国内外の学会やシンポジウムでひろく公開する。

実施状況

本研究フォーラムは、人間文化研究機構・連携研究の研究成果と、文化財保存修復学会の例会という位置づけを合わせもつ。博物館環境分析システム・スモールパッケージ完成版の開発を念頭に、博物館環境データの分析手法について、保存科学者、学芸員、資料管理の担当者がともに議論し、考える場となった。

成果

研究フォーラムでは、博物館環境データの分析手法について、保存科学者、学芸員、資料管理担当者がともに議論し、スモールパッケージ完成版に結びつく多くの貴重な知見が得られた。次の展開としては、これら分析システムを、パソコン単体で利用できるスモールパッケージとして完成させ、保存科学研究の成果を社会還元したいと計画している。完成版は、必要とする人びとが自由に活用できるよう、たとえば研究代表者のホームページからのダウンロードの可能性もふくめ、公開の手法を検討する。

研究フォーラム「東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究」

2014年3月14日～3月18日 国立民族学博物館

代表者：久保正敏

2015年3月に仙台市で開催される第3回国連防災世界会議期間中に、「世界災害かたりつぎフォーラム」を実施する。これは、TeLL-Net フォーラム実行委員会、人と防災未来センター、名古屋大学減災連携研究センター、東北大学災害科学国際研究所が共同開催を予定しているものである。目的は、大災害を経験した世界各地で様々な災害語り継ぎを展開する組織や団体と、先端的な減災研究に取り組む機関が一堂に会し、よりハイレベルな減災のための効果的な人材育成や手法を検討するものであり、2010年3月に神戸で開催された世界災害語り継ぎフォーラム（実行委員長：林 勲男）を継承するものである。

本フォーラムの開催に合わせ、「東北太平洋沿岸地域の津波災害の経験と教訓を語り継ぐ」をテーマに展示をおこなう。東日本大震災発生後、進めてきた、東北太平洋沿岸部の過去および現在の災害の記録・記憶に関わるデータの収集調査の中間成果をデータベース化して解説のパネルと共に、この展示にて公開する。本フォーラムにあわせて展示開催により、「研究成果公開プログラム」の一環として議論の発展に貢献するものである。

実施状況

2015年3月14日から18日まで仙台市で第3回国連防災世界会議が開催された。その期間中の17日に、パブリック・フォーラムとして「世界災害かたりつぎフォーラム」を実施した。これは、人と防災未来センター、名古屋大学減

災連携研究センター、東北大学災害科学国際研究所そして民博からのメンバーで構成される TeLL-Net フォーラム実行委員会が開催したものである。目的は、大災害を経験した世界各地で様々な災害語り継ぎを展開する組織や団体と、先端的な減災研究に取り組む機関が一堂に会し、よりハイレベルな減災のための効果的な人材育成や手法を検討するものであり、2010年3月に神戸で開催された世界災害語り継ぎフォーラム（実行委員長：林 勲男）を継承するものであった。

フォーラム開催に合わせ、「東北太平洋沿岸地域の津波災害の経験と教訓を語り継ぐ」をテーマに展示をおこなった。東日本大震災発生後に進めてきた、東北太平洋沿岸部の過去および現在の災害の記録・記憶に関わるデータの収集調査の中間成果をデータベース化して、この展示で公開した。展示ブースには約300名の来場者があり、用意したフォーラムの案内チラシ、民博、人と防災未来センターのパンフレットはほとんどなくなった。また、17日のフォーラムには68名の出席者があった。フォーラムは、東日本大震災（2011）、中越地震災害（2004）、インド洋大津波災害（2004）、阪神・淡路大震災（1995）、ハワイ島津波災害（1946、1960）の被災地で展開している語り継ぎ活動の報告を踏まえて、災害経験やそこからの教訓を共有し、活動に先端的な防災・減災研究の成果を融合させ、人材育成や減災活動の方策について議論された。

成果

本展示は、被災地コミュニティやそこに暮らす人びとによる災害経験の語り継ぎや、得た教訓を地域や時代を超えて防災・減災に生かそうという過去および現在の活動についてのデータを提供することで、市民レベルの活動の意義と災害常襲地域におけるリスクとの共生の在り方について、東日本大震災の被災地からの具体的な事例を紹介した。同時に、そうした市民レベルの活動へ着目した民博の調査研究を世界に向けて発信し、人文社会科学の防災・減災研究への貢献の一例を示すことができた。

「阪神・淡路大震災のデジタルアーカイブ」、「TeLL-Net（災害かたりつぎ）フォーラム」および本展示についてまとめ、『減災』（人と防災未来センター発行）にて成果を発表予定。報告書を作成し、TeLL-Net（災害かたりつぎ）のウェブサイトにも掲載予定。

●国際研究集会への派遣

「国際学術大会での研究発表 The 3rd Children's Museum Conference Program, Educational Activities Utilizing Museum Materials: Case Studies of National Museum of Ethnology」———
2014年6月29日～7月2日 韓国国立民俗博物館・子ども博物館（韓国）
呉屋淳子

韓国国立民俗博物館・子ども博物館で開催される第3回子ども博物館学術大会は、博物館の資料とその活用法（教育）に着目し、多様な博物館教育のあり方について議論した。今回、「知識としての文化と実践としての文化——学校と民族学博物館の文化教育の比較」と題して研究発表を行った。本発表は、これまで民族学・文化人類学の研究者が構築した物質文化の展示、みんぱくなどの文化学習教材が、学校教育において果たした役割や機能について再検討した。特に、これまで積極的に議論されてこなかった民博が担う教育的役割やその機能について、日本の学校教育や社会教育における文化教育の実態を踏まえた検討を試みる。さらに、現在取り組んでいる博学連携教員ワークショップの実践から、民博のファシリテーター的な教育活動の可能性についても検討を行った。

実施状況

第3回子ども博物館学術大会において、「博物館の資料を活用した教育活動——国立民族学博物館の事例から」と題して研究発表を行った。本発表では、これまで民族学・文化人類学の研究者が構築した物質文化の展示、みんぱくなどの文化学習教材が、学校教育において果たす役割や機能について検討した。まず、日本の学校教育や社会教育における文化教育の実態について述べた上で、具体的な事例として現在申請者が取り組んでいる中等教育や高等教育での文化教育を提示し、民博の教育活動がもつ可能性について考察した。今後の課題として、大学共同利用機関としての教育活動、つまり大学生や更に広い年齢層を対象とした教育への応用も検討が必要であることを提示した。その結果、以下の2つの点について高い評価を得た。1) 韓国人にとって「民俗」や「民族」という用語は、明確な区別なく曖昧に捉えられてきた。また、韓国には韓国文化を扱った博物館だけであることから、「民族」という用語は、むしろ自民族を指すものとして理解されてきた。民博の事例発表を通して、世界の各地域を扱う博物館の存在を示しただけでなく、韓国の博物館関係者に「民族学」また「人類学」について、従来とは異なる視点を示す契機になった。2) 人類学の研究手法であるフィールドワークの実践が人類学の研究室で学ぶ学生だけでなく、日本

の学校教育でも広くその必要性が求められているという点が非常に興味深かった。

また、海外からの発表者は、アメリカ・Peabody Essex Museumの学芸員、シンガポール文化財庁教育委員の2名が参加した。互いの博物館の活動や多文化教育に関する意見交換などもでき、貴重な研究交流の機会となった。

成果

今回の学術大会への参加者は、博物館教育に関わる韓国の学芸員だけでなく、ICOM韓国委員長やシンガポールアジア文明博物館の教育部長、ピーボディ・エセックス博物館教育部長など海外からの研究者・学芸員も参加しており、研究発表を通じた国際的な学術交流の機会になった。また、こうした国際的な学術交流を通して、多くの博物館が抱える諸課題についても検討することが可能になった。博物館教育が担う役割や機能について議論を深めることにより、今後の民博における教育活動の可能性を模索する機会に繋がった。

研究発表の成果報告は、韓国国立民俗博物館・子ども博物館ジャーナル「子どもと博物館教育」特集号に論文として掲載した。

「国際学会 International Society for third Sector Research (ISTR) ので研究発表 ミュンスター(ドイツ)」——
2014年7月21日～7月27日 ミュンスター大学(ドイツ)
出口正之

International Society for third Sector Research (ISTR) は米国を本部に約90か国のメンバーからなる、非営利セクターの国際学会である。2年に1度の世界大会が、ミュンスター(ドイツ)で開催される。出口は“Glocalization” of standards; Study from Participant observation on Japan’s Charity Commissionのアブストラクトを提出していたところ、大会委員会より発表許可の連絡を受けた。ISTRは、1991年に設立され、設立後23年を有する国際学会で、2年に1度の世界大会とその間の諸地域での複数の大会(アジア太平洋大会を含む)を交互に開催して、世界大会は今回で11回目となる。出口は同学会の会長を日本人では唯一務め(2006-2007)、実績もある。

また、発表内容も、110年ぶりの日本の公益法人改革における会計・法律についてのグローバルな影響を世界的な視点で分析するものであり、学術的意義が大きい。

実施状況

ドイツのミュンスター大学で開催された、国際学会 International Society for Third Sector Research (ISTR 国際NPO・NGO学会または国際第三セクター研究学会と訳される)に出席。

分科会セッションの Comparative Perspectives on State Regulation and Self-Regulation Policies in the Nonprofit Sector チェア。

及び分科会セッション “Regulation of charities and philanthropic foundations : Developments in government policy and the regulatory environment”において “Globalization” of standards; Study from Participant observation on Japan’s Charity Commission の論文発表を行った。

同学会は、世界から550名が参加。144セッションが開催された。非営利研究に関する最新の研究成果の交換を行った。なお、会議そのものは、全てスマートフォンのアプリ対応で、出席者の顔や所属が出席したセッションごとで確認できるものであった。

成果

今回の発表は、粗削りではあるが野心的冒険的な内容であり、この研究を国際学会の場で発表することで、新たな学術の向上に貢献し、さらに議論を展開し、より高度なものへと上げることができた。また、ISTRは国際的・学際的学会であり、単一ディシプリンの学会では知りえぬ世界の新しい研究の状況を把握することが期待されており、たとえば、イギリスには “Charities Studies” という研究分野が誕生している。こうしたことについての最新の知見を得ることもでき、今後の民博での研究にも生かせるものと考えられる。

発表論文は “Globalization, Glocalization, and Galápagos Syndrome: Public Interest Corporations in Japan” と改題のうえ、*International Journal Nonprofit Law* にアクセプトされた。

アブストラクトについては <https://istr.site-ym.com/?MuensterAbstracts> において公表済みである。

「アジア・オセアニア地域の先史における移住と拡散——言語人類学的・系統地理学的アプローチ」
2014年7月25日～8月2日 ベルン大学（スイス）
菊澤律子

本学会は、言語学、遺伝学、系統学、その他の関連分野の研究者が、アジア・オセアニアにおける先史人類学的研究に関連する成果をもちより、当該地域における人類の移動史や植物の栽培化に関する最新の研究成果を学際的に議論することを目的とする。菊澤は、言語学に基づく太平洋地域の移動史および研究状況の報告を担当すべく、主催者より出席の依頼を受けた。この内容は、菊澤がメンバーとなった共同研究「人類の移動誌——進化的視点から」（2008-2011、代表 印東道子）および代表者を務めた「言語の系統関係を探る——その方法論と歴史学研究における意味」（2009-2012）における成果に密接に関連する。今回の学会での具体的な報告内容はそのうち、①系統樹モデルに基づく伝統的な歴史言語学の手法を広く太平洋の言語に適用し、人の移動経路を割り出す場合の成功例と問題が出た例を具体的に示し、②方法論の理論的側面からみた性質との関わりを論じると同時に、③マクロ的比較研究とミクロ的比較研究の性質の違いについて指摘する予定である。このうち③は、これまで歴史言語学に基づく移動論に欠けていた視点であり、2つの視点を区別することで、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができるのか、他分野における研究との関連という文脈の中で考察する。

実施状況

予定通り「Migrations and Transfers in Prehistory: Asian and Oceanic Ethnolinguistic Phylogeography（アジア・オセアニア地域の先史における移住と拡散——言語人類学的・系統地理学的アプローチ）」に出席した。これは、言語学、遺伝学、系統論、植物考古学、その他関連分野の研究者が集まり、当該地域における人類の移動史や植物の栽培化に関する最新の研究成果を学際的に議論することを目的とする研究集会である。

菊澤は、1日目に、植物の栽培起源と人の移動に関するセッションで座長を務めるとともに、2日目には、オーストロネシア諸語において、形態統語論的变化を人の移動に結びつけるとどうなるか、という内容で言語学的観点から報告を行った。具体的には、「Variations in Fijian Languages and Their Historical Implications（フィジー語群における変種の存在およびその歴史的示唆）」というタイトルで、まず、フィジーにおける言語の多様性と史的事実の結びつきについて議論し、次に、語群に関する2つの異なる言語系統図を例にとり、①系統樹モデルに基づく伝統的な歴史言語学の手法を適用して人の移動経路を割り出す場合に結論が異なってくる例を具体的に示し、②方法論の理論的側面からみた性質との関わりを論じると同時に、③マクロ的比較研究とミクロ的比較研究の性質の違いについて指摘した。

このうち③は、これまで歴史言語学に基づく移動論に欠けていた視点であり、2つの視点を区別することで、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができる可能性について述べたが、この点について、他の研究者から非常に肯定的なフィードバックを受けることができた。このほかにも、他分野における方法論や研究成果を聴く機会を得て、今後の言語学における移動史研究をどのように発展・応用させることができるのか、他分野における研究との関連というより広い文脈を視野にいれつつ考察する題材を多く得ることができ、有意義な経験となった。

成果

本学会には、国際的に活躍する移動仮説関係の諸分野の専門家が多数招待されている。それらの研究者による最新の研究成果を聞き、自身の成果に対するフィードバックを得ること、また、その結果をうけたアジア・太平洋の人の移動に関する議論に参加できる機会は他では得難い。したがって期待される成果としては、そのような環境における学術交流を経験することで、申請者が以前より携わってきた言語の系統関係に基づく移動仮説擁立の方法論や理論的に関して他分野の研究手法やその成果を対照させられるようになり、言語学のアプローチに新たな視点を持ちこみ、発展させられることがあげられる。学会主催者によるプロシーディングスに投稿予定。

「国際会議『先史期の移住と移転——アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学』における研究成果発表」
2014年7月27日～7月31日 ベルン大学（スイス）
ピーター・マシウス

近年の民族植物学的、遺伝子学的研究は、栽培種のサトイモの遺伝子学的、地理学的起源を知るための新しいモデルを提示することを可能にした。そして、これまでに言語的なデータに基づき提案されてきたものと関連づけら

れるようになった。民族植物学的、遺伝子学的研究は、また作物の起源と伝播の歴史を探るのにどのような種類の言語学的データが必要であるのかという疑問を提起した。

今回のベルン大学での国際会議の主催者（Himalayan Languages Project）は、全世界から主要な言語学者、人間集団遺伝学者、また関連する領域である古気象学、民族植物学、民族生物学の研究者を招聘する。言語学者として主催者は、オーストロアジアティック、オーストロネシア、そして他の言語グループへ拡大して、植物・動物・人類の間の関係に興味を抱いている。

今回、同会議から研究発表を別紙招聘状のとおり求められたため、下記の題目にて研究成果の発表を行うものである。

Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: issues arising from research on the natural and cultural history of taro (*Colocasia esculenta*)

系統地理学、民族植物学、言語学：サトイモ (*Colocasia esculenta*) の自然史・文化史の研究から生じた論点

実施状況

ベルン大学で開催された国際会議、「先史期の移住と移転——アジア・オセアニアの民族言語学的系統地理学」において、『Phylogeography, ethnobotany, and linguistics: issues arising from research on the natural and cultural history of taro, *Colocasia esculenta* (L.) Schott』というタイトルの研究発表を行った。

人類の移動や言語の発達史を研究において、生物学的アプローチおよび言語学的アプローチを援用することに、近年、関心が集まっている。この国際会議には、アジア・太平洋地域の人類の歴史に関心を持つ生物学者と言語学者が参加した。会期中、日本を含むアジア、アメリカ、ヨーロッパからの研究者たちと討論することができた。サトイモに関しておこなった発表は好評で、学会誌に投稿するよう要請された。

発表の中で、植物の栽培化と農業の出現にかかわる植物の分布と変異を解釈するための系統的なアプローチの必要性を強調した。また、作物の起源についての討論に“range limit model”の概念を取り入れることを提案した。このことが、今後の作物の起源、拡散、人口の拡大などの研究において役立てられることを願う。

成果

この学会により、より広範な研究者のネットワークが構築されることが期待される。また、この学会で得られた成果は、学会誌として出版される。ベルン大学の会議主催者は、この会議の報告書を出版する。その報告書に、論文を投稿する。

「第15回国際イエズス会ミッション会議における研究成果発表」

2014年8月25日～8月29日 教皇庁立チリカトリカ大学・サンチアゴ（チリ）

齋藤 晃

- 1) サンチアゴ（チリ）の教皇庁立チリカトリカ大学で開催される第15回国際イエズス会ミッション会議のパネル「Saberes y etnografía de la conversión」（和訳「知識と改宗の民族誌」）において招待講演をおこなう。講演の題目は「La guerra indígena y la expansión misional en Moxos, siglos XVII-XVIII」（和訳「17・18世紀のモホスにおける先住民の戦争とミッションの拡張」）である。この講演は齋藤が代表を務めた本館機関研究「近代ヒスパニック世界における国家・共同体・アイデンティティ——スペイン領アメリカの集住政策の研究」（2011～2013年度）の成果公開の一部である。
- 2) 同会議のシンポジウム「Jesuitas en fronteras: misiones interiores, circulares y periféricas」（和訳「辺境のイエズス会士——域内、巡回、周辺宣教」）において研究報告をおこなう。報告の題目は「Consolidación y reproducción de las parcialidades en las reducciones jesuíticas de Moxos」（和訳「モホスのイエズス会集住区におけるパルシアリダの確立と再生産」）である。この報告も前述の機関研究の成果公開の一部である。なお、齋藤はRodrigo Moreno Jeria氏とともにこのシンポジウムの実行委員長を務める。

実施状況

国際イエズス会ミッション会議は植民地時代のアメリカにおけるカトリック教会の宣教をテーマとする大規模な国際研究集会であり、この会議において機関研究の成果を発信することで、同研究および本館の国際的知名度を高めることができた。機関研究のテーマである集住政策とは、広い範囲に分散する小規模な先住民の集落をヨーロッパ式の大きな町に集中させる政策であり、16世紀から18世紀にかけてスペイン領アメリカの広い地域で実施された。カトリックの修道会はこの政策の主要な推進者であり、とりわけ17世紀以降、メキシコ北部やアマゾン、ラプラタ、

チャコ、チリ南部などの辺境で精力的な活動を展開した。しかし、その重要性にもかかわらず、集住政策の研究蓄積はとぼしい。とりわけ、先住民社会への効果については、詳細がほとんどわかっていない。今回の成果公開では、アマゾンの一地方に焦点を当て、集住政策の効果を具体的かつ詳細に解明した。上記1)の招待講演では、宣教師により町に集住させられた先住民が、在来の戦争の枠組みを利用することで集住化の客体から主体へ転身し、他の先住民を自分たちの町に集住させるようになった過程を明らかにした。上記2)の研究報告では、集住化により町に集められた複数の民族集団がいかなる関係を取り結ぶにいたったかを究明した。講演、報告とも、従来ほとんど利用されなかった未刊史料の綿密な検討に基づいて、集住体制下の先住民社会の動態を明らかにした点が高く評価された。また、講演、報告後の意見交換を通じて、あらたな人脈を築けたことも、大きな成果だった。

成果

上記1)の招待講演については、内容を論文にまとめ、スペインの学術雑誌『Boletín Americanista』に寄稿した。この論文は同雑誌の70号に掲載された。上記2)の研究報告については、内容を論文にまとめ、齋藤の編著の一部としてペルーで刊行する予定である。

「MusiCam 2014: International Conference on Visual Ethnomusicology」

(映像民族音楽学国際会議「MusiCam 2014」)

2014年11月3日～11月10日 ヴァリャドリッド大学（スペイン）

寺田吉孝

MusiCamはスペインのヴァリャドリッド大学が2009年に開始した研究プロジェクトであり、民族音楽学研究における映像メディアの役割を総合的に検討することを目的としている。この一環として2014年11月5日～7日に同大学で国際会議が開かれ、1)映像民族音楽学の理論的・方法論的考察、2)音楽とジェンダー、3)ライブヒストリー、4)儀礼の実践の4テーマに沿って約20本の研究発表がおこなわれる。寺田は、第1のテーマに沿って、民博における映像番組制作の実態とその評価・問題点に関する発表をおこなう。

実施状況

この会議の大きな目的の一つは、世界最大の音楽芸能系学会である国際伝統音楽評議会 ICTM の傘下に「映像音響民族音楽学 (audiovisual ethnomusicology)」の研究グループを設立するための議論と具体的な準備をおこなうことであり、参加者はヨーロッパ、ラテンアメリカを中心にして約30名であった。

会議では、主催大学のエンリケ・カマラ教授による趣旨説明とペルーのラウル・ロメロ教授による基調講演のほか、20本の研究発表がおこなわれた。寺田は、会議初日の11月5日に発表をおこない、民博映像番組の製作過程から抽出した問題点を手掛かりにして、映像番組作成のプロセスの再検討を提案した。

成果

映像人類学は人類学の下位分野として一定の評価をすでに得ているが、音楽芸能を対象を絞った映像民族音楽学は、包括的な議論を継続しておこなうための組織化が未だなされておらず、今回の研究グループの立ち上げが実質的に初めての試みとなった。

会議を通して熱心な議論が行われ、映像番組作成の倫理的な側面に関する議論では辛辣な応酬もあった。

7日の会議終了後には、研究グループ設立の準備会合が開かれ、グループの目的や規約の制定などが議論された。また、会議での発表に基づいた論文集の刊行が決定され、寺田を含む4名が編者に指名された。

今回の会議は、ヨーロッパ、ラテンアメリカの民族音楽学における映像メディアの位置づけや研究動向を学ぶ好機となった。今後、民博との連携を念頭におきながら研究者のネットワーク化を進めたい。

館長リーダーシップ経費による事業・調査

研究公演「アリラン峠を越えていく——在日コリアン音楽の今」の開催

本研究公演は、朝鮮半島の民族音楽を継承している二世、三世のアーティストたちによる演奏を紹介することで、苦難を象徴するアリラン峠の向こう側にある「希望」を目指す在日コリアンの現在を表現しようとした。

在日コリアンの音楽はこれまで主にコミュニティ内のイベントにおいて演奏されてきたため広く一般に紹介されていない。本研究公演は、在日コリアンが演奏する音楽を通して、ステレオタイプ化された在日のイメージについ

て再考し、かれらの生活体験や心情をより深く理解してもらうことを目的としていた。高 正子による音楽の歴史的、社会的背景についての的確な解説もあり、この目的はかなりの程度達成されたことが聴衆の演奏に対する反応やアンケートの結果に表れていた。

本公演の成果の一つは、南北の民族音楽を継承するアーティストを一堂に集めることができたことにある。朝鮮半島の南北の分裂は、在日コリアンの音楽実践にも反映され、両者が舞台を共にする機会はこれまでほとんどなかった。特に、公演最後の出演者全員による「アリランメドレー」の演奏は大きな盛り上がりを見せ、強い一体感が生み出された。アーティストたちの、それぞれの異なる演奏スタイルが、一つの歌のなかで個性を失うことなく融合するさまを体験できた。

IUAES 2014 (国際人類学民族科学連合・国際研究大会)における「アイヌ古式舞踊」研究公演の実施

日本文化人類学会50周年記念事業として千葉幕張メッセで開催されたIUAES 2014大会において、アイヌ古式舞踊の研究公演と、晩餐会(バンケット)での公演をおこなった。

研究公演は、アイヌ民族の歴史と文化の概要、アイヌ音楽の現状と研究状況を解説した後、踊りの実演をおこなった。参加者はみな熱心に視聴し、質問も多かった。

バンケットでは、司会者からの短い解説を添え、晩餐会に合ったエンターテインメント性の高い演目も加えた。舞台周りに人だかりができ、大変盛り上がった。

いずれも終了後に多くの賛辞をいただき、目的とおりに日本の先住民であるアイヌ民族の文化の一端を紹介するとともに、本館がこうした事業を企画・支援していることも知っていただけたと思う。

研究公演「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」

本館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続している。このなかで無形の民俗文化財は、被災地の芸能を本館で演じる「場」を創出し、その再開の契機とする活動をおこなっている。2012年度は笹崎鹿踊り、鶴鳥神楽、南部藩壽松院年行事支配太神楽、2013年度は、雄勝法印神楽を招聘し、公演した。今年度もこの支援活動を継承し、福島県いわき市のじゃんがら念仏踊りの公演をおこなった。

事前申込348名、当日参加27名の計375名の参加が有り、盛会裡に終えることができた。

なお、日高真吾とともに出演者の遠藤 諭氏、企画協力者でもある追手門学院大学の橋本裕之氏と3人でおこなった公開座談会については、特に、遠藤氏の言葉に会場全体が聞き入るといった場面がみられ、これまでにない研究公演となった。

さらに、休憩時間及び講演終了後にハワイエでおこなった鉦や太鼓の展示を通じた演者と来館者との交流会は、予想以上の盛り上がりを見せ大きな反響があった。このなかで座談会の内容については、テープ起こしをして『季刊民族学』に掲載することとなった。

「アイヌの文化」展示新構築のための資料収集

本事業では、2015年度の新構築のために必要な資料として、アイヌの工芸家による現代の作品、およびアイヌの権利回復運動や文化継承活動に関する資料等を購入した。

現代の作品は、出身地や世代、作風や活動内容が異なる工芸家12名から新規制作をふくむ20点を収集した。その中には、近年、経済産業省から北海道初の伝統的工芸品に指定された平取町二風谷のイタ(木盆)やアットウシ(樹皮製織物)のように伝統的なものから、カナダ国立美術館で開催された世界の先住民の現代アート展に選ばれた作家による新しい作風の木彫や、樺太アイヌの弦楽器を用いてバンド活動を続けるアーティストが自作したエレキ・トンコリ(五弦琴)まで、アイヌ文化の現代の状況とそれを担う人びとのアイデンティティを示すにふさわしい作品などが収集できた。

また、アイヌ民族復権運動の指導的存在で、戦前から阿寒の観光業に携わった山本多助氏(1904-1993)と子息・文利氏が収集した儀礼具や日用品、観光みやげなど370点あまりを購入し(ほか、部品など約250点は寄贈)、アイヌ民族の近現代の歴史を物語る資料として活用する計画である。

国立民族学博物館創設40周年・特別展「イメージの力」の新規広報展開について

特別展「イメージの力」を盛り上げ、来館者数増加を図るため新規に広報展開した。具体的には、1) 地域住民をターゲットにした、大阪モノレールの車内吊り広告の長期掲出、北摂地域対象のリビング新聞への広告掲出、2) 若年層をターゲットにした、大学の書店や大阪の大型書店での葉配付、芸術や音楽等に関心のある層に向けたトークイベントの開催、ウェブ掲載に強みのあるプレスリリース配信サービスの利用である。特にトークイベントは、全

3回で457名の参加者を集め、アンケートからは、20～30代の若い層を誘引するとともに、このイベントをきっかけとして特別展にも興味をもってもらうことに成功したことがうかがえる。

伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解

研究公演は、2009年に引き続き、韓国の伝統芸能パンソリの舞台公演およびワークショップを通して韓国文化の理解を図ろうとした。舞台公演では、パンソリの古典演目の中から『水宮歌』を取り上げた。パンソリはひとつの物語を完唱するのに数時間を要し、通して演奏されることはなかなかなく、一人語りを基本としながらも、現在ではオペラ形式で演奏されるなど多様化している。今回の公演では、様々な演奏形態を取り入れながら、南海星先生とその弟子たちの歌声による『水宮歌』のストーリー全体を楽しむことのできる公演を開催した。字幕を映写することで、ストーリー全体を鑑賞してもらい、ソリ（唄）だけでなく、物語の魅力も伝えることができた。ワークショップでは、南先生とその弟子たちによる実演を通して、“口伝”を伝承形態の基本とするパンソリが実際どのような形で師匠から弟子に伝えられるのかをご覧いただき、たんなる公演では知りえないパンソリの世界を体験してもらい、参加者に「本物を実際に」体験学習していただいた。

なお、701名の事前申込があり、当日は495名の参加者があるなど盛会裡に終えることが出来た。

南アジア展示及び東南アジア展示のパノラマ映像による記録

資料収集・整理等専門部会の機関プロジェクト「展示記録映像のあり方に関する実践的研究」によって示された指針に基づき、南アジア展示及び東南アジア展示をパノラマツアー形式により記録するとともに、既に作成していた中国地域の文化及び、朝鮮半島の文化の展示記録を、この指針に沿うよう改訂した。この事業により、展示場やWebでの公開を視野に入れ、インターフェイスの統一された展示記録のパノラマの映像を作成することができた。さらに、パノラマ映像を展示に関する各種情報にアクセスするためのプラットフォームとして活用するための基礎を築くことが出来た。

モンゴル秋祭り「モンゴル・ナマリン・バヤル」

モンゴル国はこれまで東京でモンゴル春祭りを実施し、2013年より、在大阪総領事が元モンゴル国文部副大臣であったことから、総領事の肝いりで、大阪でもモンゴル秋祭りを開催することとなり、会場として現代モンゴルの研究中心である本館に白羽の矢が立てられた。関西在住のモンゴル国および中国内モンゴルなどの留学生が集合するとともに、民間活動としてモンゴルとの交流を行っている諸NPO団体も積極的に企画参加し、一般来場者に広くよびかけておこなわれた。

当日は、台風接近のため、予定していた一部の行事および全体の一般公開は、当日午前の時点で中止することとなったが、事前の広報および当日の行事の一部は、つつがなく執り行った。中止にしたのは、エントランスにおける本館所蔵のゲルの象徴展示と、講堂地下におけるNPO諸団体の告知活動の2点である。残りの計画であった、講堂における開会式、現代モンゴルを代表する演劇の公演については、一般公開はせず執り行い、写真と映像で記録した。

以上で得た写真と映像は、適切な形式を検討したうえで、一般に閲覧できるものにするのを展望している。

東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究

本研究では、「被災した有形・無形の文化遺産の保護活動」と「災害の記録・記憶の継承」、「災害時における大学間の連携体制の構築」を研究の柱として展開した。「被災した有形・無形の文化遺産の保護活動」では、実際に被災した文化財が保管されている一時保管場所の環境モニタリングとその結果に基づいた環境整備の提言と実践をおこなうとともに、塩分劣化を起こしている被災文化財の具体的な処理方法についても技術開発をおこなった。次に無形の文化遺産の保護活動では、本館などの施設を利用し、被災地の芸能の公演を企画し、芸能をおこなう場の創出とそれに伴う地域活性の状況について検証をおこない、みんぱく公演「じゃんがら念仏踊り」の実施へとつなげた。「災害の記録・記憶の継承」では、三陸沿岸の津波碑等のデータベースを作成し、今後の備えとしてこれらがどのように役に立つのかについて検証し、次年度以降の本格運用に向けた準備をおこなった。「災害時における大学間の連携体制の構築」では、大学機関を中心に設置が急速に進んでいる資料ネットワークとの連携を目指し、災害時における協力関係の構築を目指した打ち合わせを重ねてきた。以上の結果、人間文化研究機構基幹研究「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」の準備に向けた体制を作ることができた。

南アフリカの過去と現在——ネルソン・マンデラから続く道——

南アフリカ共和国は、サハラ以南アフリカのGNPの3分の2を占める大国であるにもかかわらず、これまでアパルトヘイト（人種隔離政策）があまりにも注目されたために、庶民の暮らしの現実が紹介されることはあまりなかった。また、アパルトヘイトの崩壊後にどのように地域社会が変わったのかについても詳しい研究はみられない。本企画では、モハウ・ペコ南アフリカ共和国大使による基調講演ならびに、ジョゼ・A・プビン・デ・オリベイラ 国連大学研究員及び北川勝彦関西大学教授の講演を中心として、環境経済学、歴史学（経済史）、民族学（環境人類学）の研究者がそれぞれ南アフリカの都市の過去と現在を、一般の来館者を対象にして、わかりやすく論じることができた。その結果、貧困や犯罪の温床などの都市イメージと異なる南アフリカの都市の本当の姿を伝えることができたと思われる。今回の企画は、南アフリカの事例に焦点を当てたものであるが、これらを通じて、21世紀における大都市での「持続可能な生き方」や「持続可能な資源利用のあり方」を考えるためのヒントが与えられることになった。

大元神楽上演

2014年12月21日に、総合研究大学院大学（以下「総研大」）文化科学研究科の事業の一つである学術交流フォーラムの一環として、島根県江津市の市山神友会のメンバーを招聘して、そこに伝わる伝統の大元神楽の上演を本館講堂で行った。観客には学術交流フォーラム参加者（総研大の学生と教職員）だけでなく、一般の来館者も加わり、計287名が入場しており、上演は盛会裡に終わった。その上演には単に注目を集める催し物を実施するというのではなく、研究対象とする文化を持つ人々との関係構築といった研究遂行上必要不可欠な手続きを身につけさせるという教育上の効果と、後継者不足や災害対応など日本の伝統芸能団体が抱える諸問題に対する考察を深めるなどの研究上の効果も期待されていた。学生が主体となってこの事業を盛会裡に実施することによって、それらの点でも十分に成果を上げることができた。

（その他館の運営などに関するもの4件）

民博研究懇談会

第258回 2014年6月18日

丸川雄三 「連想検索技術を用いた身装画像デジタルアーカイブの発信研究」

第259回 2014年7月23日

ピーター J. マシウス 「サトイモの起源をたどる——自然界の文化をもとめて」

第260回 2014年9月24日

伊藤敦規 「所蔵博物館とソースコミュニティにとっての資料熟覧」

第261回 2014年10月29日

吉岡 乾 「何が格を決めるのか——動詞的要素と名詞的要素」

第262回 2014年12月10日

豊山亜希 「植民地インドにおける日本製マジョリカタイルの受容——公衆衛生、消費、アイデンティティ表象」

第263回 2015年1月14日

松尾瑞穂 「インドにおける生殖医療技術の文化論」

第264回 2015年2月25日

ユーセフ・カンジョウ 「シリアの文化遺産と紛争——国の文化遺産保護のため、シリア人にできること」

2-2 外部資金による研究

科学研究費補助金による研究プロジェクト

2014年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	種目	研究課題	研究代表者	研究年度
	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	北方寒冷地域における織布技術と布の機能	佐々木史郎	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016
	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカルリティに関する文化人類学的研究	宇田川妙子	2014 ～2017
新	若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
	若手研究 (B)	現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究	宮本万里	2014 ～2017
	若手研究 (B)	『千一夜物語』 仏語訳者マルドリユス再考——<遺贈コレクション>の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
規	若手研究 (B)	オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究	栗田梨津子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究——奄美諸島の高等学校を中心に	呉屋淳子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	挑戦的萌芽研究	人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求	岩谷洋史	2014 ～2015
	研究活動スタート 支援	中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として	末森 薫	2014 ～2015
	研究活動スタート 支援	ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究	神本秀爾	2014 ～2015
	研究成果公開促進費 (学術図書)	薬剤と健康保険の人類学	浜田明範	2014 ～2014
	研究成果公開促進費 (学術図書)	神霊を生きること、その世界	竹村嘉晃	2014 ～2014
	研究成果公開促進費 (学術図書)	Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia	大場千景	2014 ～2015
	特別研究員奨励費	社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究	松嶋 健	2014 ～2016
	特別研究員奨励費	宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から	奈良雅史	2014 ～2016
	特別研究員奨励費	現代ロシアにおける新興教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して	藤原潤子	2014 ～2017

	基盤研究 (S)	権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築	關 雄二	2011 ～2015
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究 (A) 一般	世界の中のアフリカ史の再構築	竹沢尚一郎	2012 ～2015
	基盤研究 (A) 海外	熱帯高地における環境開発の地域間比較研究 ——「高地文明」の発見に向けて	山本紀夫	2011 ～2015
	基盤研究 (B) 一般	中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究	山中由里子	2010 ～2014
	基盤研究 (B) 海外	宗教と移民のアイデンティティ・共生 ——南アジア系ディアスポラを事例として	辻 輝之	2011 ～2014
	基盤研究 (B) 一般	劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の 開発	園田直子	2012 ～2014
	基盤研究 (B) 一般	映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究	福岡正太	2012 ～2014
	基盤研究 (B) 海外	経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究	杉本良男	2013 ～2015
	基盤研究 (C) 一般	瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究	笹原亮二	2011 ～2014
	基盤研究 (C) 一般	博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人 文・社会学的研究	松岡葉月	2012 ～2014
継	基盤研究 (C) 一般	水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究	平井京之介	2013 ～2015
	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学 ——オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016
	基盤研究 (C) 一般	バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の 住民行動と地域構造の変容	飯田 卓	2013 ～2015
	基盤研究 (C) 一般	スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に 関する文化人類学研究	鈴木七美	2013 ～2015
続	若手研究 (B)	現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践 に関する社会人類学的研究	相島葉月	2012 ～2015
	若手研究 (B)	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形 成の研究	鈴木博之	2013 ～2016
	若手研究 (B)	漢族の特色の空間利用とエスニシティの再編 ——中・越隣接エリアの調査研究	河合洋尚	2013 ～2015
	若手研究 (B)	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016
	若手研究 (B)	高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学 的研究	加賀谷真梨	2013 ～2015
	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成 メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016
	挑戦的萌芽研究	動的共創型デジタルアーカイブズ構築 ——梅棹忠夫資料に基づいて	久保正敏	2013 ～2014
	研究活動スタート 支援	女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリ ティの解明——タイを事例に	松井智子	2012 ～2014
	研究活動スタート 支援	西アフリカにおける生権力の複数性 ——ガーナ南部における結核対策を事例に	浜田明範	2013 ～2014
	研究活動スタート 支援	モノからみる芸能文化のグローバル化 ——バリの仮面と楽器を事例として	吉田ゆか子	2013 ～2014
	研究活動スタート 支援	気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践	近藤 宏	2013 ～2014
	研究成果公開促進費 (データベース)	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016

継	特別研究員奨励費	紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究	市川 彰	2013 ～2015
	特別研究員奨励費	社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究： ポリネシアにおける贈与の全体性	比嘉夏子	2013 ～2015
続	特別研究員奨励費	近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義 ——商業集団マールワリーを事例として	田中铁也	2013 ～2014
	特別研究員奨励費	内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究	鈴木七美 Caijilahu	2012 ～2014

【新規】

新学術領域研究（研究領域提案型）

植民地時代から現代の中南米の先住民文化

代表者 鈴木 紀

目的・内容

本研究の目的は、アメリカ大陸の先スペイン期に栄えたメソアメリカ文明とアンデス文明が、植民地時代から現代まで、中南米諸国の先住民文化に及ぼした影響を検証することである。資源人類学の「文化の資源化」という概念を援用し、いかに両文明が資源化され、先住民文化が形成されてきたかを、植民地時代と現代との通時的な比較、メソアメリカ地域・アンデス地域・周辺地域との共時的な比較、および資源化の主体が先住民文化であるか非先住民文化であるかの比較を通じて明らかにしていく。

こうして古代アメリカ文明を、後世の人々がどのように理解し、文化的アイデンティティの構築、政治的統合の象徴、経済的な富の源泉等として活用してきたかを探究する。またこの作業を通じて、これまでの古代アメリカ文明に関する考古学的な研究では十分に検討されてこなかった文明の終焉という概念について、衰退／継続／復興という多様な可能性を考慮しながら理論化を試みる。

活動報告

10月に国立民族学博物館で研究会を開催し、分担者の研究計画と進捗状況を確認した。各分担者の調査概要は次の通り。鈴木は、メキシコ国立人類学博物館、マヤ世界大博物館、グアテマラ国立考古学民族学博物館、イシュチュエル先住民民族衣裳博物館等にて展示内容を調査し、先スペイン時代の文明と現在の先住民文化の関連性がいかに表象されているかを分析した。

井上幸孝、杓谷茂樹、禪野美穂、小林貴徳はメキシコで調査を行った。井上は、クロニカ（年代記）およびクロニカ研究資料を収集し、その読解・分析に着手した。またメキシコ市の先スペイン期関係の史跡を訪問して、その現状把握に努めた。杓谷は、ユカタン州のチチェン・イツァ遺跡公園で地元露店商の不法侵入問題の現状を観察し、行政担当者へのインタビューを実施した。禪野は、メキシコ市および近郊の「旧先住民村落」に関する文献研究と並行して、メキシコ市南西部で、復元されたピラミッドの管理、利用方法を調査した。小林は、観光開発・経済推進事業に関連した文献調査、および現地での予備調査を実施し、「神秘的集落」の認定を受けた3箇所（プエブラ州 Cholula等）を次年度以降の調査地として選定した。

本谷裕子は、米国東海岸の博物館（ペンシルヴァニア大学と国立アメリカ先住民博物館）にて、19世紀末から20世紀初頭にかけてのグアテマラ・マヤ先住民女性衣裳の変遷を観察・記録し、既存の研究データと比較した。

工藤由美は、チリの先住民民族マプーチェに関する文献資料を基に研究を進めた。国内の図書館収蔵文献と、チリ国立図書館収蔵の文献を中心に整理し、次年度に現地調査を行うためのリスト等を作成した。

藤掛洋子は、パラグアイにて、現地の文化人類学者、言語学者、メディア関係者への聞き取り調査ならびに農村部における調査を実施し、グアラニー文化に対し「憎しみと愛」が混在することが明らかになった。

基盤研究（A）海外

熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究

代表者 池谷和信

目的・内容

21世紀に入り、世界の家畜をめぐる環境が大きく変化をしている。鳥や豚のインフルエンザ、牛や豚の口蹄疫など家畜の介在する感染症が、世界中を自由に行き来できるグローバル化の影響を受けて目立つようになってきた。その一方で、地球の人口は70億人を超えて主として途上国では都市化がますます進む現在、人びとの食糧供給源としての肉や乳などの家畜資源の重要性が増加している。そして、これら家畜生産の増大や流通量の拡大が進行中で

あるのが世界の熱帯地域である。ここでは、家畜の餌となる植物資源が豊かであり、未利用の土地や豊富な労働力が存在する。本研究では、三大陸の湿潤熱帯地域における牧畜に焦点を当てて、そこでの牧畜生産からみた土地利用の実際および家畜の流通を政治生態学的に把握することを目的とする。

活動報告

本年度は、世界の熱帯地域のなかでモンスーンアジア地域に焦点を当てて、牧畜の生産および流通の実態を把握する研究が進展した。具体的な調査地域は、ラオス、タイ、ミャンマー、バングラデシュ、インド、ネパール、日本・南西諸島などであり、研究対象とする家畜は、地域によって異なるが、水牛、牛、豚、羊、ガヤル、馬、蜜蜂などの家畜が挙げられる。

メンバー各自の研究を個別にみても、家畜生産の面では、日帰り放牧の状況、それに関わる飼料基盤の季節変動の動向、刈り跡放牧の実際などが個々の家畜に応じて明らかになった。また、家畜の流通面では、家畜仲買人の活動、家畜の売買をめぐる市場の状況など、国内の家畜の移動のみならず国境を越えた家畜の流通の展開過程が新たに把握された。例えば、バングラデシュ国内の豚の流通をみると、国の北部に位置する豚市場の役割が大きいが、市場とは関係なく豚肉が首都ダッカに運ばれる量も増えてきている。

現時点では、モンスーンアジア内のおおのこの調査地に対応して牧畜の現状や動態が把握されてきたが、各地域の事例を比較することを通して牧畜の一般的性質を把握する試みはあまり進行していない。今回の研究事例が、各地域の地域性を把握するための基礎資料になると同時に、多くの地域共通性を見いだすことができるものと推察している。

基盤研究 (B) 一般

ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合

代表者 丸川雄三

目的・内容

本研究は、文化財における制作者情報を対象に、これまでばらばらであった専門機関内の情報源をひとつにまとめて発信する「制作者情報統合データベース」の実現を目的とするものである。情報源として国立西洋美術館と東京国立近代美術館よりデータベースと目録・展示・図録資料を、東京文化財研究所より作家年鑑・論文・文書などの美術研究資料を集める。これらの資料をデジタル化技術とデータベースの連携技術、さらには国立情報学研究所が開発する横断的連想検索技術により集約・共有するとともに、専門的な知見をふまえた情報の分析と統合を実施する。研究成果は統合データベースとして発信し、全体的な有効性の確認として、我が国における代表的な文化財情報発信ウェブサイトである「文化遺産オンライン」との連携実証を行う。

活動報告

2014年度の研究成果は以下の通りである。

- 1) 制作者情報について、国立西洋美術館の収藏品データベースから446件、東京国立近代美術館の収藏品データベースから2,200件の作家情報を抽出した。また、東京文化財研究所の美術研究資料として、講談社『近代日本美術事典』に収録されている1,252件の作家解説情報を収集するとともに、同研究所が戦前から行っている制作者へのアンケート調査原簿（作家調書）1,200件のデジタル化およびメタデータ付与を行い、一次情報資源としての活用方法を検討した。
- 2) 情報基盤について、各機関で抽出、作成した作家情報を元にデータベース項目の検討を行い、データベースのプロトタイプを構築した。さらに制作者情報を試験的に登録し、情報検索や分析が可能な統合データベースとしての有効性を確認した。また、美術文献検索「アート・ディスカバリー」や、欧州のアーカイブズポータル「ヨーロッパアナ」の動向を調査し、文化遺産オンラインおよび海外の美術情報サービスとの連携に必要な要件について検討を行った。

基盤研究 (B) 海外

台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究

代表者 野林厚志

目的・内容

本研究の目的は、台湾のオーストロネシア系先住諸民族（「原住民族」）の制度的民族分類下で形成されてきたエスニシティの動態を個人ならびに集団のレベルで観察、分析し、民族への帰属意識と集団のエスニシティとの関係に関する人類学的モデルを構想することである。具体的には、1) 社会関係（親族関係、コミュニティ関係）、2) 言語（ヴァナキュラー、公用語、交渉語）、3) 物質文化、4) 文化実践（儀礼、年中行事、社交活動）、5) 生業（生計、

経済活動)を分析の対象とし、個人の意識と帰属集団のエスニシティとの間に存在する共通性とずれを現地調査ならびに歴史資料の渉猟を通して明らかにする。その上で、公的な民族認定が個人やコミュニティをこえながらエスニシティを規定する作用と、個人やコミュニティが主体となりエスニシティを公的に実体化させていく反作用が交錯する中で民族集団が社会の中で位置づけられていく過程を明らかにする。

活動報告

当該年度は当初の研究計画にしたがい、1)研究課題全体の枠組を確立するための予備調査を代表者ならびに分担者が実施、2)研究課題の内容に精通している現地の研究機関の担当者、現地台湾の研究者、日本および台湾以外の研究者と研究情報の交換を行った。

1)については野林(代表者)が民族集団内のサブエスニシティの形成と物質文化との関係についてパイワン族ならびにタイアル族社会を事例とする調査を、宮岡真央子(分担者)が民族集団の分裂とエスニシティの再構成における政治資源と文化資源の位置づけについてツォウ族社会を事例とする調査を、松岡 格(分担者)が個人とエスニシティとの関係を探究するうえで基礎となる家系や家に対する認識の基礎データをパイワン族を対象に、森口恒一が言語現象の変化とエスニシティの動態との相関について、タオ族と隣接する外部集団、ならびにブヌン族を事例とする調査を、笠原政治は社会関係の変化とエスニシティとの関係の基礎資料の状況調査を国内の大学、研究機関等に所蔵されている資料を対象に実施した。

2)については、野林、宮岡、森口、笠原が国立政治大学で開催された国際研究集会に参加し、成果の発表を行うと同時に、現地ならびに海外からの研究者の研究報告について議論を行い最新の研究成果と研究動向の把握を行った。また、行政院原住民族委員会担当者、国立政治大学、国立台湾史前文化博物館の研究者とも懇談し研究計画全体についての説明と現地調査における留意事項等の把握を行った。また、野林、松岡は中央研究院民族学研究所で開催された国際研究集会に参加し、成果の発表を行うと同時に、現地ならびに海外からの研究者の研究報告について議論を行い最新の研究成果と研究動向の把握を行った。同時に同研究院民族学研究所ならびに歴史語言研究所の研究者と研究情報の交換を行った。

基盤研究(B) 海外

北方寒冷地域における織布技術と布の機能

代表者 佐々木史郎

目的・内容

当研究の目的は、北方寒冷地域における繊維素材、そこから作られる織物(布)、素材と織物を製作するための道具(製糸用具と織機)と技術を、比較民族学と生態人類学を組み合わせた観点から分析することにある。研究対象とする北方寒冷地域としては、北海道、サハリン、極東ロシア、シベリアを想定している。これらの地域は冬に零下数十度の低温となるため、防寒性能が高い毛皮やなめし皮などの動物素材の衣服が一般的だが、比較的南の地域では繊維素材の布の服も使われ、独自の布も作られる。その典型がアイヌのアットゥシである。本研究では布素材の使用と製作の北限を明らかにするとともに、寒冷地における独自の繊維と布の衣服の性質と性能を動物の皮革や魚皮との比較から明らかにして、人間文化の寒冷地への適応過程の一端を明らかにしたい。

活動報告

- ・2014年4月10日 第1回の全体会議を開催し、連携研究者全員に本プロジェクトの目的と意義と本年度の計画を説明した。
- ・6月23日～30日 研究代表者(佐々木)、連携研究者(吉本 忍)がロシア、サンクトペテルブルクにあるロシア民族学博物館と人類学民族学博物館において、ブリヤート、ハンティ、タタール、アイヌの織機と自然繊維の織物、木綿製の衣服の調査を行った。
- ・7月13日～17日 研究代表者(佐々木)、連携研究者(吉本、日高真吾)が札幌、静内、千歳の博物館でアイヌの古い衣服と出土した擦文文化期の繊維断片に関する調査を行った。
- ・7月29日～8月1日 連携研究者(吉本、日高、齋藤玲子)が旭川、釧路、札幌の博物館でアイヌの古い衣装の調査を行った。
- ・8月3日～17日 研究代表者(佐々木)がロシア連邦ブリヤート共和国において、ブリヤートと古儀式派の織機と織物の調査を行った。
- ・9月17日～23日 連携研究者(齋藤)が阿寒でアットゥシと織機、テトラペの調査を行った。
- ・10月14日 第2回目の全体会議を開催し、2014年度前半の活動を報告した。
- ・11月15日～18日 研究代表者(佐々木)、連携研究者(吉本、日高)が函館、札幌、釧路の博物館においてアイヌの古い衣装とオホーツク文化期の繊維断片に関する調査を行った。

- ・2015年1月19日～21日 連携研究者（吉本）が札幌、白老でアイヌの古い衣装に関する調査を行った。
- ・2月23日第3回全体会議を行い、今年度の調査報告を行った。

以上の調査と研究会の実施により、まず、アイヌの衣装について、ロシアの博物館が所蔵するものと釧路の博物館が所蔵するものが同じ北海道虻田町近辺で作られたものであることが判明した。擦文文化期の道東の布の断片の調査から、擦文文化期末には現在よりも高度な織布技術があったこと、オホーツク文化期の千島列島出土の布の断片から、アイヌ以外の北方民族でも織布技術を持っていたことが判明した。

基盤研究 (B) 特設分野研究

多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究

代表者 鈴木七美

目的・内容

急速な高齢化を遂げつつある現代社会において、高齢者ケアの財源を始めとして多くの問題が提示されてきた。特に高齢期特有の緊急の課題は、1) 高齢化の過程は全ての人々に関わるが、健康・生活における支援の必要性は多様であること、2) 様々なニーズに対応するには、「施設か在宅か」という体制では十分ではなく、様々な選択肢の中から高齢者が生活の拠点を選び、必要に応じて容易に変更可能なこと、3) 高齢期に至って移動や変動という「異文化体験」に晒される高齢者の活動を支えて力を引き出すことや、多様な分野の人々のネットワーク形成と連携を構築すること、である。

幾度となく環境の変化を経験し、多様なニーズをもつ高齢者が安心して充実して暮らすことができる場という観点から、多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」創出に向けた構想と実践の国際比較を、領域横断型国際共同研究により推進する。

活動報告

1) 「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」に関わる現地調査、資料整理

2013年度までに実施してきた、高齢者ケア拠点等での予備調査と現場実践者との共同研究体制の整備をもとにして、高齢者とケア者との生活の課題に関し、情報収集や資料整理を進めた。また、米国において、国際共同研究者3名とと研究の進展について検討し、米国の地方都市を拠点として進められてきたエイジ・フレンドリー・コミュニティ活動について、現地共同調査を行った。

2) 研究課題の共有と発信——研究集会の開催

「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」研究の現況と本研究の意義を議論する目的で、国際人類学民族科学連合会議 (IUAES2014) にて、国際パネル「『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の比較研究」(エイジング・高齢者委員会/国立民族学博物館指定パネル 於幕張メッセ) を開催、発表した。また、パネルに参加し発表した研究者、コメンテータとともに、さらなる研究協力関係の充実と研究計画に向けて議論を深めた。

3) 研究課題の共有と発信——国際学会

近年「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」に関する研究・実践が蓄積されてきた米国において、アメリカ老年学会、アメリカ人類学会で情報収集した。さらにアメリカエイジング学会でシンポジストとして、日本のエイジ・フレンドリー・コミュニティに関する研究成果を発信し議論を深めた。

4) 研究課題の共有と発信——論文集等の企画

本年度の成果を含めた内容を、学会誌および書籍にて発表した。また、2) 3) の成果を共有するために、英文論文発表の企画に着手した。

5) 研究課題の共有と発信——ホームページ・リポジトリ等の活用

国立民族学博物館を拠点として、本研究の経過を広く発信する準備を進めた。

基盤研究 (C) 一般

インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

代表者 金谷美和

目的・内容

本研究の目的は、インド、グジャラート州カッチ地方において、2001年の地震で甚大な被害を受けた更紗の生産者たちが、危機的状況にあった生業を復興・維持するために新村を建設途上であるという事例を対象にして、「手工芸」をコミュニティ資源として、ローカル文化の再編を行っている過程を明らかにすることである。新村建設を契機として、在来の染色技術やデザインが再編され、カッチ地方全域に散らばっていた染色業の拠点が「産地」として統合されていく経緯を示すとともに、在来技術による染色品生産が「手工芸」という概念と領域に包含されてい

くこと、「手工芸」がグローバルに通用する記号となって、国内外の災害支援を引き寄せ、支援のネットワークをつくりあげることによって新村建設の推進力となったことを示す。

活動報告

本研究の目的は、2001年に発生したインド西部地震で甚大な被害をうけ、生業を復興するために新村を建設途上の更紗（染色品の一種）の生産者たちが、「手工芸」をコミュニティ資源として、ローカル文化の再編を行っている過程を明らかにするというものである。2014年度は、9月に13日間、2月に23日間、インドにおいて現地調査を行った。そして、次のことを明らかにした。

- 1) 移住状況について生産者組合代表者にインタビューした。また、新村においてすでに移住している100世帯全戸の世帯調査を行った。それにより、新村への移住状況と、染色業の復興程度を明らかにするための基礎的データを取得することができた。
- 2) 被災した旧村において、生産者にインタビューを行った。また、プジ市役所において、産業用の井戸水利用に関して担当者から情報収集した。それにより、染色業復興の障害となっている地下水位の低下の進行程度について明らかにすることができた。
- 3) 新村において、地下水位の低下を克服するための染色排水の浄化システムの設置が計画されている。組合と支援NGOの双方から聞き取りを行うことによって、浄化システムについて情報を収集した。
- 4) 現地社会において「手工芸」生産者の支援をおこなっているNGOのシンポジウムに出席し、支援状況について担当者から情報収集を行った。また、「手工芸」生産者の支援をおこなっている別のNGOの代表者にインタビューをおこなった。それにより、1970年代から現在に至る、現地社会の「手工芸」支援について明らかにするためのデータを収集することができた。以上の現地調査で得た研究成果を、9月に民族芸術学会の研究大会、10月に岡山大学で開催された研究会において発表をし、それぞれ参加者との活発な議論をすることができた。

基盤研究 (C) 一般

現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究

代表者 上羽陽子

目的・内容

本研究は、現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明することを目的とする。インドにおいては、経済自由化が進められた1991年以降、手工芸文化の形態が多面的で複雑な様相をおびるに至っている。本研究では、理論的には染織技術の戦略的継承法、宗教儀礼における布の役割、事例としては、女神儀礼用染色布の生産現場、宗教儀礼での使用状況、インド国内外の観光客との相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、手工芸文化に関する民族芸術学的考察を行う。最終的には、グローバル化された現在の手工芸文化の特質を明らかにし、さらには手工芸文化論や染織研究に対する理論的貢献を試みたい。

活動報告

本研究は現在の手工芸文化において、伝統的技術がどのように継承され、現代的要素がいかに組み込まれているか、現代インドをフィールドとして解明することを目的とする。

本年度は、次年度の本格的な現地調査にむけて、インド西部およびデリーにて現地調査をおこなった。インド西部の女神儀礼用染色布の生産現場と使用現場において、実際に制作に従事しながら、予備調査をおこなった。同時に資料収集に関しては、アーメダバード県を中心に、研究対象に関する古文書渉猟も遂行した。さらに、デリーを中心とした大都市の手工芸関連マーケットにおいて、染織品の流通や消費者動向についても聞き取り調査を実施した。

本研究の成果としてインドの染織技術に関するフィールドワークに焦点をあてた単著（『インド染織の現場——つくり手たちに学ぶ』（フィールドワーク選書12）臨川書店）を発表した。また、これまでの研究・収集の成果を国立民族学博物館本館南アジア展示場で公開した。

基盤研究 (C) 一般

現代イタリア社会におけるローカルリティに関する文化人類学的研究

代表者 宇田川妙子

目的・内容

グローバル化が進む現在、ローカルなものに再び注目が集まっているが、ローカル・コミュニティについては、その研究の衰退以降、本格的な再考論には至っていない。しかしローカル・コミュニティの復興の動きは世界的に

盛んであり、その意義は消滅したわけではない。この問題を適切に考察するためには、ローカル・コミュニティを（単なる所与ではなく）人々のローカリティという感覚の実体化と捉え、むしろ着目すべきはこのローカリティであると見なし、今やグローバル社会、国家等と密接につながっている生活の中で、それがどう位置づけられ生産されているかを考える「ローカリティ研究」へと転換する必要がある。

本研究は、そうした新たな研究領域の構築を目指すため、そのモデルケースとしてイタリア社会に着目し、イタリアのある町の事例を詳細に調査研究しながら、理論的にもローカリティにかんする研究を進めていく。

活動報告

2014年度は、本研究の1年目として、理論的な研究においても、現地調査においても、それぞれ概要を把握することに努めた。

1) 理論的研究

ローカル・コミュニティおよびローカリティに関して、人類学をはじめとする人文社会諸科学における基本的な文献を収集・分析し、その変遷や現状の問題点をできるだけ把握することに努めた。中でも、昨今の空間論をリードする地理学の業績に焦点を当てた。また、イタリアの事例にかんしては、これまでの民族誌を渉猟し、そこでのローカル・コミュニティおよびローカリティの描き方を、国家、近代化、グローバル化などのかかわりから分類・整理する作業を行った。この作業は、今後イタリアのローカリティを考える際の基本的な資料になるとともに、人類学がこれまでローカリティの問題をどう描いてきたかを探る上でも貴重な資料を得ることができた。

2) イタリアのローカリティにかんする現地調査

イタリアのローカル・コミュニティにおけるローカリティの意味を具体的に探るため、10月に約4週間、イタリアで現地調査を行った。その目的の一つは、これまで調査を続けてきたローマ近郊のR町での調査であり、ここでは、彼らのローカリティ意識の変遷を探るため、まずは約30年前の最初の調査からの変化を総合的に調査・把握した。R町の近隣の町々における資料の収集も開始した。また、この事例を相対し、さらには、イタリアにおけるローカリティ研究にかんする知見を深めるため、ローマ大学の人類学者と意見交換をした。その過程で、彼らとの間で今後の協力関係を視野に入れた関係が構築されたので、2015年度には具体的な計画の策定に入るつもりである。

若手研究 (A)

日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究

代表者 伊藤敦規

目的・内容

本研究は、フォーラム化する民族学博物館と文化人類学の趨勢を加速化させる最先端の学術調査を実施することで、新たな理論的展望を拓くことを目的とする。具体的には、日本国内の複数の民族学博物館が所蔵する米国先住民ホビ製木彫人形資料を対象として、研究代表者、所蔵機関担当者、資料を制作し使用してきた人々（ソースコミュニティ、以下SC）の3者で熟覧を行う。既存の資料情報や資料分類を現代のSCにおける文化的文脈に則した見解と照合することで、2つの異なるコンテキストにおける知（資料情報・伝統的知識）の継承の実態を検討する。加筆・修正した情報と熟覧の様子はデジタル化してまとめて両者へ還元し、さらなる知の継承の展開を図る。

活動報告

国立民族学博物館が所蔵する米国南西部先住民ホビが制作した木彫人形資料約300体のphotoVR制作を行った。PhotoVR制作では、まず立体資料を0度、30度、60度、90度角においてそれぞれ全周を水平に36分割し静止画を撮影する。それに底面写真を加え、145枚一組のファイルとして加工することで、資料をPC等のモニター上でハンドリングするように操作することを可能とする（バーチャルリアリティ化）。本研究では1) ソースコミュニティ(SC)からの招聘を基にした日本国内の博物館での熟覧と、2) 日本に招聘できなかった人々を対象にした現地での疑似熟覧が必須となる。この2)を円滑に行うためにphotoVRのための撮影と加工を初年度に行った。

10月には計画通りにSCから招聘し、資料熟覧に関する国際ワークショップ(Collection Review: Methodology and Effective Utilization for the Museum and the Source Community)を国立民族学博物館で開催した。別の財源によって招聘した博物館関係の研究者(日本、米国、スコットランド)とともに資料熟覧に関する方法論を議論した後、実際にホビの人々による資料の熟覧を行った。その過程全ては映像記録化した。招聘期間は土日祝日を含む2週間であり、この間に約140点の熟覧が終了した。SCの帰国後は熟覧時の文字起こしと言語のチェック、日本語への翻訳作業を進めた。一部は日本語字幕付きの公開用動画資料としてほぼ完成した。

また、2015年度に実施予定のリトルワールド(愛知県犬山市)へのSCの派遣について2015年1月にリトルワー

ルドにて学芸員と打ち合わせを行った。

若手研究 (B)

現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

代表者 宮本万里

目的・内容

選挙人リストから全ての宗教者を排除し、仏教僧を政治領域から退出させたブータンの新制度の下で、仏教界は年法要での肉食忌避の提案や大規模な放生や灌頂儀礼の開催等をとおして社会文化領域での存在感を増している。そのなかで、ときに犠牲獣の供犠を伴う「野蛮」で「無慈悲」な土着の呪術や自然神崇拝は徐々に周縁化され、肉食や屠殺に対する忌避感も拡大しつつある。では、世界宗教としての仏教が地域の固有性を平準化する力をもつ中、人々はいかにして自らの慣習や価値体系を再構築しているのだろうか。本研究では民主化期ブータンにおける仏教界の位置づけを精査するとともに、特に屠畜の習慣と屠畜人をめぐる価値の競合過程を、畜産局、県議会、牧畜民や仏教僧などの多様なアクターによる相互交渉のプロセスをとおして描出し、新たな価値体系と社会階層が構築される契機を捉えていく。

活動報告

本研究プロジェクトの1年目である今年度は、当該研究課題に関連する英国およびブータンでの資料文献調査、そしてブータン現地社会での聞き取り調査を中心に研究をすすめ、また研究課題に関するフィードバックを得るため国際学会における研究成果発表を積極的に行った。

資料調査では、2007年以降の民主化プロジェクトがブータン社会においてもつ意味を、政治領域における宗教組織の位置づけの変遷から明らかにしようとして試みた。対象とした資料は憲法と選挙法、そして選挙委員会の通知およびレポート、そして現地の新聞等の言論界の出版物である。まずは、宗教者 (Religious Personality) に参政権 (選挙・被選挙権) を与えないとした憲法と選挙法の規定が、ブータン社会における「宗教」および「宗教者」の定義の問題となった過程を描き出した。そして、その過程でゴムチェンと呼ばれる在家僧らが村落社会において政治領域と宗教領域をつなぐ媒介者の役割を果たしてきたことに注目した。これら媒介的あるいは中間的な人材を許容しないというブータンの新たな状況は、政治の世俗化という概念に対する批判的な考察の糸口となった。これらの考察の成果は、宗教と政治的なものに注目する形でまとめ、雑誌『現代インド研究』に投稿し、掲載された。

また、村落社会における仏教の影響力の拡大に関して、屠畜従事者の社会的な立場の変遷から明らかにすべく、タシガン県のメラ・サクテン郡およびプムタン県において聞き取り調査を行った。これらの調査の成果は英国南アジア学会およびヨーロッパ南アジア学会において発表している。さらに、仏教による宗教空間の一元化が進む状況について、ボン教その他の信仰を基盤とする呪術や儀礼に関する知識の継承過程の変化を、そのツール (植物等) の収集プロセスから考察しようとして試みた。これらの研究の成果は国際民族生物学会で発表し、好意的な評価を得た。

若手研究 (B)

『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——<遺贈コレクション>の分析を中心に

代表者 岡本尚子

目的・内容

J.-C. マルドリユス (Joseph-Charles Victor Mardrus, 1868-1949) による『千一夜物語』仏語訳は、マラルメら当時の重要な文化人たちとの関わりや、「オリエンタリズム」流行の一翼を担っていたことなど、多くの文学的・文化的重要な事項を含んでいる。しかしマルドリユス版『千一夜物語』は、翻訳元が不明であることなどから評価が低く、彼の全体像や、『千一夜物語』以外の著作物に関する研究は、ほとんど行われていない。よって本研究においては、国立民族学博物館が独占的契約を得て所有している、<マルドリユス遺贈コレクション>の使用を中心にして、1) マルドリユスの著作物、及び多岐に渡る活動についての総合データを構築し、2) マルドリユスを通じて、近代フランス文学・フランス文化を再検討することを、目的としている。

活動報告

- 1) マルドリユスの全著作についての概要を調査した。これまでに、国立民族学博物館においてデジタル化した「マルドリユス遺贈コレクション」中の、手書き及びタイプ打ち原稿に関して、その情報や内容を詳細に調査したうえで、情報を整理した。更に、それ以外の作品や、記事などマルドリユスの手によるものについても、遺族が所有している旧マルドリユス邸や、フランス国立図書館などで調査を行った。
- 2) フランスにおける調査において、マルドリユスの姪にあたり、マルドリユスの遺品の所有者である Marion Chesnais 氏と面会し、情報収集を行った。その結果、マルドリユスと、ジッドなど著名な文人たちの書簡の存在が明らか

になり、Chesnais氏よりその調査の許可を得ることができた。これは当初の計画にはなかった事項であるが、未発表の資料であり、この調査によってマルドリユスに関する情報の他、この時代の重要なフランス人作家についての情報を新たに得ることができるため、今後の重要なテーマの1つとして加える予定である。またフランス調査においては、現在入手が困難になっているマルドリユスの歌詞による歌曲の楽譜を入手することができた。この中には、これまで遺族のChesnais氏がその存在を認識していなかったものも含まれており、今後予定している「多分野におけるマルドリユスの活動の分析」に大いに役立つと思われる。

- 3) マルドリユスが活躍した19世紀末から20世紀初めの、フランス文化の分析と検証の一環として、演奏会「フランスの風 vol.4 詩人ポール・ヴェルレーヌ」の監修と、解説及び詩の翻訳をまとめたプログラムノートを発行した。この時代の文化人たちの関わり合いや周辺状況に関する情報は、マルドリユスの周辺の状況を解明する際に、重要な参考事例となった。

若手研究 (B)

オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究

代表者 栗田梨津子

目的・内容

本研究は、1990年代以降、多文化主義の後退が叫ばれるオーストラリアで社会の最底辺におかれた先住民とスーダン難民の緊張関係について、第1に、多文化主義言説における両集団の位置付け、および主流社会における両集団の受け止められ方、第2に、両集団の政治的・社会経済的状況、第3に、集団間の日常的な相互作用の中で緊張関係が生じる具体的状況、および両集団の「ブラック」としての自己認識と白人に対する態度を明らかにする。その上で、集団間の緊張関係の諸要因を多文化主義に内在する白人性との関連において考察し、反多文化主義の時代におけるマイノリティ集団の支配の構図に関する新たな理論を構築することを最終的な目的とする。

活動報告

今年度は、1990年代以降のオーストラリア多文化主義政策における先住民とスーダン難民の位置付け、および主流社会における両集団の受け止められ方を明らかにすることを目的に、日本とオーストラリアで主に文献研究を行った。まず、オーストラリアのスーダン難民に関する文献を収集し、その歴史的背景、社会経済的状況、教育や差別などの問題に関する情報の整理を行った。同時に、オーストラリアの難民政策や難民に対する社会福祉サービスの実態を調査し、既に研究の蓄積がある先住民の状況と比較した。

また、主流社会が両集団に対して抱くイメージに関しては、南オーストラリア州立図書館にて情報収集を行った。スーダン難民の受け入れが本格化した2000年以降の全国紙および地方紙における両集団に関する記事や読者投稿欄を参照する中で、スーダン難民と先住民の若者が頻繁に組織化した犯罪集団と結び付けられ、社会の逸脱者として描写される傾向があることがわかった。さらに、アデレード郊外での予備的な現地調査では、難民支援組織や先住民組織の職員、および両集団との関わりのある白人住民に対して聞き取り調査を実施し、人々の両集団との経験とマスメディアによる両集団の描写の隔たりが明らかになった。

今年度の研究の意義は、1) 研究の蓄積が少ないオーストラリアのスーダン難民が置かれた社会経済的状況を確認したこと、2) 両集団の社会経済的状況を比較することで多文化主義政策における両集団間の位置付けを明確にしたこと、3) 両集団に対する主流社会の眼差しの比較・分析を通して、多文化主義をめぐる政策や言説と一般市民による多文化主義の受け止め方の違いを浮き彫りにしたこと、である。

若手研究 (B)

境界領域における民俗芸能の教授・創生に関する研究：奄美諸島の高等学校を中心に

代表者 呉屋淳子

目的・内容

本研究の目的は、「鹿児島／沖縄」の境界に位置する奄美諸島の高等学校における民俗芸能の教授と創生に着目し、境界領域であるが故に生じる民俗芸能の新しい継承過程の様相を明らかにすることである。

奄美諸島の各地域は、鹿児島県や沖縄県の影響を認めつつも、どちらか一方に帰属することはないという重層的でマージナルな文化的特徴を有している。そのうち芸能に関しては、徳之島以北が大和系、沖永良部以南が琉球系の芸能の影響を受けて展開してきた。本研究は、奄美諸島内部の文化的特徴に焦点を当て、民俗芸能の教授と創成の様相を学校教育から示し、学校教育の果たす役割と機能の検討から、民俗芸能の持続的な継承の可能性を検討する。

活動報告

2014年度は、奄美諸島の学校教育における民俗芸能の教授が、現代奄美諸島の人々の日常における文化的実践のなかでどう位置づけられているかについて、奄美諸島内の高校を卒業した生徒たち（奄美大島、与論島、徳之島、喜界島）を対象に聞き取り調査を行った。

また奄美－沖縄の比較研究の対象として、沖縄県内の大学で琉球芸能を学んだ経験のある沖縄系日系ペルー人を対象に、参与観察および聞き取り調査を行った。

若手研究 (B)

植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究

代表者 豊山亜希

目的・内容

本研究は、英領インド期に植民地経済への参与で大きな成功を収めた2つの商業カースト、すなわち北インドのマルワーリーと南インドのチェットティヤールが、獲得した富を財源として故郷の集落に造営した邸宅建築群の変容を比較考察するものである。彼らは植民者と被植民者のエージェントとして、経済面のみならず文化的局面においても西洋と東洋の相互交渉的関係を促進し、その交渉は結果的に植民地インドの民族意識を醸成した。

本研究の目的は、①インド在地商人の自己表象＝邸宅建築の構造および装飾形式の変遷を、南北インドそれぞれの伝統や地政学的状況を踏まえて読み解くこと、②インドにおけるカースト・民族・国家という多元的なアイデンティティが、エリートの言論によってのみならず、彼ら新興中産階級により、大衆的訴求力の高い視覚表象を通して一般社会へ還元されていた可能性を、美術史的観点から考察することである。

活動報告

今年度は研究課題実施初年度にあたり、当初計画どおり北インド・ラージャスターン州シェーカーワーティー地域におけるフィールドワークに加えて、イギリスにおける関連資料の調査を実施した。

2014年8月20日～9月4日にかけて実施した資料調査は、スコットランド国立図書館（エジンバラ）と大英図書館（ロンドン）において、本研究課題の調査対象である植民地インドの商家建築に関する同時代の言説を把握するため、都市計画や公衆衛生に関する報告書などの一次資料を網羅的に閲覧調査した。

この資料調査によって得られた知見をもとに、フィールドワークの実施地域として当初計画のシェーカーワーティー地域に加えて、当該地域の商家建築の施主が経済活動を展開し、同様の建造物を建てていた旧英領インド首都のカルカッタも含めることとし、2015年2月12日～3月4日にかけて現地調査を行った。具体的な調査内容は、シェーカーワーティー地域の複数の集落において、植民地期の商家建築（ハヴェーリー）について集落内分布図を作成すること、構造的・様式的特徴に基づく造営年代の比定を行うこと、写真と概略平面図およびスケッチによる基礎資料を作成することであり、順調に調査計画を遂行することができた。またカルカッタにおいても、シェーカーワーティー地域出身商人（マルワーリー）が造営した商家建築や寺院について、同様の方法論を用いて基礎資料を作成した。

さらに調査成果をエジンバラ大学南アジアセミナー（2014年10月）、日印共同シンポジウム（2014年12月）といった国際学術会議のほか、国内の複数の研究会においても発表した。

挑戦的萌芽研究

人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求

代表者 岩谷洋史

目的・内容

本研究は、デジタル化時代における人類学的なフィールドワークによって収集される調査データである写真（デジタル写真）の活用方法を考察し、写真を主体にしたフォト・エスノグラフィーという新しいエスノグラフィーの手法を探求することを目的としている。

この目的を達成するため、1) デジタル写真というメディアの特性を活かしたコンピュータ上での静止画像管理システムの設計、2) 人類学教育を射程に入れた、大学・大学院における実習授業でフォト・エスノグラフィーを作成する実験的な試みという2つの応用的かつ実践的なアプローチをとりつつ、エスノグラフィーにおける写真の活用に関わる理論的な探求を行い、その可能性について検証する。その上で最終的にフォト・エスノグラフィーの方法論に資する基礎的なヴィジョンを提出する。

活動報告

1) 国内外の関連研究資料の収集と研究者間でのネットワークの拡大

国内外の関連資料収集と同時に、国内の文化人類学者だけでなく、隣接分野（社会学）や関係する分野（情報学）の研究者との連携を作り、各分野の研究者が研究協力者として本研究を支援する基盤を作った。

2) 調査実習授業での展開

研究協力者の協力を得て、学部生・大学院生向けの調査実習で、フォト・エスノグラフィーの手法を採用した実践を展開した。研究代表者は、その実践をモニタリングすることで、モデル化のための知見を得た。

3) 研究会・ミーティングの開催

研究協力者全員を集めた全体研究会は、1回（2014年7月14日）のみの開催に留まったが、研究代表者は、各研究協力者と個別のミーティングで対応しながら、意見交換をしつつ、本研究の進捗情報の共有をはかり、フォト・エスノグラフィーの理論的な探求を行った。

4) 静止画像管理システムの設計

フォト・エスノグラフィーをコンピュータシステム上で実現できる仕組みを設計する活動については、情報学を専門とする研究協力者の協力を得ることができ、本格的なシステム設計に関しては、2014年度の調査実習での研究成果をもとにして進める計画を立てた。

5) 研究成果の公表

本研究成果公表のためにWEBサイト（<http://www.photoethnography.sakura.ne.jp/>）を作成し、このWEBサイトに連携する形で、2)での個別の調査実習用WEBサイトを作成し、調査実習の成果を掲載した。また、研究協力者の1人が担当する授業に関しては、2014年度調査報告書を刊行する準備を行った。さらに、研究代表者は、2015年度の日本文化人類学会第49回研究大会、関西社会学会第66回大会にて、2)での成果をもとに単独で口頭発表する予定で準備を進めた。

研究活動スタート支援

中国石窟芸術技法・材料の解明による美術史観再考——麦積山石窟を事例として

代表者 末森 薫

目的・内容

中国仏教美術史は、長年に亘る研究により体系化された学術領域として存在する一方で、近年では中国仏教美術に対する文化財科学の手法を用いた調査・研究も進められている。しかしながら、両分野の研究目的や手法は必ずしも一致しておらず、学術の発展のために同一の土俵での議論が必要とされる。本研究は、中国の河西回廊沿いにある麦積山石窟および敦煌莫高窟に現存する塑像・壁画を対象として、両分野に跨る複合領域的なアプローチにより、これまで扱われてこなかった視点からの議論を展開し、新たな知見を提出することを目的とする。本研究を通じて、文化財科学においては、現場で応用可能な汎用性のある光学調査法が確立され、古代において使用された技法・材料や劣化要因に関する新しい知見が提示されることが想定される。一方中国仏教美術史においては、新しい視点による編年や石窟芸術制作に携わった工人の特徴や系統、地域性が明らかにされることが見込まれる。

活動報告

2014年度の活動では、下記の成果を得ることができた。

- 1) 本研究で用いる調査法のひとつである光学調査法について、紫外光・可視光狭帯域光源および各種の光学フィルターを用いた検証実験を行い、各条件による分光特性などの基礎データを取得した。そして、国立民族学博物館所蔵の資料および麦積山石窟の壁画片を対象として本手法を応用した調査を行った。その結果、狭帯域光源を用いた観察方法の有効性が確認できたと共に、可視光域における蛍光の可視化を行うことができた。
- 2) 麦積山石窟壁画片を対象とし、デジタル顕微鏡を用いた微細部観察、蛍光X線、X線回折による非破壊材質分析を実施した。その結果、光学調査の結果と比較するための基礎データが取得されたと共に、壁画の技法・材料に関する新たな知見が得られた。
- 3) 麦積山石窟での実地調査にて現場に現存する壁画や塑像について現状調査を行い、その技法や材料について整理を行った。また現地研究者と今後の研究の展開について協議を行い、2015年度に実施する調査の候補を選定した。
- 4) 敦煌莫高窟の実地調査にて、北朝期窟（5、6世紀）を対象に目視による調査を実施し、主に千仏図像の配色による規則性を明らかにし、窟内空間における同図像の機能について考察を進めた。
- 5) 1)～4)で得られた成果について、2015年度の各学会（文化財保存修復学会、日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会等）での発表の準備を進めた。

研究活動スタート支援

ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究

代表者 神本秀爾

目的・内容

本研究課題は、資料・史料分析による実証研究と理論研究を組み合わせでおこなわれる。本研究課題では、黒人として生きられる身体に着目する立場から、健康被害をもたらすとして警鐘が鳴らされているにも関わらず、ジャマイカで多くの人が実践しているスキン・ブリーチング（スキン・ホワイトニング、トーンングとも呼ばれる肌の脱色・漂白）を考察対象とする。

本研究課題では、スキン・ブリーチングを、ローカル・ナショナル・グローバルな諸力との関係のなかで構築されてきた複数の身体イメージと、みずからの身体のあいだでおこなわれる加工を通じた交渉の実践と位置づけ、その実践を通じて共同性の源となる黒人性が刷新されていく動態を描き出すことを目的とする。

活動報告

本研究課題は、黒人として生きられる身体に注目するものであり、全世界的におこなわれている、薬剤を用いて肌を脱色・漂白するスキン・ブリーチングと呼ばれる実践を考察対象とする。ジャマイカでは2000年代半ばより、スキン・ブリーチングは、黒人であることの誇りを損なう行為であると同時に、健康被害の原因となる危険な行為として、社会問題視されている。

2014年度は、以下の研究をおこなった。

1) ジャマイカのスキン・ブリーチングの特異性に関する研究

本研究では、スキン・ブリーチングに関する各種の記事や、ニュースやドキュメンタリー映像、先行研究でも取り上げられていたレゲエ音楽を分析対象として、スキン・ブリーチングをめぐる言説の傾向について検討した。

2) ジャマイカにおけるスキン・ブリーチングの位置づけに関する研究

2015年2月に、首都キングストンで2015年度夏期に予定している調査の予備的な調査をおこなった。薬剤の販売方法や流通経路の聴き取り、住民のスキン・ブリーチングに対する意識に関するアンケート・インタビュー調査をおこなった。

研究成果公開促進費（学術図書）

薬剤と健康保険の人類学

代表者 浜田明範

目的・内容

本書刊行の目的は、アフリカの農村地域の事例を元に、1) めまぐるしく変化する生物医療のグローバルな展開過程と 2) それらの新奇なテクノロジーを人々がいかに自分たちの世界の前提として取り込みながら生きているのか、という現代的なテーマに取り組むことにある。

一般的なイメージとは異なり、今日、ガーナ南部の農村地帯で暮らす人々は、薬剤・ヘルスセンター・看護師・健康保険といったモノや人、制度と日常的に触れ合っている。人々は毎日のように町の薬屋で抗生物質や鎮痛剤を買い求め、町中を歩く看護師と会話する。健康保険の加入を勧める宣伝は、看板や横断幕、ラジオ、テレビといったメディアを通して頻繁に行われている。アフリカの医療を対象とした民族誌には一定の蓄積があるものの、その殆どは薬草の使用や呪医の治療といったいわゆる民俗医療に焦点をあてたものであり、アフリカで暮らす人々の健康を維持するうえで、質的にも量的にも極めて重要な役割を担っている生物医療については、特に国内では、ほとんど分かっていない状況が続いている。それに対し本書は、24か月に及ぶフィールドワークに基づいて、ガーナ南部の農村地帯で暮らす人々の生活世界に入り込むことで、人々が薬剤やヘルスセンター、生命保険といったテクノロジーといかに関わりながら生きていおり、それらのテクノロジーがどのように人々の生活生活や社会のあり様をどのように変容させているのかについて具体的な事例に基づいて記述するものである。

成果刊行物

浜田明範

2015 『薬剤と健康保険の人類学——ガーナ南部における生物医療をめぐって』東京：風響社。

研究成果公開促進費（学術図書）

神霊を生きること、その世界

代表者 竹村嘉晃

目的・内容

本刊行物の目的は、インド・ケララ州北部に伝わるテイヤム祭儀を伝統的職業として担う不可触民の実践者たちを照射し、現代社会の動態や祭儀を取り巻く巨視的な位相と、彼らの生計活動や社会とのつながりといった微視的な要素がいかに実践レベルと関係し、影響を与えているのかを彼らの生活世界に足場をおく民族誌的記述から解明することにある。本刊行物は、人類学と舞踊・芸能研究を融合させた「ひと」中心的なアプローチに依拠しながら、神霊パフォーマンスとその実践者たちの「現在」の営為を祭儀の場から生活世界にまで拡げて論じる芸能民族誌の新たな試みである。人類学的フィールドワークに基づいて人びとの生活世界を記述する本書は、地球規模で進むグローバル化現象が個別かつ多元的で変化に富むことを明示すると同時に、舞踊・芸能研究が陥りやすい動作の形態だけを記述するのではなく、祭儀をとりまく社会・政治・経済的諸側面をつながりとして捉え、経済自由化以前から進行していた社会変化と今日のそれを連続的な地平で理解し、実践レベルの変容の動態を個人の視点から実証的に論じるものである。そこでは、祭儀の実践が人びとの生活様式や価値観と呼応し、かつ現代ケララ社会における「不可触民」層の家族や人間関係のあり方とも連動していることが明示され、神霊を受け継ぐ人びとが世代によって価値観や手法は異なるものの、社会的に構築された祭儀の場を通じて自らの位置を確認しているあり様が明らかになる。

成果刊行物

竹村嘉晃

2015 『神霊を生きること、その世界』東京：風響社。

研究成果公開促進費（学術図書）

Oral Chronicles of the Boorana in Southern Ethiopia

代表者 大場千景

目的・内容

【本書を刊行する目的】

- 1) 第1に学術的な新発見を擁する本書を広く世間に問うこと。
- 2) 第2に本研究は文字及び無文字社会の歴史構築に関する比較研究の基礎を提示し、今後の歴史人類学の新たな地平を切り開くこと。

【本書の内容】

第一部の資料編においては、エチオピア南部に居住するボラナと呼ばれる人々の間で語り継がれてきた口承史の現地語のローマ字転写によるテキスト化とその翻訳及び注釈をつけた第一次資料を提示している。のべ32か月におよぶ現地調査を実施して46名のボラナから口承史を収録し、その中で最も詳細な18名の口頭年代史および、予言者や英雄に関する歴史語り、叙事詩などの原文と翻訳およびその注釈を第一部においてまとめている。

第二部の分析編においては、第一部で提示した口頭年代史が成立する文化的、社会的コンテクストを明らかにするとともに、口頭年代史に内在する 1) 文化的な視点に基づく出来事への分析のあり方、2) 歴史を記憶する技法、3) 出来事を法則化する独自の災因論に焦点をあてながら、無文字社会の歴史を生成し継承する仕組みについて明らかにしている。

成果刊行物

Oba-Smidt, Chikage

2016 *The Oral Chronicle of the Boorana in Southern Ethiopia*. Berlin/London/Munster/Wien/Zurich: Lit Verlag.

特別研究員奨励費

社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

代表者 松嶋 健

目的・内容

本研究の目的は、イタリアの社会協同組合を中心とする中間集団において、人々がいかにつながりを創出しているかを見ることで「社会的なるもの」の生起の様態を描き出し、地域の「厚み」として感じられるものの実質を明らかにすることにある。現在イタリアでは、高水準の失業率と公共サービスの貧困に人々は直面しており、国家を

あてにしない共同性への希求は大きい。社会協同組合のような場に注目することは、国家による統治と個人の自己統治の両方をぬけ出て人々がどのようにして集合的な生を形づくっているかを明らかにし、「社会的なるもの」の次元についての考察を深めるのに役立つと考えられる。

具体的には、イタリア各地の社会協同組合を取り上げ、基本情報の収集の他、参加者が協働のなかでどのようなインタラクションを行なっているかを参与観察とインタビューによって調査する。また、人々が他の中間集団（教会、カトリック系団体、アソシエーション、家族）との関わりでどのようなつながりを生きているかについても調べ、そこから得られた知見を、ヨーロッパにおける「社会的なるもの」をめぐる思想と運動の系譜と突き合わせつつ、現代における「社会的なるもの」のあり様について検討する。

活動報告

本年度は、イタリアにおける社会協同組合の現状を全般的に把握することに重きをおいた。そのためにまず3か月間の現地調査において、首都ローマ近郊、イタリア北部、中部、南部それぞれの社会協同組合を訪問しインタビュー調査を実施した。さらに3月の短期現地調査、特に社会協同組合と公的な精神保健サービスとの連携についての補足調査を行った。これらの調査から見えてきたのは、欧州におけるサード・セクターの希望の星とみなされてきた社会協同組合の苦境である。1991年の法律381号による社会協同組合の法制化以降、公共セクターとの連携、別の言葉で言えば「相互依存」を深めてきた社会協同組合にとって、近年のイタリアの経済危機は直接的に多大な影響を与えている。

各地の社会協同組合は、現在の苦境を独自の工夫によって乗り越えようとしているが、その方向性の違いは各社会協同組合を取り巻く地域の特性の差異によるところが大きい。解決への道筋は大きく3つの方向性に分類することができるが、その知見の一部については、3月に開催された京都大学地域研究統合情報センターの共同研究プロジェクト「南欧カトリシズムの変容と福祉ビジネスの展開に関する地域間比較」の研究会において、“The Role of Social Cooperatives in Mental Health Service in Italy”というタイトルで報告を行なった。こうした社会協同組合を取り巻く状況の変化とそれに伴う社会協同組合自体のあり方の変化は、イタリアの中間集団の特徴を逆によく照らし出すものであり、現代における「社会的なるもの」の次元の考察にとって有益な、多くの具体的な材料を提供することになった。

特別研究員奨励費

宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

代表者 奈良雅史

目的・内容

本研究の目的は、「改革・開放」以降の中国において、ムスリム・マイノリティの回族が中心となって担ってきたイスラーム復興運動が、他民族・非ムスリムと共同し、より広い「公益」を志向する社会運動として展開してきたプロセスを描き出すことで、宗教や民族を越えた公共性のあり方を論じ、新たな理論的モデルとして提示することである。

本研究では、以上の目的を達成するために、第1に、イスラーム復興運動に関わる回族、他民族・非ムスリムそれぞれの視点から、イスラーム復興運動の実態の変化、特にその運動で志向される「公益」の変化を民族誌的な事例をもとに明らかにする。また、その際、宗教活動に大きく影響する中国共産党の宗教政策、政府による政策の実施状況についても明らかにする（課題①）。第2に、本研究の中心的な調査地である雲南省におけるイスラーム復興運動は、イスラーム思想的にも経済的にもミャンマーやタイへと拡がった雲南系ムスリムの影響を強く受けていることを踏まえ、現地調査を通じて、国外の雲南系ムスリムの影響との関わりから「公益」の変化を明らかにする（課題②）。第3に、以上の成果に基づき、宗教と公共性に関する理論的研究を行う（課題③）。

活動報告

本年度は、これまでに中国雲南省で中国のムスリム・マイノリティである回族を対象に実施してきた調査データの分析、およびその成果の発表を課題とした。

- 1) 1978年に「改革・開放」政策が導入されて以降、回族社会では急激なイスラーム復興と伝統的な回族コミュニティの解体に伴う漢化が同時に進展してきた。このように回族社会が二極化する状況下、先行研究では一部の回族が敬虔化し、多くの回族が漢化したとみなされる傾向にあった。それに対し、本研究では、回族の日常実践やライフストーリーを含めた微視的なデータに基づき、流動性や分裂性をはらむプロセスとしての回族の宗教性を明らかにした。その成果は、査読論文として『宗教人類学』5号（中国社会科学院）に掲載された。
- 2) 回族社会では「改革・開放」以降、急激なイスラーム復興が起こったが、その一方でイスラームは中国政府の強い管理下に置かれている。そのため、政府の管理下にあるモスクでは、回族の一般信徒が望むイスラーム教育を

必ずしも実施できない状況にある。そうした状況下、従来の宗教指導者ではなく、宗教的知識を有する世俗のエリートが宗教的権威を発揮し、宗教活動を主導しつつある。こうした事例から、政府の宗教管理制度には必ずしも包摂されないかたちでインフォーマルに進展するイスラーム復興の様相を明らかにした。その成果として、IUAES 研究大会で口頭発表を行い、*Revisiting Colonial and Post-Colonial: Anthropological Studies of the Cultural Interface* (Los Angeles: Bridge21 Publications) において分担執筆を行った。

- 3) また、これらの成果を基に、活発化するイスラームに関わる活動が、「公益」活動として展開されてきたプロセスを明らかにした。回族社会が二極化的な傾向にある中、回族の多くが必ずしも生活様式を共有せず、その宗教性も多様化している。そうした変化にありながらも、彼らは都市部における宗教的・民族的マイノリティとして、就職、婚姻などで利害を部分的に共有している。このように多様な回族が部分的に利害を共有するなかで、「公益」が形成される過程を明らかにした。それは南京大学での国際会議で口頭発表を行い、現在『国立民族学博物館研究報告』への投稿の準備を進めている。

特別研究員奨励費

現代ロシアにおける新異教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して

代表者 藤原潤子

目的・内容

新異教主義（ネオペイガニズム）とは、キリスト教などの世界宗教が受容される以前の民族独自の文化を現代に復興しようとする思想運動である。欧米で広く見られるが、旧社会主義圏においてはポスト社会主義時代の民族アイデンティティを支えるものとして生じた。本研究の目的は、ソ連崩壊から20年以上を経た現在のロシア社会における新異教主義運動の位相を民族誌として描き出すことである。

研究内容は以下のとおりである。

1) 思想内容の把握

①異教迫害の歴史を訴え、謝罪と補償を政府と教会に求める新異教主義運動の実態とその歴史認識を明らかにする。②新異教主義には、過激な人種主義に走る集団と、民族間の寛容・共存を訴える集団の両極端が存在する。各集団のロシア人観、人種概念、選民意識などを精査し、寛容性と不寛容性の分岐は何かを考察する。③中世から続くキリスト教と異教の戦いの現在における展開を明らかにする。④ソ連時代の無神論政策と新異教主義誕生の関係を明らかにする。⑤伝統的な異教の自然観と、都市化した社会でナショナリズムの要請によって生まれた新異教主義の自然観の違い、及び近年の自然環境をめぐる状況と宗教実践とのつながりを記述する。以上①～⑤について、時間的な思想の変化や世代間の差にも注目して論じる。

2) ネットワークの把握

ロシア新異教主義諸団体間の関係、他の宗教的マイノリティや自然保護運動、先住少数民族運動、海外の諸団体との連携を見ていく。これにより、マイノリティである新異教主義者がどこからどのような言説を貸借し、自らの語りに取り入れ、アイデンティティや権利意識を高め、実践につなげているのかを明らかにしたい。

活動報告

本研究の目的は、ソ連崩壊から20年以上を経た現在のロシア社会における新異教主義運動の位相を民族誌として描き出すものである。欧米の新異教主義運動とも比較しつつ、ポスト社会主義時代に生じたロシア新異教主義の特殊性にせまるために、本年度は以下のような作業を行った。

- 1) 新異教主義運動はポスト社会主義時代の急激な現象として注目を集めたため、ロシア語では一定程度の報告があるが、日本ではほとんど知られていない。まずこれまでの研究のレビューを行うために文献収集を行った。
- 2) ロシア各地に存在する新異教主義団体に関する情報を、インターネットサイトで収集した。それにより、マイノリティ宗教、少数民族運動や自然保護運動との連携状況、および彼らの特異な歴史観が明らかになりつつある。
- 3) ロシア正教会と新異教主義が、相手に対して互いにどのような言説を繰り出しているのかに関して情報収集を行った。その結果、中世から続く異教と教会の戦いの現代的様相が明らかになりつつある。「正教」を名乗る新異教主義団体の存在なども明らかになり、ロシアにとって真の「正しい教え」は何かと問題が両者の中心にあることが浮き彫りになった。

今年度は10月からの半年しかなかったため、成果発表は間にあわなかった。成果は今後、2015年8月に行われる International Council for Central and East European Studies (ICCEES) IX World Congress 2015などで報告していく予定である。

【継続】

基盤研究 (S)

権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築

代表者 關 雄二

目的・内容

本研究の目的は、50年以上続く日本のアンデス文明研究の成果を踏襲しながらも権力という新たな分析視点と分野横断的な手法を考古学調査に導入し（マイクロ・レベル）、文明初期における complex society の成立過程を追究する（メソ・レベル）とともに、人類史における文明形成を理論的に解明することにある。本研究では権力生成の特徴を、経済、軍事、イデオロギーという権力資源間の関係性に注目しながら帰納的に抽出する。具体的には、アンデス文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）に焦点を合わせ、ペルー北高地のパコパンバ遺跡を調査し遺構や遺物の分析を分野横断的に進める（マイクロ・レベル）。さらに、同時期の遺跡のデータと比較することで文明初期の多様な社会状況を把握する（メソ・レベル）。ここから得られた文明形成論を、中米および旧大陸の文明形成過程と比較し、相対化する作業も併せて行う（マクロ・レベル）。

活動報告

アンデス文明における権力の変容をさぐるため、文明初期にあたる形成期（前3000年～紀元前後）の祭祀遺跡パコパンバ（ペルー北高地）を約3か月にわたって調査し、遺構、出土遺物の分析を行い基礎資料の収集に努めた。とくに半地下式パティオにおいて、大量の土器が何度かにわたって放棄された跡が確認され、デンブン粒分析の結果、トウモロコシ、ジャガイモ、マニオクが検出された。考古学的に検出されることが希な儀礼的饗宴の痕跡と思われる、土器の器形分析と併せて発表を準備している。さらに人骨の分析から、暴力を示す骨折や陥没痕なども発見され、戦争の証拠がないところから、儀礼の痕跡と同定した。昨年度の懸案であったラクダ科動物の利用については、ストロンチウム同位体比、酸素同位体比を測定し、遺跡周辺での飼育と共に、他地域からの移動を示す証拠が発見され、祭祀空間における肉や骨の消費ばかりでなく、駄獣としての役割が示唆された。

一般調査については範囲をさらに広げ、パコパンバ遺跡から山間部（北）、熱帯低地（東）、そして海岸部（西）へと通じる地域間交流ルートを把握し、学会で公表し論文を出版した。また考古学資料をGISデータベースで統合する作業完成させ、新たに土器の3次元画像データベースの作成を開始した。さらに、同じペルー北高地に位置するクントゥル・ワシ遺跡、ヘケテベケ谷中流域、中央海岸北部のネペーニャ谷下流域でも調査と遺物分析を展開し、文明初期の多様な社会状況の把握に努めた。これらの成果は、学術誌で公表するとともに、2014年8月にペルーで、2014年11月と2015年2月に日本で開催した国際シンポジウムで発表し高い評価を得た。また2015年1月に東京でエジプト文明との比較を主題とする公開フォーラムを実施したほか、昨年開催した西アジア文明との比較シンポジウムの成果を出版する作業を行った。2015年刊行の予定である。

基盤研究 (A) 一般

アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト——エジプト系伝承形成の謎を解く

代表者 西尾哲夫

目的・内容

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト（千一夜物語）は、シリアで私家本として伝承されていたが、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭にとまなう中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、現在のようになった。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を分析し、フェイスブック革命に代表される社会変動メカニズムを解明する。

活動報告

本研究ではアラビアンナイト形成に関する以下の研究項目を実施した。

- 1) 文学伝統の地域民衆化で形成された写本群の分類と系統の分析として、写本データベース化の一環として、とくにシンドバード写本と百一夜物語写本の分析を継続するとともに、主としてドイツの各図書館所蔵の非標準的なアラビアンナイト写本（断片）を積極的に収集した。
- 2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、①「カルカット第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙索引の作成、②国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析とそのための海外調査、③国民共通文化形成における民衆文化の現代の変容の分析とそのための海外調査を実施し

た。とくにオランダ、フランス、モロッコ、イスラエルにて現地調査をおこなった。

- 3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパ的文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、①マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とそのための調査、②アラブ世界での再受容と文学伝統の関係の分析とそのための海外調査、③日本での受容と文学伝統の関係の分析を実施した。とくにフランスにてマルドリユス遺贈コレクション関連の調査を集中的に実施した。

国際会議等の発表による成果として特筆すべきこととして、ローザンヌ（スイス）で開催されたデジタル人文学世界大会にて永崎研宣が、またワシントン（アメリカ）で開催された第113回アメリカ人類学会年次大会に相島葉月が参加し発表をおこなった。

基盤研究 (A) 海外

世界の中のアフリカ史の再構築

代表者 竹沢尚一郎

目的・内容

本研究は、北、西、東、中央、および南部アフリカ史の専門家が集まって共同研究をすることによって、アフリカ史の刷新をめざすものである。

とりわけアフリカ大陸の歴史が孤立して形づくられたものではなく、地中海、インド洋、大西洋という3つの海域との関係性において形づくられたことを、さまざまな資料から明らかにしていく。そのため、海域史、交易史、経済史のみならず、宗教史、ジェンダー史など、さまざまな観点から、アフリカの歴史を再構築しようとするものである。

これまで日本のアフリカ史研究は、その専門の講座がないことが示すように、立ち後れた状況にあった。そこで本研究は、アフリカ史を専門とする研究者の集合によってこうした状況を打破しようとするものである。最終的に本研究は、アフリカの歴史に関する4～5巻の本の作成をめざすものである。

活動報告

- 1) 分担研究者および連携研究者等の参加を得て、アフリカ史理解を深めるための研究会を3度実施した。とくに2013年3月には、東洋史研究者が作る共同研究班と合同で研究会を実施することで、アフリカ史と東洋史を接続するための意義深い視点を得ることができた。
- 2) 竹沢は西アフリカ・マリ国南部のマデ地区で、現地の考古学者とともに発掘調査を実施した。マデ地区は、過去に栄えたマリ帝国の拠点とされる歴史上重要な土地であるが、これまで発掘調査が実施されたことはなかった。その意味で、重要な成果が上がることを期待されており、その出土品等を現在、分析中である。
- 3) これまでの成果を論文集『世界の中のアフリカ史』として出版するべく、現在論文を執筆中である。

成果

- 1) 研究内容と成果を海外に発信するために、竹沢は Université Libre de Bruxelles や、Ecole des Hautes Etudes en Sciences Sociales à Marseille 等で開催されたアフリカ史・アフリカ考古学の研究会で発表をおこない、高い評価を得た。
- 2) これまで15年にわたってマリで考古学発掘調査を実施してきたが、その研究成果を総括的にフランス語で出版すべく、*Sur les traces des Grands Empires* を準備中である。これは、2014年度中に出版の予定である。
- 3) これまでの発掘の成果を、竹沢尚一郎『西アフリカの王国を掘る』（臨川書店、2014年）として出版した。

基盤研究 (A) 海外

熱帯高地における環境開発の地域間比較研究——「高地文明」の発見に向けて

代表者 山本紀夫

目的・内容

熱帯高地は、これまで辺境とみなされ、ほとんど注目されなかった地域であるが、そこは古くから多数の人口を擁し、高度な文明も成立、発達した可能性が大きい。また、近年はアンデスやチベットなどの高地において急激に人口が膨張し、環境変化の動きが加速するとともに、環境破壊の問題も深刻になっている。本研究の目的は、このような熱帯高地に焦点をあて、そこでの環境と人間との相互関係を環境開発および地域間比較の視点から究明することである。さらに、研究代表者の山本が40年あまりにおよぶフィールドワークをもとに提唱するに至った「高地文明」の仮説を検証確立することも大きな目的とする。これらの目的を達成することにより、熱帯高地における環境と人間の関係、とくに環境を改変し文明を成立させるに至った人類史の基本的枠組みが明らかとなる。

活動報告

本年度は、5年計画のうちの4年目にあたるため、これまで行く機会のなかった東アフリカ（ケニア）の高地を重点的に調査対象とした。すなわち、アフリカ研究者の池谷和信（研究分担者）を中心として、山本（研究代表者）、大山修一（研究分担者）が約10日間ケニア山（5,199m）山麓の熱帯高地を合同で踏査し、熱帯高地の環境と人々の暮らしとの関係を明らかにした。当初、この調査は熱帯アンデス（エクアドル・コロンビア）との地域間比較を目指していたが、コロンビアの治安情勢が良くないため、熱帯アンデスでの調査は次年度に延期とした。

一方、研究分担者の月原敏博、川本 芳はブータン等で現地調査を実施したほか、連携研究者の杉山三郎はネパールで調査を実施した。

基盤研究（B）一般

中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究

代表者 山中由里子

目的・内容

本研究が対象とする驚異譚とは、ラテン語で「ミラベリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」と呼ばれる、辺境・異界・太古の怪異な事物や生き物についての言説であり、東西の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場する。本研究の主要な軸は次の3点である。

- 1) 驚異譚を比較研究することによって、実際にその言説の語り手によってどのように定義され、位置づけられてきたかを明らかにする。複数の文化圏に共通するモチーフや逸話を関連作品から抽出し、分類を試みる。
- 2) 知識の伝播や未踏の地の発見を促した歴史的な脈を把握した上で、博物学・人文地理学の発展の流れを明らかにする。視覚的表象にも注目し、中東とヨーロッパにおける世界観の変遷と相互の影響関係を辿る。
- 3) 宗教・言語・文化による相違点を浮かびあがらせる一方、異なる文化圏の驚異譚の根底に共通して流れる想像の力と語りの力を明らかにする。

活動報告

本研究では、「驚異」がもっとも生き生きと語られ、描かれた中世という時代を中心に据えて、その対象である物や現象が何であり、そしてどのように表象されてきたかを、言説だけでなく、視覚的な表象との連関も含めて考察してきた。最終年度は、研究期間中に行ってきた計10回の共同研究会を総括する議論を行い、成果を論文集として刊行する計画をたてた。研究協力者までも含めて総勢21名の執筆者の原稿が全て集まり、名古屋大学出版会からの2015年内の刊行が決定している。

この世の摩訶不思議に関する語りは、ヨーロッパと中東の歴史書、博物誌・地誌、物語、旅行記・見聞記などに登場するが、これらの多くは古代世界から中世・近世の一神教世界に継承され、共有されてきたものである。研究成果となる論文集においては、この複雑に絡み合うヨーロッパと中東の精神史の、古代から中世、そして中世から近世にかけての展開を、相対的・大局的に捉え、かつ具体的なテキストや美術品に即して正確に提示することを目指した。各章は、ギリシア語、ラテン語、ヨーロッパ諸言語、アラビア語、ペルシア語、トルコ語などの多岐にわたる一次資料や美術品の緻密な分析に基づいた実証研究であり、それらを比較対照することにより、驚異の在り方について包括的な見通しを得ることができる構成となっている。

また、2014年10月12日～13日には、人間文化研究機構連携研究「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」（代表：山中由里子）と本課題を連携させた研究フォーラム「驚異と怪異——想像界の比較研究に向けて」を国立民族学博物館において開催した。「驚異」と「怪異」を対比させるという、新たな比較研究の枠組みを今後の展開として検討した。

基盤研究（B）海外

宗教と移民のアイデンティティ・共生：南アジア系ディアスポラを事例として

代表者 辻 輝之

目的・内容

本研究は、南アジア系移民・ディアスポラを事例として、1) 宗教が受入社会における移民のアイデンティティ、「コミュニティ」の形成に如何なる影響を与えているか、2) 宗教「伝統」の再構築と展開が多文化、多人種、多宗教を特徴とする受入社会において、彼らと他集団との共生、ひいては、その社会の統合と安定に如何なる影響を及ぼしているか、について民族誌的手法を用いてデータを収集して考察し、宗教と社会に関する既存の概念、理論的枠組の再検討に寄与することを目指す。

活動報告

2014年10月3日～2015年3月7日、トリニダッド・トバゴにある西インド諸島大学（The University of the West Indies, UWI）から、本研究課題の成果を共有・還元することを条件として、図書館蔵書や同大学所属の研究者との交流など制度的支援を受けながら、現地追加調査を実施するとともに、書籍ならびに学術雑誌論文の原稿執筆を継続した。

1) 現地調査

トリニダッドの事例については、同大学 West Indiana Collection および大司教区公文書館にて史料収集と分析、参与観察を行っている南部の町シバリアのカトリック教会関係者およびヒンドゥー教徒への聞き取り調査を継続した。また、南フロリダの事例において調査対象としているヒンドゥー寺院の指導者がトリニダッド・トバゴにおいて祭礼を執り行う際に参与観察および信者への聞き取り調査を実施した。

2) 成果発表

研究成果の共有・還元の1つとして、2015年1月28日、UWI ジェンダー・開発研究所（Institute for Gender and Development Studies）が主催する定期セミナーにおいて発表した。発表は広く広報され、内容と結果は、文書と動画の形で同研究所が運営するオンラインポータルにアップされている（<https://www.youtube.com/watch?v=KIYkAS8asBs&feature=share>）。

基盤研究（B）一般

劣化の進んだ図書・文書資料の長期保存に向けた大量強化法の開発

代表者 園田直子

目的・内容

本研究は、日本の酸性紙の保存研究で未解決となっている課題、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、2) 現在稼働している気相型の脱酸性化処理法の弱点克服、これらに新たな展開を提示することを目的としている。

1) では、既存の紙強化処理法を科学的に再検証し、手法の最適化をはかる。また、新たに紙表面にナノ繊維を紡糸して補強するなど、新しい可能性を検討する。2) では、従来の脱酸性化処理法（ドライ・アンモニア・エチレン法）の改良法として、酸性物質の中和剤を揮発させて酸性紙に直接付着させる手法を検討する。

本研究では、技術改良の成果を自然科学的に検証したうえで、開発した手法の文化財への適用の判断までを総合的に行う。

活動報告

本研究では、日本の酸性紙の保存研究で未解決となっているふたつの課題、1) 実践レベルでの紙資料の大量強化処理と、2) 気相型の脱酸性化処理の欠点克服、これらに新たな展開を提示することを目的とした。

1) 紙強化法の新たな可能性として、フリース法の改良と、エレクトロスピンニング法の応用に取り組んだ。それぞれの手法において、紙の強度向上効果と、処理後の試料に加速劣化処理を施し劣化抑制効果を検証した。フリース法は、紙表面を繊維で覆うことで物理的に強化する手法であるため、処理後、文字の判読が困難になる。そこで高い透明性をもつセルロースナノ繊維を用いたフリース法を検証したところ、自然劣化がかなり進んだ酸性紙での強度向上効果、劣化がある程度進んだ酸性紙での劣化抑制効果が確認できた。エレクトロスピンニング法は、静電気力により高分子溶液をナノ繊維化し、紙表面に積層させる。セルロース誘導体のナノ繊維では強度向上効果よりも劣化抑制効果があること、カルボキシメチルセルロース（CMC）の劣化抑制効果が最も高いことが判明した。また、抑制効果にはCMCの分子量と紙自体の水分量が影響していることが示唆された。フリース法とエレクトロスピンニング法、いずれもセルロースナノ繊維を用いることで、紙資料の強化処理として適用できる可能性が確認でき、今後のさらなる応用開発が期待できる。

2) 現在実用化されているドライ・アンモニア・酸化エチレン（DAE）法では、アンモニアガスと酸化エチレンガスを紙中で反応させるため、アンモニアガスによる紙の黄変、酸化エチレンガスの危険性が問題となっていた。その改良法として、酸性物質の中和剤であるジエタノールアミン（DEA）を揮発させて酸性紙に付着させる方法を検討した。昨年度の課題であった実験条件（とくに加温条件）の緩和に関しては、温度と減圧のバランスにより解決できる目処がたった。

基盤研究 (B) 一般**映像を用いた東南アジアのゴング文化の音楽人類学的研究**

代表者 福岡正太

目的・内容

東南アジア諸地域において、ゴングは、霊的な力を備えた音具、楽器、権力を示す財産、交易品などとして重要な位置を占めてきた。この研究は、東南アジア諸地域のゴング文化の特徴と相互の関連を、現地調査と映像記録作成を通じて明らかにし、東南アジアのゴング文化を総合的に理解することを目的としている。特に、①これまで研究の少なかった地域のゴング文化の調査、②各地におけるゴング製作と調律技術の比較、③主にゴング流通からみた地域間の相互関連の解明に重点をおく。また、映像を重要な研究手段として位置づけ、現地における映像上映と意見交換を通じて、研究成果をフィードバックし、ゴング文化を支える人びととともに東南アジアのゴング文化についての新たな知を構築する試みをおこなう。

活動報告

- 1) 東南アジア大陸部では、ベトナム中部高原にて、これまで撮影した映像を関係者と視聴して意見交換をおこない、さらにゴング演奏や関連する民謡等について調査撮影を進めた。また、ラオス東北部において楽器使用等について調査をおこなった。当初調査予定だったカンボジアについては、長期にわたり調査を続けている井上航氏と情報交換を密におこない、国立民族学博物館が所蔵するゴング文化の記録映像と併せて、比較検討の材料とした。この地域の特徴である平ゴングの使用とこぶ付ゴングとの合奏の広がり、儀礼との結びつき、特に精霊との交流におけるゴング演奏の重要性、ゴングの流通を支えるゴング製作工房や調律師の役割について明らかにした。
- 2) 主にインドネシアのジャワ島、バリ島、ロンボク島での調査撮影を進めた。青銅製ゴングおよびその代用品と捉えられることの多い鉄および真鍮製のゴングの製造と流通、使用の歴史的動態が明らかになってきた。特に1980年代以降、学校教育で地域の文化を教えるために大量のゴングの需要が生まれ、大量の注文をさばくゴング商が誕生し、比較的安価で製作も容易な鉄製ゴングの製作と流通のネットワークが生まれた。また、鉄製ゴングの突起部に真鍮製のこぶを取り付けるなど、新しい製作手法が広がっている。
- 3) フィリピンにおいて、11回にわたり映像の上映および意見交換をおこない、映像が音楽文化の継承や活性化に果たしうる役割を検証した。映像は音楽伝統の伝承において大きな役割を果たしうる。その特長を生かすために、学術的映像における文字情報の効果的かつ適切な位置づけなどを再検討する必要があると指摘された。さらに、1人の創作者の作品として映像を考察するばかりでなく、伝統継承者、研究者、教育者、一般の聴衆など、多様なアクターを結び付けて音楽文化を活性化させるプロセスとして映像を再想像する必要が確認された。

基盤研究 (B) 海外**経済自由化後の南インド社会の構造変動に関する総合的研究**

代表者 杉本良男

目的・内容

本研究は、1990年代以降のインド社会の構造変動について、南インド、タミルナードゥ州及び周辺諸地域を対象に、人類学者と経済学者、地理学者などとの協働により、共同調査、資料収集、文献研究を実施して、総合的・全体関連的に研究しようとするものである。とくに、カースト制を基盤とする農村社会の比重が高かった南インドにおいて、メガシティや海外を結ぶグローバル化が進行するとともに、1) 農村と地方都市を包摂する「地域(ナードゥ)・ネットワーク」を基本単位とする伝統的な社会構造の空洞化が進み(社会経済的基盤の崩壊)、2) カースト制がむしろ都市的・国家的な政治的・イデオロギー的基盤へと変化している(社会政治的意義の拡大)、構造的な社会変動の実態について実証的に明らかにすることを目的としている。

活動報告

インド社会の構造変動に関して以下のような調査・研究を実施した。

- 1) 南インド、タミルナードゥ州タンジャーウール県クンパコーナム市および近郊農村において共同調査を実施した。また、2011年度より実施してきた調査資料の整理作業を引き続き実施し、さらに1990、91年の調査資料との比較分析を行った。その結果、昨年度までの教育、生活水準の変化に加えて、21世紀に入って宗教施設の再建が相次いで行われ、それも外部性を負った人びとのアイデンティティ戦略として実施されていることが、実証的に明らかになった。本件については2014年8月の国際地理学会で共同報告を行なった。
- 2) 上記宗教施設への消費の問題に関連して、ヒンドゥー教の聖地の変容を通じた社会変動を比較検討するため、北インドUP州のベナレス(ワラーナシー)と、西インド・マハーラーシュトラ州のトランバケーシュワルにお

いて調査研究を実施した。

- 3) タミルナードゥ州のキリスト教徒社会におけるカースト問題についての調査研究を継続するとともに、東インド、オディシヤ州における改宗法の問題についての比較研究も実施した。
- 4) 社会変動に関する比較研究のために、パリ、ブラハ、チェンマイ、ならびにシンガポール、マレーシアなどのインド人社会における調査研究を実施し、インド人の海外ネットワークが、大都市だけでなく、村落部にまでその影響を及ぼしていることが実証的に明らかになった。

基盤研究 (C) 一般

瀬戸内海及び西日本における多島海世界の民俗芸能の研究

代表者 笹原亮二

目的・内容

西日本各地には、瀬戸内海や五島灘・玄海灘等、多くの島々が存在する多島海の世界がある。そこでは古来、漁労・商業・交通等を生業とする海の民と、彼らを保護・支配する海の領主の活動圏として、島・海・沿岸地域から成る「領域」が形成されてきた。また、各海域は国内外を巡る航路上に位置し、人・物・情報が往来する「道」として外部と頻繁な交流・交渉が見られた。一方、個々の島は地理的制約から、天候等の自然状況や政治的・社会的要因により外部と隔絶し易く、個性や自律性を有する「コミュニティ」が形成された。更に、瀬戸内海は平家等の強大な政治勢力の活躍の場となり、五島灘や玄界灘は「異国」との境界となる等、それぞれ独自の地域性が形作られた。こうした海域の「領域」「道」「コミュニティ」という特質と各々の地域性が相俟って、各々の海域独自の歴史や社会が展開していった。

こうした海域の島々や沿岸地域には、海域外と共通しつつも各海域独自の特徴的な民俗芸能が分布する。その一方で、同一海域の同種の芸能にも様々な差異が認められる。こうした民俗芸能の多様性は、「領域」「道」「コミュニティ」という特質と地域性が交錯しつつ展開してきた、各海域の歴史的環境と民俗芸能の密接な関係の存在を示している。研究では、そうした海域の島と海と沿岸地域を一体として「島嶼世界」と捉え、それぞれの島嶼世界における民俗芸能の実態を、「領域」「道」「コミュニティ」の特質と地域性の中で歴史的に形成・伝承されてきた島嶼世界の民俗文化として解明する。

活動報告

今年度は、だんじりと獅子舞（兵庫県南あわじ市・同県淡路市）、獅子舞と走り御輿と傘踊（岡山県笠岡市）、松山踊（岡山県高梁市）、備中神楽（岡山県倉敷市）、大宮踊（岡山県真庭市）、太鼓踊（広島県三原市）、椋浦法楽踊と中庄神楽（広島市尾道市）、神明踊（山口県柳井市）、神代踊（徳島県三好市）、阿波人形芝居（徳島県徳島市）、田野々の雨乞い踊（香川県観音寺市）、綾子踊（香川県まんのう町）、獅子舞（香川県さぬき市）、湯立神楽と獅子舞（香川県丸亀市）、ももて祭り（香川県三豊市）、継獅子舞（愛媛県今治市）、花とり踊（愛媛県愛南町）、お伊勢踊と伊予神楽（愛媛県宇和島市）、鳥坂鎮縄神楽（愛媛県大洲市）、四ツ太鼓と獅子舞（和歌山県御坊市）、御田植神事（大分県国東市）、島前神楽（隠岐郡西ノ島町）等について、現地調査を行った。また、徳島県立図書館、愛媛県立図書館、倉敷市立船穂図書館、新見市立図書館、岡山県立図書館等の各地の図書館において、それぞれの地域の祭と民俗芸能に関する論文や報告書等の文献資料の調査を行ったほか、香川県立ミュージアム、愛媛歴史文化博物館において、それぞれの地域の祭と民俗芸能に関する映像資料の調査を行った。更に、宇和島市立伊達博物館（愛媛県宇和島市）、倉橋歴史民俗資料館・長門の造船歴史館（広島県呉市）、周防大島文化交流センター・賀歴史民俗資料館（山口県周防大島町）等の各地資料館・博物館において、地域の歴史や文化全体に関する関連資料の調査を行った。

こうした調査を通じ、この地域全域における民俗芸能の多様性の一方で、同一系統の民俗芸能の地域的な分布の偏りの存在が明らかとなり、それが、特に、江戸時代以降のそれぞれの地域が経てきた歴史と密接に関わっている可能性が浮かび上がってきた。

基盤研究 (C) 一般

博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

代表者 松岡葉月

目的・内容

代表者は、一般の人々が人文あるいは自然科学の様々な切り口から科学に関心を持てるように、研究者の視点から文理融合の新たな手だてにおいて、天文・宇宙分野の科学映像「誰も知らなかった星座——南米天の川の暗黒星雲」を企画・制作し、普及までの手だてを整えた。

本研究は、この科学映像を全天周映像化し、博物館などのドーム型スクリーンで上映し、全天周科学映像による視聴者への影響・効果を、これまでに成されていなかった人文・社会学的側面から明らかにすることを目的とする。つまり、視聴者の多様な視聴特性を、人間工学的分析ではなく、視聴者の社会文化的背景と心理的、教育的影響との関わりから分析する。さらに、通常の平面版映像の上映効果との比較も踏まえて、全天周映像の特性と視聴者への影響、および研究者の視点からの映像を効果的に伝える方法を明確化する。

活動報告

2014年度は、全天周映像の特質である臨場感や没入感について、博物館学の分野では初の検討を試み、最新の研究成果を得られた。具体的には博物館学的手法、つまり来館者をとりまく物理、社会、個人的コンテクストに照らし合わせつつ、全天周ドームにおいて異なるドーム径やプロジェクター性能を持つ上映館でのアンケート結果の比較を通して解析を進めた。研究成果として、画像精細度の高さは臨場感や没入感に部分的にしか影響しないこと、画像の精細度よりもドーム径が臨場感・没入感に影響する傾向が見られること、臨場感・没入感には視聴者の心理的側面や地域性などの環境要因の影響も見られることなどが確認でき、博物館学の学会で発表した。

さらに、博物館においては実物資料に近づけるべく高精細デジタル化が進んでいることを受け、全天周ドームにおけるデジタル資料の可能性を検討した。調査は国内有数の恵まれた星空環境に属する視聴者を対象とし、展示や教育普及コンテンツで注目が高まっている全天エアドームを用いてデジタルデータの星空について評価を得た。この調査から全天周という条件下でのデジタル資料の持つ可能性や限界を確認でき、研究成果は日本天文学会で発表した。さらに全天周画像の専門家と、デジタル画像における高精細化の動向やコンテンツに関する意見交換を行うことができ、デジタル画像の高精細化は技術面が先行し、高精細に適したコンテンツについては専門家の間でも模索中であること、最新動向として、建築文化財アーカイブの全天周映像化の試みがあり、今後、人文科学系コンテンツにおいても臨場感や没入感に類する研究の可能性も確認できた。

また、宇宙・天文分野で球形立体表示装置を開発している研究者と連携し、球形立体表示装置と全天周の視聴特性との比較をすべく一般視聴者対象に調査を実施し、全天周特有の臨場感・没入感を更に具体化できた。

基盤研究 (C) 一般

水俣病被害者支援運動のコミュニティに関する人類学的研究

代表者 平井京之介

目的・内容

本計画は、人びとが水俣病被害者を支援する運動を通じて新たにコミュニティを形成し、国家や社会との関係をつくりかえようとする過程を、人類学的アプローチを用いて明らかにする試みである。本計画では、熊本県水俣市の水俣病被害者支援 NGO「水俣病センター相思社」をコミュニティという観点から調査研究することによって、1970年代半ばから現在までのあいだに、この運動の活動や組織、関係性、資源と、そこに参加する人びとの志向する社会のイメージがいかに変化してきたか、またその過程において、国家統治や資本主義との関係をどのように変化させてきたかを解明することを目的とする。

活動報告

2014年度は、水俣病被害者を支援する NPO 相思社および水俣市周辺において、約 2 か月にわたる現地調査を実施し、特に、民間知識や儀礼的知識、社会的記憶など、相思社に蓄積された知や実践の様式等を中心にデータを収集することができた。その結果、2013年度の調査で明らかになった、相思社内部における世代交代と、相思社と行政との関係の変化について、さらに詳細に具体的内容を明らかにすることができた。

相思社内部における世代交代については、60歳代のメンバーと30歳前後のメンバーとのあいだで活動の方向性を運動方法をめぐってさらに対立が深刻なものとなっていることがわかった。60歳代のメンバーは、改革志向的で、相互に主体性を競うような、1960年代後半の学生運動に通じる運動のスタイルを維持しようとしていたのに対し、30歳前後のメンバーは、現状維持的で、より協調性を重視し、いわば NPO 志向と呼べるような活動のスタイルを好む傾向があった。こうした方向性や運動方法をめぐる差異は、財政が厳しさを増している現在の相思社の活動において、さまざまな局面で深刻な意見の対立を引き起こしていた。

相思社と行政との関係の変化については、相互の信頼関係がいつそう醸成され、いくつかのプロジェクトが協働でおこなわれるようになっていた。とりわけ熊本県主催の水俣病啓蒙普及活動や、水俣市による水俣病資料館の展示リニューアル、相思社が運営する JICA 研修「水銀に関する水俣条約批准に向けた能力強化」等において、協働の成果が明確に現れていた。

なお、並行して、2013年度末に組織した国際シンポジウム「東アジアにおける社会運動の人類学的研究」の成果について、英文の論文集として刊行するための編集作業を予定通り進めることができた。

基盤研究 (C) 一般

トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学——オセアニア大国の移民を事例に

代表者 丹羽典生

目的・内容

本研究は、第三世界における社会運動の特質の一端を、オセアニアをフィールドとして解明することを目的としている。オセアニアにおいては、植民地時代の宗教的・反植民地的運動、プロトナショナリズム運動の時代を経て、1980年代後半以降グローバル化の影響のもと、暴動から民族紛争、クーデターが生起する中で様々な政治的な社会運動が再度活性化している。本研究では、理論的には1980年代以降の新たな社会運動、参加型民主主義の研究、事例としては移民コミュニティと宗教復興やナショナリズムとの相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、民族誌的記述分析を通じて、社会運動に関する文化人類学的考察を行う。最終的には、グローバル化された現在の社会運動の特質を明らかにし、さらには社会運動論に対する理論的貢献を試みたい。

活動報告

オセアニア大国における移民社会の形成という歴史的軸からと、現在の状況からという二方向から対象に接近を行った。後者については、オーストラリア（メルボルン、キャンベラ、ブリスベン）、ニュージーランド（オークランド）にて、関係者や研究者との情報交換と現地調査を行った。また、フィジーの政治的混乱に際して、トンガとのネットワークが果たした役割が知られているが、その点についても、トンガにおいて若干の調査を行った。前者については、オーストラリアの公文書館、国会図書館、オーストラリア国立大学図書館、オークランド大学図書館及び書店にて、関係資料の収集・閲覧を行った。また、オセアニア大国における移民社会形成の文脈に関する歴史史料の収集のため、海外では収蔵されていないオセアニア大国への移民関係資料の収集閲覧を日本で行った。これまで収集した関連書籍、資料の整理を効率的に行うため、アルバイトを雇用した。

成果公開としては、編著の編集を行い、現在出版助成の内諾を得たので、来年度中に刊行の予定である。それ以外ではエッセイなど短い文章を複数刊行した。口頭発表は、本研究課題の進捗状況も2年目に入ったので、社会運動論、政治参画について人類学的な理論を念頭に置き、危機への対応という文脈にて、また、保守思想と文化的政治的サポートの表明という文脈というそれぞれのパネルにて、研究発表を行うことで、オセアニアからの事例に基づき、それを組み合わせつつ、より一般的な人類学的研究課題へと昇華することを試みた。あわせて成果報告を見据えた研究者との打ち合わせも適宜行っている。

基盤研究 (C) 一般

バイパス型私企業活動の活性化による、マダガスカル山間部の住民行動と地域構造の変容

代表者 飯田 卓

目的・内容

本研究の目的は、2009年初頭以降のマダガスカル暫定政権下において、村落部の生活がこうむった影響を明らかにすることである。この時期、国家の統治力が減退したにもかかわらず、国外との結びつきは遮断されず、むしろますます緊密なものとなった。この結果、国家が明確な方針をもたないまま国外企業の活動を許してしまい、とくに村落部ではさまざまな輸出天然資源の採取が活発化するようになっている。このように国家の調整を受けずいわばバイパスするかたちでおこなわれる民間活動の実態を、小生産者からの聞きとりによって把握し、村落部住民の行動や地域構造に与えた効果を主として現地調査によって明らかにする。

活動報告

初年度（2013年度）の調査で明らかになったことのひとつに、フランス系のNGOが人道的支援と称して、山間部の木造民家新築を奨励するプロジェクトを進めているという事実がある。第2年度（2014年度）はこの点についてより詳しい調査をおこない、新築された民家の木材にかならずしも適切な樹種が用いられていないこと、適切な樹種の場合でも樹齢の若い材が用いられていることが明らかとなった。このことは、周囲の森林からの建材調達に困難になっていることを示している。そのいっぽうで、建築技能を身につけた特定の村の職能者たちは、建築景気に喜びを隠さない。海外に拠点を置く団体の活動が村の経済構造を大きく変えているという点で、国家の調整を受けない「バイパス型私企業活動」の一例とみなすことができた。

こうした活動が近年活発になっている理由としては、2009年初頭から2013年末まで約5年間続いた暫定政権の統治力が弱かったことよりも、2002年から2008年にかけて進められた地方分権政策の影響が大きかったことが、文献調査により明らかになった。地方分権政策の影響は、鉱物採掘や自然保護の分野でとりわけ大きかったようである。

以上の成果の一端は、2014年12月に開かれたアメリカ人類学会（AAA）でも報告した。また、このことに関する英語論文ならびに日本語論文の発表媒体もほぼ決まっており、2015年度はこのための執筆にあてる予定である。

基盤研究 (C) 一般

スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究

代表者 鈴木七美

目的・内容

社会の高齢化に伴い、完治困難な心身の不調への対応として、養生法や代替医療への関心が高まっている。本研究の目的は、「補完代替医療 (CAM)」や「ヒーリング・オルタナティヴス」とも呼ばれてきた、近代西洋医学 (コスモポリタン医学) に一体化されない代替医療や養生の実践と、地域における治療・養生に関する考え方や制度との関係を、高齢者ケアの充実という観点から検討することである。

調査対象とする主な地域は、近代西洋医学とホメオパシー (同種療法) の併用を基盤として植物療法など多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイスである。ホメオパシー及び植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツやアメリカ合衆国と比較しつつ検討することにより、地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、様々な領域の研究者・実践者が参照可能な形で、フィールドワークに基づく成果を具体的に呈示する。

活動報告

現代医療と多様な民間医療・代替医療が実践されてきたスイス、及びホメオパシー (同毒療法) や植物療法に関し、スイスと影響関係にあるドイツなど欧州の他の地域と比較しつつ、情報収集・現地調査を展開した。

地域資源を生かした治療やヒーリングの実践の可能性について、国立民族学博物館で国際研究集会①②を開催し、議論を深め情報収集した。①では、ドイツやルーマニアの研究者を招聘し、民間医療・代替医療の歴史と現在に関する発表と議論を通じて、地域資源を生かした地域医療の形成過程と利用に関し情報を蓄積した。また、②では、中国、モンゴル、そして韓国における民間治療と人々のアイデンティティや食文化など日常生活との関係について議論し、代替医療として提示される実践とライフスタイルやウェルビーイング観の関係について、考察を深めた。

現地調査として、高齢者が暮らしやすい町づくりを推進しているスイス、ドイツの地方都市において、予備調査に基づき、高齢者と若者世代が共に作る環境と養生に配慮した暮らしの場について、企画と建設過程、共有スペースや時間の共有に関する構想と実践に関し、集中的に情報を収集した。高齢者ケアと補完代替医療については、2013年度に収集した基本的資料と調査成果を生かして、スイス中部地域において、フィットセラピーを活用している高齢者生活支援付住居が含まれる複合施設について現地調査を進めた。障害者が学び働く場、子どもたちの教育の場、農産物生産の場、コンサートホールやレストラン・ホテルなど内外の人々の利用に開かれた場を有する総合施設の各部署においてインタビュー調査および参与観察を行った。また、障害者が住み慣れた町で仕事や交流をしながら長期に暮らせる住居・交流施設の創出について、比較的視点から調査を行った。

ホメオパシーなど代替医療や民間医療の歴史と現在に関し、書籍を編集し論文を執筆した。

若手研究 (B)

現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

代表者 相島葉月

目的・内容

中東におけるモダニティの系譜を探求するに際し、「社会階層」は最も有用な切り口の一つである。近年、新自由主義経済の広がりにより、学歴や所得で中流層と下流層を差異化することがより困難になる中、「教養」の有無を指標とする新たな「階層観」が構築されつつある。この文脈において本研究は、エジプトのスポーツ実践に象徴された「身体化された教養」をめぐるポリティクスを、西洋の近代性に代わる、独自のモダニティを創出する試みとして考察する。エジプトを代表する大衆的スポーツである空手道コミュニティ (競技者、指導者、父兄) の事例より、中流層的な倫理観とモダニティの関係性を再考する。

活動報告

2014年度の目標は昨年度に引き続きエジプトにおける空手道の実践を都市中流層の階級意識に関連付けて考察することであった。春と冬にカイロに2週間ほど度滞在し、若者文化やスポーツに関する大衆紙を収集するとともに、空手道の稽古場や競技会を訪問し、指導者、競技者及び父兄への聞き取り調査を行った。社会理論においてスポーツ実践は「余暇」として捉えられるが、エジプトの中流層出身の空手家はスポーツと「楽しみ」を結びつけることを嫌う傾向にある。エアロビクスやウエイトリフティングなどは体を鍛えるために有意義な行為であるが、試合での勝利やメダルの獲得を目指したスポーツとは異なるという点を強調する。通常の稽古と比べ、試合対する真剣さや勝利への執着心の強さに驚かされた。空手家やコーチの家庭を訪問したり、フェイスブックに掲載された写真を閲覧したりする過程で、試合で獲得したメダルやトロフィーはもちろんのこと、講習会の参加証や写真までも中流層的な階級意識を保つために重要な意義をもつことが明らかになった。試合への真剣な取り組みを見てみると、ス

スポーツが実利的な利益をもたらすことは考えにくいとは言え、中流層の「余暇」として分析することに違和感を覚えた。

今年度の調査から空手道を中流層の文化実践と結びつける手がかりが見つかりつつある。1970年代に日刊紙・アル＝アフラームが空手について報道し始めた際に、スポーツ面ではなく、文化面に記事を掲載した。文化面には芸術や文学だけでなく、宗教やスポーツに関するニュースも含まれていた。今年度は「文化」と結びつくあらゆる施設で行われている空手教室を訪問した。中流層が教養を身に着ける機会を提供するために1950年代より建設された青少年センター（マルカズ・シャバーブ）だけでなく、図書館の閲覧室や金曜礼拝向けモスクの庭においても空手の稽古が行われ、多くの子供や父兄でにぎわっていた。

若手研究 (B)

言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

代表者 鈴木博之

目的・内容

チベット文化圏の南東端に位置し、他の民族文化圏と接する中国雲南省北西部で話されるチベット語諸方言は、その分布地域の範囲に照らして非常に大きな多様性を持っている。本研究では、同地のチベット語諸方言が多様で独特の言語特徴をいかにして持つようになったのかという問題を提起し、同地の多言語状況に配慮しながら、記述言語学の方法論を用いて数十地点にわたる語彙・文法事項に関する方言調査によって得られたデータを、比較言語学および地理言語学の方法論で分析することを通じてこの問題を解明することを目的とする。

活動報告

本研究は 1) 臨地調査と、2) データ整理・解釈に分かれる。

1)については、短期の臨地調査を2度行い、雲南省香格里拉県、徳欽県および維西県において合計6種のカムチベット語方言（Choswateng, Gagatang, mBalhag, lCagspel, sNyingthong, Chumdolog）の語彙・文法調査を行った。また、次年度の調査に向けて、村落の選定を行うための基礎情報を収集した。また、香格里拉県の村落に伝わる村民の歴史を口頭で語ってもらい、言語資料として供するだけでなく、移民の年代・状況などを把握する史料価値のあるものを収集できた。

2)については、まず収集した言語データは電子的にデータベース化し、検索可能な電子的資料を作成した。次に、言語地図を作製するベースとして、Google Mapsの地点情報に基づいてArcGISおよびGeocodingで処理できる形式として整理した。これらのデータを利用し、複数枚の言語地図を作成すべく試行錯誤を試み、音声・語彙形式・文法特徴に関する20枚の地図を作成した。

以上の成果に基づいて、論文について本研究に直接的にかかわるものを7件、副次的成果として6件発表し、各種学会において口頭発表を12件行った。口頭発表の際には、参加者との交流において、地理言語学・歴史言語学の方法論を検討する機会を持つことができ、本研究を推進するために役立った。また、2度の招待講演において研究成果に関する話題を提供した。また、研究最終年度末に予定している単著の執筆について、中国において具体的な出版のめどが立った。

若手研究 (B)

漢族的特色の空間利用とエスニシティの再編——中・越隣接エリアの調査研究

代表者 河合洋尚

目的・内容

中国／ベトナムの隣接区は、多数の少数民族が居住することで知られているが、最近、漢族を資源として地域的特色を出し、地域経済を推進する動きが強まっている。本研究は、こうした最近の動向に焦点を当て、地方政府、開発業者、旅行会社、地域住民、華僑等が、どのように漢族文化を用いて地域空間の特色を生産してきたのか、国境を超えたポリティクスについて解明することを目的とする。同時に、漢族的な地域空間の生産が、現地の漢族間、漢族／少数民族間関係を再編してきた過程についても明らかにする。本研究では、国境を超えて活動する漢族の低位集団として、とくに客家および客人に焦点を当てる。

活動報告

中国、ベトナムの国境際において漢族的特色を用いて地域開発をする傾向は、現在、中国とベトナムの双方で強まっている。そのうち、有力な資源の一つとなっているのが、「僑郷」という言説を用い、ある空間が華僑の故郷であることを強調することで、地域開発を促進するものである。本研究は、雲南省南部の紅河州において、「僑郷」としての空間がいかに生産されてきたかを、役人、学者、住民などのインタビュー等から明らかにすることができ

た。さらに、四川省成都市や広西チワン族自治区の博白県、陸川県、北海市など、国境より少し離れた地域でも、漢族文化（客家文化）を利用した文化創造と地域開発が促進されていることが分かった。他方で、ベトナム側では、漢族が少なく、中国系住民の行動が規制されている北部で、漢族的特色を目に見える形でアピールすることをしていない。ただし、ホーチミンなど南部のホア人、ンガイ人らは、漢族的特色を利用したエスニック空間を形成している。なかでも、ンガイ人は、ベトナム北部から南部に移住した集団であり、護国観音廟を中心に独自のネットワークとアイデンティティを形成していることが分かった。さらに、それらの形成は、ベトナムだけにとどまることなく、中国、さらにはアメリカ、オーストラリア等とのネットワークが無視できない。本研究では、ベトナムと中国を架橋するンガイ人とホア人客家の越境ネットワークと、それによる空間的特色の創造の過程を明らかにすることができた。

若手研究 (B)

アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用

代表者 川瀬 慈

目的・内容

本研究の目的は、エチオピアの無形文化を対象にした民族誌映画を事例に、映像を活用した文化保護モデルの構築を目指すことである。近年、無形文化遺産の保護を推進している UNESCO は、アフリカの無形文化を映像によって記録し活用する方法を推奨している。しかし、国際機関が掲げる記録・保護すべき無形文化遺産の理念と、地域住民の無形文化に対する認識の間に溝があり、対象地域における映像記録の活用に関する議論が十分に行われていない。本研究では、保護すべき「無形文化遺産」について、応用映像人類学的な観点から検討し、今日消滅ないしは著しい変容を強いられているアフリカの無形文化を対象にした望ましい映画制作・活用の指針を示す。

活動報告

2014年度は5月に開催された日本文化人類学会50周年記念国際研究大会（IUAES 2014、於：幕張メッセ）にて『New Horizon of Anthropological Films from Japan』と題した上映企画を行い、各国の映像人類学者と映像民族誌の制作方法論に関する議論を行った。さらに、学術雑誌『年報カルチュラル・スタディーズ』第2号の映像人類学特集企画に、研究課題に関する論稿を発表した。年度後半には、編著者として関わった出版物『フィールド映像術』（古今書院）、そして『アフリカンポップス！文化人類学からみる魅惑の音楽世界』が刊行された。これらの出版物を通して、報告者の制作方法論の変遷や作品に対する様々な社会的文脈における視聴者の反応について考察した論稿を発表した。報告者が制作した映像民族誌の特集上映が以下の場や機会に企画・実行され、フランスを除くすべての会に参加し、上映後の討論に参加した。

第7回中華人民共和国映像人類学会年次総会／貴州師範大学（中国、8月、2作品の上映）、プレーメン大学人類学・文化調査学部（ドイツ、11月、5作品の上映）、トロムソ大学映像文化研究科＋トロムソ大学博物館（ノルウェー、11月、8作品の上映）、第8回シネマ・ヴェリテ・国際ドキュメンタリー映画祭（イラン、12月、2作品の上映）、La Péniche ANAKO（フランス、2月、3作品の上映）さらに、全州市（大韓民国）において10月に開催された第1回無形遺産国際映画祭においては、企画構想段階から、アドバイザー的にかかわり、映画祭当日も、報告者の作品上映を行った。

若手研究 (B)

高齢者介護と相続の相関にみる沖縄の「家族」に関する人類学的研究

代表者 加賀谷真梨

目的・内容

本研究は、介護保険サービスの拡充後もなお「家族」が高齢者の生に対する責任を手放さない要因を「継承」という行為それ自体を重んじる日本人の観念に由来すると仮定し、それを高齢者介護と位牌や土地の相続との相関に関する実態調査を通じて検証する。調査地は、位牌継承における長男の単独相続と親の介護・扶養とが理念的・実体的に結合した沖縄の波照間島と久高島とする。高齢者とその「家族」間にどのようなパワーポリティクスが展開し、数いる成員の中からいかなる論理に基づき特定の介護者が選定され、また、位牌と土地の相続はそれぞれどのような論理で決定されたのか、介護と相続という本来別個な行為が「家族」というチャンネルを通じて同一化／非同一化する局面に立ち現れる論理と、そこに読み取れる合理性を明らかにする。その上で、「家族」が何を希求する集団なのかを見定め、高齢者の生に対する責任を手放さない日本の「家族」の深奥に迫る。

活動報告

2014年度は、沖縄県内で2000年に同じプロジェクト傘下で開始された離島の高齢者地域介護事業の現在の状況に

ついで、波照間島と久高島で比較調査を行った。今年度初めて久高島に赴き、同活動の継続が困難であった背景を、島の歴史、生業、社会構造等との連関に留意しながら明らかにした。その結果、近代化（世俗化）のうねりに対して、久高島の人々が霊的世界をそのまま保持し、それに依拠することで対応（対抗）しようとした戦略が、間接的に地域介護をはじめとする祭祀以外の自律的な活動の継続を困難にしていることが明らかになった。

具体的な研究成果として、波照間島における地域介護をめぐるコンフリクトについて、5月16日にIUAESにおいて「Family and “family-like” people: conflicts over community-based elderly care」と題する研究発表を行った。また、地域介護の継続要因を再帰性という観点から読み解いた論文「ジェンダー視角の民俗誌——個と社会の関係を問い直す」を、森話社刊行の『<人>と向き合う民俗学（2014）』に寄稿した。久高島の調査結果に関しては、国立民族学博物館のウィークエンド・サロンで発表した。さらに、ボランティアアソシエーションの維持や存続の仕組みという観点から神奈川県で女性相談活動を行う非営利女性団体を読み解いた英語論文「An Alternative Place for Women: A Case Study of Women’s Support Activities in Japan」を国立民族学博物館発行の『Senri Ethnological Studies』に投稿した。

若手研究（B）

博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明

代表者 太田心平

目的・内容

各国の民族学博物館では、韓国・朝鮮文化の展示が劇的に改装されつつある。本研究では、諸博物館で同時進行するこれらの改装作業を調査し、各準備過程の共通点と相違点を明らかにする。

本研究の目的は2つある。第1は、韓国・朝鮮研究の立場から、民族学、特に知識人類学の分野に理論的に貢献することである。韓国・朝鮮の「真正な文化」が再編される様相を、深層的かつ総合的に分析することで、民族文化の権威的知識が生成されるメカニズムの解明に寄与する。

第2は、博物館展示学に寄与するためのもので、展示の準備過程の国際比較である。同時に進む同類の改装作業を包括的に精査して、展示実践の過程と、近未来の博物館像を演繹的に解明する。本研究は博物館展示を、完成した展示の良悪や善悪や正偽で評価しようとするのではない。その準備過程に潜む文化的な装置に着目し、ブラック・ボックスとされていた展示準備過程を解明するものである。

活動報告

4月から1月にかけて、米国と韓国の博物館に関する聴き取り調査をおこない、その結果を3月の国際会議にて発表した。

今年度は特に、韓国・朝鮮の伝統文化を展示する際に、どういった階層の人びとの文化を展示することが相応しいと考えられるかという問題に着目し、研究を進めた。韓国・朝鮮の「真正な」文化の具現としてもっともよく語られるのは、(旧)在地土族層という人びとである。このため、博物館の文化展示でも、(旧)在地土族層の文化を表象しようというのが、20世紀には多く作られた。ただ、21世紀の韓国・朝鮮研究者たちはこれに異議を呈するようになった。背景には、(旧)在地土族層とはかなり違った特徴をもつ(旧)在京土族層についても研究が進んできたこと、そもそも(旧)土族層が韓国・朝鮮で少数者に過ぎないという認識が広まったことなどがある。

しかし、(旧)在地土族層に関する展示を韓国・朝鮮の文化展示から外すことは、容易なことといえないことが、本研究から確認できた。理由は第1に、博物館を訪ねる観覧者たちが「お決まりの」韓国・朝鮮の文化展示を期待するため、それを逸脱した展示は期待を裏切ることになるからだ。また第2に、21世紀の研究潮流を識らない同僚たちが、韓国・朝鮮研究を専門とするキュレーターたちの計画に待ったをかけることがあるからである。そして第3に、(旧)在地土族層以外の人びとが、展示されることを望まないことが多いからである。

上記の第1の理由は、「文化の監査」という問題系として、社会文化人類学で議論されてきたものに属する。第2の理由は、専門性への介入の問題として、産業社会学で語られてきたものと、節合点を有する問題であるといえた。そして第3の問題は、これまでほとんど注目されることがなかったものの、文化展示がいかに作られるかという議論に欠かすことが出来ないものとして、本研究から発信できた。

挑戦的萌芽研究

動的共創型デジタルアーカイブズ構築——梅棹忠夫資料に基づいて

代表者 久保正敏

目的・内容

国立民族学博物館（以下、民博）初代館長・梅棹忠夫が残した膨大な資料は、フィールドワーク途上の諸記録だ

けでなく、生涯にわたる知的生産活動に関わり、幅広い地域と分野をカバーした世界に誇る文化資源である。2011年度来、民博ではこの「梅棹忠夫資料」の整理保存を開始し、目録情報のデータ入力と解析を進めている。

本研究では、入力されたデータに基づき、多分野研究者がそこで見出し記述した資料間の関係性を共有し、動的に共同で知を創出できる共創型デジタルアーカイブズ・システムを構築する。これを多分野研究者が共有することで、民族学・調査探検史等の解明を共同で進めることが期待できるとともに、他機関でも研究者の残したアーカイブズ資料のデジタル化を進める際のモデルとなることが期待できる。

活動報告

前年度試作したシステムについて、まず、モンゴル関係の研究者や情報学研究者による評価と問題点の洗い出しを行った。次いで、博物館学研究者、学術行政関係研究者等から選抜した評価グループを策定して、そのメンバーに限定した評価システムを開発して公開し、「時間値・空間値・主題値（キーワード）群」三つ組による内容索引のうち、特に付与された主題値の妥当性、タグ付きリンクの有効性についての評価を行った。また、認証付きシステム及び一般公開システムの切り分けと運用方法を確定させた。

研究活動スタート支援

女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明：タイを事例に

代表者 松井智子

目的・内容

本研究の目的は、女性移民および人身売買被害者に関する言説を、国際レベル／送り出し国内レベル／支援運動の現場レベルに区分して分析し、それらの言説と女性移民および人身売買被害者当事者の多元的なリアリティとの関係性を明らかにすることである。

本研究は、事例として、タイの女性移民・人身売買被害者支援運動を対象とする。まず、1990年代以降の女性移民・人身売買被害者に関する言説を、国際／国内／支援運動現場の各レベルにおいて分析し、女性の移動・親密圏・セクシュアリティ等を問題化する論理を明らかにする。次いで、支援運動の現場レベルにおけるミクロな過程を調査し、各レベルの言説・論理と現場のリアリティとの関係性を分析する。

活動報告

本年度は、女性移民・人身売買被害者支援運動の多元的リアリティについての調査研究を中心に行った。支援運動のモデルとして、「国際ネットワーク連携モデル」、「コミュニティ・ノーマライゼーションモデル」にあたる二つのグループを対象に検討した。

「国際ネットワーク連携モデル」として取り上げたグループは、日本人スタッフとタイ人スタッフのほか、故地コミュニティに帰郷した女性移民・人身売買被害者10数名がプロジェクトメンバーとして活動しており、その支援対象者は70名程度である。啓発活動、調査活動、帰国女性の相談受付、帰国女性へのマイクロクレジット活動、タイ・ジャパニーズ・チルドレン（TJC）の教育支援等を行ってきた。また日本の市民団体や国際NGOと連携し、国境を越えた支援活動を展開してきた。このグループでは、移動する当事者の経験は被害経験として構築され、支援の対象とされていく一方で、当事者間の交流の結果、当事者が支援運動を相対化する視点を得たり、いわゆる被害経験からはズレる思いや語りが現れていた。すなわち、「支援－被支援」という関係が固定化せず、常に揺らぎをみせていた。

他方、「コミュニティ・ノーマライゼーションモデル」として取り上げたグループは、代表者や事務所を持たず、問題が生じたときに対応する形をとっており、地域コミュニティに溶け込む形で活動してきた。メンバーには帰国女性のみならず男性も含まれている。このグループは「支援－被支援」という明示的な関係ではなく、またコミュニティに期待される文脈から外れる当事者の経験は語られにくいという傾向がみられた。

本年度の調査研究の結果についてさらに考察を深め、前年度の成果と総合して考察することが課題である。その成果に基づいて、定住パラダイムに代わる枠組みを検討し、現代移民理論に対して貢献すること、また実践面において、女性移民・人身売買被害者支援運動の新しい支援枠組みを提示することを目指している。

研究活動スタート支援

西アフリカにおける生権力の複数性：ガーナ南部における結核対策を事例に

代表者 浜田明範

目的・内容

今日、西アフリカで暮らす人々の多くは、ヘルスセンターや病院、薬剤の日常的な利用を通して生物医療と関わっている。人間の生病死に関わる生物医療とそれをめぐる状況への注目は、人々の生活における重要度に加え、科

学技術の普及やグローバル化の影響の格好の事例となるという点からも、人類学的研究の有効な出発点を提供してくれる。

本研究の目的は、ガーナ南部における結核対策プロジェクトの展開に注目することにより、生物医療が 1) どのように異なる立場の人々の行為を統制しながら全体的な目標を達成しようとしているのか、2) どのようなモノ・行為・制度の配置によって人々の自己統治を促しているのか、3) どのように「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」を結果的に選別しているのか、の3点について明らかにすることである。

活動報告

本研究の最終年度にあたる2014年度は、当初の計画通り、ガーナ南部の農村地帯において現地調査を実施した。具体的な成果として、以下の3点が明らかになった。

まず、結核治療においては、毎日欠かさず、決まった時間に薬剤を服用することが求められるが、ガーナにおいては、必ずしも国際的に標準化されているように看護師の面前で薬剤が服用されているわけではない。これは、看護師の怠慢というよりは人員不足のためである。このような、標準的な治療の失敗の結果、患者はむしろ主体的に薬剤を服用する必要性に駆られており、配布される服薬チェックシートは患者の主体化を支える重要なツールとなっている。

次に、結核患者を取り巻く人間関係の再編成は、部分的には、乳幼児との接触を避けるように促す結核対策の影響と言えなくもないが、それにもまして、患者の経済状況や患者の家族によるより良い生の希求に影響されていることが明らかになった。長期の治療を必要とする結核は、貧困と負のスパイラルを起こすことが多く、治療の成否は経済状況と密接に関連する。そのため、患者がどのような規模の家族の中でどのような役割を担っているのかが治療にとって重要になるのだが、この家族の状況は、患者自身だけでなく、他の家族の希望によっても変更され続けていた。

最後に、ガーナにおける結核対策における「生かすべき者」と「死ぬに任せる者」の選別は、結果的に、担当看護師の本気度や柔軟さ、経験に依存していることが明らかになった。結核対策を担当するコミュニティ・ヘルス・ナースには、患者を早期発見するためにコミュニティを巡回することが推奨されているが、その他の感染症対策や乳幼児健診も担当する看護師達には十分な時間が与えられていない。そのため、結核患者へのケアの質は、個々の看護師の性格や経験に依存することになっている。

研究活動スタート支援

モノからみる芸能文化のグローバル化——バリの仮面と楽器を事例として

代表者 吉田ゆか子

目的・内容

本研究は、世界各地で現地の芸能家によって演奏や上演に用いられるようになった、バリのガムラン楽器および仮面が、その後各地の人々とどのように関わっているのかを明らかにする。バリでは、楽器や仮面は神格（あるいはその力）を宿す存在である。これらのモノが新たな土地でどのように扱われ、またその土地のモノの配置（e.g. 住環境）や物質文化や音楽文化にどのように影響され、また現地の人々にどのような働きかけをしているのかを、日本、北米、香港、ジャワ島の事例から明らかにする。また、米国や日本でみられる、自作のガムラン楽器や仮面の利用実態も明らかにし、これらのモノが、現地のバリ芸能実践にいかなる影響を与えるのかも考察する。民族芸能のグローバル化という現象を、モノの側から考察し、音や舞踊や演劇だけでなく、それを支える物質文化をも含みこんだ「芸能文化」の越境の問題として問い直す。

活動報告

国内では、都内を中心に3つの日本人によるバリ芸能実践グループの活動の調査を続けた。部分的には、自身も公演に携わりながら、参与観察をおこなった。海外では、米国（ボストン、パークレイ、ホノルル）と香港およびジャカルタを訪れ活動実態についての調査を行った。また本年は、ガムランの主要な形式であるゴン・クビヤールの誕生100周年を記念するイベントがバリ島現地で開催され、日本と米国からのグループが出演したため、この現地調査も行った。

米国では、大学内で結成されたり、それを地元で発展させる形でグループが結成されることが多い。ボストンのグループは、実験的な曲作りが特徴的で楽器自体もオリジナルに開発している。パークレイのグループは歴史が長くまたバリとのつながりが深い。ハワイには比較的新しいグループがあり、現在大きなプロジェクトを抱えている。

日本国内では、大学とは別にグループが多数結成されている点の特徴的である。また、神社や寺といった宗教的公共空間を利用した上演活動が頻繁にみられる点も興味深い。

ジャカルタでは、ヒンドゥ教徒コミュニティを母体にしたり、舞踊教室としてグループが結成されているが、ム

スリムの参加者も多い。

調査対象となったグループは多様だが、どこもが多かれ少なかれバリのモノに関わる信仰・文化に学び、供物を楽器や仮面に供える等の実践をしていた。また、楽器の重さ、大きさ、音量が、さまざまな面で実践に影響を与えている。加えて日本の神道や仏教そしてジャカルタのイスラム教といった、現地の宗教的な文脈に部分的に影響を受けている。現在はこれらの事柄の具体的な差異や共通点について分析を進めている。

なお期間中は2つの国際学会にて口頭発表し、意見交換をした。さらに、米国の民族音楽学会を訪れ、モノに着目する民族音楽学の最新の研究動向について情報収集した。

研究活動スタート支援

気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践

代表者 近藤 宏

目的・内容

現代の気候変動を前に、今日では熱帯林地帯に居住する先住民も緩和対策の担い手として位置づけられるようになってきている。炭素取引と連動させることで、森林減少の抑止に経済的インセンティブを与える制度が国際的に議論され、政策として実現され始めている。それは、炭素という新しい所有物を先住民の生活にもたらす制度である。この新しい所有物の導入が、現地における自然資源利用の諸実践とどのように切り結ばれるのか、そして先住民と視線との諸関係を何をもたらすのか、という問いを立て、エクアドルの先住民アチュアルとパナマの先住民のエンベラのもとで現地調査を行い、この新しい事態について民族誌的な水準から考察することが研究の目的である。

活動報告

今年度は8月から9月にかけてパナマ東部に現地調査を行った。調査前には、パナマの先住民が気候変動に関する経済開発への参加をとりやめたというニュースが流れていたため、この点について、主たる対象であるエンベラによるその考えを確認するなどした。新しい経済開発の不参加の決定は、それ自体で独立した問題というよりも、先住民を取り巻く社会環境の中で、先住民自身が手にした権利（土地に対する権利やそこでの開発を主体的に決定する権利）を十分に行使できないと感じざるを得ない状況があることが明らかになった。

研究成果公開促進費（データベース）

梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ

代表者 久保正敏

目的・内容

梅棹忠夫は国立民族学博物館（以下、民博）に膨大な資料を残した。フィールドノート、スケッチ、写真などフィールドワーク上で作成された一次資料に始まり、原稿執筆のアイデアを記したカード類、その整理結果から原稿の各段落に対応する梗概を記した「ござね」、原稿、自著への書評などの知的生産活動に関わるもの他、学術調査探検隊・共同研究会・学会の組織活動、学術機関運営や学術行政、民博創設と準備の博物館調査等に関わる資料も含まれる。梅棹はこれら資料を駆使し、モンゴル・アフリカ・東南アジアなどの地域研究のほか、情報論、比較文明論、女性論、家庭論、博物館展示論、研究経営論など、幅広い学を打ち立てた。従ってこれら資料と資料間の関係性を分析することは、梅棹の知的生産の過程のみならず、日本の民族学史や海外調査・探検史、文化行政史等の研究に寄与することが期待できる。そのため、データベース化と共有が切望されてきた。

そこで今回、資料間の相関関係に基づく梅棹忠夫「知的生産の学」を解明し、関連する分野の今後の研究に生かすために、民博だけでなく、梅棹の研究分野に関わる多分野研究者の参加を求め、それぞれが発見した資料間の相関関係の記述も含めたデジタルアーカイブズの構築を目指すに至った。これは、梅棹自身の望んでいた共同的な知の創造にかなうものである。

成果物

デジタル化したフィールドノートや原稿類は、準備の整ったものから順次、下記の民博ウェブサイトからの公開を継続しており、現在約62,000件が公開済みである。<http://nsearch.minpaku.ac.jp/umesao-archives/index.html>

特別研究員奨励費

紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

代表者 市川 彰

目的・内容

本研究の目的は、次の3点である。

- 1) 先古典期から古典期にかけてのメソアメリカ太平洋沿岸部の製塩活動と社会の実態を解明すること
- 2) イロパング火山噴火が沿岸部社会に与えた影響を解明すること
- 3) 紀元後5世紀イロパング火山の巨大噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の特質について考古学的に明らかにすること

活動報告

本研究の遂行により、「沿岸部社会・塩・火山噴火」というメソアメリカ考古学研究において重要視されながらも研究の実現が困難であった、もしくは調査研究が不十分であった課題を克服することが可能となり、生業研究や災害考古学への貢献が期待できる。研究成果は以下のとおりである。

ヌエバ・エスペランサ遺跡の考古学調査では、発掘調査に加えて大量に出土する粗製土器片に付着する白色物質の化学分析、土壌成分の分析をおこなった。その結果、エルサルバドル太平洋沿岸部では少なくとも紀元後100年頃にはすでに集約的な土器製塩活動が存在し、それらは植物質食料（C4植物）を中心として定住生活を営む社会集団による季節労働であると推察され、製塩活動以外にも黒曜石などを遠隔地から入手し、墓には往時の社会的地位などを反映させていたことが明らかとなった。またイロパング火山灰との層位的関係・出土遺物の分析の結果、噴火年代は紀元後400から450年頃、噴火時に儀礼をおこなう時間が存在したことが、つまり避難する猶予が存在したことが明らかとなった。

また、イロパング火山灰との層位的関係の明瞭な遺跡から出土した土器の型式学的分析や放射性炭素年代測定によって、火口からの距離によって噴火のインパクトが異なることを明らかにし、先スペイン期の人々の多様な火山噴火への対応の一部を考古学的に明らかにした。

特別研究員奨励費

社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究：ポリネシアにおける贈与の全体性

代表者 比嘉夏子

目的・内容

本研究の目的は、ポリネシア地域における社会経済実践を 1) 社会空間の動態と 2) 行為の演劇性という新たな視角から分析し、人文・社会科学の中心的命題となってきた「贈与の全体性」を実証的に解明することである。本研究の遂行により、現代的な社会文脈の中で生きる島嶼民がいかにして全体的営為としての贈与経済を存続させてきたのか、その実践が明らかになると同時に、近年の知の潮流における贈与論再評価の動向や反功利主義思想に対して、実践的な参照枠組みを提供することが可能となる。したがって本研究では、贈与論の主要な事例を提供してきたポリネシア地域を研究対象に、これまでの研究とは異なった新たな2つの視点を用いて現地における実践を検証し、贈与経済理論の新機軸を確立することを目指す。

理論と実践の間に存在する上述した矛盾を克服しそれら社会的実践の「全体性」へ接近する具体的方法論として、1) ローカルな社会空間認識と、2) そのような社会空間において顕在化する行為の演劇性に焦点をあてて考察を進める。これらの視点を導入することで、複数の参加者が集う場の相互行為力学と、そのような空間に深く滲透している演劇性とを解明することができる。そこから両者の統合的な理解が達成されることで、人びとの経済・宗教・政治などあらゆる諸実践を実践的な地平において有機的に統合する営為があきらかとなるだろう。それによってこそ初めて、先行研究において論じられてきた、対象社会を覆う「全体性」の本質を照射することができる。

活動報告

2014年度は、1) 2度にわたるフィールドワークを実施し、2) 本研究課題とも関連する原稿を執筆および編集した。各々の詳細は下記の通りである。

- 1) 1度目の海外渡航では、アメリカ・ハワイ州においてフィールドワークを実施し、①ホノルル市に在住するトンガ人コミュニティについて、キリスト教会における人びとの集会に参加し、宗教的实践における社会空間構成と振る舞いについて観察、記録した。②また人びとへのインタビューも実施し、母国トンガとハワイとを往来する様相と、ハワイにおける生活が経験的にどのような変化をもたらしているのかについて調査した。また、トンガを含むポリネシア地域の日常的な演劇性について、歴史資料を収集し、比較検討を行った。
2度目の海外渡航では、ニュージーランド・オークランド市において、①トンガを含むポリネシア地域の日常的な演劇性とその歴史的変容過程について、オークランド大学図書館およびオークランド博物館資料室において、文献資料の収集と映像資料の検証を行い、比較検討を行った。②またオークランド市郊外のマヌカウ地区に居住する太平洋島嶼民コミュニティについて、日常生活における相互扶助実践を調査した。また若者を中心とした犯罪対策やDVなど暴力抑止についてどのような教育、啓蒙活動が実施されているのか、聞き取りを行った。
- 2) 研究業績「対他的な〈ふるまい〉としての粗放的飼育——トンガのブタをめぐる儀礼的相互行為」では、人間と

動物との関係性を探求する研究の一環として、トンガ王国の家畜飼養に焦点を当てて考察した。本研究課題でも鍵となる〈社会空間と人びとの行為へのマイクロな視座〉を用い、家畜飼養の実践を捉えなおすことによって、ブタ飼養を人間とブタとの二者的相互行為のみならず、ブタを介した人間同士の相互行為という重要な側面が明らかにされた。

特別研究員奨励費

近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

代表者 田中铁也

目的・内容

インド並びにグローバル経済で躍進を続ける商業集団マールワリーは、コミュニティの「発現地」であるラージャスターン州各地にヒンドゥー寺院を建立してきた。私は、同州ジュンジュヌー県に存するラーニー・サティー寺院を調査対象として、同寺院を運営するジャーラン・コミュニティによる1912年の寺院基金設立から複合寺院施設の完成までの歴史的過程を、ジャーランによる「コミュニティ結集」と分析する。彼らの寺院運営は、社会的支配者としての世俗的権威を証明するというよりは、自らがいかなる存在であるのかをコミュニティの内外に公的に発信する営為と解釈できる。注目すべきは80年代以降、同寺院は、ジュンジュヌーだけでなく、インド国内外に積極的に分祀され、各地で同名寺院が建立・運営されてきた。同寺院の拡散は、ラージャスターン州を出自としながら、19世紀から本格的に商業都市へ移り住んだマールワリー（ジャーラン）が希求するアイデンティティ、すなわち「（ラージャスターンを故郷とする）地域性」と「（ディアスポラ商人としての）移住性」とを併存させる意図がみられる。私は、インド国内外の4つの分祀寺院の拡散過程とそれぞれの運営史を探ることによって、地域社会からグローバル経済までを横断しながらも、「故郷」との繋がりを強化してきたマールワリー・アイデンティティがいかに形成されたのか、その歴史的変遷を明らかにする。

活動報告

インド経済のみならずグローバル経済でも躍進を続ける商業集団マールワリーは、コミュニティの「ふるさと」であるラージャスターン州各地にヒンドゥー寺院を建立してきた。彼らの寺院経営において、私は彼らが「王」ではなく「寺院経営者」として自認している点に注目した。寺院経営の担い手が王から商人へと変質したことは、イギリスによるインド植民地経営という支配構造の転換と軌を一にしている。端的に言えば植民地政府がイギリス式信託制度を導入したことで、寺院経営におけるかつての担い手が没落し、他方でマールワリーがそれに適応し寺院経営に乗り出していったのである。寺院を経営するにあたり公益信託の組織化を義務づけた植民地政府の目論みとは、財政的・政治的に寺院を管理することにあつた。

公益信託制度は独立後も継承されたのだが、それを統括・管理する行政部門と関連法が制定されたことによって、国家による寺院の管理はむしろ強化されたと言える。しかし公共空間における活動が管理下におかれながらも、寺院経営者のマールワリーは「公益に資する限り」宗教・世俗両分野に渡って積極的に活動することで、自らの地位・名誉を維持してきたのである。このように英領インド期に導入された公益信託制度に着目して、マールワリーによる寺院経営、ひいては近現代インド社会における寺院経営の特質を読み解くことができた。それは、すなわち国家によって管理された状況下においてもなお「公益性」を基礎として生み出される名誉のポリティクスと解釈できる。

特別研究員奨励費

内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

代表者 鈴木七美/Cajilahu

目的・内容

1940年代から1970年代にかけて、近代中国において「社会主義改造」、「文化大革命」などの社会主義的イデオロギーによる洗脳運動が全国的におこなわれた。しかし、1980年代以来の内モンゴル東部地域においてはシャマニズムが復活しつつある。シャマニズムは現在、多民族的中国の宗教政策、医療政策、民族政策に対応した柔軟性を発揮しながら、モンゴル人社会の日常と絡んで生き残っている。シャマニズム的諸活動のなかで、治療行為は重要な部分をなしており、依頼者の心身両方の要求を満たしている。本研究は、そういった民間医療と絡んでいるシャマニズム的各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生と関連する諸問題を文化人類学的に捉える。そして、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようと試みる宗教政策、民族政策、医療衛生政策の本質と軌跡を解明することが強く求められるなか、シャマニズムを支える人々と依頼者の視点から、シャマニズムと仏教、オルタナティブ医療と制度的医療

衛生との間に発生する多元的医療の諸問題をエスニシティ論をもって究明する。さらに、そういった諸問題が存在する内モンゴル東部のホルチンとフルンボイル両地域を相対化する目的で、モンゴル国に赴き、ダルハドやプリアートの間で生き残っているシャマニズムに関するフィールドワークをおこない、豊富な事例のデータを活用して、多様な医療の選択肢があるなかシャマニズムの治療が選択される状況をエスニシティの問題として論じる研究へと収斂させていく。

活動報告

中国内モンゴル東部地域においてシャマニズムが復活しつつある。本研究の目的は、多民族的社会主義中国の宗教政策、医療衛生政策、民族政策を視野にいれながら、民間医療と絡んでいるシャマニズム的各種儀礼を対象に、オルタナティブ医療と制度的医療衛生との間に発生する多元的医療の諸問題を文化人類学的に捉えることである。この研究は、中国において近代と伝統、大宗教と小宗教、漢文化と民族文化が交差するカテゴリーの中で続発する文化対立の諸問題を解決しようとする諸政策の本質と軌跡を学問的に解明することが強く求められるなか、その分野に対する新しい知見を提供することである。

本年度は研究計画通りに以下のような作業をおこなった。

まず、中国内モンゴル自治区フルンボイル地域においてシャマニズムの病気治療に関する追加調査をおこない、オルタナティブ医療論、エスニシティ論及びシャマニズム的治療に関する事例資料を収集した。次に、中国の国家図書館、北京大学図書館、中央民族大学図書館において、中国建国前後に実施された民族政策、医療衛生政策、宗教政策に関する資料調査をおこなった。さらに、日本国内の大阪大学外国語図書館、島根県立大学図書館、東京大学総合図書館・東洋文化研究所図書室・医学図書館において、20世紀前半に発行されたモンゴル語新聞紙や雑誌を閲覧し、当時のモンゴル人に対して実施した医療衛生の社会教育に関する資料を調査した。最後に、国立民族学博物館においておこなわれた医療人類学研究会及び中国で開催された中国医学百年史研究に関する国際会議において講演し、国内外の学者と交流した。

そして、以上の現地調査と学術交流で得られたデータを基に、①オルタナティブ医療とエスニシティ問題と関係した中国内モンゴルの医療衛生体系の中で、シャマニズム的職能の一つである病気治療を位置づけた。②内モンゴルの地域社会及び国家医療衛生政策の実施との相互作用の基でおこなわれたモンゴル伝統医学の近代化過程に注目し、学術論文を発表した。

受託事業

「アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための研究交流」

委託者：日本学術振興会（研究拠点形成事業B. アジア・アフリカ学術基盤形成型）

共同研究代表者：園田直子

実施期間：2012年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

博物館は、単に資料を収集・保存・展示するだけの場ではなく、特に途上国においては国家・民族としてのアイデンティティを確立する場であり、また観光振興の要として、教育施設として、あるいは戦乱・災害からの復興の拠点としての役割を持つ。そのため、アジア・アフリカにおける自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成は、緊急の課題となっている。

大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立民族学博物館は、1994年から、途上国を対象に、博物館学ならびに博物館の実践的技術を学ぶ研修を実施してきた。研修に参加したアジアの国ぐにのうち、タイ、ミャンマー、モンゴルでは、日本で研修を受けた人びとの間で国内ネットワークが構築されており、自国の文化的・社会的背景に即した博物館学・博物館研究を模索しているところである。

本事業では、国立民族学博物館が今までに培ったネットワークの新たな展開として、若手の人材育成を視野に入れながら、博物館学を中心とした実践的な学術基盤の形成をはかる。タイ、ミャンマー、モンゴルで博物館学の教育研究を行い、博物館活動や人材育成の中核をになう専門家とともに、日本をふくむ4か国での博物館学の研究成果や博物館活動の事例を共有し、共通の基盤をつくる。そのうえで、従来の受動的立場から主体的立場へと変容する、現代のアジアにおける博物館の潮流を明らかにし、アジア独自の博物館学・博物館研究のモデルをつくりあげる。

本事業の最終目標は、今までの欧米主流の博物館学・博物館研究とは異なる、アジアの文化的・社会的背景に即した独自の博物館学・博物館研究が創出されることであり、そのうえで、タイ、ミャンマー、モンゴルにおいて自立的・持続的な博物館活動ならびに人材育成の研究基盤が形成されることである。

実施状況

2012年度のモンゴル、2013年度のミャンマーに続き、2014年度はタイで共同研究会と公開セミナーを開催した。共同研究会と公開セミナーでは、日本とタイ両国の博物館・博物館学の専門家や教育研究者が発表を行うことで、互いに研究成果や実践事例を共有しあう新たな研究協力体制を構築することができた。共同研究会と公開セミナーを通じて、日本12名、ミャンマー1名、モンゴル1名、そしてタイから述べ120名の参加者があり、活発な質疑応答、情報共有、意見交換をおこなった。タイでの共同研究会と公開セミナーを通じて、タイ国内の博物館・博物館学の専門家や教育研究者とともに、タイにおける博物館ネットワーク強化に貢献できたと考える。

成果

タイでの共同研究会と公開セミナーには、ミャンマーとモンゴルのコーディネーターも参加し、討論に加わることで情報と知見の共有をはかった。これにより、本事業終了後、参画した研究者が共同でアジア独自の博物館学・博物館研究を創出するための共通基盤がさらに強固になった。

モンゴル、ミャンマー、そしてタイでの共同研究会と公開セミナーの成果は、それぞれ刊行物としてとりまとめ、本事業へ参画した研究者にとどまらず、ひろく当該国の博物館関係者、若手研究者や学生が活用できるようにした。モンゴルでの成果は、2014年11月、『アジアにおける博物館・博物館学の「いま」——モンゴル、ミュージアム・クリルタイ』（日本語・モンゴル語）として、モンゴル国立文化遺産センターから刊行した。ミャンマーでの成果は、2015年2月、『*Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar* (Senri Ethnological Reports 125)』として、タイでの成果は、2015年3月、『*Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Museology in Thailand* (Senri Ethnological Reports 129)』として、国立民族学博物館から刊行した。いずれも、最新の博物館事情が分かる書であるとともに、博物館活動・研究の参考書ともなる。それぞれ相手国に100部ずつ配布し、社会還元した。刊行物発行により、アジアにおける新しい博物館・博物館学創出のための基盤をさらにかためることができた。

公開セミナーは、本事業に関わる研究者だけでなく、タイ各地の博物館や大学関連部局の人材を対象に開催した。そのため博物館学の学生も含めた、多くの若手の研究者の参加があった。博物館の社会的意義という根源的な問題について、展示・教育、そして地域との関わりという側面から、本事業に関連する研究者、そして次世代の研究者が学術的観点から議論する場となり、若手研究者育成に寄与した。

今回タイで開催した共同研究会と公開セミナーが契機となり、日本とタイ間のこれまでの研究交流の絆が一層強まった。今後、タイで博物館・博物館学に係わる研究や活動を進めるとともに、若手人材育成をしていくうえで、日本側が協力していくことが再確認された。本プロジェクトの日本側拠点機関である国立民族学博物館は、滋賀県立琵琶湖博物館とともに、2015年度から新たに3年計画で国際協力機構（JICA）・課題別研修「博物館とコミュニティ開発」コースを開催することが決定しており、国際的な人材育成にひきつづき貢献していく。

これらの経験と知見をふまえ、2015年2月21日～22日、日本側拠点機関である国立民族学博物館にて、国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」を開催した。シンポジウムは、3年間の本事業の成果発表であると同時に、国立民族学博物館が20年以上継続している博物館・博物館学に関する国際貢献、人材育成の集大成のひとつと位置づけることができる。アジアから世界へ、博物館学・博物館に関する研究成果・活動事例を発信し、欧米が軸軸になりがちな博物館学・博物館研究に新たな切り口をひらく契機となるシンポジウムとなった。その成果は、今後、速やかに刊行する予定である。

被災の共同体から地域の復興へ——被災後の人びとの行動の記録化とそれに基づく新たな社会モデルの構築——

委託者：三井物産（三井物産株式会社環境基金）

担当教員：竹沢尚一郎

研究期間：2011年6月1日～2014年9月30日

目的と概要

- 1) 岩手県大槌町、山田町、宮古市などで、被災者の被災後の行動と、かれらが形成した組織のあり方に重点をおいて映像記録と録音記録を作成する。
- 2) 先におこなった映像と録音を文字化し、社会モデルの構築のための材料とする。
- 3) 映像化および録音された資料の文字化を継続し、その分析をおこなう。
- 4) 海外の博物館や研究所と、将来の展示やシンポジウムの実施に向けて協議を始める。

実施状況

- 1) 岩手県大槌町と釜石市を中心に250人ほどの被災者をはじめ、行政関係者、NPO関係者にインタビューを実施し、映像記録と文字記録を作成した。映像記録については、地元社会に博物館や資料館が建設されたときにはそ

ここで公開する予定である（そのための許可を全員から得ている）。

- 2) 被災後の地域社会のあり方と、災害に強い社会のモデルを作成し、日本社会学会、日本文化人類学会、世界人類学大会をはじめ、海外のシンポジウム等で発表をおこなった。
- 3) 海外の研究者との協議のためにヨーロッパに出かけ、将来の展示について話し合った。映像を中心とした展示については、すでに数多くなされているので、破壊されたモノや被災前の民俗資料、被災後の生活の実態を示すモノ等を通じて、より包括的な展示を実施するようアドバイスを受け、それに向けて準備を進めている。
- 4) 被災後の被災者の行動と復興まちづくりの課題等について著書『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』（中央公論新社、2013年1月）を出版したほか、複数の論文を発表した。
- 5) 住民の声を聴きながら復興プランの作成に協力したほか、地元社会に建設される博物館等施設の建設に協力することで、復興に貢献してきた。

成果

- 1) 250名以上の被災者に対して、避難行動や被災後の相互扶助、復興まちづくりのイメージ等についてインタビューをおこなった。そのうちの50数名についてはビデオ撮影の許可を得て、映像資料を作成した。また、これをもとに、400字詰原稿用紙に換算して約3,000枚に及ぶ文字記録を作成した。映像記録については、地元社会に博物館や資料館が作成されたときには、そこで公開することの了承を得ており、現在30分程度の番組数本を作成するための編集作業を完了した。
- 2) この記録をもとに、被災者の避難行動や被災後の相互扶助活動、および災害に強い社会をモデル化し、日本社会学会（2011年）、日本文化人類学会（2012年）、国際人類学大会（2013年）などで研究発表をおこなった。そのほか、海外で実施されたシンポジウムに出席して、「東日本大震災の展示」、「トラウマを越えて——震災遺構の現在」などのテーマで発表をおこなった。
- 3) 1)の記録をもとに、被災者の避難行動、被災後の避難所等での相互扶助活動、復興のためのまちづくりの試みなどについて詳細な記述をおこない、さまざまな問題点の指摘とともに、著書『被災後を生きる——吉里吉里・大槌・釜石奮闘記』（中央公論新社、2013年1月）を出版した。これは、2013年度の講談社ノンフィクション賞の最終候補5冊のうちに入るという評価を受けたが、受賞はできなかった。
- 4) この本の英訳を英国人に依頼して進め、2014年6月段階で英訳と校正が完了した。2014年9月現在、海外の出版社数社と英文での商業出版に向けて交渉中である。
- 5) 『国立民族学博物館研究報告』に論文「津波の破壊に抗する被災コミュニティ——大槌町の避難所に見る地域原理と他者との関係性」を発表したほか、「語り継ぐこと、記憶を保存すること」『現代宗教』（特集：3.11後を拓く）、「Living in the World after the Tsunami”. *Minpaku Anthropology Newsletter*などを執筆・発表した。
- 6) 2017年冬春に「東日本大震災の展示（仮）」を国立民族学博物館の特別展示として実施するべく、大槌町の過去の写真の収集、民俗資料の整理、がれきの収集、津波で流された写真やモノの収集と保存、映像資料の編集、全体の構成についての討議、などの作業をおこなってきた。これについては海外の博物館でも関心を寄せているところがあるので、それに向けての協議も並行して進めている。

手話言語学に関する講義の実施及びシンポジウム・セミナーの開催

委託者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

研究期間：2014年4月1日～2015年3月31日

目的と概要

日本では、手話の言語としての認識や、ろう者の母語であることへの理解は十分であるとは言えない。一方、手話を言語として科学的に記述・分析することへの関心は、ろう者・聴者を問わず少しずつ増えてきて入るが、この「手話言語学」という新しい分野の専門家は、まだ数が少なく、言語学科において講座を開講している大学も殆ど無い。本事業では、本館の共同利用研究機関という性質を生かし、1) 諸大学における手話言語学の講義の開講の援助、2) 手話言語学の研究成果の社会発信、3) ろう者コミュニティへの発信のための基盤づくり、を行うことにより、研究者育成に貢献するのみならず、長期的な意味での社会における言語としての手話に対する認識と手話言語学への興味を喚起することを目的とする。

実施状況

- 1) 手話言語学の専門家の諸大学への派遣
日程：2014年10月～1月（週1日、全15回）
講師：菊澤律子（国立民族学博物館）

市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）
 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 野口岳史（国立障害者リハビリテーションセンター学院）
 磯部大吾、池田ますみ（香港中文大学）
 相良啓子（国立民族学博物館）
 松岡和美（慶應義塾大学）
 スーザン・フィッシャー（ニューヨーク市立大学／国立民族学博物館）
 坊農真弓（国立情報学研究所）
 菊地浩平（日本学術振興会特別研究員(PD)/ 国立情報学研究所）
 野山 広（国立国語研究所）
 澁谷智子（成蹊大学）
 長嶋祐二（工学院大学）
 原 大介（豊田工業大学）

派遣先：東北大学（受入研究者：小泉政利）

内 容：東北大学全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」

聴 講：20人+TA 1名（所属：文学部、教育学部、医学部、工学部、農学部、理学部）

言 語：日本語、日本手話（通訳付き）、英語

日 程：2014年通年講義のうち、半年間（15日間）

講 師：市田泰弘

派遣先：東京大学

内 容：手話言語学（大学院および学部）

聴 講：学部4名、大学院生1名が単位取得

言 語：日本語

日 程：2014年6月19日（1日間、講義）

講 師：市田泰弘

派遣先：関西学院大学

内 容：日本手話のしくみについて

聴 講：15名（学生13名、講師2名（うち1名はろう者））

言 語：日本語、日本手話通訳付き

日 程：2014年11月8日

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：Minpaku Linguistics Circle（国立民族学博物館）

内 容：Historical Perspectives on Sign Languages

聴 講：5名

受入研究者：吉岡 乾

言 語：英語

日 程：2014年11月16日～23日

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：香港中文大学（香港）、復旦大学（上海）

内 容：手話言語学に関する講義および学術交流（学生および教員）

聴 講：20名

受入研究者：Gladys Tang（香港）、Gong Qunhu（上海）

言 語：英語

日 程：2014年11月24日（1日間、講義）

講 師：スーザン・フィッシャー

派遣先：関西学院大学総合政策学部
内 容：言語政策論と手話
聴 講：20名
受入研究者：今西祐介
言 語：英語

日 程：2014年11月25日（1日間、講義）
講 師：スーザン・フィッシャー
派遣先：東北大学（上記1.の全学教育授業のひとつコマ）
内 容：ASLとJSL
聴 講：20名
受入研究者：小泉政利
言 語：英語

2) 国際ワークショップ・国際シンポジウムの開催

以下の通り開催した。詳細およびチラシは以下に掲載している (<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/news/corp/20141004-05>)。

なお、当初の計画ではワークショップとシンポジウムを組み合わせる予定であったが、内容を精査した結果、シンポジウム2日間とした。通訳士交流会については予定通り、ラウンドテーブル形式のワークショップとした。

日 程：①2014年10月3～5日（シンポジウム） ②2014年10月6日（通訳士交流会）

場 所：国立民族学博物館

対象者：①国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

②①で通訳をした通訳者（通訳コーディネーター、日本手話、日英同時通訳、アメリカ手話）および飯泉菜穂子、菊澤律子、相良啓子。

内 容：①言語の記述・記録・保存および言語類型論についての学術シンポジウム

②通訳士間の反省会および今後に向けての検討会

参加者数：①120名（1日目）、91名（2日目）、②約20名

使用言語：①英語、アメリカ手話、日本語、日本手話、②英語、日本語（日英同時通訳付き）

3) 関西通訳研究事業の開催

期 間：2014年6月～2015年1月

場 所：大阪・国立民族学博物館

対象者：関西在住の通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）

内 容：関西における学術通訳チーム養成

参加者数：通訳者4名

使用言語：日本語、日本手話、英語（日本手話通訳、必要に応じて日英同時通訳付き）

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月1回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成は主として飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）が担当した。

運営メンバー 飯泉菜穂子（世田谷福祉専門学校）、磯田恭子（筑波技術大学）、相良啓子（国立民族学博物館）、菊澤律子（国立民族学博物館）、高道由子（国立民族学博物館）

講 師 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）、中野聡子（広島大学）、高木真知子（通訳コーディネーター）、森壮也（JETRO-IDE）、市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）

手話モデル 海野和子、寺澤英弥

オブザーバー 甲斐更紗（九州大学）、前川和美（関西学院大学）、馬場博史（関西学院大学）

4) ろう者や通訳者を対象とした言語学講座の開催

2014年度は、通訳研究事業にある程度、組み込む形での開催となった。担当講師の中から2名に、2015年度にシリーズで担当してもらう方向で調整をすすめた。

5) 1)～3)のインターネット配信について

2)については、総合研究大学院大学の協力により当日インターネット配信を行った。また、映像データについては、現在、ウェブ配信用に編集中である。

配信サイト：<http://www.minpaku.ac.jp/sokendai/ssll/index.html>

成果

本年度は2年度目として、質の向上や内容の充実をはかると同時に、事業運営体制を整備することができた。また継続していることで、外部からも少しずつ事業が認知されるようになった。

また、プロジェクト広報のためのウェブサイトは随時アップデートし、広報、参加者募集や受付、内容の周知等に幅広く利用している。また、団体ウェブサイトからもリンクを貼っている。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/> (プロジェクトウェブサイト)

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/project/other/sonota> (団体サイトリンク)

2-3 研究成果の公開

刊行物

●国立民族学博物館研究報告

39巻1号 (2014年7月31日刊行)

・論文

都市を生きる出家者たち——ミャンマー・ヤンゴンを事例として —— 蔵本龍介

・資料

カムチベット語香格里拉県小中甸郷吹亞頂 [Choswateng] 方言の音声分析と語彙

—— rGyalthang 下位方言群における方言差異に関する考察を添えて —— 鈴木博之

・Revisiones bibliográficas

Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas —— Akira Saito, Claudia Rosas Lauro, Jeremy Ravi Mumford, Steven A. Wernke, Marina Zuloaga Rada y Karen Spalding

39巻2号 (2014年11月28日刊行)

・論文

ミクロネシアにおける海面保有と資源保護の様式 —— 須藤健一

南ラオスの少数民族の移住村における精霊祭祀と仏教——言語ゲームの視点から —— 中田友子

タンザニア・マテング高地における植林の受容と継承——外来技術の在来化をめぐる一視点 —— 黒崎龍悟

39巻3号 (2015年1月30日刊行)

・論文

北東アジア先住民族の歴史・文化表象——中国黒竜江省敖其村の赫哲族ゲイケル・ハラの人々の事例から

—— 佐々木史郎

On the Demise of the Proto-Tibeto-Burman Mid Vowels —— James A. Matisoff

・資料

国立民族学博物館における研究公演の再定義

—— 「ホピの踊りと音楽」の記録とフォーラムとしてのミュージアムの視点からの考察 —— 伊藤敦規

39巻4号 (2015年3月3日刊行)

・論文

レバノン南部の聖者アル・ホドル崇敬にみられる「聖者の占有」とその背景

——歴史的パレスチナとの比較から —— 菅瀬晶子

先史アンデスにおけるペルー北部チョターノ川流域社会の形成と変遷 ————— 山本 睦

・資料

Low-income and Homeless Inuit in Montreal, Canada: Report of a 2012 Research — Nobuhiro Kishigami

● Senri Ethnological Studies

No.89 (2014年5月30日刊行)

Yuji Seki (ed.) *El Centro Ceremonial Andino: Nuevas Perspectivas para los Periodos Arcaico y Formativo*

No.90 (2014年11月21日刊行)

韓 敏・末成道男編『中国社会的家族・民族・国家的 话语及其动态——东亚人类学者的理论探索』

● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.119 (2014年6月10日刊行)

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ編『20世紀におけるブリヤート人たち——中国内モンゴル自治区フルンポイルにおける口述史』

No.120 (2014年9月5日刊行)

Nanami Suzuki (ed.) *Healing Alternatives: Care and Education as a Cultural Lifestyle*

No.121 (2014年9月10日刊行)

Interviews Conducted by Yuki Konagaya and I. Lkhagvasuren, Translated by Mary Rossabi, Edited and Introduced by Morris Rossabi, *Mongolia's Transition from Socialism to Capitalism: Four Views*

No.122 (2014年11月7日刊行)

小長谷有紀編『梅棹忠夫のモンゴル調査——ローマ字カード集』

No.123 (2014年12月24日刊行)

Юки Коная (ред.), Ю.И. Елихина (автор) *Некоторые археологические находки Монголо-советской экспедиции под руководством С.В. Киселева: Городище Каракорум, коллекция Государственного Эрмитажа*

No.124 (2014年12月26日刊行)

土方久功著、須藤健一・清水久夫編『土方日記V』

No.125 (2015年2月26日刊行)

Naoko Sonoda, Katsumi Tamura and Nu Mra Zan (eds.) *Asian Museums and Museology 2013: International Research Meeting on Museology in Myanmar*

No.126 (2015年2月27日刊行)

久保正敏・堀江保範編著『バウイナング・アボリジナル組合の議事録(1978~1994)から見る対アボリジニ政策とインフラ整備の歴史——マニングリダと周辺アウトステーションの活動史』

No.127 (2015年3月25日刊行)

韓 敏編『近代社会における指導者崇拜の諸相』

No.128 (2015年3月27日刊行)

Шагланова Ольга А. и Сасаки Сиро (ред.) *Культурное наследие бурят, эвенков и семейских Предметы материальной и духовной культуры из коллекций Этнографического музея народов Забайкалья (Республика Бурятия, Россия)*

No.129 (2015年3月30日刊行)

Naoko Sonoda, Kyonosuke Hirai and Jarunee Incherdchai (eds.) *Asian Museums and Museology 2014: International Workshop on Asian Museums and Museology in Thailand*

●民博通信

No.145 (2014年6月30日刊行)

評論・展望 「モノの人類学から芸能を考える——バリ島仮面舞踊劇トペンを手がかりとして」 吉田ゆか子

No.146 (2014年9月30日刊行)

評論・展望 「フォーラム型情報ミュージアムの構築——国立民族学博物館における新たな展開」 岸上伸啓

No.147 (2014年12月26日刊行)

評論・展望 「民博の国際協力——博物館学国際研修の20年」 園田直子

No.148 (2015年3月30日刊行)

評論・展望 「世界の食文化研究と博物館」 朝倉敏夫

●研究年報2013 (2015年2月28日刊行)

●国立民族学博物館論集 (館外出版)

No.3 (2015年3月31日刊行)

韓 敏編『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』東京：風響社

●外部出版

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学 (シネ・アンソロポロジー) ——人類学の新たな実践へ』東京：せりか書房 (2014年5月23日刊行)

東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』京都：世界思想社 (2014年6月10日刊行)

笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』東京：勉誠出版 (2014年9月16日刊行)

堀内正樹・西尾哲夫共編著『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』東京：悠書館 (2015年3月10日刊行)

南 真木人・石井 溥編著『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』(世界人権問題叢書92) 東京：明石書店 (2015年3月31日刊行)

●共同研究の成果

落合雪野・白川千尋編『ものとくらしの植物誌——東南アジア大陸部から』京都：臨川書店 (2014年5月16日刊行)

* 共同研究「プラント・マテリアルをめぐる価値づけと関係性」(2009~2012年度)

村尾静二・箭内 匡・久保正敏編『映像人類学 (シネ・アンソロポロジー) ——人類学の新たな実践へ』東京：せりか書房 (2014年5月23日刊行)

* 共同研究「映像の共有人類学——映像をわかちあうための方法と理論」(2009~2012年度)

東 賢太郎・市野澤潤平・木村周平・飯田 卓編『リスクの人類学——不確実な世界を生きる』京都：世界思想社 (2014年6月10日刊行)

* 共同研究「リスクと不確実性、および未来についての人類学的研究」(2008~2011年度)

笹原亮二・福原敏男編『造り物の文化史——歴史・民俗・多様性』東京：勉誠出版 (2014年9月16日刊行)

* 共同研究「民俗行事における造り物の多様性」(2008~2011年度)

浮ヶ谷幸代編著『苦悩することの希望——専門家のサファリングの人類学』東京：協同医書出版社 (2014年12月16日刊行)

* 共同研究「サファリングとケアの人類学的研究」(2009～2012年度)

日高真吾著 『災害と文化財——ある文化財科学者の視点から』 大阪：一般財団法人 千里文化財団 (2015年 2月 27日刊行)

* 共同研究「民俗資料保存論の構築と素材に応じた保存処理法の開発」(2007～2010年度)

堀内正樹・西尾哲夫共編 『〈断〉と〈続〉の中東——非境界の世界を遊ぶ』 東京：悠書館 (2015年 3月10日刊行)

* 共同研究「非境界型世界の研究——中東的な人間関係のしくみ」(2010～2013年度)

道信良子編 『いのちはどう生まれ、育つのか——医療、福祉、文化と子ども』 東京：岩波書店 (岩波ジュニア新書) (2015年 3月20日刊行)

* 共同研究「現代の保健・医療・福祉の現場における『子どものいのち』」(2011～2014年度)

南 真木人・石井 溥編 『現代ネパールの政治と社会——民主化とマオイストの影響の拡大』 (世界人権問題叢書 92) 東京：明石書店 (2015年 3月31日刊行)

* 共同研究「マオイスト運動の台頭と変動するネパール」(2006～2009年度)

韓 敏編 『中国社会における文化変容の諸相——グローバル化の視点から』 (国立民族学博物館論集③) 東京：風響社 (2015年 3月31日刊行)

* 共同研究「中国における社会と文化の再構築——グローカリゼーションの視点から」(2008～2011年度)

嶺重 慎・広瀬浩二郎編 『知のバリアフリー——「障害」で学びを拡げる』 京都：京都大学学術出版会 (2014年 12月 5日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

広瀬浩二郎著 『世界をさわる——新たな身体知の探究』 京都：文理閣 (2014年 9月20日刊行)

* 共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんなくりポジトリ」は、一般公開後5年が経過した。今年度は、恒常的な館内刊行物の登録を継続するとともに、『研究年報2012』の掲載業績を基に個人業績の抽出・許諾・登録作業を行った。また、『著作物利用許諾書(館内出版物)』の多言語化を進め、英語、スペイン語、中国語(簡体、繁体)、韓国語を登録した。さらに、最新コンテンツの登録情報をTOP画面(お知らせ欄)に随時掲載することとした。

今年度新たに登録したコンテンツは346件で、2015年3月末のコンテンツ登録数は4,504件となった。今後も、年間300件以上の登録を目指したいと考えている。また、コンテンツのダウンロード数は、2014年度月平均約50,000件に達した。前年度と比較して、月平均10,000ダウンロード以上も増加しており、「みんなくりポジトリ」の認知度が高まって来ていることが伺える。

「みんなくりポジトリ」に対する国際的な評価も上向きであり、スペイン高等科学研究所 CSIC がおこなうリポジトリの定量的総合評価では、日本296機関中46位(前年135機関中42位)、世界2,154機関中683位(前年1,746機関中677位)にランキングされた。

学術講演会

●みんなく公開講演会

「無形文化遺産 選ぶ視点 選ばれる現実」

実施日 2014年11月4日

場 所 日経ホール(東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 310人

講演1 「文化遺産を伝える静かなくらし——マダガスカル」

講師 飯田 卓

内容 マダガスカル中央高地の山間部では、日常生活であたりまえのようにおこなっていた工芸の技術や知識が、無形文化遺産と呼ばれるようになった。交通の便がよくなり、工業製品や観光客が増えていくなか、この「遺産」を伝えるにはどうすればよいのか。現地の報告をまじえながら考えた。

講演2 「誰の、誰のための無形文化遺産——日本から考える」

講師 俵木 悟（成城大学准教授）

内容 日本は無形文化の保護を世界に先駆けて法制化した国であり、ユネスコの無形文化遺産条約の制定にも主導的に関わってきた。その一方で、日本が長年をかけて築いてきた堅緻な制度と、融通性の高い新しい国際条約とのあいだの齟齬も目立っている。とくに「誰のための遺産か」という観点から、この問題について考えてみた。

パネルディスカッション

福岡正太×飯田 卓×俵木 悟

司会 丹羽典生

内容 登壇者がアフリカと日本の事例から発表を行ったのに対して、東南アジアのインドネシアにおける伝統芸能の映像記録化に従事してきたという視点からコメントを加えた。無形文化遺産の保存という国や地方公共団体と民俗の領域が重なり合う場で、人類学者が研究者としてどうか関わっていくのかについても議論が交わされた。

「いやし旅のウラ？表？——現代アジアツーリズム考」

実施日 2015年3月20日

場所 オーバルホール（大阪）

共催 毎日新聞社

参加者 312人

講演1 「インドのメディカル・ツーリズム——癒やしから先端医療まで」

講師 松尾瑞穂

内容 健康増進や病気治療を目的とする旅をメディカル・ツーリズムという。近年、インドでは、アーユルヴェーダやヨガのような伝統医療から、代理出産のような先端医療まで、多様なメディカル・ツーリズムが見られるようになってきている。人びとはメディカル・ツーリズムに何を求めてインドに向かうのだろうか。そして、メディカル・ツーリズムは、現地社会をどのように変えていくのだろうか。このような観点から、新たな産業として期待されるメディカル・ツーリズムについて考えた。

講演2 「老後の海外長期滞在ツーリズム——マレーシアの日本人高齢者」

講師 小野真由美（岡山大学グローバルパートナーズ講師）

内容 近年、「ロングステイ」という新たな国際観光のトレンドが、日本人の老後のライフスタイルとして注目を集めている。ロングステイは、暮らすように旅する、あるいは旅するように暮らす海外長期滞在型余暇をさす言葉である。なかでも人気滞在国であるマレーシアでは、日本人高齢者が定住する傾向がみられる。なぜマレーシアが日本人高齢者に人気なのだろうか。講師自身のフィールド調査に基づいて、日本人高齢者の長期滞在の実態と受け入れ国マレーシアの変容について検討を加えた。

パネルディスカッション

信田敏宏×松尾瑞穂×小野真由美

司会 三尾 稔

内容 マレーシアの少数民族の間で長年現地調査を行っており、また近年はケアの問題にも関心を持つ研究者の視点から、アジアへのツーリズムの変遷や日本におけるケアのあり方の変化に関するコメントが加えられた。それに基づき講師を交えたディスカッションを行った。生病老死という人の一生とそれにつきまとう苦しみは、かつては家族や小規模な地域社会の中で見守られるべき事柄であったが、グローバル化や少子高齢化が進む現代社会にあっては、このような従来プライベートとされてきた事柄もグローバ

ルな社会や文化の動態のなかで展開するようになった。アジアへのツーリズムの変容もこれを色濃く反映していることがわかる。

2-4 学会開催

学会開催

- 2014年7月19日～23日 国際伝統音楽評議会『音楽とマイノリティ』研究会第8回国際シンポジウム
2014年9月20日～22日 民族藝術学会第30回（30周年記念大会）
2014年11月24日 日本文化人類学会課題研究懇談会『災害の人類学』
2014年12月6日 国立民族学博物館・立命館大学学術交流国際シンポジウム『世界の食文化研究と博物館』

2-5 研究員制度

外来研究員

ATWOOD, Christopher Pratt (アトウッド クリストファー プラット) 米国 インディアナ大学准教授／内蒙古大学客員教授

研究課題：内陸アジア遊牧民の社会史

BULIAN, Giovanni (ブリアン ジョヴァンニ) イタリア ヴェネツィア大学アジア・北アフリカ研究学部研究員

研究課題：日本の村落地域における在来気象知識の研究

CAIJILAHU 財吉拉胡 (サイジラホ) 中国 日本学術振興会外国人特別研究員

研究課題：内モンゴルにおけるシャマニズムと民間医療に関する文化人類学的研究

CHOI, Hye Eun 崔 慧銀 (チェ ヘウン) 韓国

研究課題：日帝時代における韓国大衆音楽の形成——レコード産業を中心にした研究

COUCHONNAL CANCIO, Ana Ines (コウチョナル カンシオ アナ イネス) アルゼンチン 国立サンマルティン大学人文科学研究科非常勤講師

研究課題：植民地期パラグアイの宣教政策における先住民言語——17・18世紀のグアラニ語の適応と葛藤

ELIKHINA, Iuliia Igorevna (イリーヒナ ユリア イーゴレヴナ) ロシア 日本学術振興会外国人招へい研究者

研究課題：エルミターージュのカラコルム・コレクション——モンゴル伝統文化の資料として

HUMBLE, Geoffrey Frank (ハンブル ジェフリー フランク) 英国

研究課題：元史における民族アイデンティティの語り——オゴデイ・カアン of 治世

ICHINKHORLOO, Lkhagvasuren (イチンホルロー ルハグワスレン) モンゴル 日本学術振興会外国人招へい研究者

研究課題：モンゴルにおける博物館学の構築

KIM, KYEYEON 金 桂淵 (キム ゲーヨン) 韓国 韓国ソウル大学比較文化研究所研究員

研究課題：韓国における華僑のエスニック・ビジネスと社会的ネットワーク

LEE, Young-Mi 李 英美 (イ ヨンミ) 韓国 国立アルティプラノ大学人類学科専任講師

研究課題：在日ペルー人の文化的アイデンティティの変化と社会的ネットワークの関係に関する研究

LIN, Liying 林 麗英 (リン レイエイ) 台湾

研究課題：近現代台湾におけるエスニシティの変化についての考察——地域概念の形成とローカル NGO・NPO との関係性

MARZEC, Agnieszka (マジェツツ アグネシカ) ポーランド TECC 語学学校非常勤講師

研究課題：日本における外国人の文化変容の受け止め方に関する研究

McGUIRE, Jennifer Mary (マグワイア ジェニファー メアリー) 米国 日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：違いを受け入れる——日本の一般学校におけるろうおよび難聴の生徒と教育制度

NARAN 娜然 (ナラン) 中国

研究課題：環境政策実施後の内モンゴルにおける牧畜の変化と土地劣化

NIKODINOVSKA, Dijana (ニコディノフスカ ディヤナ) マケドニア

研究課題：極東とバルカンの和解は可能か——日本とマケドニアのことわざにおける価値のカテゴリーに関する研究

SAGAYARAJ, Antonysamy (サガヤラージ アントニサーミ) インド 南山大学人文学部人類文化学科准教授

研究課題：南インド・タミルナードゥ州におけるドラヴィダ運動についての人類学的研究

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー 同志社大学グローバル地域文化学部非常勤講師

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

STEWART, Pamela J. (スチュワート パメラ ジェイ) 米国 ピッツバーグ大学人類学科上級助手

研究課題：自然災害とその後——被災者はいかに対応し、希望をもつか

YOTOVA, Mariya Ivanova (ヨトヴァ マリア イヴァノヴァ) ブルガリア 中垣技術士事務所

研究課題：バルカン地域における社会経済変動と文化変容

ZHAO, Furong 趙 芙蓉 (ジャオ フーロン) 中国

研究課題：北アジアにおけるシャマニズムの再活性化に関する人類学的比較研究

相島葉月 (あいしま はつき) 日本 英国マンチェスター大学人文学部中東研究学科講師

研究課題：現代エジプトのオルタナティヴ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

浅見恵理 (あざみ えり) 日本

研究課題：地域社会の発展と独自性の形成過程——チャンカイ文化の世帯考古学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本

研究課題：アンデス形成期祭祀遺跡における工芸品製作

石森大知 (いしもり だいち) 日本 武蔵大学社会学部准教授

研究課題：宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究

市川 彰 (いちかわ あきら) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：紀元後5世紀イロパング火山噴火前後のメソアメリカ太平洋沿岸部の生業と社会の研究

- 伊藤 悟 (いとう さとる) 日本
研究課題:「中国地域の文化」展示場の展示解説および電子ガイドコンテンツ製作、中国徳宏タイ族の音文化の研究
- 伊藤まり子 (いとう まりこ) 日本 京都外国語大学、和歌山市医師会看護専門学校非常勤講師
研究課題:ベトナム北部地域都市における「独身」女性の社会生活に関する人類学的研究
- 今中崇文 (いまなか たかふみ) 日本 摂南大学外国語学部、同看護学部、大阪人間科学大学非常勤講師
研究課題:中国陝西省西安市における回族コミュニティのリーダーの変遷をめぐる人類学的研究
- 岩谷洋史 (いわたに ひろふみ) 日本 神戸大学国際文化学部、立命館大学理工学部、関西大学文学部非常勤講師
研究課題:人類学におけるフォト・エスノグラフィーの手法の探求
- 上田知亮 (うへだ ともあき) 日本 京都産業大学法学部非常勤講師
研究課題:近現代インド政治におけるナショナリズムと地域アイデンティティ
- 太田好信 (おおた よしのぶ) 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授
研究課題:政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する
- 大場千景 (おおば ちかげ) 日本 メケレ大学外国語学部非常勤講師
研究課題:エチオピア南部、ボラナにおける口頭年代史
- 緒方しらべ (おがた しらべ) 日本
研究課題:「アート」の生産と受容に関する人類学的研究——ナイジェリア国内都市の事例から
- 岡本尚子 (おかもと なおこ) 日本 国際基督教大学高等学校教務員
研究課題:『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に
- 小川さやか (おがわ さやか) 日本 立命館大学先端総合学術研究科准教授
研究課題:現代消費文化に関する人類学的研究——モノの価値の変化にみるグローバル化の多元性に着目して
- 小野林太郎 (おの りんたろう) 日本 東海大学海洋学部専任講師
研究課題:アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究——資源利用と物質文化の時空間比較
- 鏡味治也 (かがみ はるや) 日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授
研究課題:生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究
- 梶丸 岳 (かじまる がく) 日本 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、京都学園大学、名城大学非常勤講師
研究課題:掛け合い歌「カップ・サムヌア」の音楽人類学的研究
- 金山 晶 (かなやま あき) 日本
研究課題:東アフリカ地域にみられる乳幼児の抜歯慣習について
- 金子正徳 (かねこ まさのり) 日本 三重大学人文学部、津看護専門学校非常勤講師
研究課題:東南アジア島嶼部における民族・文化動態の研究
- 金谷美和 (かねたに みわ) 日本 京都大学地球環境学学三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師
研究課題:インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

- 神本秀爾（かみもと しゅうじ） 日本 京都コンピュータ学院非常勤講師
研究課題：ジャマイカ、スキン・ブリーチングが刷新する黒人性に関する文化人類学的研究
- 河岸麗子（かわぎし れいこ） 日本 アイヌ刺しゅう家
研究課題：アイヌ衣服について——博物館収蔵資料の素材、糸の運び、線の流れについて知見を深める
- 川田牧人（かわだ まさと） 日本 成城大学文芸学部教授
研究課題：呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して
- 河西瑛里子（かわにし えりこ） 日本
研究課題：イギリスのグラストンベリーにおけるスピリチュアリティ諸実践の共存と交流
- 神田每実（かんだ つねみ） 日本 愛知県立芸術大学美術学部教授
研究課題：造形美術様式と風土の関係
- 岸本誠司（きしもと せいじ） 日本 東北公益文科大学非常勤講師
研究課題：東アジアにおける在来農業とマメ科作物に関する民俗学的研究
- 窪田幸子（くぼた さちこ） 日本 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
研究課題：表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に
- 窪田 暁（くぼた さとる） 日本 京都文教大学総合社会学科実習職員
研究課題：ドミニカ共和国からアメリカに渡る「野球移民」の民族誌
- 熊谷瑞恵（くまがい みずえ） 日本 ウイグル・アカデミー外国人研究員
研究課題：牧畜民と言語情報をめぐる人類学的研究——パキスタンのワヒを対象に
- 栗田（山内）梨津子（くりた（やまのうち）りつこ） 日本 京都橘大学人間発達学部、大島商船高等専門学校非常勤講師
研究課題：オーストラリア多文化主義下の先住民とスーダン難民の緊張関係をめぐる人類学的研究
- 高本康子（こうもと やすこ） 日本 北海道大学スラブ研究センター共同研究員
研究課題：国立民族学博物館青木文教アーカイブ資料に見る日本外務省および陸軍省の対チベット施策
- 小林貴徳（こばやし たかのり） 日本 愛知県立大学国際文化研究科多文化共生研究所客員共同研究員／大阪経済大学人間科学部、摂南大学外国語学部、同志社大学グローバル地域文化学部、神戸市外国語大学外国語学部、関西学院大学国際学部、神戸大学国際文化学部非常勤講師
研究課題：メキシコにおける無形／有形文化財の観光資源化に関する研究
- 是澤博昭（これさわ ひろあき） 日本 大妻女子大学家政学部准教授
研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に
- 近藤 宏（こんどう ひろし） 日本 立命館大学生存学研究センター専門研究員
研究課題：気候変動の政治経済と中南米低地先住民の所有実践
- 佐藤吉文（さとう よしふみ） 日本 南山大学人類学研究所、大学コンソーシアム京都非常勤講師
研究課題：先スペイン期ティティカカ湖盆地における形成期社会／初期国家ティワナクの構造的性に関わる転換と連続性の研究

澤野美智子（さわの みちこ） 日本 近大姫路大学看護学部、西宮市医師会看護専門学校非常勤講師
研究課題：フィード（ものを食べさせる行為）に関する人類学的研究

新本万里子（しんもと まりこ） 日本 広島大学大学院国際協力研究科一般契約職員／広島女学院大学国際教養学部非常勤講師
研究課題：避妊具の受容による身体観の変容——パプアニューギニア・アベラム社会の事例から

杉島敬志（すぎしま たかし） 日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
研究課題：エージェンシーの定立と作用-コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望

鈴木博之（すずき ひろゆき） 日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究

瀬木志央（せぎ しおう） 日本 メルボルン大学メルボルン土地環境大学院資源管理・地理学部フェロー／オーストラリア・カトリック大学人文・科学学部非常勤講師
研究課題：熱帯地域における海洋保護区の社会的持続性に関する研究

関根康正（せきね やすまさ） 日本 関西学院大学社会学部教授
研究課題：ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究

宗野ふもと（そうの ふもと） 日本
研究課題：ウズベキスタンにおける社会変容と女性

添野 勉（そえの つとむ） 日本 城西国際大学メディア学部成城大学社会イノベーション学部非常勤講師
研究課題：社会集団の写真資料に対する分類・メタデータ付与手法の研究

藺田 郁（そのだ いく） 日本
研究課題：近代日本における大衆芸能の地方伝播に関する研究——人形芝居を中心に

高橋晴子（たかはし はるこ） 日本 大阪樟蔭女子大学学芸学部国文学科非常勤講師
研究課題：世界の身装・布文化デジタルアーカイブの構築

高村美也子（たかむら みやこ） 日本
研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究

竹村嘉晃（たけむら よしあき） 日本 立命館大学産業社会学部、関西大学文学部、摂南大学外国語学部非常勤講師
研究課題：インド芸能の環流化とネオオーディアスポラの形成をめぐる人類学的研究——シンガポール社会を中心に

田中鉄也（たなか てつや） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：近現代インドにおけるヒンドゥー寺院運営の意義——商業集団マールワリーを事例として

田中正隆（たなか まさたか） 日本 高千穂大学人間科学部准教授
研究課題：アフリカにおけるメディアとデモクラシーの人類学的研究

玉山ともよ（たまやま ともよ） 日本
研究課題：米国南西部先住民族のウラン鉱山による影響と環境正義運動

辻 貴志（つじ たかし） 日本 園田学園女子大学人間健康学部、近畿大学経営学部、岡山理科大学総合情報学部、京都外国語大学外国語学部非常勤講師／神戸女子大学健康福祉学部特別講師
研究課題：フィリピン・パラワン島先住民の狩猟技術と知識に関する生態人類学研究

辻 輝之（つじ てるゆき） 日本

研究課題：宗教と移民のアイデンティティ・共生——南アジア系ディアスポラを事例として

津田浩司（つだ こうじ） 日本 東京大学大学院総合文化研究科准教授

研究課題：「国家英雄」から見るインドネシアの地方と民族の生成と再生

椿原敦子（つばきはら あつこ） 日本

研究課題：ディアスポラ状況下での集団の再編に関する人類学的研究

出水 力（でみず つとむ） 日本 大阪産業大学経営学部教授（非常勤）

研究課題：海外生産の技術移転の実態調査

徳岡（七五三）泰輔（とくおか（しめ）たいすけ） 日本 株式会社タスクアソシエーツコンサルタント部コンサルタント

研究課題：参加を通じた政治実践の民族誌的研究——バングラデシュにおける参加型開発と開発援助を通じた参加型ガバナンスを事例として

土佐桂子（とさ けいこ） 日本 東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

研究課題：「統制」と公共性の人類学的研究——ミャンマーにおけるモノ・情報・コミュニティ

友永雄吾（ともなが ゆうご） 日本 佛教大学社会学部、大阪産業大学経済学部、大阪学院大学、大阪市立大学非常勤講師／桃山学院大学国際教養学部ゲスト講師

研究課題：オーストラリア南東部における先住民と非先住民との相互変容に関する研究

長坂康代（ながさか やすよ） 日本 愛知大学国際コミュニケーション学部、中部大学健康生命学部非常勤講師

研究課題：ベトナムの首都ハノイにおけるストリート民衆の生活戦略に関する都市人類学的研究

長谷千代子（ながたに ちよこ） 日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中野（金澤）聡子（なかの（かなざわ）さとこ） 日本 東京福祉大学通信教育課程、日本社会事業大学社会福祉学部非常勤講師／広島大学アクセシビリティセンター特任講師

研究課題：言語知識の獲得と通訳作業過程に着目した学術手話通訳養成カリキュラムの開発

中村沙絵（なかむら さえ） 日本

研究課題：スリランカにおける社会奉仕活動の系譜とその政治的外延に関する研究

中村真里絵（なかむら まりえ） 日本 岡山理科大学、四條畷学園短期大学非常勤講師

研究課題：タイにおける焼物づくりの職人集団の形成に関する人類学研究

奈良雅史（なら まさし） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：宗教と公共性をめぐる人類学的研究——現代中国におけるイスラーム復興運動の事例から

名和克郎（なわ かつお） 日本 東京大学東洋文化研究所准教授

研究課題：ネパールにおける「包摂」をめぐる言説と社会動態に関する比較民族誌的研究

西本 太（にしもと ふとし） 日本

研究課題：近代化とラオス農村社会の再生産戦略——1975～2012

橋本裕之（はしもと ひろゆき） 日本 追手門学院大学地域文化創造機構特別教授

研究課題：災害復興における在来知——無形文化の再生と記憶の継承

長谷川 清（はせがわ きよし） 日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉夏子（ひが なつこ） 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：社会空間の動態と行為の演劇性をめぐる人類学的研究——ポリネシアにおける贈与の全体性

福岡まどか（ふくおか まどか） 日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤井龍彦（ふじい たつひこ） 日本 国立民族学博物館名誉教授／総合研究大学院大学学融合推進センター特任教授

研究課題：総研大文化科学研究科「学術資料マネジメント教育プログラム開発によるグローバルな人文研究者の養成機能強化」におけるプログラム開発事業

藤原（田中）潤子（ふじわら（たなか）じゅんこ） 日本 日本学術振興会特別研究員-RPD

研究課題：現代ロシアにおける新異教主義——歴史認識、マイノリティ性、地位向上運動に注目して

堀田あゆみ（ほった あゆみ） 日本 滋賀県立大学人間文化学部非常勤講師

研究課題：モンゴル遊牧民のモノをめぐる文化研究

堀 敏一（ほり としかず） 日本 アイヌ工芸家

研究課題：イクパスイの形状について——イクパスイの形について知見を深める

前川真裕子（まえかわ まゆこ） 日本 神戸松蔭女子学院大学非常勤講師

研究課題：自然をめぐる概念と「オーストラリアらしさ」の形成——野生動物と人間の住み分けをめぐる一考察

前島訓子（まえじま のりこ） 日本 名古屋大学大学院環境学研究科助教／岐阜大学地域科学部、椋山女学園大学人間関係学部非常勤講師

研究課題：インドにおける聖地の比較研究

松井今日子（まつい きょうこ） 日本 芸北民俗芸能保存伝承館嘱託学芸員

研究課題：民俗芸能の民俗誌的記録の枠組みについての一研究——中国山地の囃し田を事例に

松井智子（まつい ともこ） 日本

研究課題：女性移民・人身売買被害者支援運動の変容とその多元的リアリティの解明——タイを事例に

松井生子（まつい なるこ） 日本 昭和薬科大学薬学部非常勤講師

研究課題：カンボジアの人工統計における民族範疇および民族概念——在カンボジア・ベトナム人との関わりを中心に

松岡葉月（まつおか はつき） 日本

研究課題：博物館における全天周科学映像の開発および評価に関する人文・社会学的研究

松川恭子（まつかわ きょうこ） 日本 甲南大学社会学部准教授

研究課題：グローバリゼーションの中で変容する南アジア芸能の人類学的研究

松川孝祐（まつかわ こうすけ） 日本 青山学院大学経営学部非常勤講師
研究課題：ミシュテク語系トーン言語の比較研究

松嶋 健（まつしま たけし） 日本 日本学術振興会特別研究員
研究課題：社会的なるものの生態学——イタリアの社会協同組合を軸とした統治と連帯の人類学的研究

松田有紀子（まつだ ゆきこ） 日本
研究課題：京都花街の文化遺産登録と〈芸〉の継承をめぐる歴史人類学

道信良子（みちのぶ りょうこ） 日本 札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授
研究課題：現代の保健・医療・福祉の現場における「子どものいのち」

宮本万里（みやもと まり） 日本 英国アカデミー Newton International Fellow
研究課題：現代ブータンの多元的宗教空間における仏教と屠畜に関する政治人類学的研究

宮脇千絵（みやわき ちえ） 日本 京都薬科大学非常勤講師
研究課題：中国雲南省におけるモンの民族衣装とファッションに関する人類学的研究

村上 恵（むらかみ めぐみ） 日本 アイヌ刺しゅう家
研究課題：アイヌ衣服について——アイヌ文様（チヂリ）について

柳沢英輔（やなぎさわ えいすけ） 日本 京都大学学際融合教育研究推進センターアジア研究教育ユニット研究員
研究課題：現代ベトナムにおけるゴング文化の継承——村落内の伝承と政府の取り組みに着目して

藪中剛司（やぶなか たけし） 日本 新ひだか町教育委員会社会教育課文化財グループ主幹
研究課題：アイヌ民具の中にみられる特徴的な漆器資料の分析

山崎浩平（やまざき こうへい） 日本
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山下のぶ子（やました のぶこ） 日本 アイヌ刺しゅう家
研究課題：アイヌ衣服について——アイヌ刺しゅうの比較（文様、素材）について

山本文子（やまもと あやこ） 日本
研究課題：ミャンマー・ヤンゴンにおける精霊信仰の民族誌的研究

吉江貴文（よしえ たかふみ） 日本 広島市立大学国際学部准教授
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉田佳世（よしだ かよ） 日本 千里金蘭大学看護学部非常勤講師
研究課題：〈姉妹〉と〈妻〉のライフデザインの変容にみる現代沖縄の祖先祭祀に関する人類学的研究

吉本康子（よしもと やすこ） 日本 神戸学院大学、園田学園女子大学、放送大学非常勤講師
研究課題：チャム系住民とイスラームとの関係に関する地域間比較研究

劉 麟玉（りゅう りんぎょく） 日本 奈良教育大学教育学部准教授
研究課題：音盤を通してみる声の近代——台湾・上海・日本で発売されたレコードの比較研究を中心に

特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公私立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

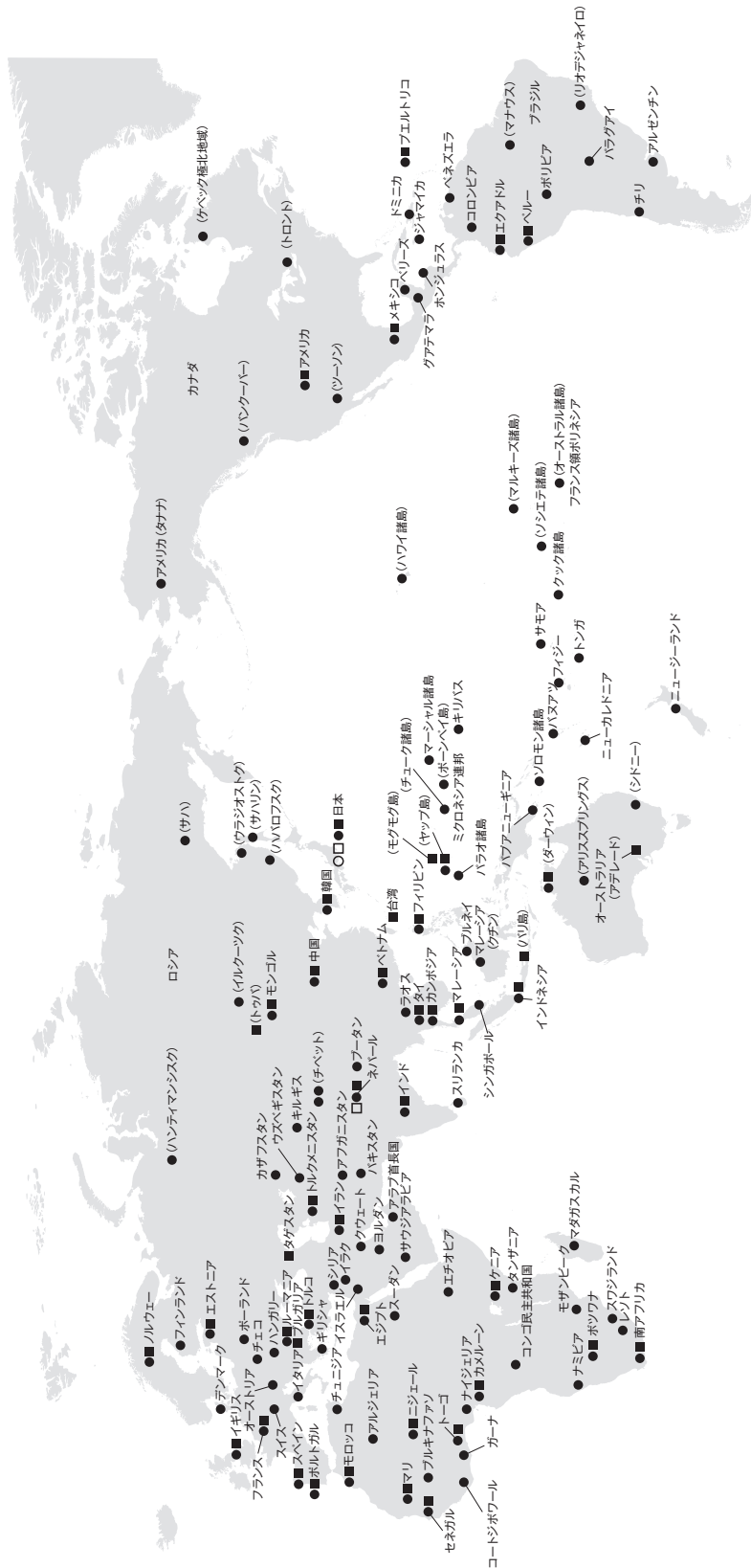
特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2014年度は、私立大学1人の大学院生を受け入れた。

2-6 データの利用

標本資料および映像音響資料に関するデータ

● 標本資料収集および映像取材地域



- 2014年度までの標本資料調査・収集地域
- 2015年度の標本資料調査・収集計画地域
- 2014年度までの映像取材地域
- 2015年度の映像取材計画地域

研究および
共同利用

●標本資料の収集・利用状況

・収集

小長谷有紀	モンゴル	41点 (衣装他)	2014年8月4日～8月12日
佐々木史郎	ロシア	6点 (衣装他)	2014年8月2日～8月17日
藤本透子	カザフスタン・ウズベキスタン	216点 (ゆりかご他)	2014年8月8日～10月23日
藤本透子	カザフスタン	64点 (円卓他)	2015年3月3日～3月28日

・2015年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料/177,689点 国内資料/163,243点 (未登録資料含む) 総点数/340,932点 (未登録資料含む)

・大学・博物館等への貸し出し

総点数/909点

●映像音響資料の収集・利用状況

・取材

寺田吉孝	大阪府大阪市	和太鼓の製作工程と伝統技術の継承	2014年6月28日、7月12日、8月1日、8月22日、12月17日、12月18日、 2015年3月12日、3月20日、3月27日
日高真吾	京都府京都市	彫金技術	2014年11月6日、11月10日、11月25日、12月8日、12月24日、2015年1月13日

・2015年3月現在の収蔵資料数

映像資料/7,966点 音響資料/62,651点 総点数/70,617点

・映像音響資料の貸し出し

利用総件数/191件 (内、大学31件) 資料利用総点数/946点 (内、大学136点)

館内利用など

利用件数/97件 資料利用点数/393点

特別利用 (館外での上映・視聴など)

利用件数/94件 資料利用点数/553点

文献図書資料の収集・整理・利用状況

●2014年度図書室の活動

1. 利用者サービス

書庫1層から4層における書架サインの見直しを実施し、利用者が求める資料へのアクセス改善を行った。

2. 利用者研修会の開催——教育・研究支援

- 1) 総研大新入生ガイダンス
- 2) 博物館学コース (JICA) オリエンテーション
- 3) 国会図書館職員研修
- 4) 若手研究者奨励セミナー
- 5) 阪大集中講義 (アート・アーカイブズ概論) 等
* 随時受付のツアーも、実施している。

3. 資料整備関係

- 1) 遡及入力を引き続き実施し、約23,000冊を登録した。
- 2) 昨年より継続して整理およびリスト化を実施していた地図資料 (約5万枚) の整備が完了し、そのリストに沿った配置換えも実施した。
- 3) 研究業績棚の点検および整理業務は、最終年 (3年目) として1,909件の整理を行い、3か年で総計11,992件を完了した。
- 4) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査 (2年目) として、視聴覚室資料、大型図書 (1層)、漢籍 (2層)

の実査に加えて、雑誌（2層）約3万3千冊に「カラーバーコード」を貼付し、総計5万冊の蔵書実査を行った。

4. 施設整備

- 1) 書庫のエレベーター内に防犯カメラを設置し、防犯対策とセキュリティ強化を進めた。
- 2) 開架スペースにおいて、割れ・浮きのある床タイルを貼り替え、図書室における安全性を高めた。

5. 広報、社会貢献

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。
- 2) 中学生の職場体験学習受入れ。

- 豊中市立第三中学校 (2014年10月29日 2年生女子2名)
- 箕面市立第三中学校 (2014年11月5日 2年生女子2名)
- 吹田市立竹見台中学校 (2014年11月12日 2年生男子2名)
- 吹田市立佐井寺中学校 (2014年11月19日 2年生男子1名、女子2名)

6. その他

HRAF 本部との協議により館内作業用として作成された「地域・民族分類（OWC）館内版」の代わりとして館内専用ページの「情報サービス課情報」においてPDFを公開した。

●2014年度新規受入数

日本語図書	2,272点	外国語図書	1,891点		
AV資料他	94点	製本雑誌	724点	合計	4,981点

●2015年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	266,823点	外国語図書	394,214点	合計	661,037点
日本語雑誌	10,104種	外国語雑誌	6,830種	合計	16,934種
HRAF	385ファイル	HRAF原典(テキスト)	7,141冊		

●利用状況（2014年度）

入室者	全体	11,481人
	館外者	1,704人
時間外入室者		117人
うち日曜、祝日		48人
貸出	図書	11,310冊
	雑誌	285冊
うち館外貸出図書		3,181冊
HRAF利用受付		48件
		(カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,831 (254)件
		国外(うち謝絶)	67 (28)件
	来室*	4,232件	
	依頼	国内	659 (21)件
国外		64 (14)件	
現物貸借	受付	国内	833 (58)件
		国外	422 (12)件
	依頼	国内	422 (12)件
		国外	23 (1)件
事項調査	受付	36件	

*うち大学等の機関1,694件

民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2014年度の問い合わせ利用件数は、402件であった。

問い合わせ者別 (件)		問い合わせ者の所属機関別 (件)		
教員 (大学)	53	公的機関	大学・大学図書館	100
大学院生	20		博物館・美術館	21
大学生	4		小・中・高	5
教員 (小・中・高)	6		その他教育機関	2
学生 (小・中・高)	0		研究機関	1
博物館・美術館関係	25		公共図書館	4
図書館	30		地方公共団体	12
教育・研究機関	3		団体	9
マスコミ関係	7		民間	研究機関
会社・団体	57	会社		45
一般	70	団体		6
民博教職員	127	個人	館外	69
計	402		館内	127
		計	402	

資料の利用目的 (件)					
調査・研究	研究*1	106	業務用	展示用	44
	論文作成	5		番組制作	14
	学習*2	2		出版物作製	25
	図書館から	19		参考資料	12
	授業で利用	37		入手方法	8
	その他	42		小計	103
	小計	211		その他	寄贈申出
館内利用	刊行物作成	0	その他		8
	館の事業	44	小計		13
	参考資料	7	合計		402
	資料の複製	24			
	小計	75			

*1 大学生以上の調査を「研究」とする
*2 高校生以下の調査を「学習」とする

民族学研究アーカイブズの構築

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、大内青琥、桂 米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、篠田 統、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ、松尾三憲旧蔵絵巻書コレクションなどの資料リスト作成等を行い、その成果を順次公開している。

2014年度は、昨年度に引き続き既存アーカイブズの整理事業を行い、泉 靖一アーカイブ、馬淵東一アーカイブ、北村 甫旧蔵資料 (仮称) アーカイブの権利処理を完了するとともに、梅棹忠夫アーカイブのリストを Web 公開し

た。また、岩本公夫アーカイブの写真資料2,237点をデジタル化し、全5,323点のデジタル化を完了した。

リストを公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2014年度の利用状況は閲覧7件、特別利用3件であった。

データベースの作成・利用状況

●館外公開しているデータベース

・標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2013年度までの作成件数	277,206
2014年度の作成件数	813
2014年度のアクセス件数	82,021

・標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2013年度までの作成件数	49,808
2014年度の作成件数	7,916
2014年度のアクセス件数	7,092

・標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2013年度までの作成件数	50,661
2014年度の作成件数	5,779
2014年度のアクセス件数	3,567

・韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2013年度までの作成件数	7,827
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	5,293

・ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	2,992
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	5,636

・映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。

2013年度までの作成件数	7,881
2014年度の作成件数	85
2014年度のアクセス件数	10,249

・ビデオテーク

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューで探すことができる。

2013年度までの作成件数	644
2014年度の作成件数	66
2014年度のアクセス件数	4,235

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出

した動画データベース。映像は館内限定公開。

2013年度までの作成件数	849
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	477

・ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	3,879
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,889

・松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	169
2014年度の作成件数	1
2014年度のアクセス件数	1,492

・音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2013年度までの作成件数	62,651
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,700

・音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。

2013年度までの作成件数	346,772
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	849

・図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌の書誌・所蔵情報。

2013年度までの作成件数	673,023
2014年度の作成件数	4,948
2014年度のアクセス件数	645,247

・梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2013年度までの作成件数	6,473
2014年度の作成件数	31
2014年度のアクセス件数	1,083

・中西コレクション——世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2013年度までの作成件数	2,729
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	42,201

・吉川「シュメール語辞書」

吉川 守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2013年度までの作成件数	
キーワード：33,450語（40,596頁）	
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	410

- ・ Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)

Lawrence A. Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2013年度までの作成件数	7,637
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	426

- ・ 日本昔話資料(稲田浩二コレクション)

稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声あり)。音声は館内限定公開。

2013年度までの作成件数	3,696
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	690

- ・ rGyalrongic Languages(ギャロン系諸語)[英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース(音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、426または1,200の語彙項目と200の文例を収録している。

2013年度までの作成件数	
語彙: 39,826語(文例: 15,706件)	
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	18,739

- ・ 衣服・アクセサリ

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像あり)。

2013年度までの作成件数	21,485
2014年度の作成件数	2,248
2014年度のアクセス件数	119,674

- ・ 身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2) 服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2013年度までの作成件数	159,766
2014年度の作成件数	5,768
2014年度のアクセス件数	17,016

- ・ 近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日本に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2013年度までの作成件数	10,049
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	2,092

- 館内で利用できるデータベース

- ・ 標本資料詳細情報(館内専用)

本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2013年度までの作成件数	264,406
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	44,537

・カナダ先住民版画

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2013年度までの作成件数	158
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	275

・音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2013年度までの作成件数	849
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	138

・朝枝利男コレクション

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	3,966
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	22

・タイ民族誌映像——精霊ダンス

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像あり）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。

2013年度までの作成件数	10,082
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	0

・東南アジア稲作民族文化総合調査団写真

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	4,393
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	1,659

・オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真

小山修三本館名誉教授が、1980年から2000年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	7,999
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	347

・西北ネパール及びマナスル写真

「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班（推定）の写真を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。

2013年度までの作成件数	620
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	352

・京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）と「京都大学探検部トンガ王国探検隊」（1960年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	24,018
2014年度の作成件数	9,672
2014年度のアクセス件数	0

・梅棹忠夫写真コレクション

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2013年度までの作成件数	35,420
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	4,751

・日本昔話資料（稲田コレクション）

稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。

2013年度までの作成件数	3,696
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	14

・国内資料調査報告集

日本国内における、1) 民具などの標本資料類の所在、2) 伝統技術伝承者の所在、3) 民族・民俗映像記録の所在、4) 民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。

2013年度までの作成件数	21,373
2014年度の作成件数	0
2014年度のアクセス件数	6

●2014年度に館外公開されたデータベース

ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版）（2014年6月27日公開）

●2014年度に館内公開されたデータベース

なし

2-7 みんぱく施設の利用

博物館施設の利用状況

●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知大学（16）、NPO法人ディーブピープル（11）、追手門学院大学（12）、大阪学院大学（78）、大阪教育大学（179）、大阪芸術大学（66）、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校（17）、大阪工業大学（17）、大阪国際大学（8）、大阪樟蔭女子大学（83）、大阪成蹊大学（7）、大阪総合デザイン専門学校（17）、大阪体育大学（4）、大阪大学（78）、大阪人間科学大学（11）、大阪文化国際学校（14）、大阪文化服飾学院（5）、岡山大学（9）、岡山理科大学（9）、沖縄県立芸術大学（26）、学校法人上田学園大阪総合デザイン専門学校（162）、関西大学（59）、関西学院大学（28）、関東学院大学（8）、岐阜県立森林文化アカデミー（21）、岐阜聖徳学園（13）、岐阜女子大学（57）、九州大学（4）、京都市立芸術大学（146）、京都外国語専門学校（86）、京都外国語大学（4）、京都芸術デザイン専門学校（50）、京都産業大学（6）、京都精華大学（84）、京都造形芸術大学（86）、京都大学（5）、京都橘大学（202）、京都ノートルダム女子大学（6）、京都文教大学（8）、近畿大学（85）、慶應義塾大学（41）、甲南女子大学（114）、甲南大学（13）、神戸学院大学（45）、神戸学園 神戸スポーツアート Cocoro（16）、神戸芸術工科大学（61）、神戸国際大学（6）、神戸松蔭女子学院大学（6）、神戸女学院大学（52）、神戸女子大学（54）、神戸大学（89）、滋賀県立大学（4）、滋賀大学（4）、四天王寺大学（16）、芝浦工業大学（15）、杉野服飾大学（74）、駿台観光&外語ビジネス専門学校（4）、成安造形大学（46）、摂南大学（48）、専門学校ルネサンス・デザイン・アカデミー（29）、千里金蘭大学（49）、相愛大学（23）、園田学園女子大学（30）、宝塚大学（15）、タキイ研究農場付属園芸専門学校（82）、玉川大学（6）、帝塚山学院大学（39）、東京藝術大学（51）、東京農業大学（72）、同志社女子大学（26）、同志社大学（10）、東北学院大学（58）、東北生活文化大学（37）、徳島文理大学（20）、獨協大学（11）、鳥取大学（13）、ドレスメーカー学院（72）、名古屋総合デザイン専門学校（92）、奈良教育大学（17）、奈良県立大学（8）、奈良大学（47）、阪南大学（11）、兵庫教育大学（22）、ファッション専門学校 ESMOD JAPON 大阪校（26）、フェリス女学院大学（5）、佛教大学（20）、文化学園大学（19）、文化服装学院（142）、平安女学院大学（23）、別府大学（3）、法政大学（17）、武庫川女子大学（14）、代々木ゼミナール大阪南校（35）、立教大学（13）、立命館大学（48）、龍谷大学（168）、和楽会（22）

*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

・来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・宗教学概論 A、宗教民族学研究の実例として
- ・1年生を対象とした「基礎ゼミ」の授業の一環
- ・大学院の基幹科目「芸術工学論」の学外演習
- ・在学生（2回生）セミナーにおけるフィールドワーク活動
- ・ゼミ（専門演習、卒業研究）の授業時間外学習
- ・2学年次 美術鑑賞 I 研修旅行
- ・1回生の基礎ゼミナール「世界の国々」の校外研修
- ・学部の高校工芸免許に関わる科目「工芸理論」の一貫
- ・本学人文学部文化交流学科のセミナー「文化交流演習工」（3年次必修科目）の一環として、世界の様々な文化について学び理解を深める。
- ・中国語コミュニケーション、中国語卒業ゼミの学外授業。
- ・人間科学専攻の新入生セミナーの一環として
- ・彫刻基礎（演習）C、学外研修
- ・博物館学芸員の資格取得の受講生のための現地講義
- ・歴史文化学会（学生による）の見学企画

●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学（1,049）

施設の整備状況

博物館施設の整備状況

1) 障がい有する方等への配慮についての取組状況

- ・来館者等に安心・安全な施設環境を提供するため引き続きバリアフリー化を計画し、くつろぎスペース（講堂地下）の床を車椅子の方でも使いやすいように、じゅうたんから塩ビタイルへと貼り替えを行った。

2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を毎月開催した。

3) 施設の維持管理の取組状況

- ・常設展示場のうち、南アジアと東南アジアの展示場を新構築展示施工に合わせて老朽化した床材の修繕を実施した。
- ・衛生的環境を確保するため、今年度も館内害虫駆除を行った。
- ・第1収蔵庫の空間を有効活用するために、2015年度に保管棚及びハンドラックの再配架を予定しており、それに向けて空調設備と電気設備と床の整備を行った。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- ・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の地震対策状況調査を行い、防災監理点検の結果と照合し、転倒防止措置が未実施の什器類について、固定工事を行った。

4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。
- ・2013年度に引き続き常時点灯している階段室等（共同研究棟東側非常階段及び館長室横の非常階段）の照明器具を省エネ型またはセンサー付き照明器具に順次取替え、節電に努めた。
- ・レストランの照明器具をLEDに取替え、省エネルギー化に努めた。

2-8 特許

知的財産形成・特許出願など

●特許出願

発明の名称：トラベリングディスプレイシステム

特許出願日：2014年9月2日

出願番号：特願2014-178585

発明者：日高真吾、上まり子（ウエマリコオフィス）、小谷竜介（東北歴史博物館）、和高智美（合同会社文化創造巧芸）

発明の名称：インタラクティブな触地図

特許出願日：2014年12月26日

出願番号：特願2014-265543

発明者：平井康之（国立民族学博物館客員准教授、九州大学）、富本浩一郎（九州大学）、吉田憲司、日高真吾、山中由里子

●商標出願

商標の名称：みんなく（ロゴ）

商標出願日：2015年2月10日

出願番号：商願2015-011927

商標の名称：ロゴマーク

商標出願日：2015年2月10日

出願番号：商願2015-011928